

奇譚クラス

新しい風俗文献誌

〔告白・手記・体験〕

特集号

11月号



1963・11

奇譚クラス

11月号

定価 二五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



四馬孝画
浣腸責絵画
女体浣腸図絵

原画原寸大複写 B4判
各一枚 二〇〇円

先般、四馬孝画伯を煩して「女体浣腸責場面」(かき6)を
発表しましたところ、幸いにしてマニヤの方々の共感を博まし
て相当数のお申込みを頂きました。ここに更に趣向を変えて八
枚の場面にお届けするに際し、筆端に於いて嗜好味たっぷりの女体
浣腸図をお届けすることが出来ました。原画の味をそのままに
迫力を以て皆様のお手元へお届けするため、原画と大じ大さき
に複写しました。八枚一組全部まとめてお求めの際は、特に送
料共に一五〇〇円に割引させていただきます。

一、女学生

略号「かき1」
セーラー服の可憐な少女、嗜
虐的な責罰教師二人に便所を直
すためだといって、太いガラス
製浣腸器で無理矢理に浣腸され
る。上半身と足首とを縛られた
少女は、今や治療という域を超
越して、二人の男女の教師によ
って、激しい浣腸責めを加えら
れることになるのだ。

二、看護婦

略号「かき2」
美しい見習看護婦が若き医師
の手術台となつて、医院の一室

で浣腸を施される。部屋の柱に
両手を縛られて抱えさせられ、
右足は柱に、左足は挙げて壁に
括られ、真白く可愛いヒッチ
を晒したまま、強烈な浣腸液を
ガラス製浣腸器によって、次々
と注入されるのである。

三、ヒマシ油

略号「かき3」
数度わたる浣腸によつても
女が飲み込んだグアイヤは出て来
なかった。今は最後の手段だと
押さえつけた口の中へ、ドロド
ロとしたヒマシ油を浣腸器の先
へとりつけたゴムの管によつて
注ぎ込む。嘔吐を催しそうにな

四、空気ポンプ

略号「かき4」
清純な乙女が捕われの身とな
って、ズベ公の手によって湯の
中に空気ポンプから空気を強制
注入されようとしている。自動
車のタイヤに空気を入れるその
ポンプは、強い力で乙女の腸内
にシュッシュッと激しい勢で空
気を送り込む。やがて腹部は張
りきるばかりに膨満することだ
ろう。

五、逆吊り浣腸

略号「かき5」
両手と両足を開いて竹に括ら
れ、両足首を吊るという逆さ吊
りのポーズで釣り下った美しい
女体。噴きを受け入れられる臀部が
丁度目の高さで待っている。老
人は、恐怖の浣腸器を手にして
責任の放棄に対して強制的な注
入を行おうとする。口を開けて
この酷い仕打ちに耐えようとし
る八等身の娘。

六、大の字浣腸

略号「かき6」
二本の棒の間に、両手と両足
を文字通り大の字に縛り上げら
れて高々と空間に吊り上げられ

七、強制洗腸

略号「かき7」
これから、お前のお腹の中を
すっかりきれいに洗滌してやろ
うと、若い女は処置台の黒いレ
ザーの上に坐らせられ、両足首は
高々と天井から下った縄に釣ら
れた。イルリガイトルから流れ
てくる薬液は、彼女の口から腹
の中へ注ぎ込まれる。胃と腸に
充満した液体は、浣腸器の中へ
吐き出させられ、再び注入され
るのである。

八、リスリン浣腸

略号「かき8」
三日間の排便を禁止させられ
た女の腹部は、ぶくぶくと大き
くふくらみ、革のベルトで胸か
ら腰を縛られ、片足を宙に吊ら
れて、恥しいリスリン浣腸を拒
む術とてない。溜りに溜った液
女の便は、激しい勢いで体外に
噴出するのち、今や時間の問題
となった。ああ、その目さまし
い光景よ。

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選 大手札印画紙(9×13種)焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E1	全裸の悦虐プレイ(愛川)	E13	拘禁された美囚女(大塚)	E39	痛打にくねる裸身(関谷)	E70	足の裏ハネ張り責(梨花)
E2	仕置を受ける裸身(大塚)	E14	浴室に覗く股間縛(愛川)	E40	乳房に加える金具(大塚)	E71	乳首ブライヤ挟み(竹本)
E3	荒縄に苦悶する肌(愛川)	E15	梅老責に泣く足首(大塚)	E41	鼻責めにあえる顔(大塚)	E72	野外的逆さ吊り責(梨花)
E4	ムチに耐える美肌(関谷)	E16	乳房強烈締めつけ(愛川)	E42	鼻責めにあえる顔(大塚)	E73	梯子責にあう美女(梨花)
E5	豊胸と豊胸しぼり(愛川)	E17	串刺で泣く縛り娘(大塚)	E43	浣腸ポーズの裸身(梨花)	E74	逆さ吊りに括れる(梨花)
E6	捨身の後手縛念像(大塚)	E18	美しい全裸股間縛(大塚)	E44	淫靡なエビ責苦悶(大塚)	E75	逆さ吊りに括れる(梨花)
E7	足から眺めた裸身(水本)	E19	全身に濡れるマゾ(関谷)	E45	敷布の上のびて(梨花)	E76	逆さ吊りに括れる(梨花)
E8	全裸エビ責尻調(関谷)	E20	ベッドにもだえる(関谷)	E46	鼻責めにあえる顔(大塚)	E77	逆さ吊りに括れる(梨花)
E9	ハリツケられた娘(大塚)	E21	身体中に強烈な縄(愛川)	E47	鼻責めにあえる顔(大塚)	E78	逆さ吊りに括れる(梨花)
E10	強烈後手高小手(愛川)	E22	放置された梅老責(東浦)	E48	鼻責めにあえる顔(大塚)	E79	逆さ吊りに括れる(梨花)
E11	責め抜かれた疲勞(梨花)	E23	ゴム衣で縛られる(東浦)	E49	鼻責めにあえる顔(大塚)	E80	逆さ吊りに括れる(梨花)
E12	逆エビにもたえる(大塚)	E24	ローソクで責める(大塚)	E50	鼻責めにあえる顔(大塚)	E81	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E25	寝台の排便ポーズ(関谷)	E51	鼻責めにあえる顔(大塚)	E82	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E26	足指先に濡る媚態(関谷)	E52	鼻責めにあえる顔(大塚)	E83	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E27	後手吊り正面裸像(関谷)	E53	鼻責めにあえる顔(大塚)	E84	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E28	嚴重な高小手縛(東浦)	E54	鼻責めにあえる顔(大塚)	E85	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E29	女体の全部を晒す(愛川)	E55	鼻責めにあえる顔(大塚)	E86	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E30	激しいムチ打の果(関谷)	E56	鼻責めにあえる顔(大塚)	E87	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E31	若肌も縛にくびれ(東浦)	E57	鼻責めにあえる顔(大塚)	E88	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E32	投げ出した胸腹美(梨花)	E58	鼻責めにあえる顔(大塚)	E89	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E33	胸中心の腹部緊縛(梨花)	E59	鼻責めにあえる顔(大塚)	E90	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E34	セーラー服の哀愁(梨花)	E60	鼻責めにあえる顔(大塚)	E91	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E35	赤いムチ痕の臀部(関谷)	E61	鼻責めにあえる顔(大塚)	E92	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E36	仰向けの囚女の女(梨花)	E62	鼻責めにあえる顔(大塚)	E93	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E37	制服の女学生縛り(梨花)	E63	鼻責めにあえる顔(大塚)	E94	逆さ吊りに括れる(梨花)
		E38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)	E64	鼻責めにあえる顔(大塚)	E95	逆さ吊りに括れる(梨花)
				E65	鼻責めにあえる顔(大塚)	E96	逆さ吊りに括れる(梨花)
				E66	鼻責めにあえる顔(大塚)	E97	逆さ吊りに括れる(梨花)
				E67	鼻責めにあえる顔(大塚)	E98	逆さ吊りに括れる(梨花)
				E68	鼻責めにあえる顔(大塚)	E99	逆さ吊りに括れる(梨花)
				E69	鼻責めにあえる顔(大塚)	E100	逆さ吊りに括れる(梨花)

今月の新版 分譲品

△浣腸関連フオート▽

エネマ・シリンジ

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚啓子 略号「るい」

浣腸の器具が散乱したムードあふれる浣腸の部屋に、実際に浣腸液を注入されて悶え苦しむ大塚啓子の姿態をごらんにいただけます。お尻を高々と持ち上げた浣腸ポーズに横臥して臀部をこちらに向けたオールドックスな浣腸ポーズ、うつ伏のポーズなど、全く魅力的な臀部を突き出したところへ、薬液をいっぱい含んだエネマの嘴管が施術者の手によって迫ってくる。

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚啓子 略号「るは」

石鹸水の白濁液が満たされた一〇〇〇CC入りのイルリガートルは、大塚啓子の豊満な臀部を目がけて吊り下っている。黒いゴム管を通して石鹸液は嘴管から、ドクドクと啓子の体内へと送り込まれてゆく。椅子を利用して、とらし

た浣腸のポーズの数々。いずれも浣腸される者の尻が施術者の眼前に突き出されるような恰好に、或は膝立前かがみに、腹這いに、尻立うつ伏せに、といろいろの変ったポーズにて液を大量に注入されてゆく。

浣腸プレイ

略号 (ほは)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子

一〇〇〇CCのガラス製浣腸器を用いて、自らが自らの身体に施す浣腸プレイの状態を、純客観的な立場から次々へと撮影していった中から選り出した三枚です。一〇〇〇CCの巨大な浣腸器が啓子の可憐な指に握られて、今まさに浣腸しようとする光景。魅力的なお尻をこちらへ向けて、にぶく光る浣腸液のしたたりが美しい。

進ばしる液

略号 (ほい)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子

椅子に腰掛けて片足を頭上高く挙げたポーズ、椅子に横にもたれて、お尻をこちらへ向けて突き出したポーズ、横臥したポーズの啓子の目の前に垂れてくるイルリガ

ートルのゴム管と嘴管。浣腸液をいっぱい詰めた瓶が、ゆらゆらりと不気味に揺れうごく。

浣腸後排便

略号 (へき)

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚啓子

思いきり浣腸液を注入して、さして辛抱のできる限り辛抱させた挙句、カメラの前で、いろいろな姿態で排便させるというアイデアは今迄、種々のモデルで試みて成功しなかったものであるが、今回の浣腸実施に於て、特に大塚啓子が自分から申出て、カメラの前にやってみてほしいという希望だったので分譲品として、発表します。

正面、側面、背面、そして姿態も実際に変化するので追って、スナップしてゆきました。

便意苦悶像

略号 (へか)

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚啓子

浣腸を施して幾許も経たないのに、早くも訴える腹痛、便器、便器と呼ぶ声も無視して辛抱させるが、やがて極限がきて、あわててブリキ製のおまるをあてがう。襲ってくる便意と腹痛に、便器の上で

△六尺禪と切腹▽

変形六尺禪

略号 (ふい)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 細川アヤ子

フンドシを着けるのが特に好きだという細川アヤ子(新人)に晒の六尺禪をきりと締めさせて、柔軟な身体を自由にこなして、両足を一の字に真直に伸ばしたり、いろいろ変形なポーズをとってもらった。

六尺禪開股

略号 (ふは)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 細川アヤ子

フンドシが好きだという彼女はそれだけに、フンドシに対して強い羞恥心を抱いている。裸身にフンドシを着用する嬉しさと同時に消えいりたい恥しさが、彼女の心を激しくゆさぶる。拒む彼女に無理矢理開股ポーズを強いたところごらんのような魅惑的なフオートが出来上った。



第ニ グラビヤ

荒縄の下にあえぐ 荒縄のどげにもだえる四態 大塚啓子
片足吊りと吊りの序曲 絹川文代
紐にくびれた女体の幻想 遠藤百合子
縄に愛された魅惑の乳房 遠藤百合子
屈従と愉悅の交響楽 梨花悠紀子

巻頭口絵

アイデア画 「可愛い牝馬」 四馬孝・画
マソ画 「お寝みの御挨拶」 四馬孝・画
女体切腹 「女賊捕物帖」 四馬孝・画
「浣腸とオシメ」 (読者のアイデア) 四馬孝・画
「女相撲」 「お嬢さん相撲の醍醐味」 雪崎京人提供
責画 「このあと何が襲ってくるか」 四馬孝・画

第ニ グラビヤ

ゴムの猿ぐつわとハイヒール 大塚啓子
(ゴムとゴム紐) 猿轡表情四態 大塚啓子
ローソク台となった女体 東浦ひかる
夫婦のSMプレイ 晒首と女体晒し 新宮明夫
女体切腹シリーズ (その一) 短刀 大塚啓子
新モデルの素描 小手はじめ 荒井マリ子
いや、いや、いや、いや 五月亜紀

随想 オフラインの効用 栗瀬 長 (34)

S・S・S 甘美な悪夢 大中 忠 (36)

美女の平手打と注射を願望する男 綾 真須男 (42)

女性乗馬考 (跨がる女性) 鞍 良人 (46)

「告白」 初めてのブレ 渡辺巳津男 (50)

十二人の女死刑囚 (斬首篇) 佐出 須登 (52)

「奇譚三十九夜」物語 (第二十九夜) 辻村 隆 (58)

最近見た女斗場面の映画 山田 隆夫 (72)

きもの・きもの・きもの物語 牧 高志 (74)

旅の楽しさ 八浣腸にことよせて 渡部 かね (79)

「告白」 倒錯日記抄 久保征一郎 (82)

手製のふんどしと赤い水着 R・いちろう (88)

重子の奇癖 女素 舞夫 (90)

連載小説 花と蛇 (第六回) 冨 鬼六 (96)

ガン作・マニヤのノート 芳野 盾美 (100)

「告白」 私の鼻を責めて下さい 湯谷 照夫 (110)

奇ケサロン

戦争と残酷ムード (森清) (113) 「ミセス生首」の感激 (前川成雄) (114)

「体験」 アブノーマルな絵 (森洋三) (115) 佐川奈津子様への公開状 (佐野光子) (116) 窃視と窃聴 (亀田孫一) (116) 「切腹心理学」 (室津三郎) (118) 緊縛女体 (青弘之) (119) ゴムの魅力 (桂木健三) (119) 責めの文 (東山映史) (122) 女体血斗阿修羅 (蒲生女斗美) (123) ある切腹マニヤの幻想図 (桐原榮門) (124) 美しい永遠の女死刑囚 (黒田寿) (124) アクロバット (阿部能丸) (125) 興行女相撲への一提案 (岡平吉夫) (126) 通信コーナー (128) 私は赤ちゃんになりたい (白川晴夫) (128)

鈴 蘭 香 水 (悦庵絵灯籠) 万田 不仁 (129)

新々播州皿屋敷 岸本 青柳 (136)

「告白」 狂愛の布地 野中 信敏 (146)

「妊婦フォトに關連して」 影浦 栄 (152)

「告白」 ゴムブレイの甘い生活 津田亜紀子 (160)

長篇SM小説 宇宙のどこかで 佐治 麻造 (162)

「告白」 女便紙にひかれて 岡山 勉 (170)

「告白」 女の足と下着 姫馬 痴人 (172)

「告白」 女が斬られるとき 中屋敷 真 (178)

「休験」 素人女相撲観戦記 岡平 吉夫 (180)

私のイメージ 悦庵美女オンパレード 近藤 一 (182)

今月の新版 分譲品

△女体切腹フオート▽

新人細川アヤ子の切腹

女体切腹態

略号 (ねは)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 細川アヤ子

晒の六尺襦をきりりと締めて、ドキドキとする九寸五分の短刀を握った清純なアヤ子の裸身。今や自ら自分の下腹に対して加虐の刃を加えようとする。フンドシと切腹の趣向は、或る意味で共通するものがあると云われる。彼女もまた同時に、その嗜好を持っているのであろうか、短刀を握ると憑かれたように、切腹の動作を続けてゆくのであった。

女体自刃態

略号 (ねに)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 細川アヤ子

ドキドキと光る九寸五分の白鞘のドスを手にして、臍の下から臍の上を真一文に鳩尾にかけて一気に切りさばく悲愴な手つき。更に

左乳下の急所に刃を凝して、健気に最後の止めの一突きを狙う雄々しい振舞。逆手に握った短刀に両手の力をこめて、咽喉元を刃の先を当てがって、貫こうという天晴れ男まさりの自決のポーズ。

血紅 血塗れ下腹 使用

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚啓子 略号 (わい)

切腹ポーズをとらしたならば、その柔軟な姿態と肉づきのよい腹部とで、素晴らしい切腹のムードをかもし出すことで定評のある大塚啓子が、今回は思いきり無茶苦茶に下腹を切りさばいて、心ゆくまで女体切腹の快味を味わいたくて、豊富な血紅をふんだんに用いて、ここを先途と下腹を切りさいなんだ姿態の中で、美しいものばかりを選び出しました。白布を敷いた台の上にすえられたイケニエの白い女体は、真紅の血汐に染って息絶えてゆきます。

殿中の自決

略号 (わこ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子

殿中の控えの間の一室に下った

侍女が着ているものをすっかり脱いでしまつて、覚悟の切腹。若々しい無垢の肌を、大勢の人達の視線に晒したいという露出症的な願望が、彼女をして、このような無暴な自決行為へとかりたてていたのである。豊満にはりきった股が、低いカメラアングルで、ぐつと大きく迫ってくる膝頭、太股、お臍、刃は今や、柔かな下腹の膨みにぶつりと突き刺さり、プリプリプリと切られてゆく。

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚啓子 略号 (わは)

膝を立てて全身に力をこめて、ぐつと刺し込んだ短刀、痛烈な疼みに、「ううう」と呻いて身をのけぞらす。たえきれずに尻餅をつきながら、更にじりじりと引きまわす。ピンと伸ばした左足の指先が苦悶に反りかえり、一思いに右脇へ切れば、がくりと左手を畳の上についでしまう。なんのこれしきと氣丈夫にも、起き上ろうとしたが、すでに手足の自由がきかざごろりと仰向けに倒れると、そのまま刃を腹に当てたまま深い眼りに落ちてゆくのだった。

△妊婦ヌード・フオート▽

臨月妊婦三態

大手札三枚一組 三〇〇円

安原さゆり 略号 (よむ)

出産予定日を迎えた産み月の妊婦のヌードを正面、側面、背面と三方から狙いをつけて、マニヤの方々の目にとくとくらん頂きたいと思い、数多くのネガの中から選び出しました。

産み月のお腹

大手札三枚一組 三〇〇円

安原さゆり 略号 (よま)

四つ這いになって、大きなお腹を覺につくばかりにした妊婦、堂々とつきだしたお腹、両手を挙げて、これ見よがしに見せびらかすお腹、全く驚異的なフオート。

動物的な腹部

大手札三枚一組 三〇〇円

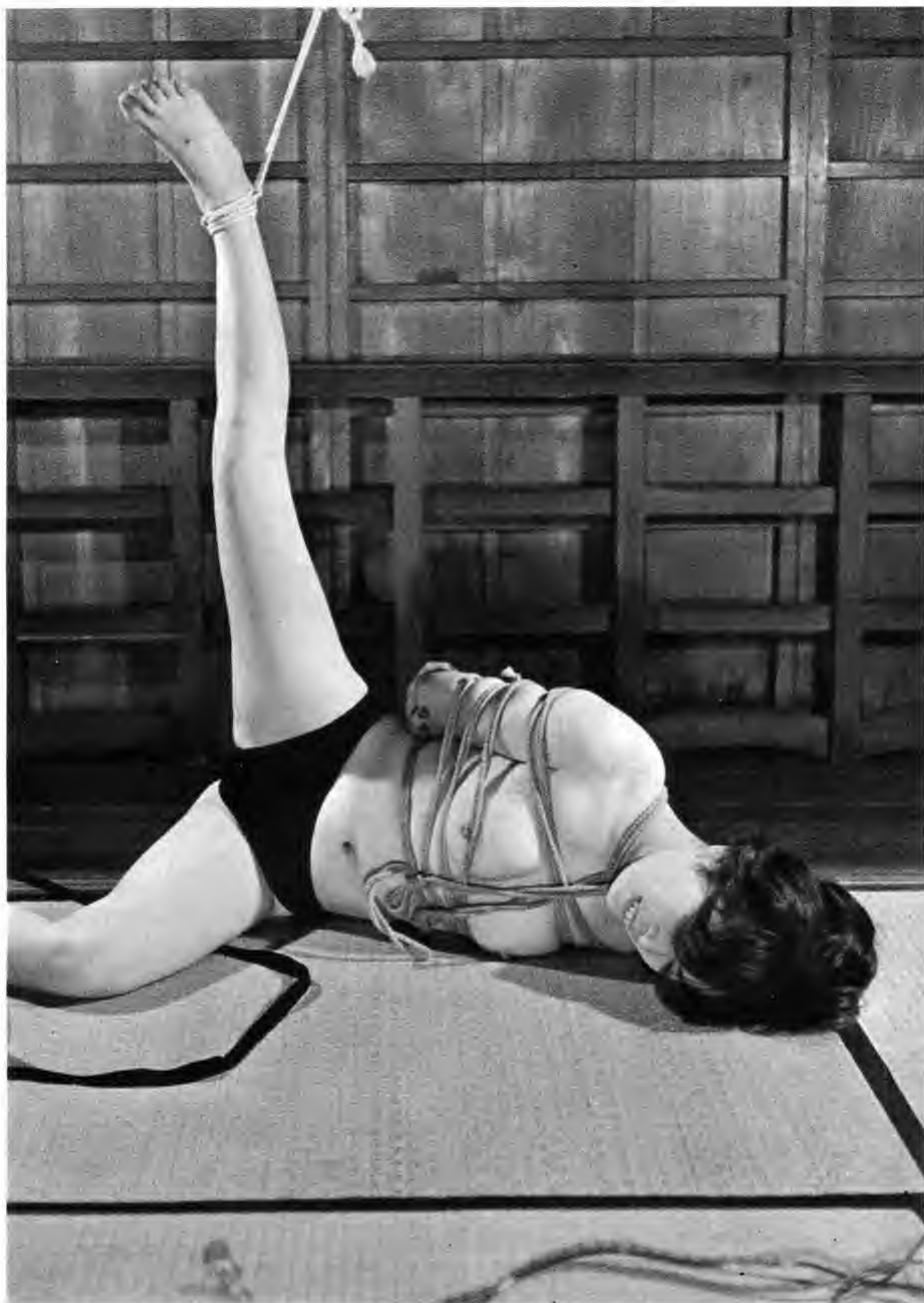
安原さゆり 略号 (よみ)

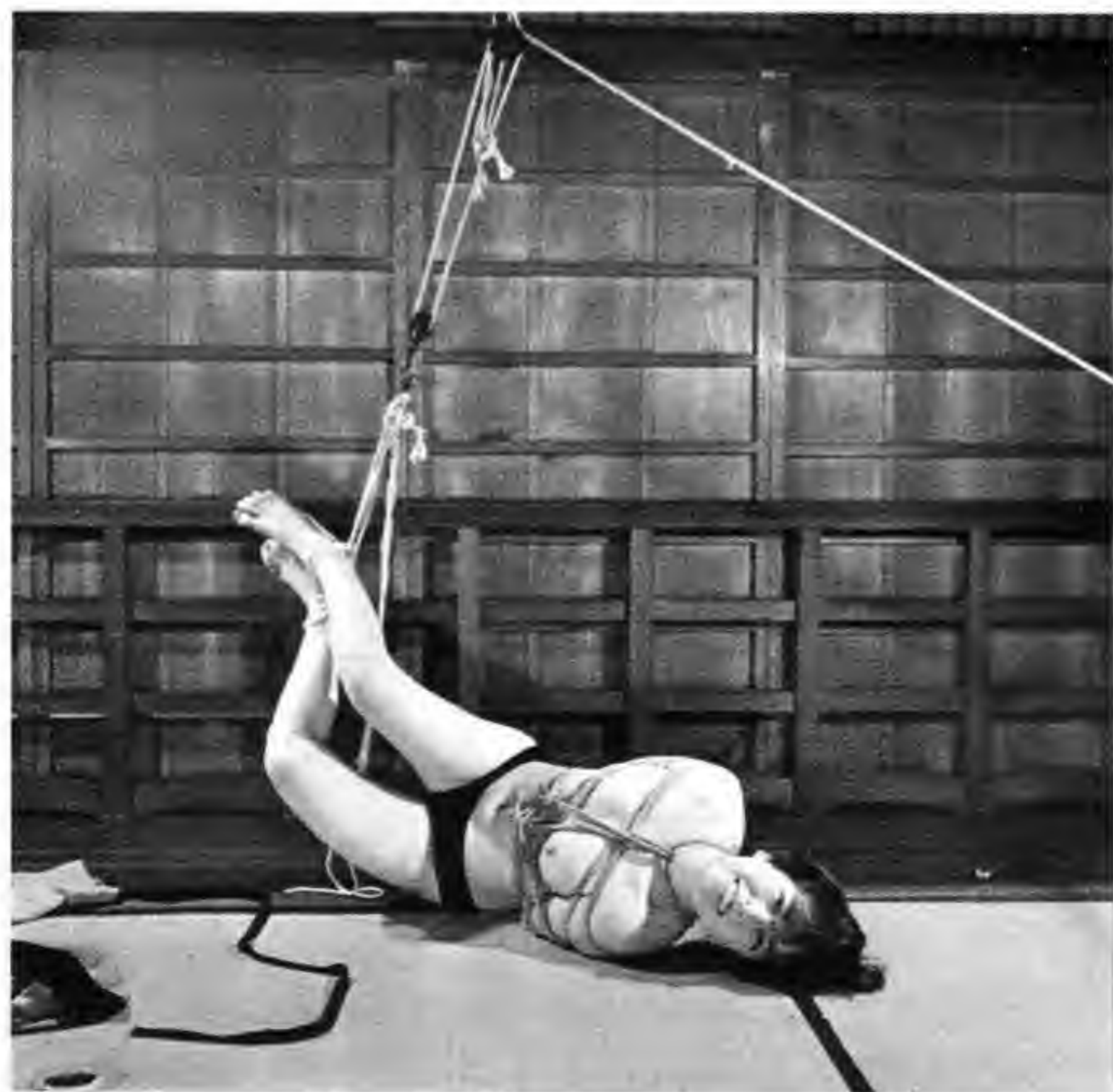
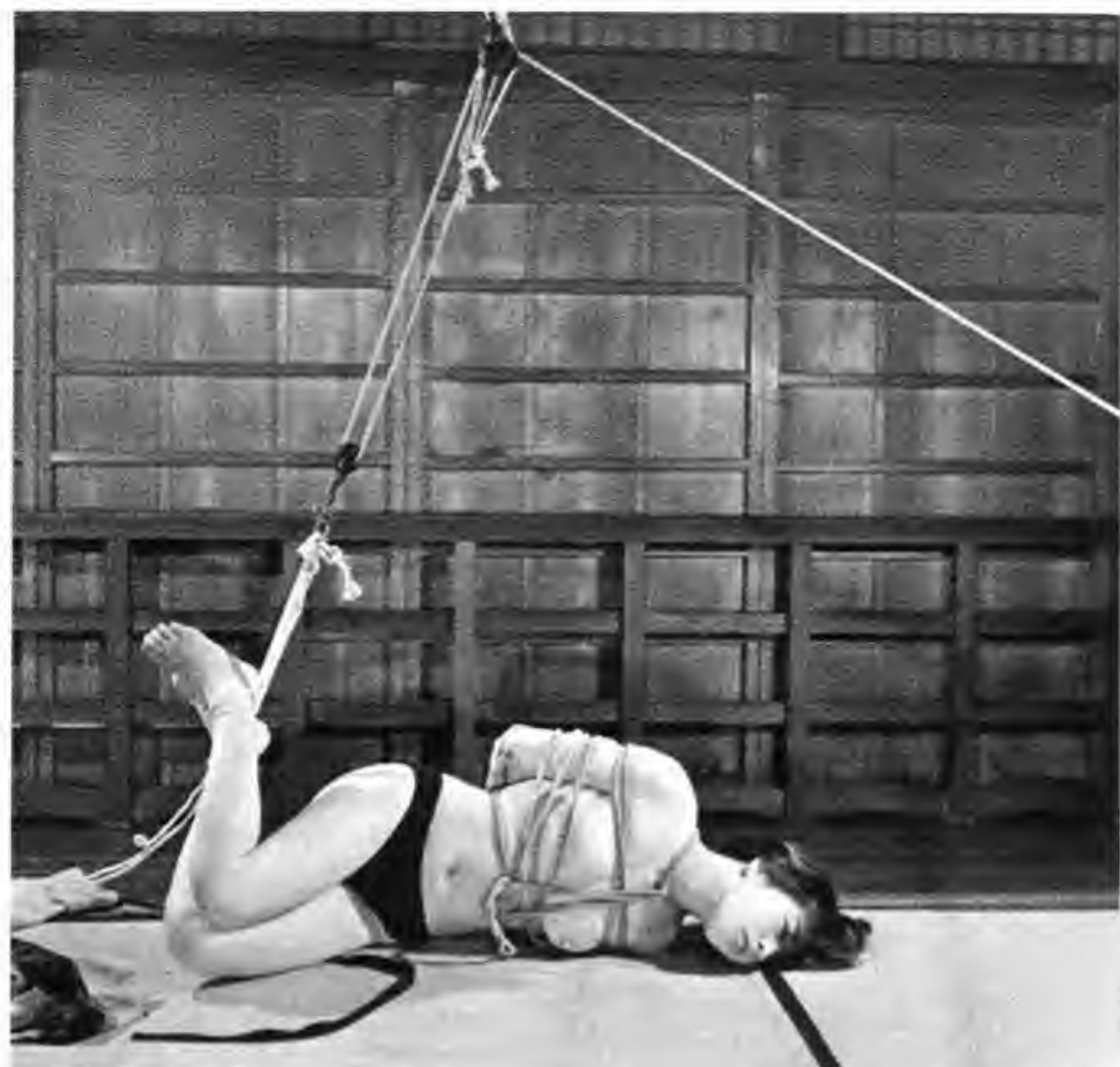
出産を間近に控えた妊婦の腹部は、生き物の美しさと醜さを併せ持っている。その生態をつぶさに見て頂こうという、貴重な資料といえましょう。



















可 愛 い い 牝 馬



「お寝みなさい」の挨拶



長靴でむれた足をお舐め



女賊捕物帖



浣腸とオシメ

石山正枝さん、草野久子さん、村田武子さんなど、お相撲の好きな
美しいお嬢さん達が、畳にチョークで円を描いて土俵にして、皆そ
れぞれ、好みの褌を堅く締め込み交替で行司役。



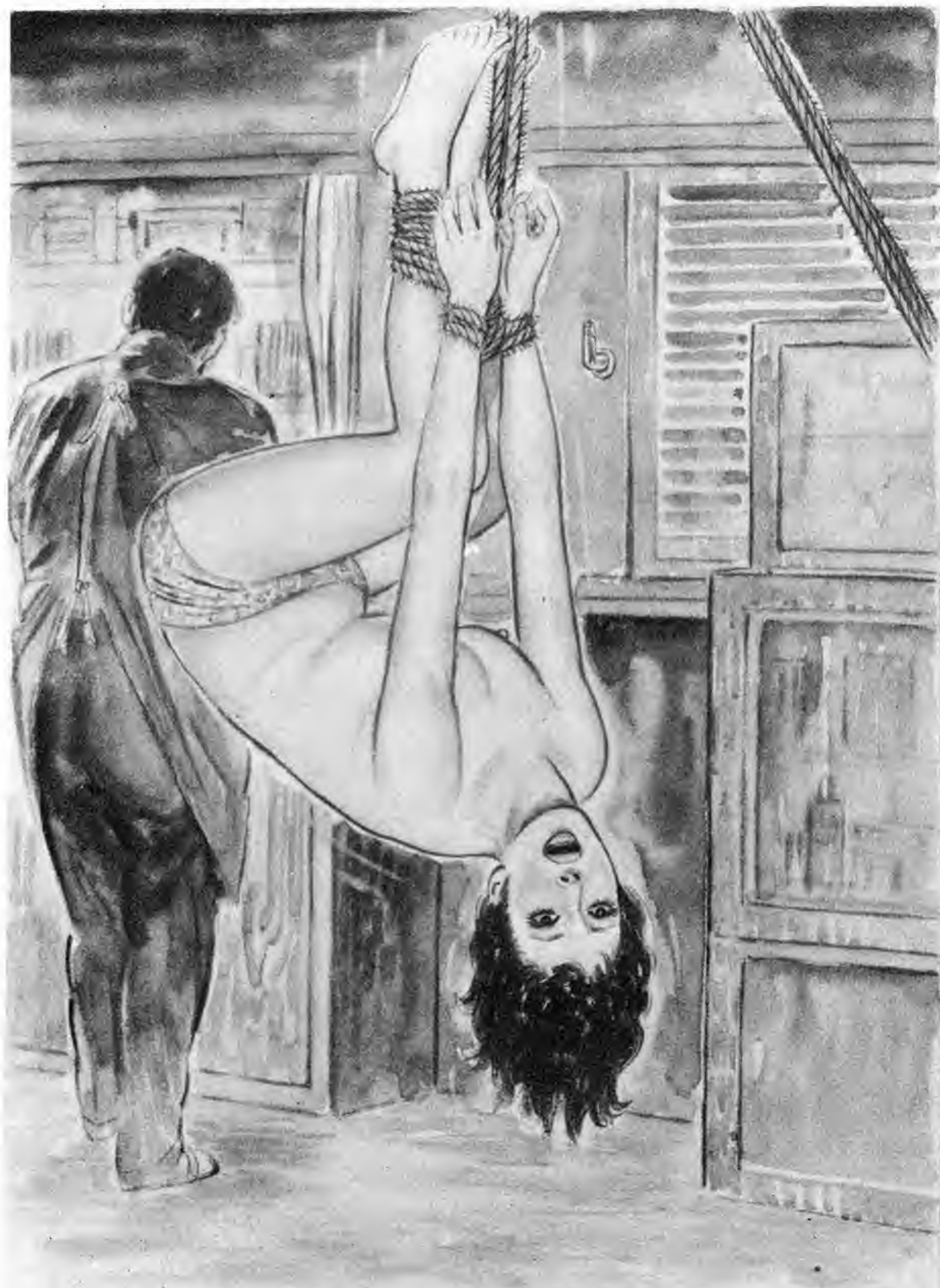
お嬢さん相撲の醍醐味

雪崎京人 提供



このあと何が襲ってくるか

四馬 孝・画



















〔告白・体験・手記〕

特 集 号

奇 譚 ク ラ ブ

1963年 11月号

(第17巻 第11号 通刊 第182号)





随想

オブラートの効用

栗原 長

苦い薬、飲み難い薬を飲む時、オブラートが用いられる。大人になった今でも、子供の時同様私はオブラートの御厄介になる。

真黒い苦い粉薬も、この澱粉で作られた薄い膜の中に包み込まれ、水と一緒に難なく咽喉を通過してしまう。それはやがて食道を通過し、胃に達すると、薄い澱粉の膜は自然に水分に融け、中の散薬は胃の中に拡散して薬としての効果を発揮するのだ。

私は奇クを読みながら、このオブラートの効用をしみじみと考える。奇クがオブラートの効用をもっているのではないかと。

奇クの標榜するアブの世界は、人間性を解剖し追及した場合に、必ず一面の真理として浮び上ってくる心理の断面である。

しかしながら、これは飽くまでも人間の心理の奥底を流れる一断面であって総べてでは

ない。いやそれが総てである。そこからあらゆる人間性が演繹され、流れ出て来るといふ人もあるかもしれない。それも心理学的にみれば真理かもしれない。しかし、私達が生活している現実を直視すれば、それはあまりにも理論のための理論であることは言を俟たない。いかにサドの言動が真実の叫びであろうとも、それが今日の社会規範に照らし合わせた時、それこそアブとして葬り去られるのは当然である。

しかし、ここで社会規範なるものが問題となる。紫式部の生きた平安時代の自由放漫な男女関係は、武士の抬頭と、それに伴う禪の思想、更に江戸幕府のとった朱子学の影響を受けて、今日では、凡そ想像もつかぬ淫らとさえ言われるのである。大古の一夫多妻、或は現今でも存在する未開人と言われる一部の多

夫一妻も、現代に生きる私達の一般通念としての規範からみて異常なのであって、逆に彼等からすれば、何と現代の私達の生活は不思議なものに映るであろう。

社会規範は、その社会の歴史の変遷の一エポックとして捉えられるのであって、この歴史の一時機に生活する以上、その時の社会規範に従うべきは当然である。

いかに高邁な真理であると信じようが、社会規範から逸脱した行動を取る場合、その社会規範を明文、条文化した法律の名の下に罪とせられるか、或は心身耗弱として狂人とされるしかないのである。

これは行動に移した場合であって、行動にまで発展させない心理作用の場合は、どうであろうか。ここにアブの世界が生れる。現実には則して考えよう。女性を鞭打ちたい、若き豊満な女性の尻に敷かれたい、或は尿を飲みたい、このような事が現実に入目のつく所で行われたならば、勿論それは社会規範に抵触するのは当然である。

しかし女性を鞭打ちたいという心理は、既に、家庭における暴君としての亭主に、或は男上位という姿で、潜在意識として働いているのである。ただそれが、社会規範意識が強いばかりに、潜在意識に留って、はっきりとサディズムの形をとった意識上に上らないだけである。

嬉々として女性の意向に従うデイト、或は鼻下長族といわれる亭主、これは女性の尻に窒息したいというマゾヒズムの体のいい具現でなくて何であろう。

しかしそうした善良な紳士諸氏は、誰も自分がサディストだとも、マゾヒストだとも感じて居られない。それはそれとして幸福な方達であろう。

その奥の奥にある心理をぐっと抉ったのがこの奇クである。私も今を去る十年前、はじめて奇クを古本屋の店頭で見つけた時の驚きを忘れ得ない。性心理学の所謂学問としてのサディズム、マゾヒズム、フェティシズム、コプロは知っていた。しかしそれを堂々と正面に押し出し、世の所謂識者と自称する人々の、ぞっき本だ、エロ本だという批判にもめげず、十数年の長きに亘って趣旨一貫、標題を貫いて来られた事は、お世辞を抜きにして敬服に値する。

では、何が故に、この長きに亘って、奇クが支持を受けてきたのであろうか。

私は正に標題のオブラートの効用の一語に尽きると思う。中に包み込まれたものが、如何に人間性の真底を抉った真理であらうともそれが一般人に苦いとして映じたらどうであらう。破棄されるのは当然である。半透明の薄いオブラートに包まれ、黙って胃に到達してはじめて、胃腸はそれを必要とする。

幸か不幸か、人間性の真底の一部を識った私達には、オブラートに包まれた中味が真に必要なのである。

奇クは最近つまらないと言われる。もっと端的に、いやはっきりと言えれば露骨に表現せよと言われる。露骨な表現は、或は社会規範に抵触し、或いは未成年者に、人間性の真底といった根本的な面を離れて、ただ単に興味本位に、外形だけを受け取られたら、どうなるであらうか。もっと露骨な表現をと言われる方の智能の程度を疑わずには居られない。「壁を隔てた隣室から聞えるピシッという鞭の音」ただそれだけの文章から、猿轡をかませられ、素裸にむかれた妙齡の女性が、ベツドに両手両足を大の字に開かされてうつ伏せに縛りつけられ、そのこんもりと盛り上った豊満な二つの丘に、鋭く鞭が振り下ろされる状景が髣髴として浮かんでこないようでは、奇クの読者たる資格はないといつては極言であらうか。

奇クのリーダーであられる辻村氏さえ言われる。最近ではマンネリだ。浣腸にしても、きまって、五〇ccグリセリンにイルリガートルエネマシリンジだ。たまには、発泡錠、ビール、サイダー、粉末殺菌剤を浣腸したらと。奇を衒うならそれも結構。しかし読者はもっと身近なものを、自己の体験に照らして、その一言半句から、想像の翼をのばしているの

ではなからうか。

たしかにマンネリには進歩がない。しかしマンネリから飛躍しようとして逸脱し、折角のオブラートを破って苦味を呈示し、世の聲を聞くよりは、マンネリと言われ、表現が生ぬるいと言われようと、そっとオブラートに包んで置いた方が、どんなによいか分らない。勿論、オブラートの中にも、辻村氏の言われるように、何時も黒の薬ではなく、黄色のもの、白のも包み込みたいのは当然である。それには私達識者の努力が必要である。

近藤一氏が常に一貫して言っておられる。奇クを明るくものと。アブの世界というところでも陰惨にとられ易い。いくら残酷物語の流行の時代とはいえ、性は善なり——これは性悪説から否定されそうだが——と信ずる私は、結局陰惨そのものは永続性がないように思う。

陰惨、結構、それがオブラートにほんのりと包まれて、読む人の見る人の夫々良識に従っているいろと解釈される所に、奇クの存在理由もあると思う。

思いつくままに、取り留めもなくペンを取った。無報酬、無目的に、ただ奇クを愛するが故に、特定の執筆陣に任せるだけでなく、私達の心の底を、ほんのりとオブラートに包んで、同志の人々に味わってもらおうではないか。

サジスチック・ストーリー・シリーズ

甘美な悪夢

大 中 忠

海水浴のシーズンも過ぎた海辺は淋しかった。白い砂浜に打ち寄せてくだけの波頭も、波打際に残る芥の数々も、空しさを憶えさせる。後をふり返えると私の足跡が一行に長く続いている。人々の去った後の静けさ、淋しさ、そういった所が好きな私は、わざわざ、シーズンをはずして、訪れたのだ。

入江になった場所を過ぎると、波は急に荒くなり、岩が波の中に迄迫っている。ここは一般の人はとても泳げない所だ。だが、こんな所で、しかも、もう肌寒さをおぼえる時期に、自由に水に潜っている数人、云わずと知れた海女だ。肌の艶から見るとまだ二十才前

後らしいが、黒く陽に焼けた肌、たくましい肢体はともすると男かと錯覚しそうになる。だが豊かに盛り上った胸のふくらみは、まぎれもない娘だ。

私は彼女等を横目に見ながら宿に向った。宿と云っても海女達が副業としてやっているだけの粗末な漁師家である。しかし、目の前に雄大な海が開け、横になれば潮風と波音が快く訪れてくれる、大自然の懷に抱かれた気持は又格別だ。料理も新鮮な魚貝類以外はとり立てて云うものは勿論期待出来ない。給仕は勿論海女だ。私も小柄な方ではないが彼女等の傍に寄ると随分貧弱に見える。座るとた

くましい脚が小山の如き様相を呈する。陽に灼けた黒い肌だが、豊かな艶だ。

「他にお客は？」

「御一人だけ。女子大生とかいった。」

「女一人でね。」

ぶっきら棒で愛想は悪いが、かえって善人なのかもしれない。

その夜は静かな波音に枕を高くして寝た。

近所の美しい少女美代子が私を後手に縛っていた。私はいつしか裸になっていた。美代子は私の両手首を腰の後で縛り合わせると、二の腕から胸にかけても縛り始めた。二回・

三回と胸に縄をまわすとうつ伏せに私を押し倒した。腰の上にまたがると胸の縄目をしめ始めた。激しい力だ。

「痛い、美代ちゃん。」

私は自分の声で目が覚めた。うつ伏せになっている。胸を圧迫した為の悪夢らしい。まだ頭がはっきりしない。手足が動かない。

「さあ起きて。」

急に現実が迫って来た。私は急に胸に痛みを感じて布団の上に上体を起こされた。私のすぐ傍に先程給仕をしてくれた海女が肌も露わにして坐っていた。海へ入る時と同じ短いパンツ一枚の姿だ。はち切れるばかりの肉体が、豊かに盛り上った乳房が私を圧倒していた。そして私はいつの間にか後手に縛り上げられていた。寝る時、寝巻だけしか身につけないのは私の長年の習慣だ。その浴衣の紐を解かれ、それが私の自由を奪っていた。この若い海女の前に私の姿はすっかり露わになっていた。

「何をする気だ。」

「さあ来て。」

彼女は後手の縄尻を引いた。すごい力だ。手首が千切れるような気持で私は立ち上らざるを得なかった。

「何をするんだ、客に向って。」

「何が客だ。さあ。」

彼女が何を怒っているのか、さっぱり見当がつかなかった。しかし彼女の様子では何も聞き出せそうになかった。その上抵抗してみても、殆んど運動などしていない私と、毎日重労働を続けている彼女とでは、体つきを見ただけで、その差は歴然としていた。私は只黙って廊下を歩んだ。浴衣はすっかりはだけてうつ向いて歩む私の目に自分の浅ましい姿が写る。

私は先程の悪夢と同じく幼い頃から、少女を相手に縛りゲームを楽しんだことがある。相手は近所に住む可愛い女の子、美代子だ。性を意識しない私達は互に縛り合い、果ては裸にもなった。だがそれは性への楽しみではなかった。子供の心の奥にひそむ残酷性の表われである。だから今思い出しても、美代子の裸体は、あまり思い出せない。唯、縛り、縛られたということしか。

幼い頃の縛りはゲームであった。しかし、今縛られているのはゲームではなさそうだ。私の縄尻を取っている海女の表情には怒りが表われていた。

思いがけなく旅先で縄目を受け、殆んど裸

に近い姿で深夜の廊下を歩く私、素足に廊下はいやに冷たかった。彼女は私を地下へ導いた。薄暗い階段をもう一つ下りると、突き当りに大きな扉がある。彼女はそこを開けると私を突きとばすように中に押し入れた。強い光と異様な音が私を包んだ。

奥の方に荷物が積んであるが充分に広いゆとりのある地下室だ。その部屋の中央に、私は白い女体を見た。入口に背を向けているのでよくは判らないが、張り切った肌、豊かな締った肉付きを見ると、まず二十才前後らしい。その巾広い白い背中には一面に赤いみみず腫れが走り、両手は上に伸ばして手首を吊られていた。彼女の後に、私を連れて来たのと同じ姿の海女が手に細竹を持って立ち、その横に、老婆が荷物の一つに腰を下ろしていた。

「さあ白状しないか。」

海女の手が細竹が空を切って、犠牲者の腰にふり下ろされた。

「ギューッ」

肌を打つにぶい音と共に白い女体はそり返り口からこの世のものとも思われない声を出すと、ぐったりと手首の縄にぶら下った。爪先を中心に体がぐるとまわって、私の方に

正面を向いた。痛々しい背中とは対照的に前面は全く無疵だ。幼い頃の美代子を思い出すような可愛らしい顔だ。しかし、今の私には彼女の顔も体も鑑賞している暇はなかった。

床に下ろされた彼女の後に、私も浴衣を剥がれて、彼女と同じ姿で、吊られてしまったのだ。

爪先立ちで辛うじて体重を支える為、手首



に縄は喰い込み、一杯に引っ張られた脇腹は、はり裂けるかと思う位痛む。

「一体、何の為に？」

私の精一杯の抵抗だった。彼女らの体に比べて私は自分の体格が恥しかった。

「喧ましい。身におぼえがあるだろう。お前かあの娘か、どっちかが取ったに違いないんだ。」

あの哀れな娘は裸のまま、壁を背に座らされ、両手を斜上に伸ばして、鎖で止められていた。まだ気を失ったまままだ。

「何を取ったって？」

「金に決ってるさ。」

老婆が、荷物の上から声を出した。

「早く白状しちまいな。あの娘が知らなけりや、お前しかないんだから。」

「そんな無茶な、金なんて……」

「ごまかす気かい。」

空を切る音、背中に激しい痛みを感じてのけぞった。手首に体重がかかり、千切れそう

だ。

「し、しらない。」

再び、空を切るムチ音、骨身に喰い込む細竹。私の口からもれるのは、もう言葉ではなかった。自分の声かと思う程、すさまじい悲鳴が次々と室内に満ちた。背中では焼けるようだ。海女の力は強い。細竹は背中一面を脹れ上がらせたに違いない。手首を中心に体がぐるぐるまわる。脇腹が裂けそうだ。天井がまわり出し視野が暗くなっている。行った。

「つかまえたぞ。」

小学校の放課後の教室、私は美代子をつかまえて、腕を後にねじ上げた。

「キヤー」

少女は芝居がかった悲鳴を上げた。

「括っちゃうぞ。」

「いやー」

私は少女の両腕を後で縛り合わせた。可愛い手だ。手の自由を奪った少女を椅子に座らせて、後手の縄尻を椅子の背に結びつけ、形の良い両脚も揃えて縛った。彼女は別に抵抗もしない。むき出しの膝小僧が可愛らしい。

「さあ、これから拷問だぞ。」

「どんなことするの。」

拷問という名は知っていても、その内容を詳しくは知らなかった。

「色んなことさ。」

「色んなことって？」

縛られていても、この少女は陽気だ。

「鞭で打つぞ。」

「何処にあるの。」

教室には見当らなかった。

「裸にするぞ。」

「縄を解かなくっちゃ駄目でしょう。そうしたら逃げちゃうわ。」

「それじゃ、それじゃ、こうする。」

私は美代子に近付き、彼女の腋に手をかけた。

「キヤー、止めて、くすぐりたい。」

少女は不自由な身をよじった。椅子がギシギシ鳴る。手足の縄目が肌に喰い込むのが判る。服を通して彼女の体は温かかった。息が段々荒くなって来た。

背中と手首の痛みに私は氣を取り戻した。

地下室は静かだ。私のすぐ目の前には、あの娘が壁につながれたままうなだれていた。彼女と一米も間を置かず向い合った恰好で私も彼女と同じ姿にされていた。近くで見れば、彼女の体は余計美しかった。海女達のたくま

しさは無かったが、それだけに女らしい美しさがあった。丸く、むっちりとした二の腕と太もも、小さく締まっているが美しい乳房、小さな乳首が上を向いて、しゃぶりたい様だ。胸と腰の張りの間の胴は細く締り、日本人離れした美しさだ。両手を一杯に伸ばされている為に露わになった腋の下。白く、艶のある肌。美しく健康的なのだ。手が引き伸ばされている為、この腋から二の腕の裏側に美しい線が見えていた。

「むう……」

目の前の体があぐらめいた。ゆっくり顔を挙げ私に気付くと体を固くさせ、むっちりとした太ももに力を入れた。

「あなたは？」

自分の視線のやり場に困りながらも、私は彼女が気付いて味方が出来たことを少なからず喜んだ。沈黙は不安を増すばかりだ。

「貴女と同じ目に合わされたのですよ。」

「お金を盗ったって？」

「そう。」

彼女は私の方に視線を走らせた。異性の前にさらすのには恥しい体だ。

「私、山中みちと云います、女子大の二年です。」

「そう。私は大中忠、自由業です。」

「卒論の資料を少しでも集めようと思って来たのだけれども、これでは拷問の資料しか集まらないわ。」

「だけど、ひどいなあ。こんな目に合わせるなんて。」

「本当よ。人間じゃないわ。背中はどう焼けるよ。」

「同じく。」

両手を上に縛られた二人の男女。第三者が見れば、随分変なものだったろう。

「自由業って、何ですか。」

「本の挿絵を書いています。」

「まあ、素晴らしい。随分もうかるでしょう。」

「それ程でも……」

私は苦笑した。

「どんな絵が主ですか。」

「色々。だけど、近頃は残酷ものが多いね。」

「残酷ものって云うと、殺されたりするの。」

「それもあるけど、縛られたり拷問を受けたりするの……。」

「今の私達みたいなの？」

「そう、だから貴女の姿は、悪いけど参考に……。」

「嫌だわ。」

白い肌が薄い桃色に染った。

「モデルは使いますの。」

「使いたいけど、縛るといふことになれば、一寸居ないね。」

「私、なりましようか。」

「恥しくない？」

「平気よ。縛られたことはあるもの。」

「どうして？」

「高校時代、上級生に可愛がってもらったことがあるの。いわゆるSっていうのよ。その人がサディストの気があったのね。よくその人の家で縛られたわ。」

「裸で？」

二人共同じ姿だと案外気楽に物が云える。

「いつも素裸にされるの。その人はブラジャーとパンティだけになって。初めのうちは、後手に縛られるだけだったけど、段々変わった縛り方されたわ。そんな雑誌が出てくるのね。」

裸の女の人色々縛られてるの。その人は、その雑誌沢山持っていて、私にも見せてくれて二人で縛り方の話をしたわ。縛った私を見てとても、恰好が良いって。本当？」

「本当、とてもきれいだよ。」

囚われの二人、苦境にある今の自分が少し

も気にならない所か、入口に足音がして、会話が途切れたのを苦々しくさえ思った。

「さあ入れ。」

荒々しい声と共に先程の海女達が戻って来た。しかし今度は小柄な一人の海女を後手に縛り上げて急ぎ立てて来ているのだ、まだ少女と云ってもいい位のその海女は、水から上って来た所なのか、全身ぐっしりとぬれ、若々しい肌が光っていた。

先程私達を鞭打った海女が近付くと、「お客様達には、まことに申し訳ないことをしました。」

と、大きな体を小さくしながら鎖をはずし始めた。

「では私達でないことが判ったのね。」

山中みちは案外ケロッとしていた。

「そうなんです。犯人はあの娘です。」

あの若い海女は後手縛りのまま宙に吊られていた。体に喰い込む縄目の厳しさは若い体に相当な苦痛であろう。しかし、もう覚悟を決めたのか、その少女は小さな唇を噛みしめ目を閉じたまま、一言も口に出さなかった。

「さあ、お座敷の方へ。」

自由になった私達はせき立てられるように地下室を出た。出る時に目に入った宙吊りの

少女の裸身は例えようもなく美しかった。これからどんな責めが彼女に加えられるか判らないが、どのように苦痛にあえいでも、彼女の美しい曲線は崩れることはあるまい。私は後に残ってその様子を見たかったが、海女は私達を急がして、先程のとは違う一番上等な部屋へ案内すると、部屋着もさっぱりしたものを出した。さらに驚く私達の前に、次々とお手のものの新鮮な御馳走が並び、宿の者が全部並んで、頭を下げた。いささか、あつけにとられた私達も皆が下って二人だけになると、やっと落着いて、食膳に手が伸びた。

「すごいな。」

「何が？」

「何もかも。」

「背中が痛い？」

「大分ましになった。さっきつけてくれた薬がきいたようだ。」

「本当によくきいたわね。」

「あの娘は、今、責められてるのかな。」

「そうでしょう。見たい？」

「う、うん。まあね。」

「貴方って、サディスト？」

「男は大体、多少ともその気があるって云うよ。」

「女はマゾヒスト。ねえ、今縛ってみない。」

「誰を？」

「勿論、私よ。」

「疲れてるだろう。」

「平気よ。」

「人が来るよ。」

「来ないわ。さっき、用事があつたら呼んで下さいって云ったでしょ。」

「紐がないだろう。」

「一寸待って。」

彼女は押入を開けて、ごそごそしていたがすぐに浴衣の紐を数本持ってきた。

「こんなにあったわ。」

「じゃ、縛らせてもらうよ。ついでにスケッチもさせてもらう。」

「良いわ。裸になる？」

「おんなじ縛るんなら、なって欲しいな。」

「向うむいてて。」

どうせ肌をさらすのだから、ぬぐ時に見られていても大差はないようなものだが、ぬぐ時の羞恥心は又別のものらしい。

「はじめは、どんなにするの。」

「そうだなあ。後手からいこうか。」

先程の彼女の体を思い出しながら、私は答えた。自分の手が細かく震えているのに気付く。今日は余りにも刺激が多過ぎる。

「良いわ。」

私は興奮を無理に押殺して彼女の方を向いた。白い体を、あます所なくさらけ出した彼女は横ずわりになって、両手を後に組んでいた。巾広く白い背中には先程の責めの跡がまだ痛痛しい赤い筋になって脹れ上っていた。

体つきが立派であるのに彼女の手首は小さかった。震える手で両手首を合せて縛り上げて。少しためらった後で、二の腕から胸にかけても、紐を喰い込ませた。柔らかなふくらみに手がふれると体を緊張させるのが判る。紐が喰い込んで丸い窪みを作る。弾力のある白い肌だ。

「痛くない？」

「平気よ、もっと強くしても。」

最も一般的な後手に彼女を縛り終った私は芸術作品を見るように二、三步後に退った。芸術作品、確かに彼女の肢体は、自慢するだけあって美しかった。私は電気を消した。彼女は身動きもしない。その彼女を窓際の廊下に座らせた。窓一杯に月の光がさし込んで来る。その冷い光に照らされても、彼女の肌は温かかった。

窓の向うには汐騒がして、漁火がまたたいて見える。月光を浴びて彼女は動かない。私は息を整えると、鉛筆を走らせた。

【体験告白】

美女の平手打と注射を願望する男

綾 真 須 男

私は今年二十九才、独身ですが、今迄に十数人の女性と交際しましたが、結婚したいと思う女性はい人もいませんでした。

美女もいましたし、私と同じ趣味の人も数人いました。私の趣味は音楽、絵画、旅行です。ただし、これらの趣味は表面的なものであり、内面的なものは、他にあるのです。

この内面的な趣味こそ、私の秘めたる最も大きなものなのです。それは美しい女性から平手打ちを受けたり、注射を受けたりすることです。このような感情や欲望が、いつ芽生えてきて、どのような変化をしていったかをこれからエピソードを混えて、告白してゆこうと思います。

私が小学校一年生の時（当時は国民学校といていたが）予防注射が学校の医務室で行われました。二人の保健婦（当時のことなので、看護婦か女医だったかもしれない）が二列に並んだ児童に次々と注射していました。

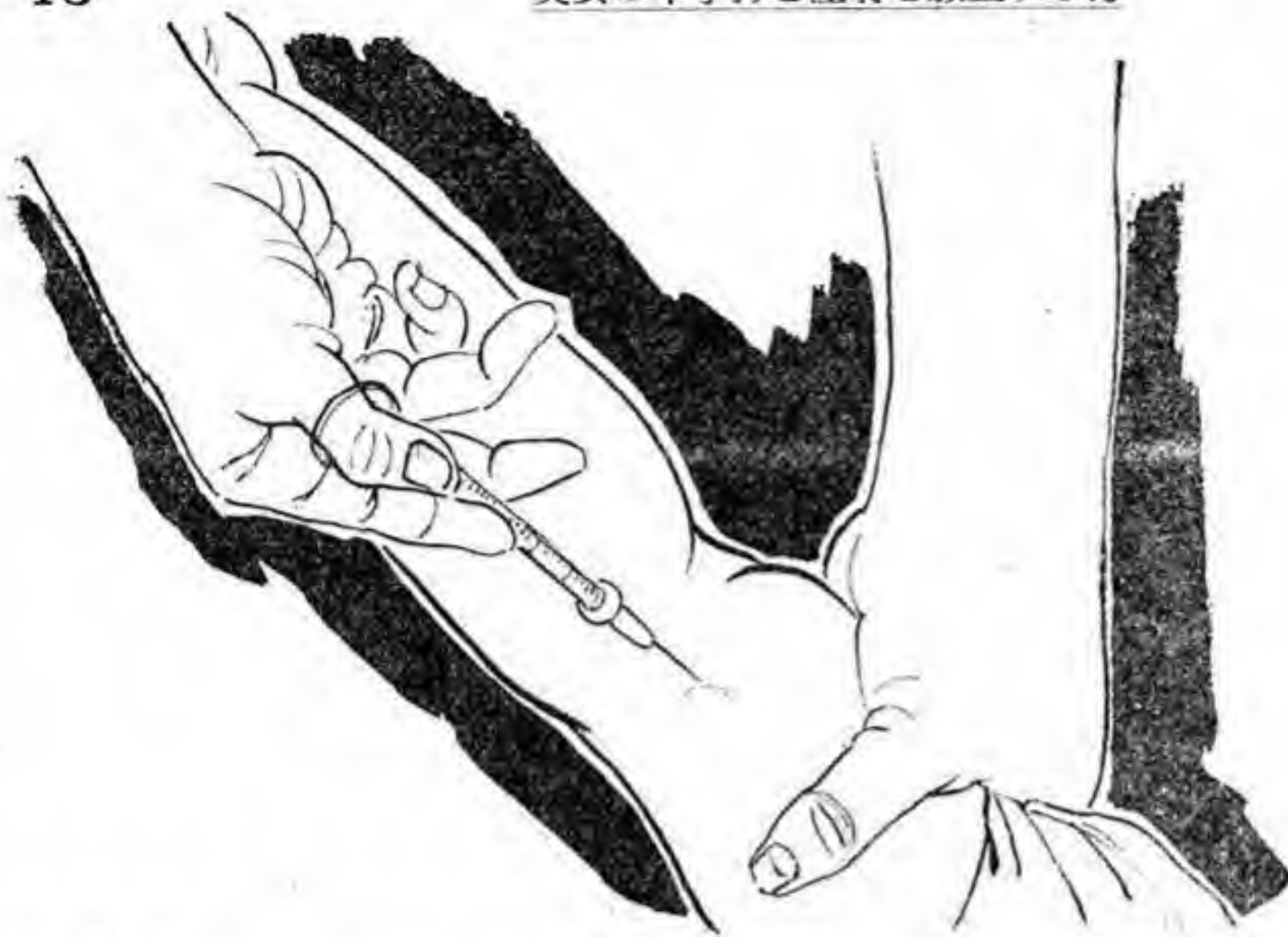
二人の保健婦は一人は美しく、一人はやや醜くかったので、私は美しい保健婦の方の列へ並びました。皆、痛そうに顔をしかめています。こんな美しくて優しそうな女の人が、痛がっている子供に平然として注射針を刺し込むのは、どうしてだろうと不思議な気持ちになりました。

いよいよ私の番がきました。女の先生が注射する部分をアルコール綿でふきました。美

しい保健婦さんは、「男の子のくせに、弱虫ですね」といって、そっと針を抜いていました。そして、私の方をやさしく見て、「次の人、いらっしゃい」と、よくすき透った澄んだ声でいいました。

ああ、ついに僕もあの針を、この腕にさし込まれるんだなあ、死刑にでも、あうような悲痛な気持ちで腕をさし出しました。保健婦さんは、注射器を上に向けて針から液を少し、チュッと飛ばすと、私の腕をとらえて、注射する上膊部の部分の肉をつまみ上げて、鋭くとがった針をプツリと射し込みました。

瞬間、私は激しい痛みを感じると共に、全身に快い刺戟を覚えました。それは、小学校



一年生の私にとっては、予想してもいなかった性的な快感でさえあったのです。私の顔は急に赤くなりました。保健婦さんは、
「痛いのか？　こんな注射ぐらいで、そんな顔

をしては駄目ね、そうね、もうすぐ済みますよ。」といって、そっと針を抜きました。あとで見ると、注射されたところは赤くはれ上っていました。

この時から、私は女の人から注射を受けると、痛覚が即ち直接、セクシャルなものに連結してしまうようになってしまいました。男の医者注射されるのは、大嫌いですし、また注射されても不快なだけで、全然性的な快感を覚えることはありません。それに、相手が女性であるときに限って、痛覚が直接快感につながるのは、一体どうしてでしょう。

また子供の頃は、よく便秘をして困ったことが度々あります。大抵は家で母がいちじく浣腸をしてくれましたが、一度近くの女医さんへ連れていかれたことがありました。たしか、小学校二年生の時です。

その女医さんは、上品で落ちついた感じの面長な人でした。さっそくベッドに、うつむきになって、お尻をまくられました。私はこわごわ女医さんの方を見てびっくりしました。大きな注射器を構えているのです。しかし、あの鋭い注射針がつけられていません。浣腸の怖さを、この時ほど強く

感じたことはありません。

それから、小学校四年生の時、給食の時間です。私の友人が茶わんをはしでチンチン叩きながら、「腹へった、めし喰わせ」と声張り上げていると、そこへ、給食パンを入れた大きなカゴを持ってきた若くて美しい女教師が見つけて、顔をしかめると、「ここへ来なさい」ときびしい声で命令しました。

彼は洪っていました。が、「早く来なさい」といったら分らんのですかッ」と再び激しく叱責されたので、彼は嫌々ながら廊下のそばの窓へ行くと、女の先生は、眼をいからせて、彼の両頬を手ではさみ、「どうして、あんな行儀の悪いことをしたんですかッ」といいました。彼がわざと、ふてくされたように黙っている。と、「返事をなさい、返事を！」と更に追求します。それでもだまっている。ので、「もう、私は許せません。両方のほったたをよくもみなさい」というと、彼はビククリした顔をして、女の先生の方を見ましたが、ほったたをひっぱたかれることを覚悟し、悲しそうに自分の頬をもんでいました。

「もう、そのくらいもんだら、いいでしょう手を離して！」

と、女の先生、言うが早い、美しくしな

やかな白い腕がひらめいたかと思うと、彼の左頬にピシャリと大きな音がひびきました。次に右の頬にピシャリツ、左にピシャリツ、右にピシャリツとやさしい筈の女の先生が、こんなにもぐい体罰を与えようとは、思ってもいなかったもので、私は息をのむようにして眺めていました。

他の児童たちも、先生からビンタの制裁を受けている友人を、哀れむように見つめていました。両頬へ美しい女の先生の平手打がピシャピシャと続きました。彼は痛いので両手で頬をかくそうとしますと、「だめだめ、あなたのような子は、この際思いきりこらしめなぐちゃ、男の子でしょ、我慢おし」、といって、彼の手をもぎ離して、右左、右左とピシッピシッと平手打を連発させました。

やがて隣の教室から、男の先生が騒ぎを聞きつけて来て、「まあまあ、そんな乱暴なことをしなくても、可哀そうに頬っぺたが真赤にはれ上ってるじゃないか」というと、美しい女の先生は、きっと男の先生をにらんで、「あなた、何を邪魔しに来られたのですか、あっちへ行って下さい。この子を叱る理由が私ありますのよ」ときめつけると、頬を真赤にして涙を流しながら、うなだれている子供

の方に向って、「まあ、あんた、この位のビンタで泣いているの、弱虫ね。そんなことで立派な人間になれませんか。さあ、先生がもっときたえてあげるから、顔を上げて、歯をくいしばって、それ、いくわよ」

ピシャツと彼の左頬に痛烈な平手のパンチが飛びます。ピシッ、ピシッ、と左右の頬への平手打の連発です。ピシッ、ピシッと殴る若い女の先生。私はあんなに美しくやさしそうな顔の先生が、どうしてあんなひどい平手打をしなければ気がすまないだろう、と不思議に思いました。現在だったら、きっと女の先生の暴行事件として、新聞に大きく書き立てられ大問題になるところですが、当時としては別に問題になるどころではありませんでした。結局彼は、「痛うなかった、蚊にくわれた位や」と負け惜しみを言い、女の先生は、何事もなかったように、他の子供には愛想よくパンを配っていました。

小学校六年生の時、学校で予防注射がありました。美しい保健婦さんが、一人で大勢の子供を次々と注射していましたが、私の友人が痛さに耐えられず、涙を流しましたので、「あんた、それでも男の子？ 弱虫ね、注射ぐらい、何です！」と叱りつけました。

私の家の二階に、その頃、看護婦上りの婦人が下宿していました。時々注射をうってもらいに、いろんな人がやってきました。

ある時、やせた背の高い男の人が、「疲れたから、ビタミンを注射してほしい」といつて来ましたので、私はその人が注射されることを、二階の段梯子の一番上のところから覗いてみました。

「この注射、ちょっと痛いよ、我慢してちようだいナ」といって、チクリと男の人の腕に針を刺していました。女の人は当時二十七八才で、美人ではありませんが丸顔のぼってりした肉づきのよい身体で眼鏡をかけて、子供の私にも、一寸近寄り難い気がしました。

気性は激しい方で、よく夫婦喧嘩をしたということを母親と話しているのを聞いたことを覚えています。なんでも、夫の頬をなぐったり、二階から突き落したりしたので、別居しているのだそうですが、子供の私には詳しいことはわかりませんでした。

私の裏の家に、女三人男一人の兄弟がありました。男の子は姉が二人、妹一人にはさまれて、女の方が優勢でした。彼がよく上の二人の姉にピシャピシャ平手打をくっているのを見かけました。下の妹も気が強くて、この

兄のほったたを二人の妹と同じように、ひっぱたいていました。

この姉妹は美貌で、上の姉は淡島千景に似ており、下の姉は山根寿子に、そして一番妹は長谷川裕見子そっくりの顔立でした。よく廊下で姉や妹から、ピシャピシャなぐられている彼を見て、私もあのようにして、なぐられてみたいなあ、と、つくづく彼がうらやましくなりました。

その家の下に眼科医が住むようになり、医院の看板を出しました。この医師の奥さんは結婚するまで看護婦をしていたとかで、患者によく注射をうっていました。診察室が私の家の二階から、よく見え、いろいろな患者が注射をうってもらっているのが、裏窓からよく眺められました。

高校三年生の時、集団で保健所へ予防注射を受けに行った時のことです。円満な容貌のやせた男が保健婦さんから、ストレプトマイシンの注射を受けているところを見ました。男のシャツをまくり上げ、上膊部をアルコール綿でふいてから、注射器を右手に持つと、左手の指で肉をつまみ上げ、チクリと射しました。男が、「痛いッ」と悲痛な声を上げると、この穏やかな顔の保健婦さんは、「ちよ

っと痛いわよ」といって、ゆっくり薬を注入していました。

以上、私の子供の時から思春期にかけて、見たり体験したことを、ありのまま書いてみました。小説や映画の中で、平手打や注射の場面、非常に多いのも、私にとって楽しみの一つです。

注射では、谷崎潤一郎の「細雪」で姉幸子にベタキシンを注射する雪子、痛がる娘にベタキシンを注射する幸子、雪子に注射する妹妙子等が出てくるし、平林たい子の、「追われる女」では、男に麻薬を注射してやる女が出てくる。若林慧の「青春前期」の中に、教え子の椎ノ木武志に黒皮かばんから薬と注射器をとり出して注射をうってやる、美しい女教師青戸閑子が出てくる。彼女は、この小説の中で、武志の頬に平手打を加えてもいる。

深井迪子の「夏の嵐」では、女教師の積子が男生徒の頬を三度もぶっている。「女軍医と偽狂人」でヘレン・ヒギンス扮する女軍医が、震えて逃げようとする偽狂人の男の腕を無理やりとらえて注射をうつシーンがある。「噛みつかれた顔役」で伴淳三郎が、美しい高千穂ひづるに、注射をうってもらうところ

がある。

このシーンは、注射器具の盆を持って入って来た女中の高千穂ひづるが、盆を置くとパチンと注射器のケースを開け、注射器をとり出し、注射針をとりつけ、アンプルをやすりでゴシゴシこすって、ぽきんと折り、薬液を注射器に吸い上げる。伴淳が「注射をうってもらおうか」といって、畳に坐ると、高千穂ひづるは、アルコールをしまった綿と注射器を持って、伴淳のそばへ坐り、上膊部を綿でこすってから、鋭い針をチクリと刺し込みゆっくり注射してゆき、スッと針を抜くまでを、私のようなマニヤを十分喜ばせてくれる程、念いりに撮影してありました。

「風来先生」では女医になった月丘夢路が、男の教師にビタミンを注射するところがあります。「イ、イイイ、痛いっ」という男の顔が愉快である。

女が男に平手打を加えるシーンは、近頃の映画では、大抵出てくるので挙げきれない。まだまだ書きたいことが山程ありますが、今日はこれくらいにしておきます。

同好の方がいらっしゃれば、文通し、お互いの経験を告白しあい、資料を交換したいと思います。

【女性乗馬考】

跨 がる 女 性

鞍

良 人

昭和36年12月号に「馬と女性」が掲載になりました。以来、乗馬女性の資料も、又溜って来ておりましたのですが、原稿作製に至れないままに甚だ失礼致しておりました。あんなに放置しておけませんから、今回はその中の数件に限って発表致します。

一 馬のり夫人の家族

「馬と女性」のときその内項で、北海道の女性が詠んだ馬のり短歌を紹介しました。あの「婦人の友」という雑誌の本年6月号の巻頭をご覧下さい。グラビア頁「わが家の健康」

の劈頭をかざっているのが「家中の乗馬を」(山県睦子)です。睦子夫人は五人家族の主婦ですが、写真では、鞭を左小脇に馬上に跨っている勇ましい夫人を中心に、他の三人のメンバーがそれぞれ騎馬姿で勢揃いしています(――パレスクラブにて)。左端にいる御主人の市長と長男の中学生以外は娘さんで、真紀子さん(中学一年)と由紀子さん(小学四年)です。

馬の手入などをして過します。……家中でしよにしますので、自然家族中の話題が一つになります。皆殆んど病氣らしい病氣をしたことがなく、ことに長女の真紀子は今迄に一度も学校をお休みしたことがありません。それが乗馬を続けているせいかどうかは解りませんが、一家揃ってスポーツを楽しむということが、心身共に健康な家族をつくり出しているのではないかと思っております。

睦子夫人の若さと美貌がステキですね。

健康の秘訣は馬に跨がりて

家族ともども原駈けめぐる

馬のりに娘姉妹をひきつれて

馬場へ通える市長の夫人

このパレスクラブは、屢々写真の題材にされるところですが、昨年のリーダーズダイジェスト6月号（日本語版）の表紙もここで女性の人が乗馬している情景でした。題して「乗馬クラブの人たち」D・フォーバート撮影とあります。去年6月9日には、ここで東京馬術大会が開かれ、午後、天皇皇后両陛下と義

宮が見物しました。その時の写真が「女性セブン」誌6月26日号のグラビアにありまし

た。「火星ちゃん」パレスクラブの馬術大会」がそれで、記事にも「……パレス乗馬クラブ婦人部員のりりしい騎乗姿の中に、未来のプリンセスのお姿を、そっと思ひ浮かべておられたのかもしれない」とありますように大勢の騎馬令嬢が整列している場面です。

プリンスが妃の候補探さんと



乗馬する女性（その二）

騎馬令嬢の試合に臨む

皇室といえば、デンマークのベネディクト王女が「三度のゴハンよりも乗馬が好き」というのですから、ことによると「火星」様のお気に召すかもしれません。この王女の誕生日が天長節と同じ4月29日ときていますから、天皇もお気に召すでしょう。ベネディクト王女は今年19才の妙齡、去る誕生日の贈りものにはお父さんにすばらしい馬をオネダリしたとか。その写真が「女性セブン」誌創刊号のグラビア「世界の王室」にあります。街頭の只なかなか、宮殿の中なのか、豪壮なビルディングの前にズラリと乗用車が駐車されてある場所を背景としたところでした。そこを駿馬に打ち跨がったハイティーングラマの王女様が意気揚々と乗り廻しています。あんなヴォリニウム王女とお馬ごっこでもして、ギユウギユウに跨がられた日には大変でしょう。

王宮の庭を騎馬にて乗り廻す

ハイティーン王女豊かな体軀

二 うるわしき落馬

ジャタリーン夫人が大の乗馬好きであることは、同じく「馬と女性」の項で触れまし



乗馬する女性（その一）

た。昭和26年12月23日のジャパントイムズ「海外よりの写真」というところを見ると「うるわしき落馬」との題でケネディ夫人の写真が二葉、左右に掲げてあります。左の方は夫人がニッコリと馬上にあります。ところが右の方は夫人が頭から、木柵の外へ落下する最中の図です。

「アメリカのファースト・レディ、ケネディ夫人は馬術が達者なことで聞え高く、サラブ

レッドに飛び乗って鞍上豊かに打ち跨がったところなどは、なんともカッコイイ。……」記事は、そのように書き出されています。ヴァージニア州のアパビル附近の荘園で狐狩をしていたときのこと、愛馬「ビットブアイリッシ」が木柵の垣根の飛越を拒否したのでした。不意を食らった夫人は、敢なくもんどり打って落馬したわけですが、その落馬姿がまた美事に優雅であったので、永く後世に伝え

る価値ありと撮影者は判断したとのこと。実のところ馬をして突然の拒否をなさしめたる犯人は、どうやら、この写真師らしいのですが、夫人は素早く再び馬上の人となった。そして写真師にニッコリはほえみを投げかけたかと思うと忽ち他の狩人達を追ったのです。

アメリカの一等レディー乗馬好き

落馬姿も世界第一

三 ゴダイヴァの像

英国コヴェントリ市、ハーフォード通りに、ピーピングトムの像がある話は前に致しました（36年12月号129頁）。この由緒深い都市も爆（15年11月14日）に遇って徹底的に破壊されたのでした。戦後、廃墟の中から復興なつたこの都市の中心にブロードゲイトの緑の広場がつけられ、なんとその真中に我がゴダイヴァ夫人の騎馬裸像が建設されたのでした。この像の写真は、あまり明瞭とは申せませんが、大修館「英語教育」誌（35年10月号22頁「イギリスの表情」）に掲載されております。更に道路を隔てた向い側に「ゴダイヴァクロック」と呼ばれる時計台が建って、時を告げる毎にゴダイヴァ夫人が右の戸口から馬

で舞台に現われ、左の戸口に退出するという仕掛けになっています。それだけではありません、この舞台に夫人がおどり出た瞬間に上の窓からトムが目をもいで、のぞくのですが、忽ちその目は白盲と化す設備になっているので、すから手がこんでいます。

とつ国の古都の真なかに騎馬の像

民を救いし裸婦またがりて

ゴダイヴァの義拳を称えるお祭りに

繰り出す裸女は騎馬で行進

四 日活の「エデンの海」

「あのエデンの海は、もう相当昔の事となつてしまいましたから、再映画化をしていただいてよい頃と思います。巴の役を演ずるにはどの女優がよいでしょうか？」と私は前に書きました（36年12月号177頁）。——和泉雅子という回答でもって、この願いを日活がお聞きとどけ下さったのは何よりです。去る5月27日の夕刊（朝日）を手にした私は思わずハッとしました。

「ただいま練習中」の欄に「なんとか行けそうだわ——エデンの海で『馬責め』——」なる見出があつて、和泉雅子の乗馬写真が載っていたからです。「非行少女」ですっかり株

のあがつた彼女、撮影中の「男の紋章」が終ると撮影所用語でいう「馬責め」「水責め」が待っている。若杉慧原作「エデンの海」の奔放なヒロイン清水巴の役が予定されていて馬に乗り、海で泳ぐシーンがあるからだ。——と書かれていました。永年画いていた夢が遂に実現するのです。女優は太い横縞の半そでセータにスラックス姿のいでたちで嬉しそうに乗馬の稽古をしています。

馬のりに夢中になった女生徒が

学校さばり馬の練習

高校の女子の生徒が水着きて

馬にまたがり浜辺を駆ける

水着きた「非行」女優が馬に乗り

海辺で演ずる巴の役を

あまり適当な箇所ではありませんが、少しでも遅くならない方がよろしいですから、ここで乗馬熱望の18才になる女子学生を紹介致しておきます。「乗馬をやってみたくてたまりません。適当な、馬術クラブを教えてください。東京都渋谷区初台2の22富沢方・高橋幸子・18才・学生」（『週刊女性』6月19日号139頁スポーツ・コーナー）

若きわれ年18の女学生

乗馬やりたし馬場を教えよ

五 トルコ按摩

芸能界での馬のりについては、他にもかなりの資料がありますが、今回は按摩の件だけをつけ加えるにとどめ、後は次の機会にゆずります。

「楽園を求めて」というイタリア映画で日本の風物が紹介されます。その中で、ブラジャー、ショーツのトルコ嬢に按摩してもらっている外人客が出るのです。裸で俯伏せにされた外人の背中に大ボリュームのトルコ嬢がガッポリと全身の重みをかけて乗ったまま骨も折れよとばかり力一ぱい押さえつけます。

外人の客をベッドに押し伏せて

ヴォリウム嬢その上に乗る

この種の馬のり按摩は、かつて「女のつり橋」において中村玉緒が演じました（36年12月号138頁参照）。その外に演技者不詳なのですが、中平康監督「危いことなら銭になる」のはじめの方に、とても美しいトルコ嬢が出て、長時間の間、宝戸錠の背に乗ったまま揉んでいます。しかもとても勇ましい歌（——よくわからないのですが、ドイツもコイツも狐が狸でどうのこうのという文句が出て来るテンポの早い歌です）を口ずさみながら、敷

かれている錠が「何すんだヨ！」と悲鳴を上げて、一向にやめようとしません。「こうやって、この歌うたつてると燃えて来ちゃうんだヨ」などといったりして跨がり直し、休み直し揉み続けます。或は錠の両脚をたたんで逆馬のりのまま責めつけたり致します。総天然色の画面一パイに写し出されるこの勇ましい裸娘の美しい肢体は見あきることはいないでしょう。

ブラジャーにショーツ姿のトルコ嬢

告白

はじめてのプレー

渡辺己津留

私達夫婦は今年の二月、長かった恋愛に別れを告げて、ある小さな神社で交わした愛を誓ったのです。しかし、いざ新しく結婚生活に入ってみると、あまりにも長い恋愛生活だったためか、お互いの身も心も知りつくして、新婚の新鮮な魅力を感じることができませんでした。未知の男女が

客の背中にピタリ跨がる
尻下にしつかとジョーを敷きひしぎ

グラマトルコが按摩で責める

この場面のスチールは「週刊実話と秘録」(37年11月30日号88頁)——「馬乗りになられたエースのジョー」——にあります。「新婚そうそうのエースのジョーがはやくも女難、半裸のトルコ嬢に馬乗りになられて、なんともいやはや、喜んでいいのか悲しんでいるのか……」と複雑な笑みをうかべていた。

夫婦となって、心から喜びあえる新しい肉体の喜びは感じられず、何かしら、もの足りなさを感じずにはいられませんでした。そんなある日曜日、妻と一緒に外出した時、私達はある大きな発見をしたのです。二人が入った書店にあるではないか、奇くが。私達夫婦が求めて、なお満足できなかった

シナリオをもらってこの異色の役柄にとり組んだ穴戸だが、撮影初日にぶつかったのがこのトルコ嬢のお色気攻勢。すっ裸になったジョーのうえに馬乗りになったセミ・ヌードのトルコ嬢。「ジョーさん、いくわよ！」とかけ声もいさましく「よいしょ、よいしょ」ともみにかかったからたまらない。若い女性のやわ肌に着せられてエースのジョーも冷や汗まじりにたちうちする。うらやましうらやましにこのセミ・ヌードになった二人の芝居を眺めていたスタッフたち、「奥さんがみたら、どんな気がするだろうね？」

このような、馬のり按摩を大映「温泉あんま」では、三原葉子が勤めます。半裸でないにしても、客の伊藤雄之助の背中にガッポリと打ち跨がって押さえつけている彼女のスカートは太腿高くまくれ上って、いずれ劣らぬ迫力です。グラマあんなに敷き潰されて散々の雄之助の哀れさ。はじめこそ、いい気持とばかりに揉まれていた客も、遂には「やめろヨやめろヨ」と悲鳴を上げるに至ります。それでもお手やわらかになるどころか、後むきに乗り直した葉子の巨大なお尻はおかまいなく後退して来てしまいいは殆ど頭上にまで迫ってきます。こここのところでカメラは雄之助の

った何物かを、私達に与えてくれるだろうと、早速買い求めると、何はともあれ、急ぎ帰宅し、一頁一頁、丹念に読み、そこにこれからの私達夫婦の生きる喜びを発見することが出来たのです。

その夜、私は手初めに妻をしばる事にしました。まず、両手をうしろ手にしっかりとしばり、足は野球用のバットの両はしに片足ずつしばりつけてみました。なんと素晴らしい美しさではないか。喰い入るように巻きついたロープが、妻の白い肌を三本、私は今でもこの美しさを、はつきりと網膜の中に残しています。

私はその時、妻にこんな事を云ったと覚えています。「お前は今日から、私のなすがままに従わなくてはならない」と。妻は、こっくりとうなずき「私達の本当の幸福のために、私は、あなたの全てに従います」と。云いました。そこで私は、私達の新しい夫婦生活のために、この喜ばしいプレーを初めたのです。

こんな事を書く、世の中の一部の人達は、なんとつまらない下品な事と蔑むかもしれません。しかし、私は事業の事で相当社会的地位のある人と交際しますが、その人達が、一歩家庭を離れると、どんなつまらない遊びをしているかということを知

って、いつも苦々しく思っています。

私は若々しい新妻の美しい姿を、しばらく残した美しい姿を、いついつまでも、若々しいままに残したいと念願しています。新婚時代の記念として、プレーの写真を印刷して残しておきたいと思うのです。

私は先に述べた様に妻にしばっておいて物さしでピシッピシッと背中を打ち、妻の「痛いッ」という反射的な声に、「こんな事で新しい生活が初められるか」と、手拭でしっかり口をふさぎ、更に激しく打ちすえました。それからしばらく、私は妻をしばりつけたまま、何もなかった様な顔をして奇クを読みはじめたのです。

三十分ほど過ぎた頃、ふと妻の方を見ると、こちらに顔をむけ、哀願する様な目つきで私を見つめ、腰のあたりをわずかに、もじもじさせているのです。今までに経験したことのないプレーに緊張して尿意を催したのでしょうか。

私は今でも、あの初めての日の、あの新鮮な喜びを味ったプレーを忘れる事が出来ません。妻も、初めてしばられた時の異常な刺激の体験が如何に素晴しかったかを恥しげに告白しました。そんな事があって、今日まで常に新しいアイデアを考え出しお互いが満ち足りた毎を送っております。

枕元の方角からあちら向きになっている乗り手のお尻の後姿をじっくりと捕えています。

今やその尻座の下に雄之助の後頭部、首の部分は完璧に敷きひしがれてしまいました。乗り手は「これでもか、これでもあっちのホテルに行くか、さア行かないかどうか」と満身の力でどしんどしん押えつきます。このところの場面が甚だ長くて、更に前方に乗り出した葉子は、一旦、立ち上ったかと思うと相手の両脚をかかえ込むようにして反らせて持ち上げ、そのまま再びドッシリと馬のりに戻ってエビ固めの態勢に入ります。双方ともどもに力つきてしまうまで、彼女はこの責めで相手を痛めつけるのです。尻敷き責めの圧巻です。似たようなポーズで26年の12月号の巻頭グラビア頁に春日ルミ女史の「尻敷きのプレイ」が確かにあるにはありましたが、あの種乃至はこういう「温泉あんま」的な迫力の写真が、もっともっと、載ると有難いと思います。

馬のりのあんまに組敷かれ

尻で採まれる温泉の客

頭までグラマの尻に潰されて

悲鳴を上げる温泉旦那

(以上)

十三人の女死刑囚

(その一 斬首篇)

佐 出 須 登

1

クロチルドは心をときめかしながら刑場へ急いでいた。圧制者のもとにあるこの国では毎日の様に若く美しい女性が反逆の名により或は絞首台に、或は斬頭台にかけられ生命を失っていくのだ。その死刑は公開され、死体はみせしめとして晒しものになる。クロチルドは祖国も同胞も愛してはいたが、同じ年頃の女性が処刑されるのを見るたび、次第に血汐がわきたつ思いにかられるのだった。

今日は絞首刑である。六人の美女が後手にしばられ悲鳴と共に吊り下る。十二本の足が

宙に浮きバタバタともがいたが長くはなかった。じっとこれを見つめるクロー。他人は、圧制者に対する怒りを秘めてるとみたらう。だが彼女はこうつぶやいていた。「どうも、ものたりないわ。」

2

今回はギロチンによる処刑である。黒山の見物人、クローは勿論その一人。美女達はまるで大根か人参でも斬る様にその首をおとされていく。穴に首をつっこまれ頭上に巨大な刃を見て絹を裂く様な悲鳴をあげる。だが次の瞬間落下するギロチンは、その首を胴体か

ら切断してしまうのだ。刑吏はかごの中から首をつかみだすと血の滴るのもかまわず高々とさししめす。ザビーネという女だった。

次に処刑されたマリサの首はあまり見事に斬れすぎて斬口が斧の腹にピッタリとくっついてしまい、かなりの力でひっぱらなければはがれなかった。胴体の方はちょっとピクリとしただけでもう物体と変っている。みつめるクローの目は次第に輝きをましてきた。

なかには、冷静に死に対したものもある。サンドラがそうだった。首をさしのべながら「この姿勢でいいの？」と云うのを聞いたの

が何人かいた。刑吏は彼女の首がおちた時、荒々しくひつつかみ、例の如く高くかかげながらその頬をはげしく打った。彼女の顔にさつと赤味がさしたかに見えた。群衆の中から恐怖の声があがる。クローは思わずため息をついだ。自分がそうしてやりたい気持ちになっていたのである。

3

こうして何人も斬っているうちに刃がぶったのか、テリーの首の上に落下しても完全に斬りはなすことができなかった。まだ生きてもがいている。

「あの首をネジ切ってやりたい。」

クローはこう思っていた、勿論彼女とは友達なのだが。刑吏はテリーの首をつかむときりぎりともわしはじめた。見物人の中からも悲鳴があがる。哀れ泣きわめきながら首をネジ切られてしまった。

このあと死刑はつけられ更に何人かが生命を失っていく。逆づり、いの吊り、或は海老吊りと種々の形に吊るされたまま首を刎ねられるもの、穴に首だけだして埋められ大鎌でかきとられるもの、地中から血汐が噴き出すのはすばらしいながめだった。こうして悲鳴は次第に少なくなり、やがて絶えてしま

った。一体何人殺されたのだろう。おびたらしい死体の山と生首。クローの顔にようやく満足のはほえみがみられてきた。

4

しかしクローの秘められた喜びも長くはなかった。クロー自身が捕えられてしまったのだ。先日の死刑の時生首を一つもち帰り愛撫していたのが処刑された女性に対する愛情、それが反逆になるという。有無を云わさず裁判にかけられる、裁判といっても実は名ばかりで無罪は勿論、終身刑すらなく死刑宣告にすぎない。ただ首を斬られて獄門に梟けられるか、絞首されてそのまま晒されるかの違いがあるだけだった。

判決が下る。十三人の美女は助命と云う言葉を書いて思わずとよめいた。但し、これには条件があった。彼女達で決闘し、勝ったものが相手の生首をさしだすことによって助命されるのだ。果然として立ちすくむ女たち。クローだけははっとした。相手を殺せばよいのだ、思う存分欲望を満足できる。ただどうしても勝たなくては。獄舎に帰され、ほかのものがだまりこんでいるなかでクローはこう考えていた。

5

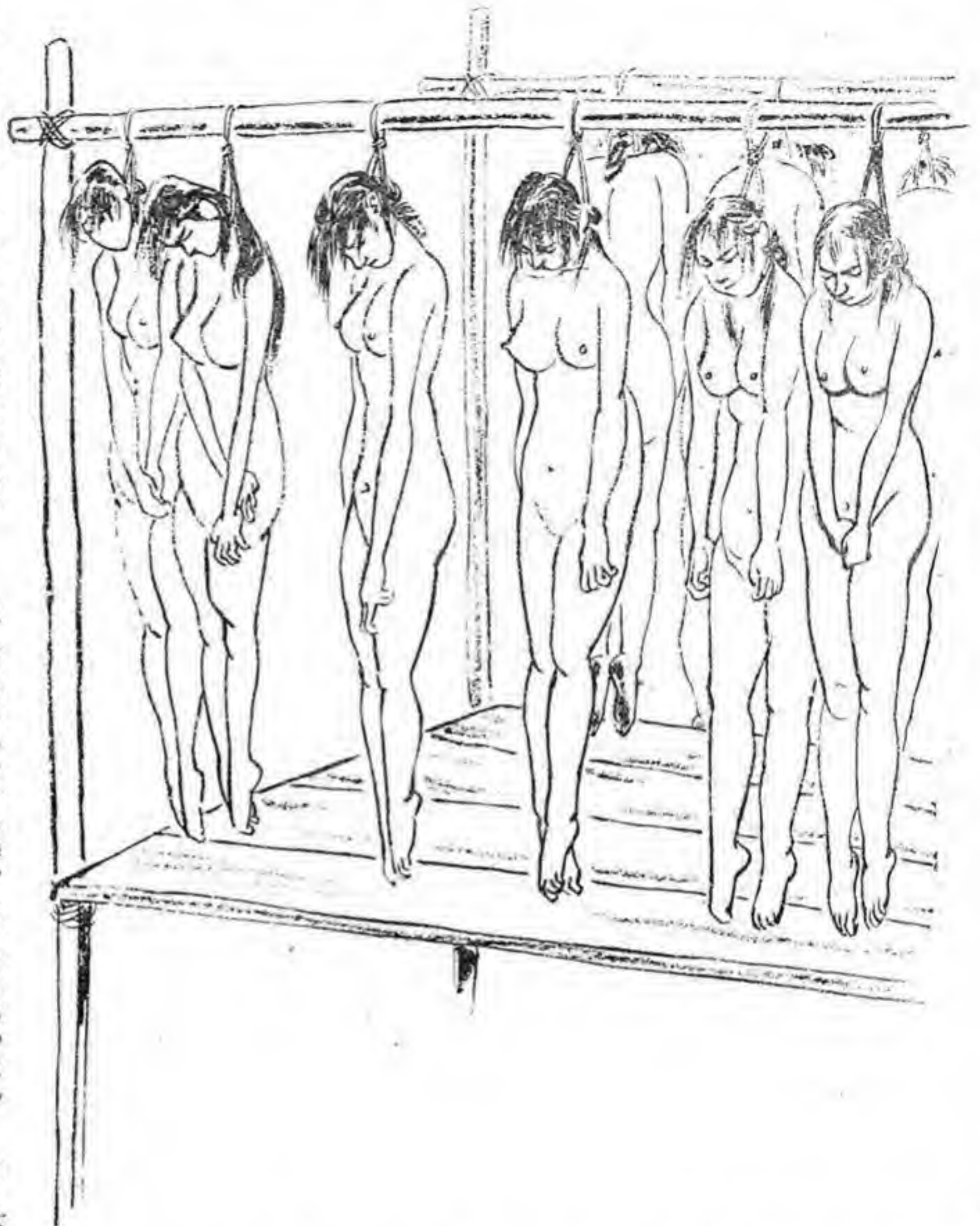
翌日十三人は刑場にだされた。この生き残る可能性をすて、殺し合いをするよりはと自ら死を願ったもの五人。あとの八人は承知した。生きるためには仲間の血を流しても……これが人間の本能であろうか。

刑はまず決闘拒否の五人からはじまった。最年少十七才のジャクリーヌからである。穴の前に坐ると後から刑吏が足の拇指を重ねておさえ、前からは髪の毛をつかんでひっぱった。彼女は腰をあげ首をせいっぱいにのばしながら、今首を斬られるということよりも前にたおれまいとする方に気をとられた。その瞬間、「かっ」と頸骨が鳴って首は血しぶきをあげて穴にころがりおちた。その上に胴体がつくりとのめる。雄々しい最後だった。刑吏が首を拾いあげる。眼瞼がまだピクピクとうごいていた。

次いで最年長二十九才のデボラが静かに台の前に坐り、両手をのばして台の両脇にあるかんをしっかりとつかみ、美しい首を台の上にさしのべる。刑吏は斧をふりあげ、発止とうちおろす。たったひとつ、重いぶい音がただけで、デボラの首は永遠にうちおとされた。胴体は台の前に坐ったまま、ピクリともうごかなかった。首はきれいに洗われ、幾

世紀もの間みがきをかけた様な髪もなでつけられてジャクリーヌと並び獄門台にのるのだから優雅そのものといわれた表情は、すこしも変ってはいなかった。

6



三人目のシルビアの時、とうとうじっとしていられなくなったクローがとびだし「わたしにやらせて」と叫んだ。刑吏も驚いたが無言で斧をわたす。冷静に刑をうけようとしても悪魔の如きクローの言葉をきいて、さすが

のシルビアも一声高く叫んでにげだした。あとを追うクロー。ぱったりとたおれたところに追いつき、夢中で斧をふりおろす。すると赤い髪をもったシルビアの首は血汐を噴出しながら十米もふっとび、木の切株の上にちよんとのっかった。うらみに燃えるかの如き目でクローの方をみながら、二十四才だった。

長い間心に秘められていた願望をやっと果たしたクローは、ほっと息をついだ。

ミレーヌがこれにつづく。二十三才のブロンドの女性だった。彼女は草を刈る押切台に首を入れさせられた。上方からクローが刃のついた柄をぐいとおしさげる。ミレーヌの頬すじに、血汐が流れ苦痛の聲がもれた。刃は、次第に頸へ食いこんでいく。全身を柄の上にのせた。「ゴトリ」不気味な頸骨の断たれるひびき。美しい首はどっと噴きだす血汐と共に前方にころがりおちた。

最後は二十七才のエレオノラであった。手を後にまわして縛り、ロープで引っ張りあげ

る。全重量が手首にかかった。クローに続いて処刑係を志願した十九才のナタリーが大刀をふるって大腿に斬りつけた。ぱっと飛ぶ血汐、三度目で右脚が、五度目で左脚が斬りおとされ、これで上半身が重くなり身体は前方に傾いた。首がぐつとのびる。クローがその首すじへ一撃、見事なタイミングでエレオノラの首は宙を飛んだ。首と両脚の斬口から血汐がはげしく噴きだして床を染めた。

7

さて、いよいよ残る八人の美女決闘である。四人づつ二組にわけられる。クローの組はミッチイ、ピア、デビー。ナタリーの組はキム、アン、フランソアーズ。武器は短刀と槍だった。

いずれも顔は蒼ざめ、こきざみにふるえているなかクローとナタリーは割に落ついており、まず主将格だった。

クローは短刀をふりかざし、手近のアンにとびかかりさっと喉をえぐった。驚いたことにアンの首はポロリとおちてしまった。勿論クローは殺すつもりだったがせいぜい頸動脈をかききる位と思っていた。それが丁度人形の首がのりのつぎめからはがれる様にポロリとおちてしまったのだ、殺したクローの方で

夢かと思う位。だが正しくアンの首はクローの手にあった。目はみひらいているが苦痛の表情はない。びっくりしたただだから十三人のうち最も幸運と云えるだろう。フランソアーズはミッチイと戦う時あせりすぎて石につきまづき、その拍子に自分の短刀で自分の下腹を刺してしまった。『こんなバカな』ながらも『うおいつかない。ミッチイが首に斬りつける。ぱっと血しぶきが飛び、フランソアーズの首は哀れ皮一枚をのこし、グランと前にたれさがった。二度目の刃がひらめいて彼女の二十四才の生涯は終了を告げた。キムはピアと戦っていたがアンを討ちとったクローが近づいてくるのをみた。キムとアンは同じ年で二十二才、親友だった。『もうだめ——』こう思った時、クローが槍をぐいとつきだした。キムは辛うじて短刀ではらったがこれが最後の力であることは誰みてもわかった。二度目、美しい下腹にブツツリとつきささる。苦悶する身体、そのもがきは槍をつたわってクローの手にひびく。キムの手から短刀がおち、槍にぐんと重量がかかった。もういいだろうとクローは槍をひきぬいた。血汐がどっとふきだし、キムの身体は前にたおれブロンドに輝く美しい首をクローに渡した。

8

ナタリーは、こうして四人を相手にすることになった。いくら生き様としてもだめだった。ピアやデビーも殺すことに興味をもってきたのか四人がかりでナタリーを後手に縛りあげ打首の処刑をすることになった。

クローの大刀が風を切った。当然コロリとおちる筈のナタリーの首はまだ胴についていた。クローとしては珍らしい切り損じ、恐怖がナタリーをおそう。『いやだ、いやだ。生きたい、死にたくない。』ものすごい勢であればだし、四人でおさえつけるのを恐ろしい力ではねかえす。ピアの大刀も後頭部にあたってはねかえり、三度目のデビーも肩に切りこんだ。『もうあきらめなさい』『早く死んだ方がらくよ』口々に叫んでも泣き狂っているナタリーの耳には入らなかった。

とうとうおおむけにねかし、喉をめがけて真上からグサリ……哀れナタリーは四肢をふるわせて絶息……かと思つたが、これも刃がすべて息の根をとめることができず、五度目も必死で首をひねったので僅かに傷つけただけ、四人でかわるがわる胸を刺そうとしたがいずれも、胸骨や肋骨にあたってはねかえされ、ナタリーは全身血まみれになりながら

も絶命にいたらず、泣きわめき、もがきつづけるのだった。悪魔でもついているのだろうか。

十数回目にクローはナタリーのふくよかな下腹をねらった。ここには刃を防ぐものはない。遂にナタリーの体内深く刃が刺し貫いたのだ。二刀、三刀。さすがのナタリーも動かなくなってしまうた。息絶えた彼女をピアとデビーでかかえる様にし、その首をねらってクローの一撃、皮肉にも実に見事にふっとなだ。

9

クロー達四人はそれぞれ生首をぶらさげ刑吏のところへ急いだ。すでに処刑された五人は獄門に梟けられ晒し首になっている。その獄門台は十二人分あった。クローははっと気がついた。まだ三つあまっている、助かるのは一人だけなのだ。

その瞬間ピアがものすごい勢で短刀をふりかざし斬りかかってきた。もしこれが決ったら最後、クローの首はズバリと、もう少しでふっとなでしまうほど斬り裂かれたろう。クローは辛くも身かわしたが体勢くずれ、よろめきながらバツタリとたおれてしまった。すかさずピアがのりかかった。しまった、

油断だった。後悔したがもうおそい。

ピアは左手でクローの喉をしめつけながら右手の短刀で首をとろうとする。クローは必死でその手をおさえる。このためピアはどうしてもクローの首をかくことができない。だがなんどいっても馬のりになっているだけにピアの優勢は明らかだった。じりじりと刃が頸に近ずき遂にふれかかった。

「もうだめか」クローがあきらめピアが最後の一刀を加えんとした時、刑吏が近ずいてくると後からピアの首を両手でぐいとしめつけた。刑吏は面白半分のいたずらだがピアにとっては何とんでもない話である。あわてて首をねじまげてその方を見ようとする。力がゆるみ、クローはさっとはねおきた。正に九死に一生というところ。尚も首を絞めつけられピアの顔は血の気を失って蒼白となった、手から短刀がポロリとおちる。クローはこれをひろうと自分のとあわせて二本、まだ二十才のピアのかたい、まるい乳房にズブリ、ズブリとつき通す。ピアのつぶらな目から涙がすつとこぼれおちる。クローは刑吏の大刀を借りさつとばかり首を刎ねた。

ピアは首のあったところから血汐を噴出しながら二歩、三歩とよろめいてはったりとな

おれた。

10

一方ミッチはデビーの不意を狙い、短刀をグサリと下腹につき刺した。悲鳴をあげて倒れるところ馬のりになる。ピアと同じく二十才、しかも同月同日の生れの親友デビーの生命は風前の灯だった。ここで何故すぐに首をとらなかつたのか、これがミッチイにとっては何とにかえしのつかぬことになるのだ。即ち何を考えたのかハンカチをとりだしデビーの首にまきぐいと絞めつけた。

デビーは、あきらめていた。「早く殺してね」こう云うと目をつぶり、なすがままにする。ミッチイは尚も絞めつける。デビーの顔が苦痛にゆがんだ。だが絶息する一瞬前、ハンカチはぶつくり切れた。ミッチイは短刀をとるためおきあがり、再びゆっくり馬のりになろうとした。デビーはふと目をあけた、彼女の目にはミッチイは全く無防備だ、ひそかに短刀をひろうとミッチイの下腹に十分に柄までつきたてた。悲鳴をあげてのけぞるミッチイ。「話がちがうわ」と叫んだがデビーはその上にとびかかり、こうして重傷を負った二人の美女はごろごろともつれあった。やがて相手の首をもって立ちあがったのは

ミッチイではなかった。哀れ九分九厘まで勝
っていたが思わぬ逆転をされたのだ。デビ
ーは自分が上になるや、すかさず相手の細首
をザクザクとかき斬ってしまったのだ。

11

しかし、デビーも重傷を負っていた。目の
前にクロローが立っている。もう戦う気力もな
くそのままくずれおちた。クロローの胸は高な
った。すでに生首の数は十一個、最後の一人
も今ここに横たわっている。それでも十分に
警戒しながらデビーの上に跨がり、胸や腹を
何度もつき刺してから喉にブツツリと短刀を
つき立てた。プスーとばかり血汐が二米も噴
きだし、手足をちよつとふるわせただけで数
秒後こときれた。

クロローはデビーの喉のまわりの筋肉をすっ
かり切り裂いて頸骨をあらわし、その継ぎ目
に刃をこじ入れて力を加えるとデビーの首は
あっけなく地上にころがった。哀願する様な
目つき、死体の上に跨がったまみつめてい
るとやがてその首は目の輝きを失い、すべて
の表情が消えていった。

12

こうしてクロロルドは勝った。"やっと生
命だけは助かった"彼女はニッコリとほほえ
むと前にころがったデビーの首をひろうた
め身体をのばした。まさしく斬ってくれとい
わんばかりの格好だった。そつと後にまわっ
ていた刑吏は大刀をふりあげ、長くのびてい
た首すじめがけて斬りおろす。"かっ"と頸

骨なり全く不意を食ったクロローは、それこそ
"あつ"と叫ぶひまもなく首をうちおとされ
てしまったのだ。血汐は三米以上も高く噴き
あがった。"助命"というのは死に対する恐
怖と苦痛をあたえずに処刑することらしかっ
た。

獄門台の生首はこうして十二を数えた。一
方クロローのそれは刑吏達にもち去られ、さん
ざんなぶりものになった。首になってもニッ
コリとした顔は実にすばらしい。

刑吏の一人がウイスキーのグラスを生首の
唇にそそぐ。斬口から下ににじみでてきた。
もう一人はタバコをくわえさせる。鼻から煙
がもやもやとたちのぼった。これを見て皆が
かっさいした。

本誌最近号在庫案内

○本誌最近号は左記の通り在庫し
ております。送料は当方にて負
担いたします。
○昭和35年5月号以前の号は全部
売切れとなり在庫ありません。
○各月号の総目次は、漸次誌上に
掲載いたします。

昭和35年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和35年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和35年8月号 (定価三〇〇〇円)

昭和36年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年12月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年12月号 (定価三〇〇〇円)

昭和36年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年12月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年12月号 (定価三〇〇〇円)

S悦悦悦悦悦
特特特特特
第第第第第
四五四三二
集集集集集
(特価五五五五五)
八五五五五
〇〇〇〇〇〇〇
円円円円円

昭和38年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年12月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年12月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年4月号 (定価三〇〇〇円)

「奇譚三十九夜」物語

△第二十九夜▽

辻村 隆

残暑は尚も厳しく、街のあちこちに夏を惜しむ盆踊りの、櫓太鼓の撥音が、風に乗って流れてくる夜のことでした。

ライカ氏とステッキ氏の二台のマイカーはひた走りに、有馬に向って疾走していました。神戸港の無数の灯が、まるで宝石さながらに燦めき、黒々とした巨船の群が、玩具の様に湾のあちこちに碇泊しているのが、遙かに望めました。

旅館専用の小型ロープウェイで涼線上の旅館に到着し、早速一行は赤く濁る鉱泉に浸って疲れを休め、爽やかな夜風に、骨の髄まで涼気を浸み込ませたのでした。

ビールが快よく咽喉をうるほし、軽やいだ空気が流れた頃合いを見計らって、前回での約束通り、ワイン氏とドクター氏が、自己の労作によるフォトを一同に披露しました。

フォトが人々の手から手へと廻り、あらかた一巡したのを見ずまして、ワイン氏は一同を制して話の口火を切ったのです。

心得顔に酌をしていた仲居達が立去り、一座はワイン氏の口許に注目しました。

第六十五話 女はプレイで勝負する

「世間からは一般に教養があると思われる女性の中に、反ってSMプレイを好む女性が、案外多いものであることを知らされました。女子短大一年生の緑川洋子の場合も、その例外ではなかったのです。

彼女を如何に緊縛し得たか——。それをこれから皆さんにお話ししようと思うのです……」

写 真 (A)



以下、私と謂うのはワイン氏自身である。

時計は既に夜の十時半を指していた。加古川まで友人夫妻を送り届けて、私は漸やく解放された気持ちになって、唯一人車を駆って、既に交通量の落ちた国道二号線を、時速八〇——九〇キロのスピードで飛ばしていた。

明石も過ぎ、やがて須磨の海岸の浪音が、提防を隔てて間近に聞こえ、鉢伏、鉄拐から吹き降す松籟の風が、窓に鳴りはためき出した頃、私はヘッドライトの光茫の中に、舗道の白線上に立ってしきりに手を振る、一つの小さな影を遙かに見出した。

エンジン・ブレーキでスピードを落し、車は急速に路上の人に近づくとつれ、それが小柄な一女性である事を知った。

ヒッチハイクでもあろうか、柄に似合わぬ、大きなバカンスバッグを肩に掛け、彼女は親指を立てて、しきりに私の車にサインを送っている。

寸前で停車して、窓から顔を出すと、ノースリーブにストラックスというスタイルの女性が、ホツとした表情に、稍々羞らしい気味の笑みを浮べて車に近寄って来た。

断髪で小柄な、ひきしまった、若々しい理智的な顔が私を凝視した。車を止めたものの、この車の主が、送り狼か、善良なる紳士かを咄嗟に観察しようとしたのであろう。

中年の私の、白の開襟姿に、彼女は安堵したのであるか——、口を切った。

「神戸の元町まで乗せていただけませんか？」

「いいですよ。で……貴女お一人？」

「ええ、はぐれちゃったんです。元町のRホテルまで行けば、友達が先に帰っているそうです。公衆電話で聞きあわせたら帰っていました。電車で帰ろうかと思ったのですが……」

「マイカー族に便乗しようと思ったってわけですね、大胆なお嬢さんだ。さあ、お乗りなさい——」

空車の私は勿論否応もなく、助手席のシートをあけてやった。

「あのう、白タクなんですか？」

「お金は要りませんよ。ショーバイじゃないんだから……」

「まあ、本当に助かりましたわ……」

彼女は安堵と感謝の気持を面に表わして、イソイソと私の横に乗

写真(B)



私も自己紹介した。

「ところで——、今頃どうしてこんな淋しい処を？、物騒ですよ、女一人じゃ……」

緑川洋子はその問いには応えなかった。

私も敢えてそれ以上問わなかった。人にはそれぞれいい難い秘密があるからである。

「写真おとりになるの？」

ぼつりと何の前触れもなく彼女は言ねた。私のシートの横に転がる、キャノンが眼にうつったからでもあろう。

「まあね。大したものも、とれませんが……」

「ヌードなんかも撮影なさる？」

「えッー」

私は声をのみ込んで彼女の顔を見つめ、慌ててハンドルを切り損なった位だった。

二人つ切りの車の中で、これは又、何という大胆な質問であろう。そういった緑川洋子は別段、顔を赤らめるでもなく平然と、前面の夜の街並を直視していた。

「遅くなった理由、申し上げましょうか。私、須磨で泳いでいて、行きづりの人に誘われて、ヌードのモデルしたのです。アルバイトのつもりでね。」

私は息をのんで、思わずブレーキを踏んだ。車は急停車する。

「こんなチツぽけな体でも、役に立つのかと意外でしたわ。ヌードはグラマー許りとは限らないのね——」

「貴女、一体そんな事を私に聞かせて、どういうつもりなんです。

私が撮りたいといえは、O・Kなんですかね——」

り込み、赤バッグをうしろのシートに投げ入れた。

言葉つきから察して、彼女は関西の女性ではないようだった。

やがて神戸の灯は見えている——私はこの気まぐれの時間を多少とも多く持ちたいと、スピードを緩めて、車をユルユルと制限速度で走らせ乍ら、それとなく彼女を観察した。

「貴女——こちらの方じやありませんね？」

「ええ、家は横浜です。伯母が大阪に嫁いでいるものですから、そこを頼って友達二人とヒッチハイクで出て来たのです。私、横浜Q大の一年生、緑川洋子です。よろしく……」

「アルバイトとして割り切ったら、こんなラクなお仕事ってないわだって二時間と少して三千円なんて、そうそうそんないい話が転っていませんもの……」

「ボクは急に貴女に興味を持ち出しましたよ。面白い——、じゃあボクは四枚出そう。やるかね——」

止った車の中で、シートを隔てて私達は向い合って、こんな奇妙な会話を交した。

そこで緑川洋子は始めて、私の顔をまじまじと見つめ、フト軽い笑いを浮べた。

「旅の恥は掻き捨てって、昔の人はいい事をいったもんね。貴方まさか、プロの写真家じゃないでしょうね。好きで撮るのならO・Kしますわ。でも、もう十一時を過ぎてますことよ。こんなに遅くからでもいいの……」

「顔馴染のホテルなら夜中だって、部屋をとってくれますよ。御意の変らぬうち善は急げだ——」

「へえ——善ね……」

彼女は何が面白いのか、くくくく、と含み笑いをした。十九才の彼女の不可解な言動は、戦前派の私如き、チョッと理解出来そうもない。

考えて見れば、すべては彼女からの挑発に外ならない。私はマンマと彼女の計画に引掛つたのかも知れない。

△案外喰わせ者ではなからうか。横浜だとか、短大だとかいって、これは或いは、新手のコールガール戦法ではなからうか△そんな危惧を私は感じた。それ程に彼女の態度は奇怪なのである。試みに私はいった。

「元町のRホテルで待つお友達に、遅れることを連絡しなくてもいいの——」

「貴方とホテルに行ったそこから連絡することにしますわ。夜道に日は暮れないっていうわ。さあ、そうときまったら、急にオナカがすいちゃったわ。何か御馳走して……」

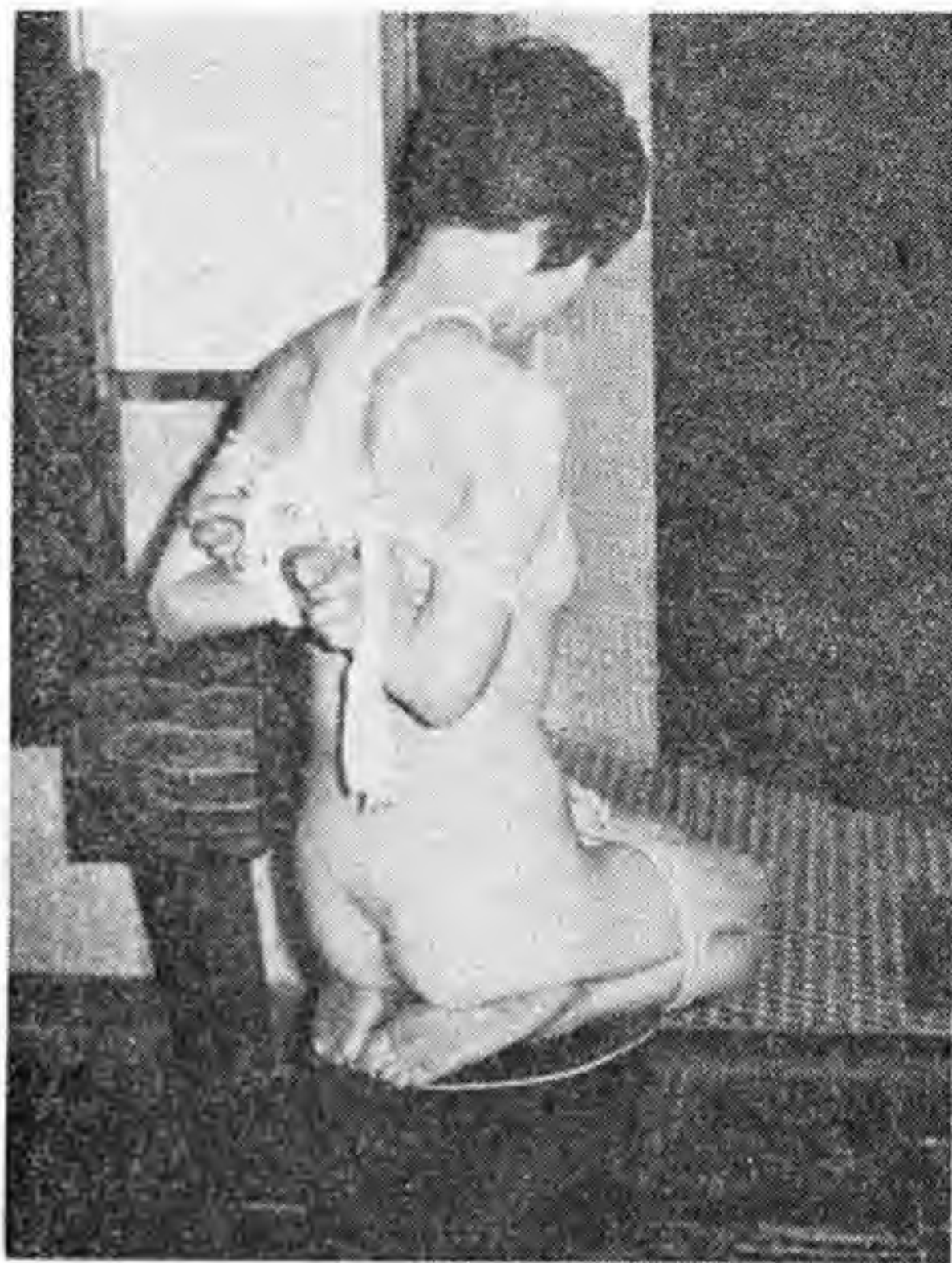
益々これは大変なシロモノである。

私は半信半疑で、まさか、こんな小娘一人に、大の男がどうなるものでもない、たかをくくって、行きつけの三の宮界限の、なじみのホテルへ直行した。運よく、カコのストロボを鞆に入れてあ



写真(C)

写 真 (D)



たことが、私を一気に決行に踏みきらせた原因であったかも知れない。鞆の中の二条の縄が、その時の僥倖を思っ、私はストロボと共に秘かに縄を忍ばせて車を降りた。

夜食をホテルで造らせ、私達は慌ただしい腹ごしらえをした。

私の奇行を知っている、このホテルの女中は、緑川洋子を伴って上り込んでも、別段怪しみもしない。その都度都度のチップが効いているのであろう。私は料理の跡片附をする女中に、例によって幾許かをそつと握らせた。心得顔に女中が去ると、私は扉をしめて、把手の上の金具を廻した。これで外部からは開かない密室となる。

流石に洋子は、少々顔を硬ばらせて、未知の私の馴れた動作を、無言で見守っていた。

「今日撮ったヌードって、どんな程度？、すっかり何もかもとらせたの、？」

「いわれる儘に色々なポーズをしたわ。まあ、私の体すっかりでしょうね」

「露出症気味だね——」

「かも知れないわ。私ってそんな女よ。変におずおずされたり、撮りたい癖に遠慮したりする男より、何でもズケズケやる方が、反ってサバサバして快いよ。脱ぎましょうか？」

「そうだね。支度する間、風呂につかったらどうだね。先刻女中が湯加減して行ったから、もう入れるだろう」

「そうね。じゃあ、そうするわ」

彼女は全然逆らわない。スルスルと私の目前で裸になると、部屋の隅の、はめ込みの整理たんすに、衣類をまとめて投げ入れて、さつさと浴室に消えた。

些さか後めいた気持ではあったが、私は彼女がザブザブ湯を使う音や、湯にひたった気配をみすまして、逸早く、彼女の脱衣に近づいた。判っきり正体を掴みかかったからである。スラックスの内側に、手縫の隠しポケットがあった。軽装を旨とする夏の装いの女性の、唯一のポケットでもあろう。

赤い二つ折れの皮の定期入れに、数葉の名刺、それに小さく畳んだ一万円札一枚と千円札数枚、彼女自身の学生服のポットレイト。そして、あきらかに彼女を証明する学校の学生証明書と、鉄道の学割証明書が挟まれてあった。まぎれもなく緑川洋子は本名であり、

十九才短大一年生であった。

それを確かめて、私は大急ぎで元通りに藏った。

新鮮な警異と、得難い機会に恵まれた事に私の心は大きく弾み出した。ヌードから移行して、何とか緊縛のシーンを撮りたいと私は念願した。二度とは逢えないたった一度のゆきづりの機会である。

怒れば怒れ、泣けば泣け——私はヌードに続く、緊縛への飽くなき探求を決意した。

烏の行水で、緑川洋子は、全身の水滴を弾かせて、臆面もなく、白い肌を私の視野の中に曝し乍ら、悠々と体を拭いていた。

アプレの近代女性とはかくも性に対して開放的なのであるうか。

いや、彼女は特別に己れ自身の肉体を曝すことに羞恥を感じている様子はなかった。羞恥の眼で見る私の方がどうかしているのであって、あるべきものがあり、備わるべきものが備わっている以上、彼女にとっては肉体を堂々と開陳して、何らやましさも羞らいも感じる必要がなかったのかも知れない。

「四〇キロの体格って随分貧弱でしょう。モデルになる資格なんてないと思うな。だからあたし、そのひけ目の分を、貴方のお気の済む様になさって、それでカバーするつもりだわ。でないと、ゲルを貰った手前申し訳ない——」

彼女はクリーム気一つない、素肌で当然の様にいい切った。

「ね、そうでしょう？」

「実に明快だね。よろしい。じゃあ、貴女のお言葉通り、私は貴女を自由にする資格がある。つまり自由を束縛してもいいという事だが……。私もヌードは随分とり飽きた。変ったところで、自由の束縛と行きましょう」

「自由の束縛？」

審かしげに首をかしげるのへ、押っかぶせて、

「貴女の体の自由を束縛するんですよ。つまりズバリいって、貴女の体を緊縛する——」

瞬間、彼女はハッ、とした様だった。

「私を縛ってどうなさるおつもり——。まさかその上で……」

「冗談じゃない。

縛った写真をとる——。それだけの事です。うなれば一種の残酷ムードでね。縛られてみたいなんて考えたこと、今迄にない？」

「……」

返事はなかった。しかしうつむいた硬い顔が徐々にほ



写真(E)

ぐれていた。表面大胆に偽悪めいてよそおっていても、所詮十九才の小娘である。極度の緊張感が内臓されているに違いない。いや彼女にとっては、ヌードや、緊縛そのこと自体より、それによって生じる女性の危機をじかに感じとっていたに違いない。

写真を離れて、緊縛された体に、襲いかかるであろうかも知れぬ、未知の男の悪魔の触手――。

それは無理のない連想であった。しかし、私も体面上、合意ならいざ知らず、それを拒否する女性に挑む気持は更にならない。これは百万言を費いやしても、数時間後に判明する結果を見てもうより仕方のない事だ。妙な弁解めいた言葉を口にして不信感を抱かせるより、要はサラッと撮して、結果の何事もなかった事を早く知らせてやるべきだ。

私はストロボの電源をACコードにつなぎ、小型の三脚にキヤノンを据えて準備に黙々と動いた。そして注意して、無言の儘、二条の縄をバッグよりとり出して、床に投げた。一条の縄をもって近附くと、彼女はビクリと体をふるわせて、一步後ずさりした。

「これを三重にして体に巻いて下さい。後手にして、縄尻を握っていけばいい。うしろはとらないから。」

一種のアクセサリとして縄を纏うに過ぎないポーズに、彼女は少々安心して私の巻きつけた縄の端を後手で握った。

「そうしておいて、とる時は、うんと腕を横に張ってね。そうすると縄が皮膚にくい込んで如何にも緊縛した様にうつるから……」

こんなポーズが何になるう。所詮は偽りの緊縛ポーズの凝態に過ぎない。が、緊縛の道程は、先方を安心させる為にも、又こうしたいつもの装おいかから、齒搔ゆくも始めて要かねばならない。

いわれる尽に、縁川洋子は背を見せず、右に左にポーズを変えた。

「自分の縛られた写真見たいわ、送って下さらない――」

「送ってもいいけど、大丈夫？」

「私信は絶対あけないのが、我が家の鉄則よ、貴方に御迷惑はかけませんわ。」

「どうして、そんな写真がほしいの――」

「唯なんとなく……、いいえ、本当のことという、ひよっとするとあたし、こうして縛られて見たい願望があったのかも知れないわ。自分自身が安全で、信用の出来る人に、色々縛られて、自分の体をギリギリと虐めて見たい気持。難かしい法律書にうみつかれた時、フト、角田喜久雄の一連の伝奇小説を貸本屋で借りてくる時があるの。うら若い娘が、穢多や非人に犯されそうになったり、縛られて雲助達にあわや乱暴されそうになったり、そんな本をつまらな いと思いつつも読みふける時、私自体いつしか、その小説の中の、娘の位置に坐り込んで、ドキドキし乍ら、身内のほてりを感じ、轟々と縛られて、そんな眼にあって見たい気になるのをどうしようもないわ。受身が女の本性であるをつくづく知らされ、嘗って読んだ西洋の魔女裁判の、あの魔女の本心が私にも巢喰っていて、ああして責めさいなまれ、非道い拷問にかかる事が、自分の運命でもある様な気がしてくるの」

短大生だけに喋り出すと、能弁で弁舌さわやかに一気にいいたい事をぶちまけてくる。

「そういう性質をマゾというんだが――」

「マゾッホは男でしょ、けれど、女性の本心はマゾヒズムよ。愛す

る男から虐められたい気持、これがノーマルな女性の本心じゃないかしら。女が男を虐め、男が女から虐められるのを欲ぶのはおかしいと思うけど、女は愛されたいと願う時、その人からいじめられる事を切望するものだわ……」

いつしか、緑川洋子はモデルの位置を忘れて、論調に入ってきていた。

彼女の持論を否定もしないが、肯定も出来なかった。それよりこの貴重な時間を論議に費やしている暇がない。要は百の論議より、一の実行あるのみだ。

「じゃあ、送ることを約束しよう。もっとも貴女の気に入るような、縛りの写真をねー」

「じゃあ、一つだけお願いがあるの。私を縛って、私の胸に字を書いて頂戴。そうね。マゾの女、緑川洋子十九才。この体提供します——黒々とそう書いて頂戴——お願い。」

私は思う壺だ。相手は昂揚し、愉びを覚えつつある。私は不審そうな顔をした眠ぼけづらの女中から硯箱を借りて来て、墨をする。と支度をととのえ、二の腕に縄をかけて、腕を引き絞るようにして今度は本当に後手を縛った。後手が下らないように首に縄を廻して両手を背につり上げ、更に一条の縄で、彼女のややとげばった小さい顔を、ぐるぐる巻きにして、口にぐつと縄を喰い込ませて、猿ぐつわの代りにした。

筆をとると、彼女の要求通り、私は未だ硬い蕾のふくれ切っていない胸に筆を走らせた。激しい動悸が、筆のまにまに手にとるようを感じとられ、縄の喰い込んだ頬が始めて赤々と紅潮してくるのが分った。

写真(A)はそのポーズの一枚であり、(B)はセルフタイマーで、私と彼女の小柄を比例したものである。私(身長一六八センチ)にくらべて彼女は私の肩までもないトランジスターであることが、これで分ると思う。

とり終った私は、縛った儘の彼女をバスへつれて行き、丹念に石ケンをつけて、ごしごし体を洗ってやった。

濡れぬさきこそ露をもいといえ——、という言葉通り、後は一瀉千里。緑川洋子は内蔵していたマゾ性を判つきり露呈して、しきりに愉悦の溜息まじりに、激しい緊縛をあからさまに要求した。

三面鏡に座らせて、彼女の緊縛のポーズを彼女に見せてやった時しばし彼女はこの場所を離れようとせず、己れの緊縛の姿に見惚れ、胸に書かれた自分の名前に飽きず見入っていた。三面鏡に写った彼女の姿の肩の辺りに筆のあとが見えるのを目にとめて戴きたい(写真C)。

風呂から出てきても、彼女は以前の縛りを解いてくれとはいわなかった。私は顔を解いた縄を今度は太腿に使い、三面鏡の小さい回転椅子に正座させて、首縄から両腿へ緊縛して、その姿勢を数枚ものにした。(写真D)

縛りを変えて、両手を幾重にも強く縛り、それを股縛りに連結したのを数枚とったが、これはポーズの加減で、あるいはカットされるかも知れない。

時計は既に午前零時を指していた。諾々易々と応ずる彼女と相対して、二条の縄で私は様々の緊縛をあく事なく試みていた。しかしその大半は、誌上に発表出来そうもないもの許りであった。

短大生のプライドを剥ぎ度い欲望がともすれば私の体内をかけ巡

写真 ①



った。その結果が（写真E）のごとく、彼女の顔を墨で滅茶苦茶にぬりたくり、ひじかけ椅子に身動きも出来ぬ露わな緊縛のポーズとなつて現われたのである。

私の顔に脂汗が浮き上り、流石に緑川洋子にも、疲れが見え始めた。時間にして一時間半そこそこであったが、二度と得難いチャンスだけに私は最大限に、時間を活用していたし、別ればもう、いつ逢えるとも知れぬ路傍の人だけに、私の緊縛も激しかった。

フィルムの三六の目盛りが出て、この夜のプレイに終止符が打たれた。

書いては洗い、また書いてと都合彼女は五回もバスへ往復した。

深夜の三宮は、流石に人の往来が絶えず、麻薬に犯された男女がドヤ賃もなくガードの下や、舗道の片隅で新聞紙一枚の上に転がり、泥酔した男がわめき散らしてそうろうとした足どり、あてもなく流れて行った。ドブの匂い、立小便の醜えた悪臭、そんな匂いのミックスした中を抜けて、私達は元町の方へと大小二つの影を落して歩んでいた。

元町六丁目——緑川洋子のRホテルはそこにある。静かな街角で何事もなかった様に私は握手を交す。

「来年またお目にかかりましょう。あたし達、明日は京都へ行つて二泊して横浜へ帰る予定なの——。生れて始めての経験だったけど、私の知らなかった、もう一つの世界があることだけは分りそうな気がするの。じゃさよなら——。愉しいアバンチュールだったわ」

スラックスが小股にかけて、残置灯の仄暗いホテルの玄関のベルを押し乍ら、彼女は振り返り、バイバイと手を振った。

私は再び三宮へと引返し、マイカーを運転して深夜の阪神国道を芦屋まで飛ばさなければならぬ。洋子の面影にひたり乍ら……。

× × ×

ワイン氏の話は終わりました。人々は今更の様に改めて、女子短大生緑川洋子の緊縛のポーズに見入るのでした。

次はドクター氏の番です。ワイン氏のフォトに比して、ドクター氏のものは、これまた対照的におとなしく、初歩そのものの様でしたが、夫々が懸命の努力を、傾むけて撮ったものには違いありません。

人々は、照れ臭そうに頭を掻き乍ら、ポツリポツリと話出したドクター氏の言葉に耳を傾けます。

第六十六話 蛇の生殺し

「医者と薬屋——、これはお互いに不可欠の間柄のものです、近頃のようにどんどん新薬が次々と誕生してくると、我々ロートル組の不勉強な輩は、その効能や使用方法、適応症を覚えるだけでも一苦労です。以前のミッテル（薬）にかわって、新薬を試用するとなると、いつも仲々ふんぎりがつきません。自然、そうなると、薬屋の方も懸命で、製造元からプロパーを廻したり、ジュースや洗剤、果ては強精剤までサービスしたりで、あの手この手で、攻撃して来ます。私の病院にも新薬、医療器具、衛生材料など各部門を含めて、十二、三軒出入しておりますが、S医療器具店の秋山紀美は、男性の圧倒的に多いこの商売で、珍らしく女性がスクーターに乗り廻して御用聞きにくる特異な存在だったのです。その彼女と、ショールバイ気を離れて、私はヒョんな事から、かわりを持つ様になったのです。

秋山紀美は才気煥発の美人セールス・ウーマンだった。S医療器具店は業界では二流の下といった中堅どころだったが、秋山紀美の愛想のよさ、てきばきした物腰、冗談をうまくあしらうコツ等が実に鮮やかで、しかも近代的な珍らしい色白の瓜実顔の美人で、未婚の二十二才と三拍子も四拍子も揃っているから、看護婦連には別として、医者仲間では評判も上乘で、彼女が医者廻りを始めてから半年も経つと、S医療器具店はライバルを圧して着々と売上の実績を上げていった。殊に若いインターン上りの医者などは、要りもせぬものまで、何かとかこつけては秋山紀美に注文してしまう有様であ

った。

医療器具店の扱かうシロモノがまた多種多様で、私の病院など、大抵ギネ（婦人科）が主であるから、注射ポンプ、消毒器はいいとして、イルリガートル、エネマシリンジ、カテーテル、ブーシからタンボン、ペッサリ、ゼリー、浣腸器といったものから、婦人科用の医療器全般——、果ては産制具のスキン類まで、一切合財秋山紀美に注文する。

インターン上りのK君はよく彼女をからかう。Y社の発売している黒いムードに便乗したコンドームが、静かなブームをまき起していると聞くと、早速それを取りよせさせ、彼女の前で、黒いコンドームを長々と拡げて、煙草の煙を吹き込み、性能試験をしては、彼



写真 ②

写真 ③



女の顔を赤らめさせ、脱腸帯はいいとして、子宮帯の説明をわざとこと細かく訊ねたりして彼女を困らせたりするのである。

同業者は業を煮やして、巻返し戦術として、何処で借りてくるのか八ミリの秘密映画を提供したりするのだが、それも一時で、またぞろ秋山紀美にすっかりお株をとられ、ダンピングに出ても、美人の笑顔とサービスには到底太刀打ち出来なかった。

その彼女が、選りによって変った病気に罹ってしまった。

ある日——もう七月中旬の暑い頃であったが、商用を終わっても秋山紀美は立上りかねてもじもじしていた。

「未だ何か私に用があるの？」

「それが……あのう——一度診察して戴きたいのです。皆さんに内

緒で……。あらぬ噂を立てられると私困りますから……」

そこで、秋山紀美は症状を訴えた。よくあるトリコモナス原虫による膣炎であるが、未婚の秋山紀美にとっては、正に悩みぬいた一大事である。私は念の為診察することにしたが、彼女の強つての頼みなので、看護婦にも知らさず、商用の体にして、私一人診察してやった。秋山紀美は例の婦人科用の診察台に跨がった時、非常に恥らいを示したが、私は既に職業意識をとりもどしていた。

私は定石通り膣帯下、尿通、前立腺からの分泌物をとると、これに生理的食塩水を加え、顕微鏡にかけて見た。予想通り西洋梨子状のトリコモナス原虫が、前端的四本の鞭毛を活発に運動させて、波動膜はうごめいていた。培養するまでもなく、この生鮮標本で明らかであった。

どうやら紀美の話を総合すると感染経路は銭湯らしかった。搔痒とただれ、それに不快感——、秋山紀美は、この不潔な原虫の寄生を知らされて泣き出しそうな顔になった。

私は、抗生物質トリコマイシン系統の挿入薬で短時日で治癒することを説明してやると、紀美はほっとした顔になった。私はコストをとらず、しかもトリコ挿入錠を内緒で、紀美にくれてやった。

医師がクランケに興味をもつ事はよくない。併し秋山紀美の場合カルテにももらない、私と彼女だけの秘密であったから、商用がすむと私は彼女に症状をきき、それをまた紀美はとぎれとぎれにいい難そうに、経過良好を報告するのであった。

若いインターン上りは、私と紀美が怪しいなど、プレを掴まえては、ヒソヒソと囁き合っていたが、何ら私にとってやましいところはない。しかしこれを機縁で、私は秋山紀美にセールス以上の親

しみを覚えた事は否めない。何故なれば、克蘭ケの場合、また妊産婦の場合、病気がよくなり、また、お産をすましたら、もう克蘭ケとは顔の合せることのない間柄であったが、紀美の場合には彼女のトリコモ炎が完全に治っても、毎日または隔日に、その美しい笑顔に接する事が出来たからである。

「遂々、誰一人気づかず、先生のお蔭で治す事が出来ましたわ。何か私に出来ることでしたら、先生の御恩に報いなくては気が済みませんね」

紀美は二人切りになると、私にそっとそう告げた。

天啓のごとく、私の心にその時浮んだのは、三十九夜諸君への約束のフオトの一件である。私の職業柄、悲しい哉、皆さんの様に自由がない。明け暮れお産や掻扱や、治療に過していると、到底写真をとる機会などには恵まれなかった。休日と雖ども、臨月の妊婦は待つてくれない。自然日曜の休診日でも私は、家で待機している時が多い。いわば二十四時間絶対心おきなくゆっくり出来るという間のない私である。

秋山紀美なら、この私の一見アブノーマルな希望をきき入れてくれそうに思えた。そして私のその秘密も守ってくれそうに思えた。「秋山君、こんな私の気持が分るかね。私は明け暮れ、女の秘奥を探る事を仕事として生きている。自然、他の人間だったら探求してやまぬ個所も私にとっては、耳鼻科の医者が、耳や鼻を、眼科が眼を見るに等しい思いで、他人が羨やむ様な感懐は、何ら湧かないんだ。これは神聖な職業意識に徹すれば当然の事だろうと思う。いつか『お産の映画』だと称してドイツの古いフィルムが日本で公開された時、一般大衆は、興味と見ぬもの見たさで列をつくって、僅か

数分の何が何んだか薩張り分らぬ傷だらけのフィルムに飛びついていたが、それを我々の職業に携さわる医師は、毎日かそれとも三日に一度は、この眼で見究わめているんだよ。だから私は、今も市場に氾濫する性を扱ったキワモノには殆んど何らの関心を持たないが私はそれに代る、アブの世界に興味をもつ様になった。例えばこうしたものにね——」

そこで私は、戸棚の奥から奇クを一冊とり出し、グラビヤを払げて、秋山紀美にそれを示して、その反応を見ようとした。

「先生がギネ専門の方だけに、分る気もしますわ。私には、この本の内容にはついて行けそうもありませんけど……」

「ところで、君の治療を思にきせていうのではないが、一度でいいから、君がこうしたモデルになって、私にフィルムをとらせて欲しいんだけど、無理だろうかね——」

「……」

彼女は困惑した表情を、判っきり示して返事を渋った。しかし意を決したのか、

「とても、この写真にある梨花さんなどの様な激しいものには堪えられないと思います。でも、先生がたつてのおのぞみなら、一回だけ縛って戴いても結構です。但し裸になるのは許して下さいね」

「いいかね。無理をいって済まないね。じゃあ、明後日昼の休みに自宅に居るから訪ねて来てくれ給え。子供達はバカンス旅行で信州へ行ってるし、家内も心齋橋へ買物に出る予定だ。お手伝いを映画にでも出すから、一時間許りだが私一人だ。じゃあ頼むよ——」

秋山紀美は生真面目な表情で判っきりうなづいた。

私は年甲斐もなく二日後が待遠しく、場所は応接間にしようとか

緊縛の構成はどうしようとか、あれこれと楽しい想念を働らかせたのである。これ程の美人は奇クのモデルの中でも一寸おるまいて……。

待望の日は朝からそわそわと、落付かなかった。毎日顔を見合せる秋山紀美を、いざ改めて縛るとなると、奇妙な幻惑を覚えるのであった。

病院で昼飯を済ますと、私は休憩の為、病院より二キロ程離れた自宅へ車を走らせた。

家内は既に買物に出ており、お手伝の雅子一人が留守をしていた。

「切符をクランケに貰ったから行っておいで。『アラビアのローレンス』はいいそうだよ」

雅子は私の差出す切符を、冗談の様に押し戴き、気の変らぬうちに、匆々に飛び出して行った。

一人で居れば何と我が家の広い事だろう。ガラソとした家の中で私はしきりに、秋山紀美の来訪を待ちうけ、愛用の相当使ったローライコードをなでまわしていた。

玄関でベルが鳴る。私は大急ぎで扉を開くと、これはまた、特にみずみずしく、セットしたての黒髪を、流行型にふんわりとソフトに盛り上げた秋山紀美が、一際美貌を真向にふりかざして、はにかみ笑いをして立っていた。

「縛られますけど、裸にしないで下さいね」

「いいとも、いいとも、さあさあ応接間へ行こう」

私は酔余で、ガイドクラブの女性や、ヌードスタジオのプロ女性を金で釣って緊縛のフォトを撮ったことはあるが、その様な経験皆

無の、こうした女性を撮る事は始めてである。秋山紀美は応接間で私手づから入れたポットの冷しコーヒを行儀よく啜ると、ブラウスとスカートを脱いで、キチンと畳んで部屋の隅におき、シュミーズ一枚の姿で私を待った。

「じゃあ、そろそろ痛くない様に……」

私は半ば独り言で、縄を二本にして、一応型通りに胸に廻し、後手にした両手を跡型のつかない程度にゆるく縛った。

「ポーズをつくらなくとも、自然の儘でいいんだよ。いつもの顔でね。いいかね、撮るよ」

紀美は素直に膝で半ば体を浮かし、少々腰をひねり気味に上を向いた。(写真①)

私はカメラを移動させて、後に廻り、紀美の手入れのよく行届いた清潔な爪先を見つめ乍ら夢中でシャッターをきった。(写真②)

「少しオッパイを出していいかね」

「……」

紀美は無言で軽くなづいた。

私はよく振り切った紀美の乳房を押し出す様にして、シュミーズの胸をだけさせて、少しずり下げた。安心し切った様に彼女は表情も変えない。これが私に対する御礼返しのもりでいる様で、私は一寸やり切れなかったが、カメラ持つ手は、委細かまわずシャッターを切っていた。(写真③、④) 尚も数枚とり、一度縄をといて徐々にシュミーズを外し、せめてパンティだけのもの位はとりたいたと、縄を解き出した時、玄関でベルがなった。紀美はビクリとして私をみつめる。

しばらく私達はじっとして留守をよそおっていたが、ベルは執拗

になりつづけた。

私は縄をとく手を止めて、不安げな彼女にいいからいいからと眼で合図して玄関の錠を外した。立っていたのは、映画に行った筈のお手伝いの雅子だった。

「どうしたんだい——映画みなかったの？」

私は思わず不気嫌な声になっていた。

「でも、あの招待券、去年の十二月まで有効で期限切れで通用しませんでした」

雅子もまた、映画を見損なったのと、ベルを押せども押せども扉を開いてくれなかったのでブスとした調子だった。

まったくついていない。私はいつか貰った招待券を机の抽出しにしまっておき、期限の切れている事をトンと考えもせず、これ幸わいと雅子に手渡したのであった。

「もう映画はよして、今のうちに夕食の支度でもしておきますわ。」

あら、誰かお客様ですの？」

「ああ」

私は返答に困り、更に応接間で縛られたままうずくまっている紀美の事を考えてハラハラした。雅子は玄関にぬいであつた女靴を見て客を知つたのである。

「急患でね、私ที่บ้านなもんだから、応接間で容態をきいていたんだよ。用があれば呼ぶからね——」

私は腋の下に汗をかき乍ら、それだけいうと大急ぎで応接間に戻った。

「駄目駄目、お手伝いが帰って来たよ。またにしよう」

「先生、一度のお約束でしたわ。でもまた私、先生にお世話になる

写真 ④



時があつたら、またその時はその時——」

紀美は解けかかった縄を自らとり、さっさと服をつけて、装おいを改めた。

「先生、お約束は果しましたわ。ああよかった——」

「えッ——？」

「いえ、あんな姿見られないでよかったと申しましたのよ」にこやかに微笑んで秋山紀美は、私の切ないむなしさも知らずさっさと出ていった。

「蛇の生殺しとは、こんな事です。いやどうも……」

ドクター氏は、思い出しても無念そうに話を切りました。

肌寒い位いの夜風が、退屈男達の間を吹きぬけて行きます。ナイ

ロン氏は立上ると、
「ウーッ、冷えて来たな。もう一丁、温泉につかるとしますか、皆さん」
それにつられて、人々はゾロゾロと立上り湯煙をしたって一斉に

浴場へと降り立って行きました。
有馬の月は、秋の月のように白々と山肌を輝やかせていたのでした。

(終)

〔映画通信〕

最近見た女斗場面の映画

山 田 隆 夫

最近見た映画の中から、私のようなマゾ愛好者にとって、いささか記憶に残るシーンを通信いたします。

「世界の夜」に始まる一連の夜物シリーズの決定版といわれる映画「夜の夜」の中に、パンコックの女剣士が真剣をもって斗う場面があります。相手の青年と真剣そのものの斬り合いを演じ、最後は組打ち勝負になります。この女性、仲々強く青年を背負い投げに飛ばし、起き上るところを更に腰車に一転させ

それでも立ち上ろうとするのを、情容赦なく仰向けざまにドッカと組敷いてしまう。

馬乗りに跨った彼女は、左手で相手の胸倉を掴み、動けないように押さえつけ、右手の剣を逆手に構えるや、止めを刺すべく咽喉笛にピッタリと押し当ててしまします。

組み敷かれた青年は、完全に降参して命乞いするより仕方ないわけです。

「野性のラーラ」これはソビエト映画かと思えますが、ストーリーそのものは、これとい

って取り立てる程のものではありません。しかし、豊満な全裸の女性が裸馬に跨る場面が全篇に流れ、何か夢幻的な陶醉境を見出すことができます。

裸女が馬に跨る……。これは観ようとしても仲々観られる場面でないでしょう。それが映倫の眼を通して私達にお目見えしている事実には驚き且つ喜ぶものです。と、同時に、最近、奇クにおいてとかく圧迫され勝ちなマゾ写真、口絵、小説等も、もっと大胆であってよいのではないかと思われてなりません。四月からの自由化によって、この種の映画が続々輸入されている今日、奇クにおいても独自の立場で八公刊誌の良識Vという基本線を守りながらの振幅は、当然あってしかるべきかと思えます。

少し前になりますが、「死の谷」では、女性同志の格闘場面があります。野性の女に扮したバアジニヤ・メイヨーが、相手の女と上

下になって組打ちの末、遂に仰向けに組敷き胸のあたりにドッシリと跨がり、首をぐいぐい締めつけて殺してしまいそうになります。邪魔が入って引き放されてしまいますが、何んとも凄惨な格闘シーンではありません。

日本映画では、日活「ヤバイ事なら銭になる」の中に俯伏せになった穴戸錠の背中に、パンティとブラジャー一枚のトルト嬢が逆馬乗りに跨ってマッサージする場面があります。マッサージするとは奉仕する事ですから、題材としてはいただけませんが、ピッタリと跨り、あたかも組伏せた相手の咽喉を締め上げるような勢いは、やはり魅力を感じます。これが仰向けになった男の胸の上に跨ってマッサージするものでしたら等と空想してみたくありません。

東映「裏切者は地獄だぜ」では、海に落ちて溺れた進藤英太郎が、砂の上に仰向けに寝かされ、佐久間良子に人工呼吸されるシーンがあります。佐久間良子は、ピッタリ身についたジーパンスタイルで進藤英太郎の腹の上に立ち跨り、そのままのしかかるように両手で相手の胃袋あたりを押さえつけるのです。時間も短く物足りない感じは免れません。「海女の怪真珠」「悩殺女体絵巻」、これは

最近二流館で見たものですが、製作されたのは相当昔ではないかと思われれます。先ず「海女の怪真珠」では、キャルマタ一枚の泉京子と扇町京子が、恋の鞘当てから猛烈な格闘を演じます。

二人共、一六五センチはあろう大柄な身体を全身砂まみれになりながら必死に組打ちます。六分四分の優勢さで泉京子が相手を組敷きますが、直ぐ跳返されてしまいます。

やがて、ヘトヘトに疲れ果てた二人は、相手に挑む力も尽き果ててノビてしまいます。やはり最後は、いずれかが相手を馬乗りに組織いて完全に征服してしまう場面であつたらと残念に思えてなりません。

限定特別号、残部僅少！

第一弾「アラベスク」売切、

第二弾「緊縛」在庫なし

第三弾「緊縛」在庫……

「緊縛写真グラフ集」

略号「グラフ」 定価五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育つベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した「グラフ」です。誌面いっぱいに所狭しと盛り上げる大型グラビアの迫力は、きつと皆さまを、この妖しい異常美の縛りムードの

「悩殺女体絵巻」では、ジャズの伴奏で女性レスリングがあります。一人は背の低い、肥満した女性、一人は長身の美女、ハンマー投げ、ヘッドロック、腕固め等の技の応酬があった末、遂に肥満した女性は仰向けに捻じ伏せられてしまいます。

勝誇った長身の美女は、勇ましく脚を開いて跨り、全身で押しつぶさるように組敷きます。下になった女は、必死に跳ねかえさんものと、脚をバタバタと動かし、腰をも懸命にひねりますが、力量の相違か、どうにもなりません。やがて両腕をも勝者の下、にしっかりと踏敷かれてしまつて止めを刺されてしまいます。

中へと誘い込むことでしょう。

第四弾「緊縛」在庫……

緊縛フォトと緊縛画帳

略号「別特」 定価五〇〇円

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利江子、藤田節子、萩千恵子、桜井葉子、絹川文代、大塚啓子、須川令子などの代表的ポーズによって味をつけました。

きもの・きもの物語



夜高志

ひぐらし蟬の声が一しきり鳴き終ったところで、いい案配に大粒の雨が軒をたたきめすかのように降って来た……。

何んせ気の置けない連中がその名もゆかし

い夕霧楼の一部屋に腰を据えての放談会、そのうち都会では薬にしたくも味えそうもない涼風が部屋一杯に吹きわたってきた。まず、本篇の開幕にあたって予め名称のことでお断

りして置きたいことは「夕霧楼」などという古めかしい言葉であろう。何んでもその昔、この地で一代を風靡した夕霧花魁という才女のお女郎さんが住み込んでいたことに因んで先代がうやうやしく命名した由に聴き及んだが、勿論現在は何代目かに当るハンサムな若主人を中心に名実共に割烹旅館としてかえり咲いている。

だから柱の一本、格子の隅々にも昔の面影が偲ばれるのは嬉しいが、巾の広い梯子段の真下には行灯部屋、当時の折檻部屋がそっくりそのまま残こされているのは別の意味で大変有難い。畳にしみ込んだ涙のあと、手首に巻かれたであろう古色蒼然とした紐縄類は恐らく好事家にとって、千金の価値がありそうだ。処で、こんな別天地で至極のんびりとどぐろを巻く「気の置けない連中」とは、そもそも何んぞやということになるが折角お集り願った紳士淑女諸君の面々に対してくどくどしく戸籍調べをすることは無粋の極ではあるまいか。

やがてしばらく待つ程に何がし山の彼方から月がさし上り、やるせない月見草がパツと咲くように話のきっかけが、どうやら昇ったらしく急に座がざわめいて来た。こういう時

にはすかさず気転のきく進行係が大いに重宝である。

「どうも、皆さん、大変お待たせいたしました。例会と申しちゃ何んですが、今日は飛び切り上等のモデルさんもお連れ下さったことだし、また自称衣裳学の先生も最前からムズムズしていらっしゃる（一同大笑）ので、頃合をみてズバリ開講と参りましょうか……」に流石は昵懇の間柄だけに、文句なしに和氣藹々裡に開幕とは相なった……。

「ええ……と、そもそも初鼻からして緒論も結論もありませんネ、またつべこべと論議もしない処に会の趣旨があるんですから私共の丸でナマコみたいな話には転んでもメスを振わないように願いますよ」は人も知るおしどり夫婦で有名な山川夫妻であり。いわば雑学に毛の生したこんな話の内容をわざわざ理路整然とかしこまる必要はさらさらなしという御託宣なのであろう。

「ナマコで結構ですよ、対外的には少々困りますが、ここでのうちわ話には大いに無責任な処をご發揮願っても一向にかまいません、どの道皆さん酸いも甘いも存分かみしめた方がたばかりですから……。」

「じゃ一つ、私共から話題提供を……。頗る

小物なんですが私が家内を買ったのは実は帯揚げにひかれたためなんです。帯揚げと一言にいつても、今時の若い人達にはおよそ縁遠い品物で、余程説明しないと何んだかさっぱり判らない代物だと思ふんですが、勿論きものアクセサリとしては可成りウエイトのあるもの、巾が三〇センチ、長さが優に一米五〇センチ以上もあるかという布切れで、帯の附属品どころか眼か口ほどに充分物をいう役目を持っているものなんです。もう一寸具体的に申上げると背中の帯の中で帯枕を包み、その両端を脇の下をくぐらせて前に曳き出し結び目を若干のぞかせる程度で帯にはさみ込む——ただそれだけのものに過ぎない、処がこれで結構男性の心が動揺し、ひいては女の評価がなされようというんですから事はすこぶる重大ですな、まあここに居る家内が計画的にその昔真赤な帯揚げを使ったんだからいけませんや……私の方がとうとう落城しちゃって」

「赤い蹴出しに目がくらんだという戦陣訓は兼々聞いておりますが帯揚げとは余程心の底から純情にお見受け致しますな、奥さんも何か一つご反論を……」

「まあ、まあこの処は野郎共の一方交通に願

い上げますよ、つまりいうなれば、その時に置いて既に男の気持を充分把握しておったといえるんですワ。拙妻ながらえらいと思ひました。爾来今日まで千変万化、結構娛んで倦怠期も自覚症状全くなしという有様ですから誠に以て有難い話です。」

「では一つこのきものきもの物語もすべて総花式という訳にも行かないでしょうから、今晩は帯揚げをめぐるの放談なやまし会と参りましょうか、モデルさんもその趣向で協力して頂けますか、さてどうぞ、そのあとをお続け下さい……」

「どうも山川さんの肩を持つ訳じゃないが、女の帯揚げって物は世間さまじゃ案外重要視してないんじゃないか、私なんか年配のせいとかあれを見ると一種の威圧を感じるんです。何というか、丁度女の人が妊娠してお腹がせり出して来ると当初の恥ずかしさから寧ろ誇りたくなるあの心理と全く同じなんですね。特に部厚い豪華な袋帯を不落の鉄壁のように胸に巻いて数千円もする紅輪子の総絞りの帯揚げをごてつと盛り上げた花嫁の姿なんていうものはたの者に劣等感を強いるようで大いに圧巻的なのだが裏を返せばあれは一種の女体拷問具で、一番最後に赤い帯揚げでこん

なにきつく縛られましたのよと無言の告白をしているかのよう……皆さん、そう思いになりませんか」

「僕は非常なその道の天の邪鬼なモンですから和服を着た場合よく着物にマッチした帯揚げをしろっていいですね、色だとか柄とか出し方とかいったことなンドが、僕は和服に赤い帯揚げないしは濃いピンクはこの誰が考えたか仲々いいアイディアとっているんですが、この帯揚げが若し和服のキーポイントであるならばよろしくこれに合わせて逆に着物の方を選ぶべきである。処がここで問題となるのは所謂のぞかせ方という奴で僕は定説を破った方がいい位な強行論者ですよ、つまり俗に……デパートや美容院で教えるらしいが……ウール地の格子柄や無地、つむぎの縞や緋などのふだん着では帯揚げは決して外に見せないこと。縮緬地の小紋やお召などの外出着では六分かくして四分見せる位にかくす方を多く見せる方を少なくすること。訪問着では五分五分の割合で結び目は帯の中へぐつと押し込んで結び目の左右だけふっくらと出すようにすること。最後に振袖の場合はたもとが長く総模様のケースが多いので帯揚げは思い切りたっぷり出して全体のバランスを

取るようにして下さいとある。僕はこんな法則は永久に破棄して田舎娘然としてあれこれ勇敢に露出させて欲しいと思いますネ。何んとなく野暮くさい処が堪らなくアツピールするンですよ。僕は上品という言葉にレジスタンスを覚えると同時におよそエキサイトしない衣類はゼロだと判定しますネ、その意味から申せば話題に上った帯揚げという名の小物は確かに上半身と服美のエキサイティングセクターかも知れない。一寸暴言過ぎましたかな……」

「じゃ、どうです？ 一つモデルさんにそのエキサイト何某のニューアンスで実演して貰うのは如何ですか、帯の結び方はわれわれに苦手ですから山川の奥さんのお願いして……」

と来たから大変な難となつて了った。器量好みとあって純日本調の顔付は文句なしに美人である。山川夫人が一目置いて惚れるのも無理もない。その山川夫人の手を煩わしてまず最初に着付されたのが昭和の初め頃の娘さんの風俗であつた。

「この頃はよく覚えてますよ。帯をこのように胸高にできるだけ背負いあげてしかも問題の帯揚げは巾広に出し正面から見た身体全体の装飾物は胸部オンリーの方へとせりあげら

れた格好だから帯のすぐ下の腹部から脚にかけてはのっぺら棒の何一つない姿になる、これが専らあの頃の流行でしたネ。だからよく新派の演るお芝居で令嬢が悪漢などに縛られたりすると、だらりに垂れ下った赤い帯揚げの上から荒縄がもろに喰い込み、嫌でもおうでも自然と裾がひらいてしまうンです。つまりこうなるんですネ……。(モデルの実演)襟がはだけて赤い長襦袢が見えれば、ひどく無惨な感じがしますが、見えないとすれば乱れた赤い帯揚げが集中的に一層目立って印象的になること受合いました。まあ、和服の持つ独特の嬌嬌とした美しさともいうンでしょうか……」

「処で……さき程帯揚げの色に合わせて着物の方をきめるべきだというお話がありました。が毎年春に上演される新橋演舞場の東おどりあれには必ずといってよい位、芸者の四季という総踊りに似た踊りがあって、揃いの舞台衣裳は黒紋付の出の衣裳に真紅の帯揚げを触らば解けなん帯の上にきまって花柳界独自の結び方をして、しかもたつぷりとのぞかせますネ。その姿は正面よりは寧ろ真横の方から見た方が素晴しくよい。仮りに亡くなつた伊藤晴雨画伯が若し客席で見物していたと

すれば彼は漆黒の島田、真紅の帯揚げ、黒一越縮緬の長襦袢に魂を奪われるの余り、おい、その女達をちよいと縛らせてくれ……とスタスタ舞台上に登られたかも知れない。つまりこの場合、どの部分を探りあげても、人工の美とは申せ、配色衣裳学的にいつでも文句をさしはさむ余地のない、完璧さを表わしていると思うんです」

「人間は感極まると見境もなく相手を縛りたくなるそうですが、これなんか一種の独占慾だと思ふんです。山川の奥さん、これは夏の婚礼衣裳なんですが一寸着付してみてください。多少黒っぽい色に近くひょっとすると、ピンクの長襦袢が透けて見えるかも知れませんが。全体的に衣裳が薄目ですから身体の線がそのまま出たり特にお尻が出たりしますが一つ暑いのを我慢してその上にふくら雀に帯を



帯揚げのいろいろ



背上げてみて下さい。そうですね……それで結構です。僕の知人に帯揚げもさりながら毎年今頃になると特に結の着物を細君に着せてお腰を觀賞している人がいます。そして後手に縛りあげた細君を飯台の前に座らせ、最初

は博多帯に赤い帯揚げをキチンと結んだ端正な和服姿を静かに眺めながら冷豆腐か何かでチビリチビリやっているうちに酔いが回ってくる。と細君を柱のそばに移動させてくくりつけ豆しほりの手拭で猿轡の上問題の赤い帯揚げを帯の中から引きあげて

ダラリと前へ垂れさせ、膝を崩させるんです。これがもう何より一番の楽しみだ。そうで……もともとご商売が画家なんですから当り前だといえはそれまででしゅうけど……」

「僕は帯揚げで咄嗟に猿轡をかませたことがある。当時青二才の書生っばで、しがない下宿住いをしていたんですが、そこへしたたか正月酒に酔いつぶれたご婦人がいきなり飛び込んで来て僕に抱きつき、あげくの果ては態よくからみついて逆に口説こうとするんですワ、いくらなだめすかしても焼石に水でからつきし相

手に通じない。じゃ、これでは一体どうなんだと彼女の派手な帯揚げをひっぱり出してガバツと猿轡をかませたんです。処がご存知の通り木綿の手拭などと違って本絹物だから声がスースー洩れるんですワ。その内多少それつが回らないながらも続いて縛った腰紐で手首が心地よくしびれたと見えて逆効果となり一層興奮した彼女は真紅の長襦袢のはだけるのもかまわず爛熟した身体を押しつけて、もっとあたしを苛めてよ……と、おっぴらに催促されて大弱りに困り抜いたことがありました。」

「そんな場合……はたから変な助言を申し上げるようですが、今時の若い女性の方は洋装の下着で、どうにも利用できないが一昔以前のご婦人だと猿轡に手頃なものが一つ必らずあった筈です。ただ現実には可能であっても、腰の物を脱って猿轡をかましたという新聞記事はそうやたらに見られませんでしたネ。」

「今晚は余りパツとした話題ではありませんでしたが、色々と思い出話など出して頂いてどうやらナマコ怪談の面目が保てた形、ご同慶に堪えません。帯揚げは半襟などと同様に小物コレクションには手頃なものと思えるんですが、どこかで秘そかに蒐めているなんて

いうお話はございませんか。」

「かんざしなんかは現に骨董品的な意味合いから年配のご婦人で可なり専門的に蒐めているようですが、帯揚げとか腰紐などといったものは左程バラエティに富んでいるというものではないので、コレクションとまでは行かないんじゃないでしょうか。」

「僕は天の邪鬼の癖に不思議と女の帯揚げに縁がある。戦地にいた頃京都のさる処から送られた慰問袋の中に正田絞りの帯揚げが入っていた……本当なんですよ。何故だか今もって判らない。おそらく誤まって片ずけたつもりが袋の中へ入ったのかも知れない。」

さあ、夜も大分更けましたね、どこかで騒いでいた三味線の音も、どうやら静まったようです。

「処で、皆さん、肝心なことを忘れていました。聞きしに優る山川ご夫妻の帯揚げにまつわるロマンス！これを拝聴するのをコロッと忘れていましたっけ。如何でしょう？ 後学のため是非その片鱗なりとも伺いたいんですが……」

「そりゃ困るよ……、私事はすべからず保障されなくっちゃ少くとも文化国家じゃないねえ、と見えを切る程のものでもないんです

よ。何んというのかな、一言に言って家内の帯揚げにはもう一人陰の彼女がおってそれがほどほどに物をいわせた……とでも申し上げた方が適切かも知れません。まあたわいもないことですワ、例えば私が会社の用で出張する時駅まで見送りに来る、早く帰ってネ……はきまって燃えるような無地の真赤な帯揚げって訳ですよ。今晚愛して……が濃ピンクか、背中搔いてえ……が純白、まさかそうでもないんですが、つまり三十余りの色取りどりの帯揚げがすべて戦闘開始のZ旗と思って頂けば結構です。ですから黄ろい地紋のある綸子地の帯揚げが締められた時は……という訳で一つしかるべくよしなに想像願います。申し遅れましたが家内は生来洋装が似合わないんです。ですから……」

「有難うございました、ちゃんと意のある処は充分判ります。賢明な同人仲間ですもの、十まで仰る必要はありません。今晚は誠に行届かず大変失礼致しました。モデルさんもお話中ずうっとご覧の通りくられっ放しという残酷さ、どうぞごかんべん願います。次回はまた出たとこ勝負という処でおつき合いの程を幹事の役目ながら申添えて一まず例会を終らせて頂きます……。」



〔体験〕

旅の楽しみ

△浣腸にことよせて▽

渡部 かね

わたくしは仕事のこととあつて、よく一人旅を致します。旅って、ほんとに楽しいですわね。美しい風景、異った風俗習慣、家の作り、土蔵の壁一つにもその地方その地方の特色がうかがわれます。

そして、駅弁の楽しみ、見ず知らずの方とお友達になれる楽しみ、それから行く先に、何か幸が待っているように期待する楽しみ、

数えあげればきりのないことです。

でも、私にはもっともっと、大きな楽しみがあるのです。それは浣腸、女だてらにと笑わないで下さいね、だってそれは旅の恥はかきすてといわれる解放された、あの喜びなのですもの。

では、皆さん、私と一緒に楽しい旅に出ましょう。出発は東京。東海道線はいつの

も快適です。東京をでて、一時間もしない中に、大船藤沢をすぎ辻堂、その辻堂を通過して間もなく、右手に、あのイチジク浣腸の広告看板が立っています。

何でもない野立広告に、どうしてこう胸がときめくのでしょうか。そつとあたりの人を見廻しても、誰も知らん顔、たとえば、

「ホラ、あそこにイチジク浣腸の広告が」

なんていっても、へへえとおかしな人だという顔をするだけでしょうね。何だか我ながら恥づかしくなってきました。

見なれた湘南の景色にあきてきた私は本をよみます。女だからといって初歩の経営学ぐらい知っておかなくっちゃというわけで、もう五年も前に出た本ですけれど、カップブックスの経営学入門（坂本藤良著）をよみ出します。一五二頁に達した時、次の一文に私は目をかがやかせずには居られませんでした。「ある雑誌に、『成功のカギをつかんだ人びと』として、『亀の子だわし』の西尾さん、『セロテープ』の歌橋さん『イチジク浣腸』の湯浅さんの三人があげてあった。その雑誌の記者は、『成功するもしないも頭の使い方ヒトツである。他人にマネができない独得のものを生みだしていつてこそ成功するのだ』

と書いている。たしかにそうかもしれない——と。」

私は本を閉じて考えました。子供の頃からお世話になったイチジク浣腸、それは何時はじめて作られたのか知りません。今でこそポリエチの美しい容器ですが、私が子供の頃お世話になったのは、セルロイド製でした。母に浣腸された時、あのセルロイド特有のペコンという音が、どんなに切なく私の脳裡にきざみつけられたことでしょう。

でも、湯浅さんという人が、それまではお医者さんしかできなかった浣腸を、五〇%のグリセリン液をセルロイド容器につめて、軽便浣腸として家庭にもちこんだアイデアは、大したものだったに違いありません。そしてそのおかげで、どんなに多くの子供達が、ヒキツケ、疫痢、便秘等から救われたことでしょうか。と同時に、どんなに多くの人々が、浣腸の羞恥に泣き、またやがて浣腸マニアになったことでしょう。このわたくしもまた——。

そうこうしているうちに丹那トンネルを過ぎて沼津です。三分停車、やっとお弁当を買えたらもう発車、左手に千本松原が見えはじめる辺りに、おお、またもイチジク浣腸の広告がありました。例の、目玉のグリグリとし

た坊やの顔があつて、その横に大きくイチジク浣腸と書いてあります。一瞬にして後にとび去るその広告を、私は窓から首を出して見送るのでした。

丁度お昼なので、あちこちでお弁当を開く音がします。こうして同じ列車で旅をする人々の中には、みんな知らん顔をしますが奇クの愛読者もきつと何人かは居るんでしょう。同好の志が、若し知り合えて、お互に言葉をかけあえたら、どんなに素晴らしいことかと思ひます。

「貴方は奇クを知っていらっしゃいますか。」
「奇クを愛読していらっしゃいますか」

なんていちいち尋ねるわけにもいきませんもの。そこで提案があります。

奇クで愛読者バッジを発行したら如何でしょう。本当に奇クを愛する方ということで、半年か一年分予約した方だけを対象として。一個千円位でしたら、わたくし喜んで真先に戴きますわ。いぶし銀か何かで、ごく小さな普通の会社マークのような目立たないものがいいですね。勿論奇クのイニシアル、KとKと組合わせた上品なもの。

と同時に、各自の嗜好も表示したいものです。組合わせたKKの一部に、サド愛好者は

勿論Sが入って、KKS、マゾの方にはKKM、私達浣腸マニアには、エネマのEはどうでしょう。KKE。同じように、渾のすきな方はF、女装される方にはJ、切腹すきの方は腹切りというわけでH、おっと鼻責めのすきな方がありましたわね、鼻はHでなくてノーズのNとゆきましよう。女斗美ファンの方は、女装とまぎらわしくないように、戦うのTはどうでしょう。おむつパンティのすきな方の為にはP。

こうしてみんなが、奇クバッジをそつとつけるのです。

「お、おとなりの方は、KKEだわ。ああ私と同じ浣腸ファンでいらっしゃる。お友達になれそうだわ」

「通路の向うの方は、KKSの方。私をいじめて、浣腸して下さるかしら。さあ、何と切り出してお近づきになろうかしら」

こんな夢を——いえ、この夢は奇ク編集部で実現して下さるでしょう——追っているうちに、もう名古屋です。立派に復興した金の鯨を、ビルの谷間にやっと見付けたと思つて、いるうちに、早や清洲を経て稲沢、ここにもまた左手に、沼津のとそっくり同じのイチジク浣腸の広告がありました。それにしても、

さっきの湯浅さんでどんな方でしょう。坂本藤良氏によまれた雑誌、或いは、湯浅氏の伝記等と承知の方がありましたら、お知らせ戴きたいと思います。

こうして私は今回の旅の目的地京都につきました。

宿につくと、先ず私は散歩に出ます。女中さんが訝るのをしり目に。目的は薬局です。男の方が店番をしているお店は敬遠です。やっぱり恥づかしいですね。

「あの、浣腸、ありますか？」

「ハイ、ございます。お子様ですか」

「いいえ、わたしの、大人の」

「二〇グラムですね、二個入りですが」

「ええ、それ」

「お通じありませんの？ 便秘は毒ですものね。浣腸なさったら、できるだけ我慢なさって下さいまし」

必ずこんな分り切ったことを言われます。

又それが何ともいえない羞恥心をかき立てる情緒があるのです。それと私は、こうして旅先で買い、用いて空になった浣腸器にマジックで場所と目付を書いて記念として集めることにしました。もう随分集まりました。時々それを出してながめる楽しさは、コケシや郷土人形を集める以上の楽しみがある、というの

もマニアならではのしょうが。

東日本は圧倒的にイチジク浣腸ですが、アイデアル、さくら、などにもお目にかかります。西日本では、最近オロナインが随分勢力をのばして、イチジクを圧倒していますね。関西に強かったハート十字も型なしといったところですよ。

さて、求めた浣腸、それはイチジクでもオロナインでもハート十字でもかまいません。両手の中で私に愛撫されています。旅館に帰るのももどかしく、早速実施です。

お茶とお菓子が運ばれ、お風呂をつけて女中さんが引下ったあとは、夕食まで誰も来る気づかいはありません。鍵をかければ、もう私の天下です。姿見を適当に傾斜させて、真白なお尻を写しながらする浣腸、誰に気兼ねすることもなく、旅先で浣腸に陶醉する、ああ何という旅の喜びでしょう。

お腹をすっかり空にしてから、ゆっくりと浸るお風呂、そしてお食事のなんとおいしいこと、明日への元気がもりもりと湧いてきます。夜になればなった独りで、静かに、こうして原稿を書く楽しみもあります。

旅の楽しみ、私は浣腸にことよせて、さまざまの楽しみにあくことをしりません。

懸賞（告白と手記と体験）原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千円	若干篇
佳作	一篇に付	二千円	若干篇

☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたもので

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従って必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限ります。二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくきめませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

〔告白〕

倒錯日記抄

久 保 征 一 郎

一、プロロゲ

僕が現在兄貴と呼んで居る春山と云う一上年上の大学生との付き合いは、もう四年近くも続いて居る。春山は僕が高校二年の時、熱海で旅館を経営して居る親からはなれて京都のT高校、即ち僕の通って居た高校のしかも僕のクラスへは入って来たのであった。

僕は剣道部と馬術部の部員であったが、春山は前の高校で剣道部に居たらしく、すぐT高校の剣道部に入部した。春山は大柄でたくましい肉体は、その引きしまり具合と云い正

にギリシャ彫刻を見る様で、彼が道場の部屋で学生服の上衣を脱ぎ、ランニングシャツをかなぐり捨て青色の有段者用の稽古着、剣道具の垂れ、黒胴、面、小手をつける様子を見て居た僕は、もうすっかり彼の男らしさにはれ込んでしまつて居り、こんな奴に責めさいなまれたら、どんなにいいだろうに、と云う気持ちでぞくぞくして来た。

僕も硬派と云われた方で喧嘩も相当いける方だったが、勝つて敗北者を責めるのも楽しいものだったが、それよりも一段と力のある者に徹底的に責められる喜び、楽しさと云つ

たものを常に待ち望んで居た。こう云う僕にとって春山は正にぴったりと僕のイメージに合った。その時、僕も下級生を仕込んでやる一試合をすませたばかりで、また小手、面、胴、垂れと皆防具をつけたままだったので、春山の所へ行つて「おい春山、一試合やらなにか」と声をかけた。「ああやろう」と彼は面の中でちょっと笑つて云つた。

彼と僕はそれから二時近くも練習をやっていたが、ふと気がつくと春山と僕だけが道場に残つて居るのに気がついた。部屋にも誰も居ないらしい。春山もそれに気がついて居た

らしいが、仲々やめようとは云わない。こうした時僕はわざと竹刀を大上段にふり上げた。春山はすかさず「えいっ」と力一ぱい突きを入れた。竹刀の先は僕の面たれに突き刺さる如く突込まれた。「うわっ」と僕は仰向けにどうと道場にひっくり返った。そして起き上がろうと体を起すと、春山は竹刀を捨てて僕の体の上にとっかと馬乗りになり「組だ」と云った。

「よし」と僕も応じてしばらくもみ合ったが春山の力の前にはなすすべもなく、春山は小手をはめた手で僕の面たれをにぎりぐいっと面をねじった。これは相当こたえて「うーむ」と僕はうめいた。「どうだ、苦しいか、参った」と一言云ってみな、ゆるめてやる」と面の中でニヤリと歯を出して春山は云った。僕はたまらない被虐感にひたり、「参った、春山。僕は君がすきだ」と云った。春山は「俺もさ、てめえも強そうだが、おれにはかなわねえぜ。俺の家来になれよ、いじめられるのが好きだったら俺の家へ来い。俺一人だけだ。どうだ約束するか。しなけりゃこうしてっ……」と又面をねじる手に力を入れて来た。「苦しい。……参った。家来になる、兄貴、約束する」と云った。

春山は手を離れた。僕はぐったりと横たわって居たが、春山は僕の足をもって部屋へ引っぱり込んだ。部屋のカベには黒胴、赤胴、竹胴、と部員達の防具が吊り下げられて居た。春山は自分の面と僕の面とを取りしばらく僕の顔を見て居たが「好きだ」と抱き締めて来た。僕も「兄貴っ」とうれしさに声をふるわせて彼の腕の中へ顔をうずめた。彼の体臭が心持よく感ぜられ春山のぎゅっと締まるその力に僕はこの春山こそ真の恋人であると感じた。これが春山との劇的とも云える出会いであったが、これ以後、僕は毎日と云ってよい位彼の一人住いの家へ行き様々の二人っきりのプレイを行った。

あるものはサディズム色の濃いプレイ。或る時はマゾヒスティックなプレイ、それに又長靴愛撫と云ったフェチ的なプレイも有ると云った具合で、仲々バラエティに富んで居た。では僕の日記の中から特に印象に残って居る春山とのアブノーマル劇を皆様に御紹介しよう。

なお、もう少し春山について附記しておこう。彼はG・I刈り、服装としては学生服に乗馬ズボンに黒革の長靴、あみだにかぶった学生帽、こうしたかっこうは、とても魅力的

である。それから僕もG・I刈りで、やはり学生服に黒革の長靴着用を特に好む。

三月四日（高校時代）

今日は春山が鬼の様なアメリカ軍曹で、僕はその軍曹の手にかかって無念の最期をとげる日本の青年将校を演じた。春山は手に入れて来たアメリカ兵の軍服に半長靴をはいて居り、鉄かぶともかぶって居る。僕は旧軍隊の将校の軍服、乗馬ズボンに黒革の長靴をはいている。

僕は軍力を抜いてアメリカの軍曹に立ち向うが、その時軍曹はピストルをぶっぱなす。無念腹を撃たれたのけぞって倒れる。起き上がろうとすると、あごを半長靴でけとばされ、完全に参ってしまう。「ヘーイ、ジャップ」軍曹はのびて居る僕をふみつける。靴裏の鉄が首すじにねじ込む。「うーうー」とうめくだけだ。それから軍曹は僕の体に小便をかけ、それから馬乗りとなり、のどへジャックナイフを突き刺して止めを刺す。「ぎやっ」と僕は断末魔の声を上げ、両手で虚空をつかみ、歯をむき出して絶命する。軍曹はなおも靴でこづいて完全に死んだかどうかをたしかめて立去るのである。春山の米兵姿もびったりであった。

五月六日（高校時代）

今日は西南の役に於ける私学校の二人の若者の割腹が中心となる。春山も僕も黒の袴に白の稽古着、剣道の防具の黒胴と垂れをつけ、鉢巻をきりっと締める。官軍の攻撃の前に屈



服寸前の私学校の生徒の我々は四面敵に囲まれ、捕われの浮目を見るより、いさぎよく自害する事を決める。春山と僕は向い会って坐り、胴を取るのもめんどくと垂を下へずらし、胴と垂れの間へ一しよに刀をぐっと突込む。

「むう……うっ」苦しいうめきが二人からもれる。

「引き廻せっ」春山がはげます。「よしっ」ぐいっと一文字に腹を引き裂く、「うわっ、うーむ」苦しさをがまんし春山は僕の、僕は春山の腹の中へ手を入れて腸を引き出す。「うーっ……」苦しさは頂点に達する。二人は抱き合って倒れ絶命する。それから春山と僕の二人はむしろの上に仰うむけにねて二人の死体が官軍の手によって公衆の面前でさらし物にされて居る事を空想する。二人とも腹を大きく切りひらき、稽古着や剣道の胴を鮮血に染め男らしい最期をとげて居る若者を空想する。

なお肉屋へ行って腸詰を買い、それに赤インキをたっぷりしませ胴と垂れの間へ入れて居て、以上の切腹の場面を演じた。

五月二十一日（高校時代）

今日は春山が彼の友達のA子と云う、以前に曲馬団に一時居た事があると云う一寸ジェーン・ラッセルに似た女を連れて来て居た。春山はトレーニング・パンツにボクシングの編上革靴、ランニング・シャツにグラヴをはめて居た。僕は春山から「今日はお前も俺もA子さんから可愛がってもらうんだ、早く用

意しろ」と云った。僕も春山と同じくトレパンに編上革靴ランニングと云う服装をととのえた。

A子は股の所に革の附いて居る乗馬ズボンに硬胴の黒革の長靴を着用し、手に鞭をもっている。「さあ春山にそつちの男、かかっておいで」と云った。春山は「いくぞ」と云ってグラブをかまえて打とうとしたが、その時「何さ！」と云う鋭い声と共に彼女の鞭は春山の眉間にたたきつけられた。「あっ」と春山は手でひたいを押さえた。「これではどう」彼女は第二撃を春山の横腹に打ち込んだ。「うっ」と春山がかがむ所を長靴の先であてをけり上げた。「うわっ」と仰うむけに倒れる春山。起き上がるうとする春山の顔の上へ長靴をぐっと押しつけた。春山の唇の所は長靴のかかとで春山の男らしい顔はA子の長靴の裏の下でうめいて居た。

「どう春山さん、参った？ ゆるしを私に願いなさい。強情張るなら、ほーらこうしてよ」と長靴に力を入れる。「うーんA子さん、ま、まいったっ」春山は完全に屈服して云った。A子は春山を離れた。「今度のこの人の番よ」と僕を見て云った。と、春山はむっくり起き上ったと見るや、ものすごいアップパーカットを僕に打ち込んだので、あっと云う間に僕はノック・アウトされた。気がもうろうとして居る間に僕は何か腹の所に痛みを感じて息を吹き返すと鉄附の春山が自分で作った胴ばさみの拷問具が僕の腹にびったりと当てられて春山は僕が起き上らない様にのどを押さえて居り「A子さん、早く責めてやって下さい」と云った。彼女は「悲鳴なんか上げるんじゃないよ、男のくせして、いいわね。齒をくいしばって耐えるのよ」と云って長靴の片足を板の上へのせてグッと押さえつけた。鉄の鉄が腹に喰い込んだから、たまらない。「ワッ」と僕は悲鳴を上げたが、近くの家に聞えては困るので春山は彼のよれたトレパンを猿ぐつわ代りに僕の口へねじ込んだ。

僕の悲鳴は「グウ……ウーン」と云ったことも様な声になった。苦痛の中で下から彼女の長靴に見とれ再び気絶してしまった。今度気がついてみるとA子は帰ったらしく姿はなく、春山のベッドの中に居る自分を見出した。

七月十日（高校時代）

今日は僕がヒロポン中毒の学生で薬が切れてのたうちまわって、春山の扮する暴力団のボスに薬をくれと哀願すると云う一幕を演じた。

春山は革ジャンパー、乗馬ズボンに黒革の長靴、僕は学生服にデニムズボンに米兵のはいて居る半長靴をはいた。「だ、だんな、く、くすり下さい」と僕は春山にすがりつく。「ええうるさい、金もねえくせに、何ぬかす。俺の長靴の裏でもなめろ」と長靴のかかとで僕のをけとばした。「うっ」と僕はひっくり返ったが、すぐ春山の足下にはいつくばり長靴の甲にキスし「だんなの奴隷になり何でもしますから薬を」と泣いてたのむ。「よしそれ程云うなら犬になれ、そうこの首輪をはめろよ」と大きな革の犬の首輪を出した。僕は首をさし出した。「そらはめるぞ」と春山は首に首輪をかけギュッと締めた。首がしめられて一種の快感が走った。

「おいてめえ、剣道三段、柔道四段の犬の男が、こんな目にあっても、何ともないのか。意気地なし！ こうしてやらあ」とぐっと首輪を引張って僕の体を引っぱり上げ、みぞおちに力一ぱいこおし打ちにしたから「うーん」と云って僕は目を廻した。気がついてみると彼の家の水洗便所の中に後手にくぐられて入れられて居た。しばらくして春山がやって来て「おい犬の兄ちゃん、出な」とクサリを引っばって僕を引きずり出して仰うむけに

ねかし「薬なんかねえんだ」とにやりとして云った。「くそっ、だましたなっ」と僕は起き上ろうともがくが春山の長靴は僕の腹の上をグッと押さえつけて居るので、どうにもならない。「くやしいか」とにやにやして春山は云う。「くそっ」僕は歯ぎしりしてくやしがるが、ただ半長靴をどたばたさすだけである。最後に春山は「もうすぐ静かにさせてやる」と云いながら台所から出刃をもって来てとどめの一突きを僕のものどへ刺し通す。「ギヤッ」僕は一こと叫んで絶命する。僕は口をあけ、両手は空をつかむ形で横たわって居ると云う所で今日は終わった。

九月十日（高校時代）

今日は兄貴が強盗で、僕がおそわれる高校生であった。場面はある山中の人気のない所として僕が学生服に乗馬ズボンに黒革の長靴着用で遠乗り独り出掛けて一休みしている所から始めた。

突然後ろの草むらから僕の背後に忍び寄った一人の怪漢、黒革のジャンパー、烏打帽に黒の色眼鏡、乗馬ズボンに黒革の立派な長靴と云った服装で、いきなり後から僕の首を締める。「あっ、誰だっ、放せっ」と僕はもがくが、その男は後へ僕をねじ倒して、すかさず馬乗りになってしまった。「何するんです」と僕は必死になってもがき、長靴をはい

た足をばたつかせたが、その男はにっと笑って「金出しな、坊や。でないとこのナイフが腹に刺さるよ」と僕のズボンのバンドをゆるめ、腹の所をむき出してナイフをひたひたと腹の皮に当てて云った。

「ひえーっ」と僕は恐怖におののいて叫ぶが、人気のない山中、誰にも聞えない。「早く返事しろ」とその男は、僕の体の上で云った。「なな……ないんです。今何にも。遠乗りなので金持って来てないんです」と僕は泣き声で云った。「馬鹿やろーこいつ」二つ三つ僕の顔を張りとはしてから、その男は立ち上り、長靴で僕の首すじの所をふみつけ、地面にめり込む程ぐいぐい押さえつけて「何も無けりゃ、取るわけにも行くめえ、その代り、一寸お前を可愛いがってやるぜ」とにやりやりと残忍な笑い方をしながら云った。

「うーうー」僕はその男の長靴の下に屈服しながらも、何かぞくぞくするものを感じていた。「痛い、苦しい、くやしい、おい起きてしろ」と長靴の力を抜いてその男は云った。僕は「くそっ」とばかり力一ぱい起き上がろうとしたが、「おっと、そうはいかん

よ、そらアンコールだ。うふ……」と長靴で顎をけり上げ「うわっ」とのけぞってひっくり返った僕の顔の上をまともにふみつけた。僕の唇の所に長靴のかがとがあり、顔は長靴の裏面とびったりと接触して居た。鼻は押しつけられたので鼻血が出た。僕は気絶しそうになったが、歯をくいしばってこらえた。「まだ参らん、こいつ」と強盗は今度は僕の喉を長靴で押さえつけたので、さすがの僕も「ゲー」と云ううめき声と共に気絶してしまった。すっかりのびた高校生を満足そうに見下して強盗は高校生の馬に乗って悠々と何処かへ去って行くと云った、真に奇抜なプレイを兄貴と僕は演じたのであった。

さてこの位で高校時代の日記の抜き書きから大学時代のものを、二つお目にかけたいと思う。

四月十九日

大学入試で何かと忙しくて兄貴とのプレイは四月になってから今日が最初であった。僕が今日出掛けて行くと兄貴は旧陸軍の将校の軍服を着、乗馬ズボンは拍車付きの黒革の長靴をはき軍刀を吊るして居た。頭も丸刈りにして居り青年将校の男らしさと一種のほれぼれする残念さを兄貴はすでに全身にみなぎら

せて居た。

「おい、今日は、脱走して捕えられ重営倉へ
ほり込まれた幼年学校の生徒になれ」と云っ
たので、すぐ用意をし軍靴をはき、ゲートル
を巻き上半身は裸で横たわった。

「おい、国賊ノ貴様、それでも軍人か、訓練
が苦しくて逃げる奴はこうしてくれる」

鬼将校の武道指導の若い中尉は長靴で横腹
を力一ぱいけった。「うつ」とうめいて僕は
うつ伏せから仰うむけとなつてあえぐ。「殺
したって誰もお前をかわいそうだと思つたか
てんだ。おい小僧、軍隊つて所はな、もう少
し気合のかかった奴が来る所だ。貴様の様な
奴はこうして……」と長靴で僕の腹の上をぐ
っとふみつけ軍力の先で顎を押さえつけて責
めた。

「うーうー」僕はどうする事も出来ず、齒を
むき出してうめくばかりである。「くやしか
ったら、起き上つて俺を倒してみろ」と中尉
は憎らしそうに云う。「くそっ」満身の力を
ふりしぼって起き上がろうとしたが、その時
中尉は長靴に力を入れた。長靴が喉に喰い込
む様で「ゲー」と異様なうめき声を上げて僕
は気絶した。

五月十日（大学時代）

今の場面は某高校の便所であつた。兄貴は
高校の体操の若い教師でレスリング及び剣道
部の部長である。GI刈り、黒のボロシャツ、
白のトレーニングパンツ、と云つた服装でレ
スリング用の靴の編上半長靴をはいて居る。
僕は陸上部の選手で黒線のはいつた短いパン
ツ、上は紺のランニング、革のスパイクをは
いて居る。

練習を終つた僕は校内の便所へ来て大便所
の戸をあけて中へ入った。そうしてパンツに
手をかけようとしている時、突然戸が開けら
れて誰かが飛込んで来た。「あっ」と声を立
てようとした時、その者の手は僕の口をふさ
いで居た。「おい俺だ」と耳もとでささやき
別の手で僕の体をぐっとだき締めた。

その夜、僕はレスリングの練習場の部屋の
床の上に後手にしぼられ、上半身裸でトレパ
ン編上シューズをはいて仰むけに横たえら
れ、僕の体の上に黒のパンツ、上半身は裸、
やはり編上シューズをはいた教師の彼が馬乗
りとなり僕を責めて居る。

「ウーウー」僕は彼の体の下で屈服のうめき
声を上げながら最後のあがきをしていた。「お
い、お前は俺を兄貴と思うんだな」と顔をの
ぞき込んで云つた。「はい、先生、兄さんと

思います」と喜びに声をふるわせて云つた。
「よし、それなら俺のこの靴にキスしろ」と
云つて僕の手をほどいてくれた。そして両足
をふんばって仁王立ちとなつた。僕ははつて
彼の足下へ行き片方の足の靴の甲の所へくち
びるをぐっと附けてキスした。「まだ放すな」
と彼は云つたので、しばらくそのままキス
を続けた。彼の足の臭いが気持のよい香りが
靴の革の香りと混つて僕の間を流れてさし
た。

結 び

以上は僕の日記の一部であるが、僕にとつ
てこれを読みかえす時には常に新しい興奮を
感ぜずにはいられない。いづれ折を見て新し
いプレイの紹介が出来ればと思つて居る。な
お最後に兄貴と僕がプレイに使用した用具の
主なものを上げておこう。

黒革硬胴長靴。米兵半長靴。編上半長靴。
スパイク。乗馬ズボン（内股皮附）将校用
特大バンド。剣道防具（黒胴、赤胴、竹胴
三種）黒稽古着（師範用）白稽古着（生徒
用）柔道着（黒帯附）木刀、竹刀。鞭。精
神棒風の太い棒。トレパン。ボクシングの
グローブ。及び黒及び赤のパンツ等。



〔手記・告白〕

手製のふんどしと赤い水着

— R・いちろう —

1

二年前の夏休み、僕は田舎の親せきに遊びを兼ねて、墓参りに行った。

父母が用事で行けないというので、代りに僕が行くことになったのである。いとこのK君（17才）は、生れつき身体が弱く、内気な性質で、いつも二つ上の姉に頭が上がらなかった。

2

或る晩、僕はこの姉の奇異な行動を見てしまったのである。その日の夕食後、僕はK君と、おじおばと連れだって墓参りに出かけた

が、その姉だけは行きたくないと言って家の中に残った。

途中でK君は懐中電灯を忘れたので、家へ取りに戻ったが、どうしたことか、寺に着いてもK君が来ない。何にやってるんだろうと僕も家に駆け戻り、土間の戸口を開けようとしたその時、中で姉のかん高い声がきこえてきた。

父母がいらないのいいことにして、彼女は弟のK君をいじめて喜んでるのである。興味半分、どんな具合かなと、台所の窓から覗いて見た。そして僕は、彼女の信じられないような姿を見てしまった。

八帖の間の真ん中で彼女が裸で、いや、ふんどしをきりりとしめ込んで、デンと立っているのだ。もっとも、そのふんどしは二枚の手ぬぐいを丁字型に組合せた、貧弱なものだが、とにかく、シヨッキンゲンな光景である。

K君は部屋のすみっこで、やはり彼女と同じ様な手製のふんどしをつけさせられて、小さくなっている。ふんどし姿の男女、これから相撲でもとるのかな？

案の案、彼女は片足を上げて四股を踏みはじめたではないか。そのたびに大きなお尻がびくびく動く。全く彼女がこんなにも相撲好きだとは思ってもいなかった。

「だれも見えていないわ、さあ、どこからでもかかって来な！」

K君はこわごわかかってゆくが、たちまちズデンと投げとばされる。

「何にしてんの、さっさと立ちな」

弱虫のK君が彼女に勝てるわけがない。二回、三回と投げころがされ、ふんどしがはずれてしまった。

「まわしは、もつくきつく締めるのよ」

そう叱られながら、彼は姉の前で、それをつけなおす。こうなると彼もみじめである。

しかし、彼も男だ。くやしさがこみあげてきたのか、こんどは思いきり体当りして、二本差しをとった。さすがの彼女も、ちょっとあわてたが、すぐにかん抜きに攻めかける。

ゴムまりのような乳房に顔面を圧迫された彼は息が苦しそうだ。そのため、ついに力つきて彼女のさばおりに、ヘナヘナとたおれてしまった。

彼女は立てよ、起きよとばかり、彼をけしかけるが、ぐったりとなったK君は、もうやる気がない。業をにやした彼女は、

「あんたはそれでも男なの？」

やにわに彼のふんどしをはぎにかかった。

「やめてくれ！」

彼は悲鳴をあげるが、それだけ、彼女のビントをくらうだけである。

「もっと強くなるように、焼きを入れてやるわ」

彼女は勝ち誇った顔で、彼をうつ伏せにする。そして、彼の腰をもち上げ、そばにあったスリッパで、尻をピタンピタンと引っぱたく。K君はどうすることも出来ず、ただ悲鳴をあげるだけだ。

やがて彼女は、でくの棒のようになったK君をひきずるようにして、奥の部屋へ消えていった。

3

墓参りの事など、すっかり忘れた僕は、夢中になって家に入り、八帖の間から、そっと奥の部屋をのぞき込んだ。

K君は、相変らずぐったりとして畳の上にほり出されている。真赤にはれ上ったお尻のみみずばれは痛々しい。

彼女は、「汗かいちゃったから、泳ぎに行こうね、夜だから、だれもないわ」と言いながら、タンスから何やら薄赤い物を取り出した。良く見ると、それは古くなった彼女の水着である。

「あんた、水泳パンツ持ってないでしょう。」

だから、これ着せてあげるわね。いい子だから、おとなしくすんのよ。」

水着がきつすぎたのと、彼のわずかな抵抗で、ちよっと手間どったが、とうとう彼はピンク色の水着を着せられてしまった。彼の毛むくじやらの足と、その水着を見くらべるとちよっとこっけいだが、その時はそんな事を考えている暇はなく、ただ僕は興奮して見ていただけだった。

さて、彼女がバスタオルを探しているすきに、K君は突然立ち上り、縁側から外へ逃げ出してしまった。彼は恥も外聞もない、夜の田圃道をピンクの水着姿のまま、お寺へ一目散に走っていった。

4

こんな出来事を目のあたりに見た僕は、大変なショックを受け、心の奥底にこびりついて離れなくなり、それ以後、僕の心の一部にM的性格が宿りつくよりなった。

あの姉のような性格の女性を思慕する気持が日毎に熾烈となり、現在に至るまで変りがない。

現在、K君は十九才になるが、あの二年前の出来事は忘れていないだろう。しかし、単に姉弟喧嘩程度に思っているかもしれない。

重子の奇癖

(昭子をレスリングで苦しめること)

女 素 舞 夫

〇〇〇〇

秋雨に濡れた舗道にネオンがうるんで、やるせない秋のムードをかもし出していた。

昭子は友達と別れ一人〇町行のバスに乗った。昭子は廿六才、出版社に勤めている。その美貌と明るい性格に好意を寄せる男性も多く、今夜も食事に誘われ遅くなったのである。

昭子は終点でバスを降りて、ゆっくり歩いた。雨の夜のデイトの甘い余韻が、彼女を感傷的にさせていた。しかし自分の部屋の灯が見える所迄来て、ふと憂鬱になり顔を曇らせた。昭子は重子と二人で、この家の二階に間借りしているのだが、重子は変った娘で、昭

子は、いつも彼女の奇癖に悩まされているのだ。而も今夜は階下のおばさんが留守なのである。余程今夜は友達の家泊ろうと思ったが、年下の重子だけ一人にしておくわけにも出来ず帰って来たのである。玄関を入りレインシューズを脱いでいると、二階から重子が駆け降りて来た。重子は廿一才、K団体に勤めている昭子より五つ年下である。

「昭子さん遅かったわね、待ってたのよ」

「ええ、お友達とお食事して来たの」

昭子は答えて足を拭く積りで台所へ行きかけると重子が慌てて止めた。

「さあ、早く二階に上りましょうよ」

「だって、一日中レインシューズ履いてて気が悪いんですもの」

しかし重子は無理に昭子の背を押してせき立てた。昭子は仕方なく階段を登る。重子も直ぐ後から続く。彼女の眼は目の前の昭子の十文の足の裏に注がれている。脂足の昭子は、足の裏がひどく汚れているのである。

「ああ、疲れたわ」

昭子はハンドバッグを畳の上に投げ出して坐る。横坐りした脚が美しい。しかし足の裏はレインシューズで蒸れて赤味を帯びてべっとなりと汚れている。真白な土踏まずと素晴らしいコントラストを描いている。重子は昭子の

傍に坐り、

『昭子さん、貴女の足、汚れてるわね』

『そう言い乍ら昭子の足の裏を撫で廻す。』

『止してよ、擦ったいわ。だから足を拭こうと思ったのに、拭かせなかったじゃないの』

昭子は足を引込めながら不愉快そうに答える。重子は昭子の足首を掴んで尚離さず。

『昭子さん、十文だって？ でも横巾が狭く、指も長いから恰好が良いのよ、羨ましいわ。私は九文三分だけど巾が広くて不恰好なのよ。足指もこんなに太くて短いでしょう』

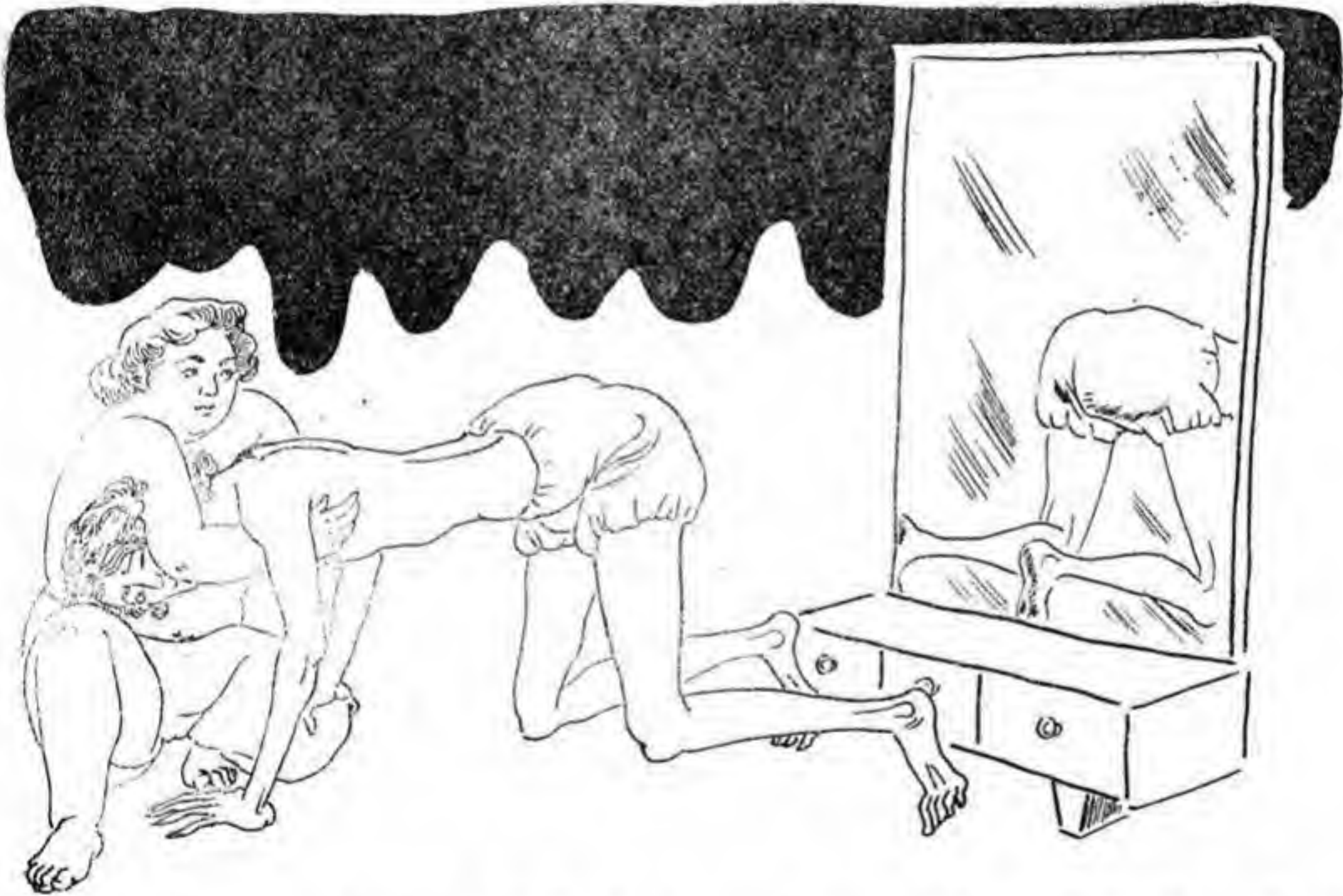
『そう言いながら自分の大根脚を出し昭子と比べる。文数は昭子が長いが巾は逆に重子が広い。』

『わたし、銭湯に行つて来るわ』

昭子は苦笑して逃げる様にして立上った。

『今夜は休業よ、だから早く脱いでシユミーズ一つにおんななさいよ、一寸階下の戸締りして来るわね』

重子はいそいそと降りて行った。昭



子はがっかりした表情で、諦めた様に脱ぎ始めた。九月とはいえまだ暑い。シユミーズだけになった昭子の身体は素晴しかった。色が抜ける様に白く、身長一六五糎、体重四五キロの身体は、細長い首筋、盛り上った乳房、よく切れたウエスト、大きなピップ、足首の細い美しい脚線美、両足を揃える内側がぴたりと付く、高校時代ハンドボールの選手だっただけに、見事なスタイルである。

だが多汗性の昭子は色白の肌がじつとり汗ばんでいる。いつの間にか上つて来たのか重子が昭子の背後に立った。重子は昭子より背は低く一五〇糎で小柄だが体重は五二キロと逆に重い。太い首筋、太い腰、大根脚でずんぐりして、お世辞にもスタイルが良いとは言えない。肌の色も赫らんで汚く、容貌も昭子が眼尻の切れ上った美貌に比べ、眼が大きく気の強そうな感じである。

突然、小柄な重子は上背のある昭子の肩に手を掛け飛来りおぶさった。昭子は思わずよろめいた。

『よし、貴女を背負うなんて御免よ。貴女は背丈の割に重過ぎるわ、降りてよ』

しかし重子は昭子の首に掴まって言った。

『昭子さん。さあ歩くのよ、部屋の中をね』

『仕様が無い人ね、まるで赤ん坊みたいよ』

昭子は重子を背負って仕方なく部屋の中を歩き出す。重子の五二キロの体は重く、足を踏みしめないといろけてしまう、六畳の部屋を二回程廻ると足がふらついて来た。

『ああ重たい、この暑いのにたまらないわ』

昭子は悲鳴を上げた。漸く重子は昭子の背から降りた。毎晩この様にして昭子は重子を背負って部屋の中を歩かされるのだ。逆の場合一度もなかった。重子は昭子の肩に攜り『ねえ昭子さん、今夜は思い切ったレスリングやってみない？ 階下は留守だし絶好のチャンスよ』

眼を輝かせて昭子を見上げる。

『重子さん、貴女どうかしてるわ、女性同士がレスリングするなんて普通じゃないわ』

昭子は自分の予感的中したと思った。先程憂鬱な顔をしたのは、これだったのだ。

重子は熱狂的な相撲やレスリングファンで昭子は毎晩、彼女の話を聞かされうんざりしていたのだ。昭子も明るい活発な性質なので

野球など好きなのだが、相撲やレスリング等には全く興味がない、否、余り好きではないのである。重子に話だけ聞かされる内は、まだよかったが、話だけでは物足りず重子は無理に昭子に対し相撲やレスリングの手を教えると言いつ出したのだ。上手投はこうだ。小手投はこうする。と言いつ……。

そして数日前に肩透しの型を教えると嫌がる昭子を四つん這いにさせ、昭子の首を抑えていた所を偶然階下のおばさんに見つかってしまった。その時は重子が美容体操していると云って誤魔化し事無きを得たが、昭子は全身から火が出る位恥しかった。その後、重子もさすが階下のおばさんに気兼ねして立技は遠慮したが、寝床に入ってから昭子の上ののしかかり、首を捲いてヘッドロックだと言いつ締めつける。昭子は音をたてて階下に知れてはと抵抗せず重子の成すが儘にさせて、しまいにはうるさくなり参ったの合図をする……。こんな事が毎晩続くのである。昭子はこんな重子を最近嫌いになり出した。

『ねえ、重子さん、あんな馬鹿な事よしましなうよ』

昭子は重子をたしなめる様言ったが『私ね、貴女と一度本気でレスリングしてみ

たかったのよ、型だけじゃ面白くないもの』昭子も重子の執拗さに腹が立って来た。『貴女一人でやったらいいわ、お相手なんか御免よ』

『昭子さん、私より背は高くせに意気地なしね、やはり私が恐いの？』

重子の挑発的な言葉に、昭子もさすがムツとして、

『何言ってるのよ、馬鹿々々しいから、わざと負けてやってるのよ。余りいい気にならないでよ』

『じゃ、やるわよ、早く』

重子は挑発的に言いつて早くも構える。昭子はレスリング等勿論好まなかったが、重子の態度が小僧らしくなり、やつつけようと思つた。自分の方が上背はあるし、まさか負ける筈はないと思つた。行きがかり上、止むを得ず重子に対して油断なく身構えた。

小柄な重子は、最初から積極的に攻勢に出た。自分より上背のある昭子に、むんずと組付き右腕で昭子の細長い首を捲く。口では強い事言つた昭子も、重子の激しい闘志にさすが尻込みし、頭を下げ後退する。重子は右腕で昭子の首を抱え一気に押潰そうと攻める。昭子は頭を重子のお臍の辺りに突込み上体や

曲げて喰下る。丁度上背に優る昭子に下組みに組まれた恰好だ。

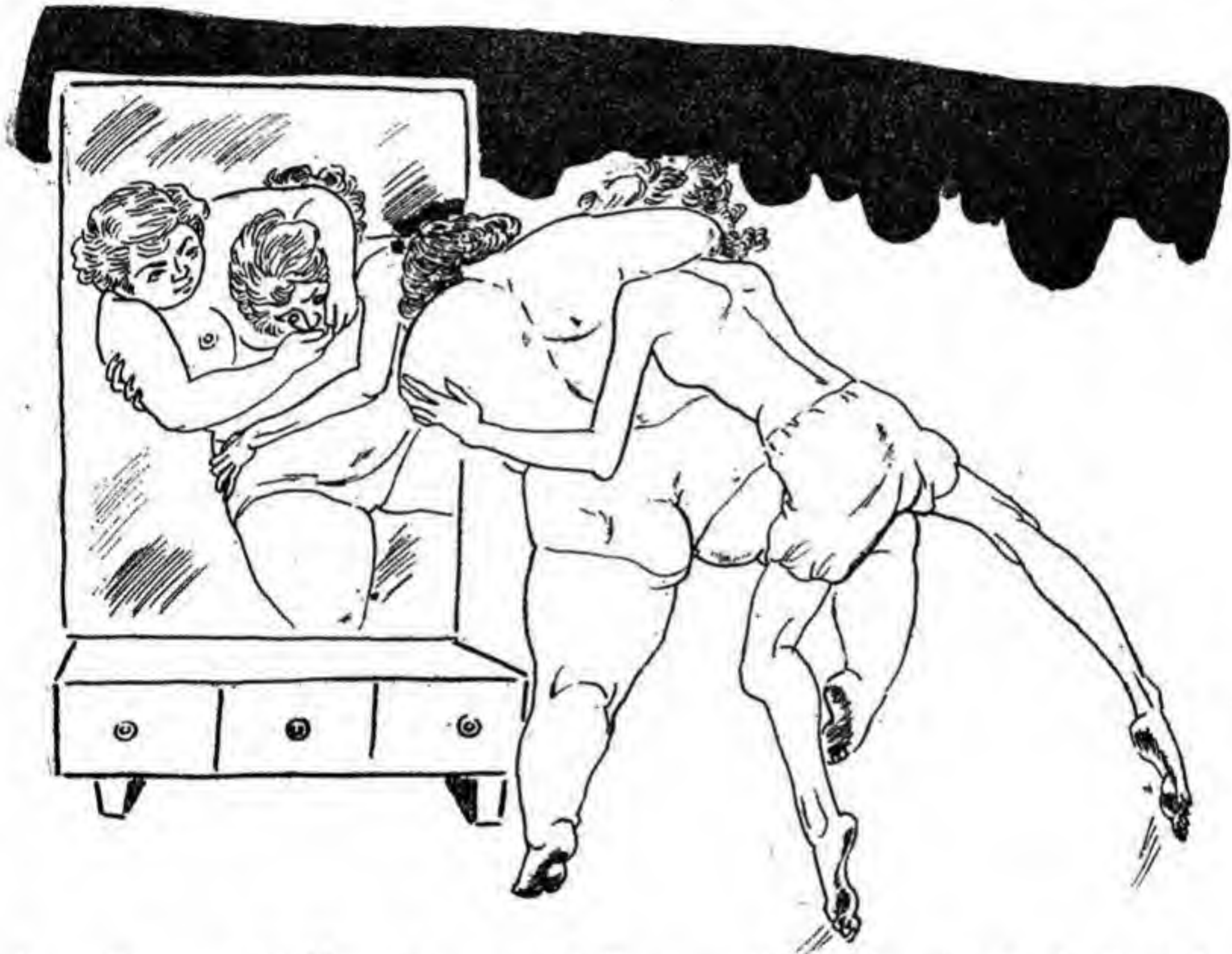
重子は右腕に抱えた昭子の首を強く引き五二キロの体重でのしかかり、昭子に膝をつかせ様とする。昭子は両足を踏んばって懸命に耐えたが、重子の体重に抗しきれず遂に両膝をがっくり畳についてしまった。十文の足の裏を揃えて……。重子はすかさず右腕で昭子の首を締め左手で昭子の大きなお尻を抑える。昭子が肩透しで負けた姿勢だ。

昭子は小さなお尻をむくむく動かし立ち上ろうともがく。その瞬間、昭子のお尻からぶっ／＼と音がした。思わずおならを出してしまったのだ。

昭子はぱっと顔を赧めた。こんな恰好にされているのが情無かった。

『わあ臭い！ 昭子さんおなら出したわね』

重子は左手で昭子のお尻を撫でながら、全体重をのしかけ抑え込



む。昭子のおならで余計興奮した様子だ。昭子は足の裏を立てて必死に起上ろうとする。重子は上から覗き込んでいたが、思い出した様に昭子の首を放し立上った。

『昭子さん、一寸待ってね』

重子は鏡台のクロスを開けて鏡を稍下けた。

『こうすれば貴女の足の裏が映って、よく見えるわ』

自分の九文三分の巾広い足の裏と、十文の脂足の昭子の足の裏の表情が見たかったのだ。昭子は既に身を起し横坐りしていた。

『貴女、変な事ばかりするわね』

『さあ、昭子さん、今の体勢からやり直しよ』

重子は昭子の首を巻き再び四つん這いにさせ様とする。しかし昭子は立上って言った。

『いやよ、始めからやるべきだわ』

『昭子さん、ずるいわ、負けたくせに』

重子は再び昭子の首を捲こうとする。昭子は左手で防いだが結局首を

捲かれた。重子は右腕に昭子の首を抱えたまま鏡の前へ引張った。昭子も首を抱えられているので、重子の太い腰に抱きついたまま仕方なく従う。

『昭子さん、御覧なさい。私たち鏡に映ってるわ。レスリングのテレビ実況みたいよ』

重子は楽しそうに言った。昭子も重子の右腕の中から顔を上げて鏡を覗き苦笑する。重子は突然首投を掛けた……。

『ああ危い！ よして！』

昭子は悲鳴を上げた。鏡にぶつかりそうだったからだ。一廻転して鏡台の前を離れた。

重子は又首投げを放つ。昭子よろめいたが、左手を伸ばし重子の太股を抱えた。足取りだ。左足一本で立った重子は昭子の首に両腕で握り耐えたが、二人は纏れ合って畳の上にとっと倒れた。二人は組合ったまま畳の上で争った。その時、階下の玄関に人の訪れる気配がした。昭子はぱっと飛び起きた。重子は怒った様な声で

『今頃誰かしら、仕様がないわね』

シユミーズのまま階段を下りて行った。昭子は乱れた髪をかき上げ、ほっとした表情で横坐りした。全身汗で濡れている。足の裏も今朝から拭いていないので、ひどく汚れている。

る。自分でも分る位臭い匂いが、ぷーんと漂っている。重子はやがて帰って来た。

『お隣りの人よ、帰ったわ、さあ、やり直しよ』

『もう止しましょう、みっともないわ』

『まだ勝負ついてないわよ、さあ早く』

重子のしつこさに呆れたが、仕方なく昭子は応じる。重子は又も昭子の首を捲く。

『重子さん、私の首ばかり巻くのよ』

昭子は首をすくめ顎を引き抜こうとする。

『私は首投げが大好きよ、昭子さんみたいな美人で、背の高い人を首投げで倒すのは、たまらないわ。貴女の首は汗でぬるぬるしてるわ』

重子はそう言って強烈な首投げを打つ、昭子はよろめいたが辛うじて残した。重子は成るべく鏡の中に自分達が映る様に動く。

重子は太い右脚を昭子の長い左脚に絡ませ強引な首投げを打続けた。しかし昭子が必死は上背を浴せたので完全に決らず同体我倒れた。昭子の外掛けが決った様な恰好だった。

昭子は首を捲かれながらも、懸命に上から重子を抑えつけ様とする。両足を畳の上に踏張った。その時、鏡に昭子の足の裏が映った。重子はそれを見た瞬間、昭子の首を放した。

跳ね起きた。

素早く昭子の後に廻り、昭子の足首を掴んだ。そして自分の鼻を押しつけ嗅ぎ出した。

『ああ、素晴らしい匂い、昭子さんの足は脂足だから蒸れて臭くてたまらない匂いよ。だから、先程はわざと拭かせなかったのよ、ほら、こんなにくっついてるわ、赤味がかって素敵な色してるわ！』

重子は遂に昭子の十文の細長い足の裏を抱いて舐め始めた。細長い足指の股をべろべろ舐め廻す。こんな重子に昭子は嫌悪感を覚えた。

『何するのよ、貴女馬鹿よ』

足を引込めて軽蔑する様に重子に言った。

『言っただわね！』

重子は大きな眼をむいて掴み掛った。

もう既に喧嘩だ。二人は激しく組合って争う。昭子は重子の髪を驚掴みにし、重子は昭子の首を捲きながら……。

二人は、両膝を立て、互いに相手を組み伏せ様として揉み合う。昭子も本気になると、さすが上背に優るだけに強かった。重子を突放した。

二人は同時に立上っていた。小柄な重子は執拗に上背のある昭子の首を捲こうとし、昭

子はそうはさせじと防ぎ手四つの体勢で激しく揉み合った。しかし、重子の執拗な首攻めが成功し昭子の首を捲いた。昭子は左足を飛ばし外掛けで浴びせ様としたが、重子は掛けられた足を跳ね上げ、逆に強引な首投げ、

昭子腰を落し必死に耐える。重子は丸っこい太い右腕で昭子の首を力一杯締め上げ、強引きわまる首投を打つ。昭子呻き声をたてながら、倒されまいと耐える。重子の太い腰に爪を立てて抱きついていて。重子は痛さに余計気負い立ち、左腕も昭子の首に捲きつけ両腕も昭子の首に捲きつけ両腕で強烈に締め上げながら、大根脚を昭子の長い左脚に絡ませ強烈な首投げを打てば昭子遂に耐え切れず、大きく宙に一廻転して畳の上に地響き立てて倒れた。

重子も昭子の首を捲いたまま折重なって組敷く。重子は右腕深く昭子の首を抱え込み、その太く短い腕で骨も砕けよと締め上げる。昭子は眼をつり上げ、苦悶の表情を浮べている。左手は必死に重子の髪を掴み、右手は首に捲きついていて。重子の腕に爪を立て引離そうとしている。長い脚を畳の上ではたつかせる。

十文の足の裏が激しくのたうつ。汗と脂が

滲み出て畳の汚れが付き、べとついて赤黒く汚れている。丁度下向きの鏡に映った。

重子は鏡をふりかえったが、それを見た瞬間、興奮の極に達したのだろう。昭子の首を強烈に締め上げた。

「むうっ！」

昭子は呻き声を出した。重子は昭子を締め殺す積りなのか。その時だった。

「貴女達、何してるのッ！」

頭の上で怒鳴る声がした。何時の間にか、階下のおばさんが帰って来たのである。

重子は慌てて跳ね起きた。昭子はうつ伏せになつたまま、起上れない。

「昭子さん、貴女年上のくせ何よ、レスリングなんかして、この部屋はリングじゃありませんよ、先日からやってたのね」

昭子は漸く身を起こし、

「だって、重子さんが無理にしようって言うんですもの」

昭子は眼に一杯涙を浮べて悲しそうに答えた。重子に負けたくやしさと、おばさんに叱られて悲しくなったのだ。切れ長の瞳が美しかった。重子はふてくされた表情で、昭子の十文の脂足の足の裏を見詰めていた。未練そうに……。

(おわり)

M写真・シリーズ 決定版

足の味覚

大手札

三枚一組 三〇〇円
絹川文代、杉 早夫
略号(そは)

犬の生態

大手札

三枚一組 三〇〇円
絹川文代、杉 早夫
略号(そろ)

長靴は悶ゆ

大手札

四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一
略号(そに)

灰皿の男

大手札

四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一
略号(そほ)

股責の地獄

大手札

四枚一組 五〇〇円
大塚啓子、高田 一
略号(まさ)

足舐の構図

大手札

四枚一組 四〇〇円
絹川文代、小沼正三
略号(そへ)

縛りの過程

大手札

四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一
略号(そと)

使役の凌辱

大手札

四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一
略号(そち)

なぶり者

大手札

五枚一組 五〇〇円
絹川文代、高田 一
略号(そり)

おいしい足

大手札

四枚一組 四〇〇円
絹川文代、小沼正三
略号(そぬ)

連載小説

花

と

蛇

(第六回)

団

鬼

六

「逆転」

何とか血路を開こうと、京子は、やくざ達
が固めている裏門に向って突進した。

「逃がしてたまるもんか」

朱美と銀子がナイフを逆手に持って、京子
と静子夫人を追った。二人にここから逃げ出
されたりすれば、森田組も葉桜団も潰滅する
事になる。逃げる方も必死なら、追う方も必
死であった。

京子に脇腹をけりあげられ、だらしなく庭
石の上にうずくまっている川田は、苦しそう

にあえぎながら、

「その阿女は唐手を使うぜ。皆んな要心しろ
よ。いいか、絶体ここから逃がすんじゃね
えぞ」

と、うなるようにいいつつける。

そうした川田の注意も耳に入らず、銀子と
朱美は、猪のように京子に突進して行き、結
果、京子の空手打ちを二人ともいやというほ
ど、肩先に受けて、

「ギャー」

と怪鳥のような声をあげて横転してしまっ
た。大手を開けるようにして、裏口を固めて

いたやくざ達も京子の勢にはじかれたよう左
右に散る。

「さ、奥様、早く！」

京子は、静子夫人の手を取るようにして、
裏門を開けようとする。

「おっと、そうはさせねえぜ」

先程、京子にチョビヒゲを剃り落された田
代が眼をつりあげて、その場へかけつけて来
たのだ。彼の手には、無気味に黒く光る拳銃
が握られている。

京子は、ハッとして、静子夫人を背後にか
ばい、田代を睨む。

庭石の上に、うずくまっている川田は、田代の拳銃を見ると、ほっとしたように、

「社長、もうこうなりや面倒な事にならねえうち、この二人を天国へ送ってしまひやしょう。さあ、一思いに引金をおひきなせえ」と田代にいう。

「二人とも覚悟をしろ。一緒にお陀仏させてやる」

田代は、京子と静子夫人に拳銃をつきつけた。

京子は、夫人を背後にかばって、必死な眼を向けている。二人の動揺を見てとった川田が再び声をかけた。

「おい、京子。命が惜しかったら、おとなしくしな。俺達だって、何も無理にお前達を殺したくはねえのだ」

と川田は、周囲のやくざ達に目くばせをした。

「お前さん方、この二人の阿女をふん縛っておくんなさい。まだ、じたばたするようだったら、社長に始末をつけてもらう事にしようじゃありませんか」

やくざ達は、合点だとばかり、麻縄を持って、京子と静子夫人に迫る。

あと一歩というところで、京子は遂に身動

きがとれなくなってしまうたのだ。唐手二段の腕前も、やはり、飛び道具の前にはどうしようもない。

京子は、キリキリと歯を口惜しげに噛みしめながら、じわじわと迫って来たやくざ達を見廻した。

「やい。京子、どてっ腹に風穴を開けられなくねえなら、おとなしくお手々をうしろへ廻すんだ。」

男達は、それでも恐る恐る京子の背をつつく。彼女の空手打ちがよほどこわいらしい。

自分とはとにかく、静子夫人の命を救うためには、自分が一旦、彼等のいいなりになる外仕方がないのだと悲痛な決心をした京子は、固く眼を閉ざして、両手を背後へ廻すのだった。

「なかなか往生がわがいいぜ」

男達は、勢いこんで、京子の背後へ廻した両手首をがっしり、麻縄で縛り、余った縄尻を前へ廻して、ふっくらした胸の隆起をブラウスの上からしめあげる。唐手を使うぶっそうな京子の両手の自由を奪えば、もう安心と男達は調子づいてきて、

「今までの礼を充分返させてもらうぜ。さ、こっちへ来な」

力一杯、京子の縄尻をひいた。

「さて、奥さんの方も、お手々をうしろへ廻してもらおうか」

静子夫人も救われたと思ったのも束の間で男達に肩や背をつつかれ、ベソをかいたような表情で、両手をうしろへ廻すのだった。

「とっとと歩くんのだ」

後手に縛りあげられた京子と静子夫人は、がっくり首を垂れるようにして、男達に引き立てられて行く。

背を邪慳に突かれたり、腰をけられたりして二人は庭をよぎり、再び、縁先から廊下へ押し立てられて行った。

「二度と逃げられねえよう地下室へしよっぴいていきな」

体中傷だらけの森田が、ちんばをひきながら廊下へ出て来て、やくざ達に指示する。

廊下を二つばかり曲ったところで、突き当たった壁のボタンをやくざの一人がおすと、ギイーときしむ音がして、壁がスルスルと上方にはね上り、そのあとにポッカリ大きな穴が開いた。階段が下方へつづいている。

「もたもたせず、とっとと下へ降りるんだ」

川田が、京子の肉ずきのいい尻をスカートの上から平手打ちしている。

密輸品らしい荷造りされた箱が、ぎっしりつまっている地下の倉庫に京子と静子夫人は押し立てられる。

「よくも、ひでえ目に合わせてくれたね。たつぷりと礼をかえさせてもらうぜ」

森田と田代が、眼をつりあげていい、川田に眼くばせをする。

京子と静子夫人は、つき当りの壁に並んで立たされる。田川が、壁のボタンを押すと、上から鎖が二本するすると下りて来る。その一本に京子の縄尻を、別の一本に静子夫人の縄尻をつなぎ止め、二人が身をかめられぬよう鎖を上へ引きあげた川田は、屈辱と恐怖の入り交った眼を向ける京子と静子をせせら笑うように見ながら、

「これから、お前さん方二人を裁判にかけるんだ。森田組と葉桜団を潰滅させようとした大罪に対する判決はどうなるか、ふふ……、田代社長に裁判官になってもらい、森田親分がさしずめ検事というところだな」

などといって笑い出す。

「裁判にかける前に、もう二度と逃げようなんて気の起らないよう京子姐さんに素っ裸になつて頂こうじゃないか」

葉桜団の団長、銀子が川田に提案した。

朱美も、はしやぐように、

「男達が飛びかかってもかなわない京子姐さんの唐手の腕前には感心したわ。どんな体つきをしているのか、後学のため、京子姐さんのヌードをしみじみ観賞したいものだわね」という。

後手のまま、壁に背をつけて立たされている京子の顔に血がのぼった。

「なるほど、お前達のいう通りだ。じゃ、京子も静子夫人も仲良く丸裸になつてもらおうか。」

川田は口を歪めてそういうと、銀子と朱美に眼くばせをした。

銀子に朱美、それに森田組のやくざ達が、自由のきかぬ京子の前につめ寄る。彼等の手が身に触れると京子は電氣を感じたように体を震わせ、声をはりあげた。

「何をするんだよ！ け、けだもの」

衣類を剥ごうと近づく銀子と朱美の腰のあたりを京子は自由な足をばたつかせて、けりあげる。

「あいて！」

銀子は、嫌というほど横腹をけられ、顔をしかめて、その場にうずくまってしまった。

「やったね、畜生！」

朱美が眼をつりあげて、ナイフを抜く。

「まあ、待ちな」

川田は、興奮している朱美の手からナイフを取りあげた。

「あわてちゃいけねえ。こんないい玉を何も急いで殺すことあねえよ。まあ、俺にまかせておきな」

川田は、朱美から取りあげたナイフを手に持ちかえると、京子の横に並んで立縛りにされている静子夫人の方へ近づいた。

おびえたような眼を川田に向ける静子夫人の表情を川田は面白そうに見ながら、夫人の着ている浴衣の裾前を割り開き、雪のように白い大腿を露出させる。真赤な顔になった夫人の鼻を川田はつついて、

「今まで丸裸でいたくせに、何も今更恥しがる事はあるめえ」

そして、夫人のふっくらした内腿にナイフの先を突きつけた。

「あっ」

夫人は思わず悲鳴をあげる。

「おやめ！ 奥さんに手出しをすると承知しないよ」

京子が体をゆすりながら、川田に向って叫ぶ。それが川田の作戦であった。

「奥さんの悲鳴が聞きたくねえのなら、おとなしく、自分で着ているものを全部脱ぐんだな。おめえがその気になるまで、奥さんに歌ってもらおうとしようぜ」

川田は笑いながら、更にナイフで静子夫人の内腿の肌をつつく。

「あっあっ」

夫人は、苦痛に歪めた顔を激しく左右に振る。

「おやめ！ おやめったら」

京子も逆上したように、けたたましく叫んだ。

朱美が、ニタリと口元をゆがめて、京子に近ずき、耳もとに口を寄せるようにしていつた。

「どう。京子姐さん。裸になる決心がついたかい」

京子は、血の出るほど固く唇を噛み、眼を横へ伏せて、かすかにうなずいた。

自分はどうなっても、静子夫人は、何とかして助けなければならぬと、屈辱に身を震わせながら、京子は悲痛な決心をしたのである。

「そうこなくちゃいけねえ。さすがは、サツの廻しものだけあって、いい度胸だぜ」

川田は、満足そうにうなずき、京子の縄を解くよう森田組の男達に命じ、自分は、静子夫人の喉元あたりにナイフを当て、

「いいかい。妙な気を起してまた暴れ出したりしやがると、奥さんの命はねえぞ。縄をといてもらったら、おとなしく着ているものを全部脱ぐんだ」

と浴びせるのだった。

縄尻に結びついている鎖が解かれ、京子は朱美と銀子に縄尻をとられて、土間の中央にまで引き立てられる。それを森田組のやくざが取り囲み、いざという時にそなえる意味か手に木刀などを持っている。

縄を解かれた京子は、口惜しげに川田の方を睨んだ。川田の手にあるナイフが静子夫人の喉元を狙っているので、京子はどうしようもない。

「ぐずぐずしねえで、早く脱がねえか」

川田は、そうどなると、ナイフの先で、夫人の喉元をチクチクつつき、彼女に悲鳴をあげさせる。

京子は、眼を閉じて、ブラウスのボタンを外し始めた。口惜しさのためかボタンを外す京子の指先が震えている。ブラウスを脱ぎ、京子は、スカートのシャックをひいた。

淫靡な眼で、森田組のやくざや葉桜団のズベ公が見守っている中で、京子は遂にスカートを脱ぎ、淡いブルーのスリップ姿となる。均整のとれた京子の肢体に、男達は、ごくりとつばをのみこむ。

奇跡的にこの場へ救援者が現われる事を念じつつ、京子は、ゆっくりと絹の靴下を脱いだ。が、どうしても、これ以上、野卑なやくざやズベ公の中で、裸身をさらす事はできず、そのまま棒立ちになってしまふ京子であった。「何してるのさ。早くスリップも脱がなきゃ駄目じゃないか」

朱美が、うしろから、スリップ姿の京子の背をつつく。

「もう少し、奥さんの泣き声が聞きてえのかい」

川田も、意地悪く、京子に浴びせるのだった。

顔を朱に染めながら、京子は、我が手で、スリップのたすきを外す。

ブルーのスリップが、京子の体から下へすべり落ちると、それに合わせるようにして、京子も、その場にちぢこまってしまった。

京子の身にあるのは、刺繍のほどこしてあるブラジャーと、水色のフレルのついた妙に

艶めかしいナイロン・パンティの二つだけである。

さすがの京子も、そうした屈辱の姿で、けものに等しい人間達の前に立つ勇氣はなかった。立膝をして猿のようにちぢかんでしまった京子を田代と森田は互に顔を見合わせ、含み笑いをする。

「なかなかいい体をしているじゃねえか。ふふ……」

川田は、眼をキラキラさせて、

「さあ、思い切って、残っているものを、全部取るんだ。生まれたまんまの素っ裸になって葉桜団と森田組のお仕置をたっぷり受けるんだ。ぐずぐずしやがると、この奥さん、傷だらけになっちまうぜ」

男の一人が、そっと、京子の背後に寄って素早く京子のブラジャーのホックを



外す。

「な、なにをするのさ」

京子は、男の一人に、ブラジャーをいきなり、剥ぎ取られ、耳たぶまで真赤にして、ブルンと飛び出した弾力のある乳房を必死になって、両手で覆った。

どっと哄笑がわく。

乳房を覆い、消えいるように立膝をしている京子の切長の美しい眼尻から屈辱の口惜し涙が一筋二筋、白い頬を伝わって流れるのであった。

四囲に散乱している京子の衣類を葉桜団のズベ公達が奪い合うように取りあげた。京子に脱がさせたスカートを浅ましくも引っぱり合い、あたいが先にひったくったものだよ！とがなり合っているものもある。

「手前達、ガード下時代のくせがまだなおらねえのか。うるせえぞ」

川田は、大声をあげて、スカートの奪い合いをやっている女達を突き飛ばした。

「ちえっ、あたいの分取品は、何もありません」

悦子というズベ公が口をとがらす。捕虜の持物は何でも奪い取って自分のものにするというのが彼女達の常識であった。

「心配するねえ。まだ、一つ、残ってるあ。」

と、川田は、うずくまっている京子の方を顎でしゃくった。

「さ、京子姐さん。こうなったら、いさぎよく、最後の一枚もすっぱり脱いでもらいましょうか」

朱美が、小腰をかがめて、屈辱にむせんでいるような京子のなめらかな背をつつく。

ギクと体を震わして、京子は、身を固くするのだった。

胸の隆起といい、腰から股にかけての曲線といい、男達の官能をしびれさせるに充分な京子の肉体である。

「いつまで手間をとらすんだ。往生ぎわが悪いぜ」

川田がどなる。

「お願いだ。こ、これだけはかんにんしておくれ」

京子は、ペソをかきそうな顔になって川田に哀願の眼を向ける。

「ふふふ、鉄火娘も、素っ裸にされるのは、よほど辛えようだな。だが、手前のしたことよく考えてみる。素っ裸になった事ぐれえじゃ俺達の腹の虫はおさまらねえ。ぐうの音も出ねえように遠山夫人と一緒に責めあげやるから、さ、早くとったり、とったり」

と、川田は、心地良さそうにいったが、京子がかたくなにパンティのゴムを片手でしっかりと押えているのを見ると業を煮やして、
「仕様がねえな。おい、皆んな、その阿女を縛りあげるんだ。自分で脱げねえのなら、手伝ってやらなきゃしょうがない。じたばたできねえようがっちり縛るんだ」

男達が麻縄を持って京子の背後へ廻った。片手で乳房を片手でパンティのゴムをしかり押さえていた京子の両腕を男達は強引に背後へねじ曲げようとする。

「な、なにをするのよ」

京子は、狂ったようになって、男の一人を思わず、突き飛ばした。こんな姿のまま、縛られてしまえば、野卑の連中にどのような淫

虐な方法で罵られる事になるか、想像するだけでも気が違いそうになる。

「やい、京子、まだ、暴れる気なのか」

と川田は、いらいらしたように、静子夫人の尻のあたりをナイフの先で突きまわった。

けたたましい夫人の悲鳴を聞くと、京子ははっとしたように顔をあげる。

「おとなしく両手をうしろへ廻すんだ」

川田にせかされ、京子は、もうどうしようもなくなったようにがっくり首を垂れ、静かに乳房を覆っていた両手を解いて、背中へ廻すのだった。

京子に突き飛ばされた吉村というチンピラやくざが、再び縄をとりいらした眼つきをして、京子が背後へ廻した両手首をがっちり交錯させ、ひしひしと縄をかけていく。

京子は、一切をあきらめたように首を垂れ小さくすすりあげている。まつ毛が涙で光っていた。

「ちゃんと胸を張るんだ」

京子の両手を背後で嚴重に縛りあげた吉村は、あまった縄尻をたぐりながら、京子のすべすべした白い背をつつく。

観念したように京子は眼を固く閉じたまま胸を張った。腕を伏せたような形のいい乳房

の上下を縄はしめあげるようにつけられた。
「ふふふ、ずいふんと手間をとらせやがったな。もう、こっちのもんだ」

川田は、やくざやズベ公達の手で、ひしひしと縄をかけられていく京子を楽しそうに眺めている。

「さ、立つんだ」

水色のナイロンパンティ一枚を許されただけの京子は、見事な胸の隆起をくびれるばかりに麻縄でしめあげられ、ズベ公達に強引に引き起される。

天井から垂れ下がっている鎖に再び京子を縛った縄尻はつなぎ止められて、京子は、静子夫人と並んで立つのだった。

「さて、奥さんの方も裸になって頂こうか」

川田は、男達に合図する。

静子夫人は、気が顛倒してしまつて、魂が抜けたよう、一旦、縄がとかれて、男達の手が浴衣の襟にかかっても、抵抗する氣力を失っていた。京子と同じように、パンティ一枚の裸身にされると、男達にせかされるまま、両腕をうしろへ回して、うなだれてしまう。
「へへへ、いい覚悟だぜ、奥さん。二度と逃げようなんて量見の起きないよう、うんとお仕置してやるからね」

川田は、せせら笑い、肉づきのいい夫人を高手小手に縛りあげると、縄にくびれた豊満な乳房をピチャピチャ手でたたきながら縄尻をひき、京子の横へ立縛りにした。

静子夫人も京子も、共に、がっくりと首を垂れ、この屈辱を必死に耐えている。

「社長、親分、長らくお待たせ致しやした。

どうぞ、氣のすむまで、この二人にうんとヤキを入れてやっておくんさい。この京子っていう太え阿女ですが、どういうお仕置がよろしゅうござんすかね」

川田が、ニヤニヤしながらいうと、田代が寄ってきて、いきなり、京子の髪の毛をわしづかみにして京子の顔を正面につりあげた。

無念そうに眼を閉じ、唇を固くかみしめている京子の顔を小氣味良さそうに見た田代は「少しは、思い知ったか。このイヌめ」

というや、二三発京子の頬に平手打ちを喰わせる。

「ま、社長、お待ちなさいよ」

森田が田代を止めた。

「これだけの別嬪なら、商売ものとして充分通用しますぜ。そんな風に手荒にしねえ方がいいでしょう。きれいな体に傷がついちや損だ」

もっと、面白い責め方が、いくらでもあるじゃありませんか。と森田は意味ありげに田代にいうのだった。

「成程、蹴ったりなぐったり仕置じゃ、俺としても、腹の虫が治まらんよ。ここは一番、親分に任せる事にしよう」

「廻りもの」

静子夫人と京子は、腰のもの一枚のあられもない姿を立縛りにされ、彼等の淫虐な責めを待っている。静子夫人は、美しい顔を横に伏せて、小さくすすりあげ、京子は、口惜しさに歯を噛み鳴らしつつづけているのだ。

「二人とも、よくも、俺達に煮湯を飲ませてくれたな。充分、お礼をさしてもらうぜ。覚悟はできてるだろうな」

山崎は、静子夫人と京子の顔を交互に見ながら勝ち誇ったようにいう。

ウイスキーをラッパ飲みしていた川田が、それに調子を合わせるように、

「さっきは、お二人ともまるで巴御前のような奮戦ぶりだったぜ。そんな、おしとやかなパンティなんか似合わねえ。ねえ、親分。この二人に、男のように縄をキリリと締めさせて見ようじゃありませんか。さぞ、似合うだ

ろうと思うのですがね」

それを聞くと、森田は声を立てて笑った。

「面白い。早速かかるでしょう」

森田の同意を得ると、川田は、悦子を呼んだ。川田は、ショウに使うための襦を悦子にあずけていたのだ。

あいよ、と悦子は、階段をかけあがって行き、大きなボストンバッグを持って来る。

悦子は、静子夫人と京子の足もとにボストンバッグから出した色とりどりの長い布を積み重ねるのだった。

ハッと顔を朱に染めて、身を震わせる二人を川田は、楽しげに見て、

「色は、お前さん方のお好みに合わせてやるぜ。赤青黄白、何でも揃ってるんだ。さあ、何色がいいかね」

川田は、色とりどりの長い布を両手に持って、二人の鼻先に近ずける。

血の出るほど固く唇を噛んでいる京子の頬を川田は指でつつくと、

「ふふふ、京子姐さん、何色を選ぶんだ。返事をしなよ」

川田に、そうからかわれた京子は、キリリと柳眉をあげ、憎悪のこもった瞳を彼に向けてのだった。

「へっへへ、この阿女、怒った顔を見ると、ずいぶん色っぽくなるじゃねえか」

森田が、赤ら顔をしわだらけにくずしていう。

川田は、布の中から、ピンク色のものを抜き出し、

「唐手の修業をつんだおめえに、これから、みっちり色修業をさせてやるんだ。その意味でピンク色の襦ってのはどうだい」

どっと哄笑がまき起る。

銀子と朱美が、口を歪めて近ずいて来ると「あたい達が、京子姐さんの襦をしめてあげようじゃないか」

と、川田から、布を受取った。

京子の腰に、これから、屈辱的なピンク色の六尺襦をしめさせようというのである。

「さてと、まず、生まれたまんまの素っ裸になって頂きましょうか」

朱美が、京子のたった一枚のものを剥ぎ取ろうとして、そのゴム紐に手をかける。

京子は、耐え切れなくなつて、

「な、なにをするんだ。それでも、お前達は人間かい！」

と叫び、必死に両足をばたつかせて、朱美を突き離す。

「畜生、おとなしく出りや、つけあがりやがって。もも容赦しねえぞ」

川田は、いささかムツとしたらしく、森田組の男達に目くばせをする。

「往生ぎわが悪いぜ。おとなしくするんだ」と、やくざ達は、京子に迫って行く。

必死になって、京子は、足を振り、男達を近ずけまいと暴れるのだが、両手の自由は太い麻縄で奪われ、足だけの抵抗では、どうなるものでもない。

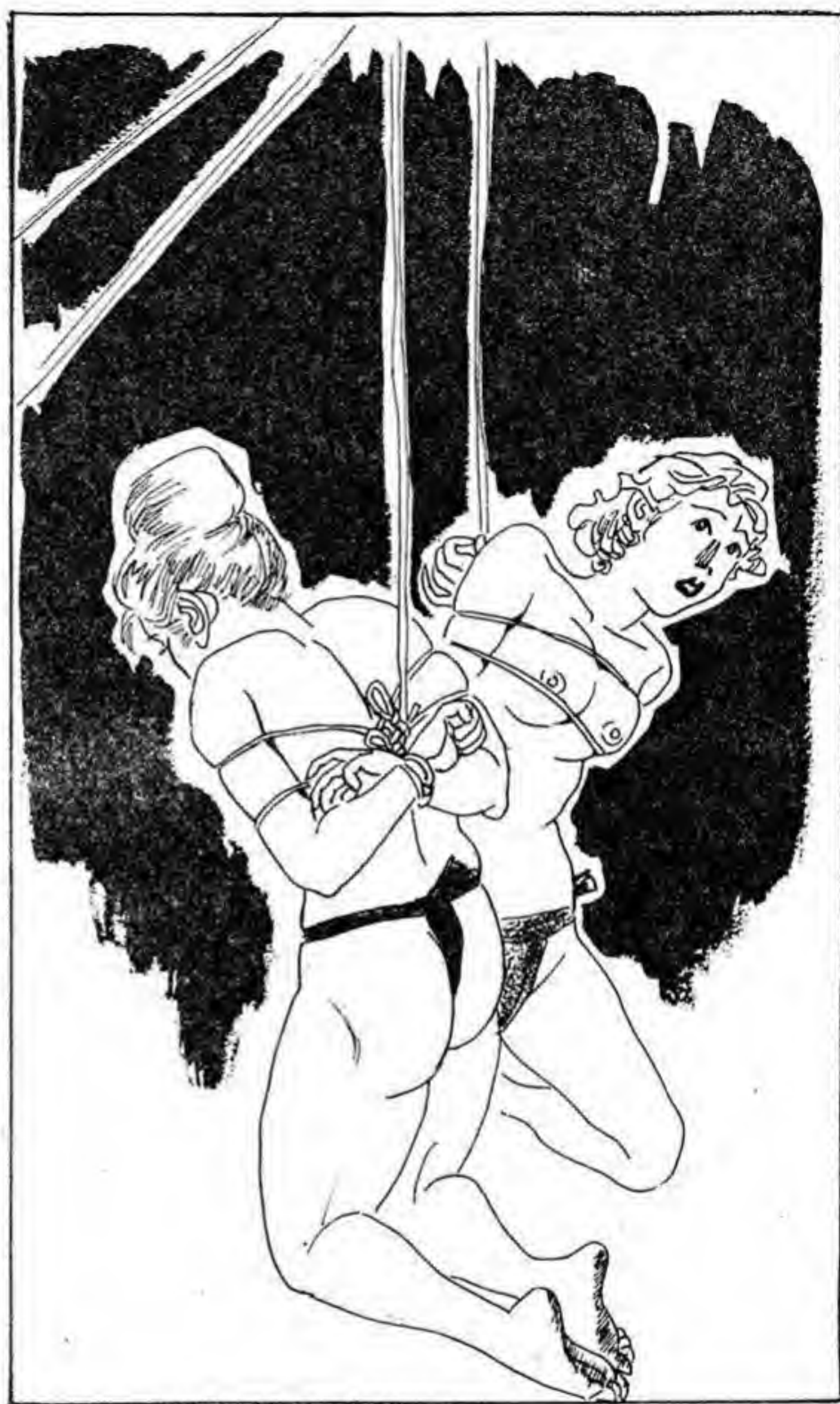
京子は、激しく肩で息をし、たった一枚の身を隠す楯を守ろうとして、身をよじり、足をバタつかせていたが、静子夫人が大きく悲鳴をあげたので京子は眼をつりあげて、その方を見る。

川田が、ナイフを使って、再び、静子夫人の身体のおちこちを突き始めたのだ。

「おめえが、おとなしくなるまで、奥さんに唄をうたってもらうぜ」

京子は、歯ぎしりをしながら、抵抗を止める。

「へっへへ、どうやら、観念したようだな」
今にも泣き出さんばかりに歯を喰いしばった表情をしている京子の顔を川田はのぞくように見て、ズベ公達にいった。



「おとなしくして下さるそうだけ。さあ、一
思いに涼しくしてあげな」

銀子と朱美が、再び、京子の左右に立ち、
「ふふふ、女のお仕置は、まず丸裸にむきあ
げて始めるのが定法さ。覚悟しな」
というやゴム紐に手をかけた。
「ああー」

京子は、羞恥の極に耳たぶまで朱に染めて
がつくりと首を落とす。

「ざまあみやがれ」
京子の膝の下までずり下げた水色のパンテ
イを銀子と朱美は、京子の足首から抜き取り
「こいつア、お前の分捕り品だよ」
と、悦子に投げ与えるのだった。

銀子は、愉快そうに、身も
世もあらず悶えている京子の
頸に手をかけて、ぐいと顔を
正面に向けさせ、

「丸裸にされた事ぐらいで、
そんなに情ない顔をするのは
おかしいよ。さっきの唐手チ
ヨップの威勢の良さはどうし
たのさ」

と、含み笑いをしながらい
う。

京子の閉じた眼から、屈辱
の口惜し涙が一筋二筋、糸を
引くように流れ落ちる。

「泣くのはまだ早いよ。さっ
きのお礼がまだ一つも返して
いないじゃないか。今に嫌で
も、男達が色々面白い方法

で責めてくれるから、その時にうんという声
で泣いて頂くよ」

銀子はそう言って、ピンクの布を手にし、
「さてと、次に京子姐さんの禪姿をとくと観
賞させて頂くとしようか」

銀子と朱美は、二人で布をさばきながら、
京子の腰のあたりに体を沈め、

「さ、アンヨを開きな。ぴっちりと締めてあげるからね」

朱美が京子の弾力のある尻を平手打ちしていうのだった。

京子は、嫌嫌をするように首を振って、体を硬化させる。女の羞恥心を更に一層高めるために、次に禪をしめさせるという淫獣に等しい連中のやり方に、京子は、気が遠くなりそうだった。

川田は、森田組の連中と、ウイスキーを飲み合っていたが、ウイスキーに濁った眼を京子の方に向けて、

「まあ、銀子、待ちなよ。もう少し、そのまま、さらしておきな。唐手の名人の見事な肉体をもう少し酒の肴にするんだ」

それを聞くと、森田もうなづいて、

「京子姐さんが禪をされるのを、そう嫌がるのも、もっと自分の体をここに居る男達によく見てほしいからだろう。はっははは」

京子は、憤怒のこもった瞳を、ちらと森田の方へ向けたが、どうしようもないよううなだれてしまう。

男達は、そんな京子の周囲に寄りたかり、ウイスキーの酌をし合いながら、卑猥な言葉を浴びせるのだった。

「おっぱいの大きさ加減といい、お尻の丸さといい、こりや仲々の堀出しものですぜ。みっちり仕込んで、静子夫人と一緒にショウヘ出演させようじゃありませんか」

川田が、森田に話す。

「だが、なかなか気の強い女だぜ。俺達のいいなりになるかな」

「なあに、こういうじゃじゃ馬をならすのはそれ、やり方次第ですよ。俺に仕しておくんなせえ」

二人が、そんなやりとりをしているのを聞く静子夫人は、京子がこういう破目に陥ったのも、すべて、自分のせいなのだとなまらなくなり、声をあげて嗚咽するのだった。

二人の美女を酒の肴に、この卑猥な酒盛はいつ果てるともわからなかった。ムチでたたかれ、足でけられるような責めに合った方が京子と静子夫人にとってまだしも楽であったろう。彼等は、商品に傷をつけちゃならねえというわけで、手荒な事はしないが、そのかわり、徹底的な羞恥責めを加えようというハラなのであった。

「明日もある事だ。今夜は、このへんにしておこう。楽しみは一度にするもんじゃない」と、田代がいう。

川田が、へっへへ、と笑いながら、

「とかなんとか、おっしゃって、静子夫人と先程のつづきが——」

つまり、お床入りが早くなさりてえというわけで、——と川田がからかうようにいうと、

「図星だ。あのままじゃ、森田親分も僕も体に悪いからな」

と田代は腹をゆすって笑う。

「じゃ、京子の方は、俺達に下げ渡しておくんなせえ。森田組の若い衆達と今夜はこってり色責めにかけて、色っぽい女に仕上げてやりますから」

よかろう、という事になり、静子夫人と京子は、いよいよ禪をしめられる事となる。

静子夫人のために選ばれたのは紫地の布であった。

「どうでい。大家の令夫人には、高貴な感じの出る紫地の禪だ。さぞ似合うだろうな」

川田は、手に唾をして、夫人の腰に、それを締め始めるのだ。

「ああー」

静子夫人は、美しい瓜実顔を真赤にして、悶えぬく。

川田は、強引に夫人の股に布を通し、そこ

で布をキリキリとねじって、豊満な尻の間をしめあげるように上へしぼった。

「わあ、よく似合うわ。気品のある顔に紫の褌って、素敵じゃないの」

ズベ公達は、感謝したように、見事な、乳白色の夫人の肉体に喰いこんだ紫地の六尺褌を見つめている。

「どうだい奥さん。褌をしめてもらった感じは？ 満更でもねえようだな。寝室へ行ったら社長と親分にゆっくり、解いてもらいな」
川田は、羞恥の極にあえいでいる静子夫人の頬を指で突つく。

「さて、と次は、京子姐さんだが――」

銀子と朱美は、ピンクの褌をひらひらさせながら、がっくり首を垂れている京子の髪の毛をわしづかみにして、顔をこじあげる。

「おまえさんじゃ褌を締めてやる前に、ちょっとばかり葉桜団に詫びを入れてもらいたんだよ」

銀子の眼の底に残忍なものが光る。

何か手荒な事をするのではないかと、川田が口を入れた。

「まあ、おめえ達の気持もわかるが、この女は、これから、男達の手で、うんとお仕置をされるんだ。おめえ達も、それを見て、溜飲

を下げりゃいいじゃないか。これだけの上玉に生傷をつけるのは勿体ねえ」

銀子は、それに対し、

「だけど、一応、葉桜団にも、詫びを入れさせなきゃあたい達の顔がたたないよ。まあ、兄さんは、だまって、見物してておくれ」

銀子と朱美は、手きびしい敵意のこもった眼で、京子を睨みつづける。

「こ、これ以上、私にどうしろというのさ」

京子は、涙にうるんだ美しい瞳をキッと開き、二人のズベ公を見る。

「詫びを入れろ、といってるじゃないか。商品に傷がつくと男達が困るというんで、指をつめさせたりはしないよ。実に、たやすい方法さ」

銀子がそういうと、そのあと、朱美がつけ加えていう。

「ふふふ、これから、お前さんをたっぷり可愛がって下さる男達に、とくと見ていただくんだよ。お前さんが粗相をする姿をね」

京子は、途端にギクッと体を震わせ、ひきつったような表情になる。

「何も、そう驚く事はないじゃないか。誰だってできる事さ。唐手名人の気性の強い姐さんは、どんな顔してするのか、とくと拝見

させてもらおうというわけさ」

それを聞いた男達、どっと手をたたいて喜び出す。

京子は、ズベ公達の計画した事のあまりのおどましさに、狂ったように自由のきかぬ身体をゆすり出して、叫ぶのだった。

「鬼、悪魔、そ、そんな事、死んだってー」
京子の狂乱した状態を見て川田は、ニタリと笑う。

「そういう風に駄々をこねればよけいにさせてみたくなるのが俺達の性分さ。強情をほらずに、女達のいう事を聞きな。後始末は、ちゃんと俺達がしてやるからな」

塩水を一杯つめたヤカンがズベ公達の手で持って来られる。京子は、それを見ると、体中の血がふき出すような恐怖をおぼえて、必死に体をよじり始めた。

「さすがの京子姐さんも、このヤカンには、大分こたえるらしいナ、フッフフ、こうきちゃ、俺も一寸見物させてもらおうか」

川田は、ズベ公達が、無理矢理、京子にヤカンの塩水を飲ませようとするのを、うれしくてたまらぬといった表情で、身体をのりだすのだった。

(つづく)

ガン作・マニヤのノート

(私のバーでの会話)

芳 野 眉 美



A スカーフ

「ボタンダウンにスカーフとは、おめずらしい」と私。

「たまには、若い人のおしやれをしないかね」とA。

「アスコット・タイですか」

「いや」

「絹ですか」

「フフ」

「やわらかそうだ」

「そりや、やわらかいよ。梨香の」

だから

「梨香のスカーフ？」

「おパンティ」

「え？」

「そうは見えないだろう」

「――」

「驚いたか」

「言うことありませんね」

「色もいいだろう」

「白ワイシャツの首にね、マッチ

してますよ」

「考えただろう」

「新品？」

「とんでもない」

「洗濯してないの」

「こいつを首に巻いていると、梨

香の体臭がほのかに匂ってくる」

「そりやそうでしょう」

「君もどうだ。一枚あげようか」

「奥様のなら」

「馬鹿野郎」

「梨香、知っているの？」

「どうかな」

「せめて、洗濯してあるのを巻い

たら」

「梨香のは、そんなに汚れてないよ」

「あきれた」

B 切られる

「薄くなったな」とA。

「なんです」

「君の頭さ」

「髪が短かすぎるんですよ」と私

「天井がハゲてるぞ」

「そう見えるだけです」

「髪を短かくするの、やめた」
「そのほうがいいですよ。大正生まれは」

「残念でした。これでも昭和生まれだ」

「どっちみち、昭和のヒトケタでしょう。大正とそう違わない。私はフタケタですからね」

「二人共、オジイちゃんよ」と梨香。

「すみません」

「なんだ、二三カ所、切られているぞ」とA。

「見習いさんだったからでしょう」と私。

「十七、八の女の子」

「いや、十六、七の女の子。それがまた可愛いんだ」

「同じことだ」

「梨香は十八でしょう。ちがうわよ」

「こいつはマセている」

「Hなことをせつせと教育しているのは誰よ」と梨香。

「すみません」

「その子ね、カミソリで切ると、小声で、すみません」と私。

「どうぞどうぞ、もっと切って下さい」

「床やは、昔から（百人切って一人前）って言うから仕方ありませんよ」

「そうか。見習いでも、野郎だったら怒るだろう」

「そうかも知れない」

「はっきりしていやがる」

「あまり夢中で剃っていてカミソリで二、三切ってしまったので、息苦しくなったらしい。マスクもとっちゃったから、その子の吐く息がまともにかかってね。いい匂いだったな」

「いい気なものだ」

「また切られに行くかな」

「案内しろよ」

「いやになるなあ、二人の話」と梨香。

梨香。

C 踏まれる

「一足で踏むだけのお客さんていま「うれしくなるね」

すか」とA。

「またヘンなことを言いだした」と梨香。

「ええ、いますよ」と女のマッサ―ジさん。梨香のアパートの友達。

「腰とか背中を」と私。

「ええ、足からずっと、重くないのかしら」

「梨香だったらつぶれちゃうな」

「失礼ね、十四貫よ」

「首や頭は」とA。

「踏んでくれと注文されれば」

「踏むの？」

「ええ」

「今度お願いします」

「頭だけでいいのよ、Aさんは」と梨香。

「この間も、そんなお客さんがいました」

「ほう、いるんですね、やはり」と私。

「頭の上に立って、踏むだけ」

「片足？」とA。

「いえ、両足で」

「いたくないのかしら」

「息が苦しいだろうな」

「踏みにくいでしょう」と私。

「勝手がちがいますから」

「実験してみたら」と梨香。

「そうしましょう」とA。

「あら、困りますわ」

「どうしてです」

「だって、梨香ちゃんのお客様でしょう。知っている方だとやりにくいんです」

「いいですよ、そんなこと」

「えんりよすることないわよ」と梨香。

「それで喜んでいらっしゃるから」

「でも、足が汚れているし」

「素足ですか？」とA。

「ええ」

「そのほうがいい」

「面白いわ」と梨香。

「二人で踏んづけちやお」

「さあ、えんりよなく飲んで下さい」とA。

D 両足の間

「この間、D劇場に朝の九時に行ったら、もうカブリツキは満員なんだ」とA。

「全スト？」

「そう、六時頃から来てるらしいんだ」

「開演は？」

「十一時」

「あきれた」と梨香。

「朝からね」

「しやくだから、花道の一番うしろに坐った」

「何かいいことがあったな」と私

「そうなんだ。うしろは席が高く
なるから、寝ると花道が枕にちよ
うどいい」

「なんだ」

「話は最後まで聞け」

「はいはい」

「雨に関係のあるジャズで、レインコートを着た女が舞台を歩いて
いると思え」

「歩くだけ」

「そうだ」

「ストップって、踊らないの」

「そんなことは関係ないよ。花道をゆっくり歩いて来て、俺のところで止まった」

「あわてて起きた」

「いや、そのまま寝ていた」

「案外、ドキョウがあるんだな」

「それが、俺の顔の真上なんだ」

「ははあ」

「H」と梨香。

「それを見に行くの」

「ストリップで、何を見るつもりなんだ」

「それで」

「少しずつ、かがんで来た」

「うれしかっただしよう」

「客が笑ったね」

「今度はよく見えた」

「見えすぎた。匂うようだ」

「きたないなあ」と梨香。

「いやになる」

「それから」

「それだけ」

「なんだ、つまらない」と梨香。

「わかつちやいねえんだなあ」と

A。

「彼女のハイヒールの間に顔をはさまれて、下から彼女を見上げるなんて、Mの夢ですよ。Mのシーンじゃないの」

「彼女」という題で書いていますよ」
「ほう」
「日本で劇化したら、私はジュスティンヌでしよう、とかなんとか書いてあった」

E サド的に愛す

五月十六日、東京新聞夕刊、六音六画を読んでいたAが、「加賀まりこって面白いな」と言った。

「ここ読んでみなよ」

「(このオジサマは私を悪女の権化だと思い込んでいます。だから、私もサド的に愛してあげるのです)」と私。

「サド的に愛すって、どんなことするんだろう」

「さあ」

「加賀まりこは、まだ十九らしいな」

「そう書いてありますね。(十九になると、焦りが出ます)だって」

「サドって知っているのかな」

「二週間前の六音六画に(サドと

「面白いじゃないの」

「最後のサインがふるっている。(マリコ・ド・サド)だって」

「テレビで加賀まりこを見るか」

「加賀まりこに愛されたオジサマ族の一人になりたいでしょう」

「オジサマ、サド的に愛してあげましようか」と梨香。

「有難う」とA。

「泣けてくるなあ」

「こんな女の子が、ドンドンふえてくれると、助かるのだが……」

「サド的に愛してくれる」

「さしあたり、梨香あたり、適任者……？」とA。

「まあ、失礼しちゃうワ」

「とか、何んとかおっしゃって」

「万更でもなさそう」と私。

「バカ！」と梨香。



(告白)

「私の鼻を責めて下さい」

湯谷 照夫

八月号誌上で革手袋に猿轡された絹川嬢、

美を破壊されて妖しく悶え狂う四馬孝先生の令嬢（私は彼女をマゾ嗜虐気ある的子と名付けたのですが）は、この手記を書いている今も責め付けられている様に思えて、自分なりに責め型を頭に画いて身体をくねって見ているのです。また新しく私達の道に入門した令嬢が鼻料理の第一歩の洗礼をうけて、アアッと背伸びし乍ら理性を保とうとしているいじらしさに微笑を禁じ得ませんでした。時間も経った今日此頃は、もう良い生徒仲間

育っただろうと、何だか自分で責めてみたい衝動を感じるのです。

前回申上げた様に、旅から久方振りに帰京した私は、八月号貴誌が点火して呉れた感激を胸にして里子（私を責めるサド気の彼女）の家を訪ねました。里子も八月号を既に見ていましたので、二人で共感を盛り上げたら九月号は、こうだあだど話に花を咲かせたものです。

ここで里子の身边を簡単に御紹介すること
が私の報告文を理解して頂くのに都合と思

いますので述べさせて頂きます。

廿三才の里子は、遠縁に当る老夫婦を尋ねて田舎から上京して来ました。老夫婦は昔からの理髪業で嘗ては可成りの、業を続けていましたが、老齢にもなったので昨年店を閉めて自分達は郊外にある昔からの家で暮し、店の方は売らずに旧知の老婆を留守居にして都内に遊びに来た時に泊り場にして悠々暮しています。店を閉める前から上京していた里子は理髪の手伝いをしていました。が廃業後は老婆と共に留守番役を兼ねて、今は都内貿易会社

のB.Gとなっています。廃業以前から里子の剃刀を受けている裡に、お互の性癖が何となく解り合い、今では離れられない仲になって了ったのです。この家には、今でも理髪台と道具一式が残してあるので私達二人には、仕置の場として非常に都合なのです。

扱て話を戻して、貴誌の話題で里子の加虐欲と私の被虐感もつり、お互いの口数も減っている裡に、ツツと立上った里子は周囲のカーテンを引いてから自分のベルトを引抜いて、サアとばかり私の首を一巻きして押倒すように理髪台（私には検診台に思えて仕方ないのです）縛り付けるのです。老婆も今日は疲労で寝ているので私達二人切りの故で、いつもより行動も大胆となり早くも上気して息はずむ雰囲気包まれて来ます。

検診台を水平に固定し、顎が上って鼻孔が天上を向く姿勢に置かれた私は、妖しくも侮蔑をただよわせた眼差しに見下されて恥辱感をゆすり起され、眼前に誇らしげに突き付けられた彼女の美しい鼻孔の息づかいに羨望感を掻き立てられ、抵抗する術もなく、里子の誘惑の好技に導かれて被虐の世界に沈んで行きます。

悠っくり始まった鼻先押上げの繰返しは漸

く激しさを加えて来た頃、鼻孔内壁にヌルツとした液体の暖みを感じ、孔奥を刺戟して呼吸困難を起すや、素早く私の首をくの字なりに引起して液体が咽喉へ流入するのを防ぐ姿勢にして呉れます。呼吸が整うとまたその繰返しで責められている裡に鼻孔奥の筋肉が巧みに働く様になって、元の上向けの格好で鼻先へ突上げのまま絶え間なく液体が鼻孔内に注がれます。

私は鼻奥と舌根筋肉を働かせて先ず液体を口中に導き次に吞込むことを繰返して早鐘の様に呼吸を続けるのです。無心に眼を開けて見上げると、里子は口中で唾液を練っては、ネバネバした粘液を紅唇の間から、私の鼻孔に向って注ぎ込んでいます。呼吸が伴わなくなりそうになると鼻柱を寄せて顔を傾けるので、口から小鼻から唾液がダラダラ溢れ出て頬をぬらします。その唾液を髭面に擦り込む里子の柔い掌の感触は、私に歓喜のスイッチを入れます。

幾十回も繰返されてヘトヘトになった頃、里子の剃刀が眼前に冷かに光ります。首元から顎にかけて一気に逆剃りを受ける時の快感に酔う間もなく、揉み上げにいきなり逆剃りを受けるのですが、ジャリツと突掛った刃が

二度三度と強引に喰込んでくると魂が抜けそうです。絶えず練り上げていた口中の唾をたらしかけては擦り込んで剃刀責めに力が入って来るのが感ぜられて来ます。痛みに身を反らせると、アクセルでも踏むように鼻先を強く蹴上げられ容赦なく鋭い刃が顔面を押つぶして行くようです。鼻頭を右に左に倒す様にして、小鼻から鼻嶺に向けて鋭刃を当てられる被虐感から覚めると、今度は耳毛用の小剃刀を持出して来て、鼻先突上げのまま鼻毛剃りが続き休む間も与えて呉れません。

字典によると「鼻毛を読む」とは、「女が自分にいかれた男を自由に弄ぶ」とありますが、里子は十分私の鼻毛を読み終ったので剃り落しているのでしょうか。紅潮させた顔色と息はずませている可愛い鼻孔を思えば、里子は未だ私を責め足りない様に思えます。熱い蒸したオルで鼻孔を押えられた時は、熱気が毛を剃られた粘膜に直接当たって宛ら練獄から練獄へ引づり廻されて行く様です。

休まない責めに里子も疲れ気味なのか、一寸手をゆるめて、美しい顔から一瞬残忍さが薄らいだと思ったら、縛り付けられている私の視界から姿を消しました。一休みしているのでしょうか。

再び現れた里子は、薄手の防水手袋をした両手に、ヘヤドライヤーとヘヤスプレーヤー及び薄い透明ビニールの布を持って、ニッコリ見下しています。身体をかかめて何かモジモジしていましたが、立上って急に私の顔に薄い透明ビニールをかけ素早く黒布をかぶせます。黒布の間からビニールをかぶって顔を出した形になりましたが、今脱いだ里子のシヨートパンツの片脚から顔を出しているのに気付きました。片脚孔は顔に合う大きさにつまんでクリップで頭髮に止め、首部は呼吸が停まらぬ様に緩く締められて了います。ビニールの上から指で鼻孔を反らされると、薄いビニールが吸気につれて鼻孔に吸い付き、今にも呼吸が止まりそうになるのを、里子は薄笑いで楽しんでいるようです。鑢て、鑢で鼻頭の辺りのビニールを切取って呉れた時は、空気が刺られた鼻孔内に勢よく入って来て、生きかえった気持ちになります。

待つ間もなく、今度は鼻先に突きつけられたドライヤーにスイッチを入れられ、だんだん熱気を帯びた空気の流入に鼻孔内は乾き切り、毛のない粘膜に熱みを感じ出し、とうとう耐えられなくなって来ます。その頃先程持ってきたスプレーヤー（霧吹き）を見せびら

かせてくれるのですが、瓶の中には黄金色の液体が入っています。一休みした時に里子自らの尿を入れて来たことを私の耳元に告げたとしたら、乾き切った私の無毛の鼻孔に向って鋭く放射するのです。何回も放射してはドライヤーで熱するので、異臭が鼻孔内で嵩じて、私の呼吸も激しく乱れて来ます。神水放射と熱気乾燥を繰返されている裡に私の鼻孔から肺尖に至る間の呼吸系統の内壁には里子の黄金液が浸み込み、その空隙は悪臭の蒸気で充たされ尽し、クীツと引上げられた鼻先責めに痛ぶられ乍ら、冷たい空気を一息でも求めている哀れな鼻孔の震いに、私の被虐感には里子の妖火に焼き尽されそうに燃えて来ます。

余りにも強烈な鼻責めに身悶えて、検診台上で下半身をくねらせて、被虐感に酔いしれていると、里子は荒々しく自分の片脚を上げて私の太腿を押えて来ます。それにつれて、私の顔に近づいた里子の素晴らしい鼻孔からは熱い吐息が、突き上げられ放しの私の鼻孔に降りかかって、得も言われぬ情態の淵にさまよう気持ちです。軽く首を締めていた片方の手を外して里子は何をし初めたのでしょうか。彼女の片脚に力が入っているのが押えら

れている私の太腿に感じて来ます。薄手の防水手袋を脱ぎとって里子の手が私の眼前に差出された時、その小指が汚くよごれているのに気がつきました。美貌に残忍気が走ったと思った時、その小指が突上げられた私の鼻孔に挿入されるではありませんか。

文字通鼻つく異臭に、燃え切りかけた私の被虐感が再び炎を上げて来るのです。毛を失った孔内粘膜に臭いクリームを塗られて乾き痛んだ鼻柱中隔は甦りを取戻したものの、左孔右孔と再三襲われている間に、その悪臭が肺の奥まで充満して、我身にして我身に非ず、全く里子の弄辱人形と化して行くのです。その上神水の霧滴を加えられて、汚水が舌の根の方から次第に舌頭に伝わって来る頃、里子も私も夫々の感情に燃える様な歓喜狂乱に時のたつのを忘れて、二人だけの世界を楽しみ合うのでした。

心ゆくばかりの被虐の遊びを越えて、心も浮き浮きして、身中満ち足りた様な安らかな喜びに気も落付いて参ります。次の機会の倍加した楽しさを約束して里子に別れをつけた時は、もう東の空が白んでいる頃でした。





八月二十一日付の各紙を読むとシンガポールで、戦時中日本軍が多数の中国人を殺害した事件について、対日賠償を要求する運動が起っているということを報じている。

〔シンガポール二十五日ロイター「共同」〕によれば、戦時中の中国人虐殺にたいする対日賠償要求貫徹大会（シンガポール中華総商會主催）は、二十五日午後七時（日本時間午後九時）からシンガポール市政庁前の広場に、約二十万人の市民を集めて開かれた。集會参加者はまず第二次大戦中シンガポールで死んだ人たちのメー福を祈る三分間の黙トウをしたのち、主催者団体を代表して、中華總會の高徳根會長が激しい調子で、戦時中の日本軍の行動を非難し、約六十億円の賠償支払を要求した。と

述べている。

先頃、八月十五日の終戦記念日を迎えて広島、長崎に投下された原爆による被災者の惨状を十八年後の今日、今更のように思い知らされた吾々であったが、このシンガポールに於ける対日賠償要求で日本軍の惨虐というよりも、更にもっと根深い「戦争の残酷性」について考えさせられた。

戦争の惨禍によって、交戦国の国民がお互いに非常な被害を蒙ったということは当然予測されるとしても不幸、両国の戦場となった第三国の人達が、国土を荒され、生命の危険にさらされたというこ

とは、全く不慮の災難という外はない。

「シンガポールの状況緊迫」という報道を読むにつけ、悪夢のような二十何年前の戦時中の出来事が眼前に甦ってきたような不気味な気持ちに襲われた。

戦争というものは、由来惨虐とか残酷とかからは切り離すことは出来ない性質のものではあるが、「平家物語」「源平盛衰記」「太平記」などに代表される戦記物語の中に描かれた戦争からは、人の世のはかなさとか、物のあわれさとかいうものは、味われても、表面に酷ごたらしさというものは打ち出していない。それは流麗な文章によって、芸術的な高さにまで昇華されているからであらうが、戦さに敗れた一族が、妻子妾婢の末に至るまで、三条の河原で打首になるというような件りは、戦争のむごたらしさを、まざまざと見せつけられる気持ちになる。殊に、男子ともなれば、赤子でも助けておかない無惨さは、目を掩うばかり

であるが、戦記物語をそこまで考えて読む人は少いであろう。

二、三日間、あるデパートの広告に、こんなキャッチフレーズがあった。「安値の残酷ムード」というのである。残酷ムードもデパートの広告にまで利用されるようになったら、もう下火であろうと思われる。しかし、映画、テレビの内容を見てみると相変わらず、争闘ものが多い。アメリカの西部劇に代表されるピストルの乱射乱撃と、日本のチャンバラ物の日本刀による立ちまわりは、東西の双壁といつてよいだろう。もっとも、チャンバラの斬り合いは、当事者に言わせると、一種の舞踊なんだそうでこれを殺人の残酷として一概にかたづけざるわけにはいかないかもしれない。

アメリカテレビ映画「ギャラントメン」の好評に刺激されて、日本でも、戦時中の落下傘部隊に取材した戦争テレビ映画を放送しているが、戦争は残酷の最たるものといつても、やはり、こういったものに対する憧れというかヒロイズムは、人間が生命のある限り、抜けきれものではないのだろう。

戦争と残酷ムード 森清

「ミセス生首」の感激

前川 成 雄

十月号のグラビヤに掲載された「ミセス生首」の写真こそ我々生首マニヤにとっての千天の慈雨。

私などは書店から飛んで帰ると早速掲載場面のグラビヤを前に五六杯グラスを空にした程でした。

KK誌の果敢並びに新宮氏御夫妻の御努力には深甚の敬意を禁じ得ませんでした。五葉の中、左側面からのアップが特によく、女の生首だけが持つ妖しい倒錯美をよく強調しています。また正面に向った首も優れた出来栄なのですが、カーテンによる特撮ぶりが目立ち惜しむらくはの感を抱かせ残念でした。

思うに生首写真大成功の因は、モデルに依ること甚大かと存じます。スター役の傾国の美女では生々しさが不足し、さりとお色気欠乏の醜女ではなおさらのことムードぶちこわしで、新宮氏の奥さ

んが丁度現実性を訴える理想的美貌に恵まれていたことを、我々と共に嬉びたいと思う次第です。

今後の希望と致しましては、死相に変化を与えて戴きたいと思うのですが。極楽往生的な表情ばかりではなしに、断末魔の心境がさまたまな如く、斬られた時の形相も又さまさまなものですから、その点をリアルに表現して戴けたら幸甚なのですが……苦しげに眼を斜き、舌を噛み、或は歯を喰いしぱり、未練げに半眼にしたものなどは非とも発表して欲しいと思います。更に蜀を求むれば、水野氏にも我々マニヤの前に奥さんの生首を提供していただく事を切望して止まぬものです。

女斗彦様に小作品を望めぬとは失望の至りです。せめて今後とも誌上にて豊富なアイデア、イメージをジャンジャン発表して頂きた



いものです。

私も多少絵心が有是（といっても同じアマチュアでも芹沢嬢の足元にも及ばぬものです）数十枚の生首画をひそかに描き続けて参りました。

女斗彦氏の御意に叶うとは到底考えられませんが、芳年の無惨絵を下敬にしたものを三枚ほど思ひきって投稿してみることに致しました。「没」のうき目に会わなければ幸いだと念じている次第なのですが……。

相手の女の生首の髑をひつつかみ、首の中から滴る血汐を飲んで、いる女武者の図などにひそかな自信を抱いている次第で、もし採用されれば私にとっても、苦勞のしがいがあり嬉ばしく思われるのです。

編集子には更に、我党の熱意に御厚意を寄せられ、分譲写真の実現化など近き将来において果して頂けることを期待して止まぬ次第です。

（新潟市菅根町 前川成雄）

〔体験〕

アブノーマルな絵

森 浩 三



これは僕が実際に見たり聞いた
りした事を、下手ながらも、なる
べく私的感情をいれずに、ありの
ままを記した積りであるが、才能
のない悲しさ、そう注文通りにい
く筈はない。しかし、これは僕の

体験であり、実話である。

第一話

僕の住んでいる所は、大変うる
さい所である。家が往來に面して
いる事もその一つである。ひっき
りなしの車の騒音、初めて家へ泊

った客は、先ずこの事に驚く。
それから近所の噂さも、そうで
ある。さすがに、この頃は井戸端
会議の様に、集まる場所はなくな
ったが、それでも時には、道に五
六人の主婦が固まっているのを見掛
ける。

僕は或る用事で渋谷へ行く事にな
った。渋谷へ行くにはバスが便
利である。平日の午後四時頃であ
るから、中は二、三人の乗客しか
いなかった。

僕と同時に乗った三人の主婦は
バスを待っている時でも、何やら
ひそひそと話しをしていたが、中
へ入っても、ひそひそ話は一向に
やまなかった。

「……で……の御主人が……をし
たのだろうと……」という具
合で、はつきりとは聞えなかった
が、誰かの噂であった。

「……が変態的なよ、それで……
……」と僕の耳に入った。僕は聞耳
を立てた。変態者が近くにいろ
うことは大いに興味があつた。

しかし、聞こうとすると、やけに
エンジンの音が気に掛り、遂に渋
谷につくまで、誰がアブノーマル
なのか知る事が出来なかったが、
二人の主婦は最近、近所はひっこ
して来たんで、又ある機会に知る

事が出来よう。

第二話

僕はつい最近知り合った十八に
なる女性と喫茶店にいた。僕はコ
ーヒー、彼女はソーダ水と、この
店で一番安いものを飲んでいた。

暫く向い合つたまま、見つめあ
つたり微笑したりしていた。背後
のアベックの話が手にとる様にわ
かるので、何気なく聞いた。

「この頃、あなた、少し変よ」

「何故だい、僕は少しも変になん
か、なっていないよ」

「まあ、いやねエ。私から見れば
物凄く変ったわよ」

「そりや、変るさ。君だって変っ
た。僕から見れば。時間がたてば
誰だってわかるさ」

「じやないのよ、あなたのは不自
然なのよ」

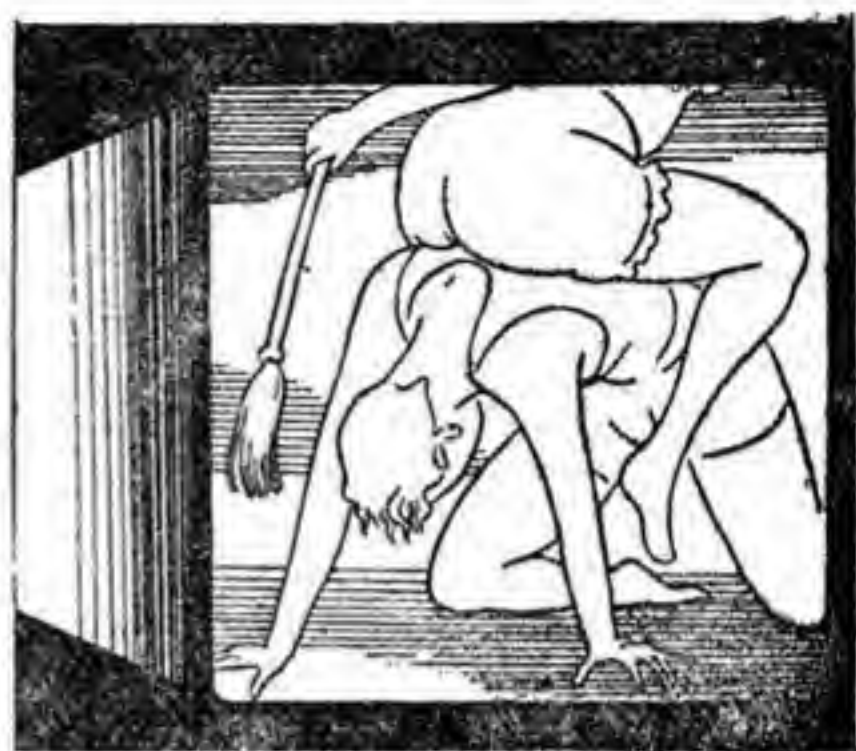
「どういう所？」

「って、それ云わせるの、じゃ云
ってやるわ……」で、小声に
なった。僕は彼女に話しかけよう
と、前かがみになったとき

「そりや、君がカンチョウを……」

と男の声がしたかと思つたら、
「大きいわよ、声が……」と女
のあわてた強い調子の声がした。

僕は一瞬ビクツとした。果して
彼女の耳に入ったかどうか。



誌上通信

佐川奈津子様への公開状

佐野光子

△本公開状に対しての誌上での御返事を心よりお待ちしております。
○(編集部より)

女だてらに、こんな公開状などという大それた事を申し上げて、御免あそばせね。

私、先日、奇クの旧号の読者通信を読んでおりまして、たまたま貴女の奴隷を募集する投書を拝見しましたの、読んでいるうちに、同じサジストとして、本当に腹立たしくなって参りましたよ。

大体、私達女主人として、マゾ男に君臨するドミナ達は、自分の楽しみを実現するのと同じ様に、相手の楽しみも考えてやらなければいけないと思いますの。本質的に金円の代償にプレイをする職業的ドミナと異なる点は、何時も相手の身になって、お互いに楽しむところにあると思いますの。ですから

ら、相手の奴隷男を一人の人間として、愛することが出来てこそ、始めてお互いの本当の楽しみが得られるのではございません。

大ぜいのマゾ男たちを、その満たされない性のもだえを良い事にして、僅かの金銭で、自分の生活の不便な点を、まるで、本当の下男をやとった様な気持ちでこき使ってゆこうなんて、本当にいけないと思いますわ。

本当のマゾ男って云うのは、私の奴隷の平伏人の様に、紳士であって、別の面の生活を私という女主人によって、思う存分満しているの、決して朝から晩まで、二十四時間中奴隷で居るわけではございませんのよ。

恐らく、貴女の申し出に応じたマゾ男たちも、空想のはけ口として、手紙を出したので若し貴女のおっしゃる様に、自分の社会生活も捨てて、ひたすら、貴女の奴隷になって僅かの給料で一生満足する様な男は、きっと居りませんことよ。若し居たとしたら、恐らく今までの生活が、貴女の奴隷であるよりも、もっともっと下等な生活をしていた者に遅いのではないかと思いますの。

私達、お金で遊ぶのなんて、絶対いけないことだと思ふの。失礼ですけれど、貴女のやり方は、一寸マゾの知識のある職業女が、相手にめぐまれずに悩んでいるマゾ男から、多額の金円を取って、幼

窃視と窃聴

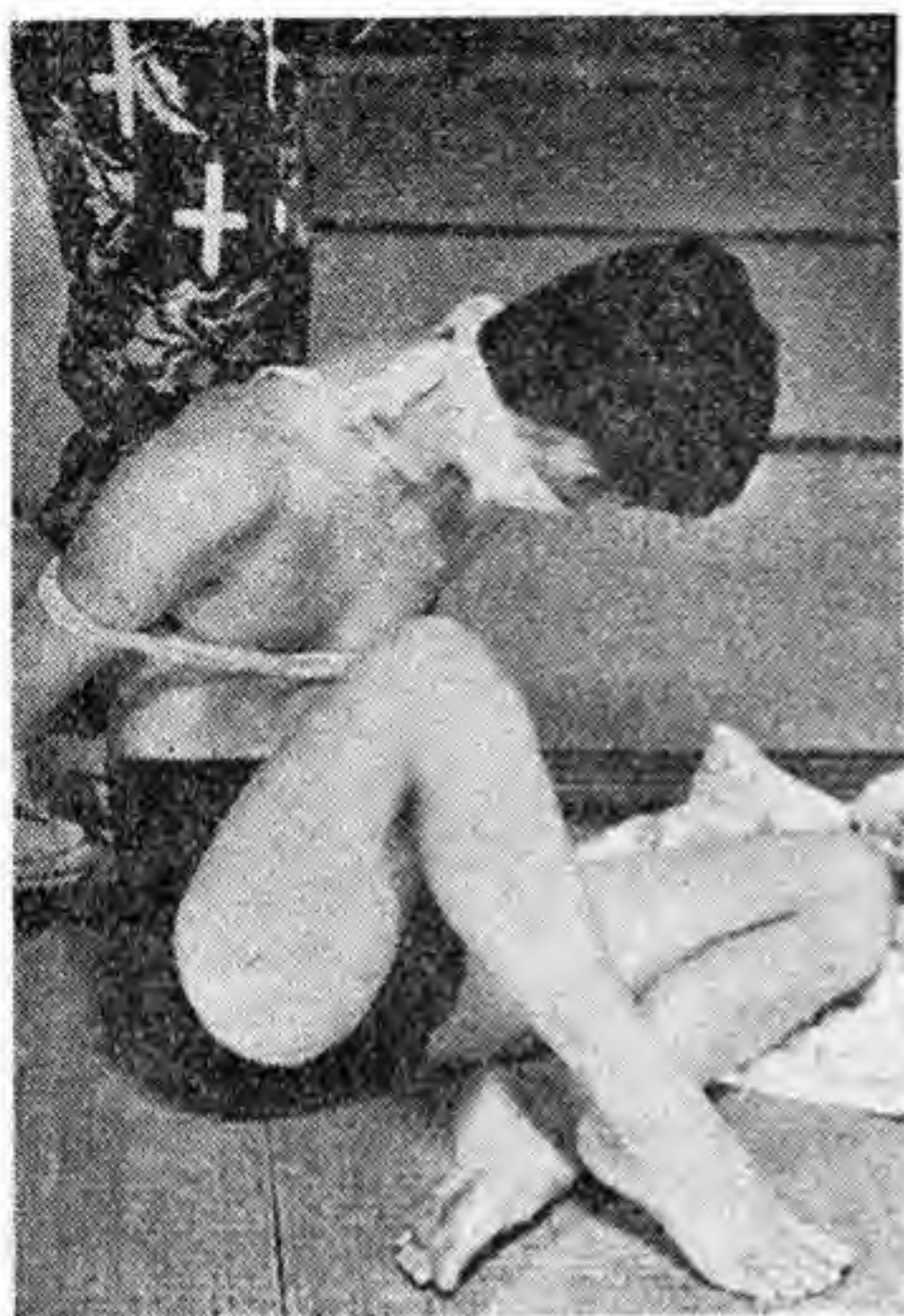
亀田孫一

○温泉マークの電気スタンドの中へカクシマイクをひそかに忍ばせて採取した睦言なるものを酒席で聞いたことがあったが、退屈なばかりで余り感心したものではなかった。

○ある新聞社の写真部員が夏の公園の繁みや海岸の砂浜などでアベックの密会場面をフラッシュで強行盗み撮りした写真を見せてもらったことがあったが、その中の一枚に、腹這いになって窃視している出歯亀男が、はっきり写っているのがあった。

○右のいずれもが、お芝居でない、ほんものの窃視と窃聴であるにも拘らず、その割に刺戟はなかったように思う。それにひきかえ、ある大部屋ニューフェイスの声の出演というお色気テープを聞いたが、つまらぬ8ミリ映画など、そののけの迫力があって、一同生つばをのみこんで拝聴したものだった。

○私の高校(旧制)受験準備時代に一つの失敗談がある。翌春



美女の前で M生

雅なプレイをしてやるのに、似ていると思いますの。

確かに貴女は、金円を相手に僅かですけどあたえるのですから、表面上は違いかもしれませんが、相手のマゾ性を利用して、自分のサド性を満たすよりむしろ、生活を便利にする事に重点が置かれてる様に感じられて、私感心致しませんのよ。

プレイと現実の生活とを、はっきり区別がつけられない様では、私達サド、マゾを論ずる資格がないと思います。

貴女も、是非、大勢の男をおもちゃにしたり、本当の下男をやとる様な気で、マゾ男を募集したりする様な事は、お考えにならないで下さいませね。

良く聞く話ですが、読者欄などで、やっと知り合った女主人が、実は悪質な職業女で、大変ひどい仕打ちを受けたなどという事を聞きますが、どうか、幼稚なるM知識をふりまわして、世の中のマゾ男をなぶりものにしないで下さいませ。私達サド女性としても、そういう方達に対しては、心から憤

りを感じますの。

マゾ男といえども、自分の事のみ考えて、相手の事は、ほんの気まぐれでしか、かまってる呉れない様な女主人には、決して満足しない事をお忘れなくね。

じまんするわけじやございませんせんけれど、私達のSMを通しての関係位理想的なものはないと存じますの。

佐川様も若し本当にサジストでしたら、十分にお考えになって下さいね。だって少くとも私の方が先輩ですものね。けど、若し貴女が、どなたか、マゾ男の仮の名で自分の空想を投書なさったのでしたら、別ですよ。

やっぱり、サド女性が少い事が一番いけない事ですのね。私も皆様、マゾの方達の為にお力をおかししようかしら。でも今はまだ駄目、伏人と良く話してみませんか。

では、佐川様、勝手な事ばかり申し上げて御免遊ばせね。若し、お気にさわったら、おわび致しますわ。

では健全なサド女性として、貴女が再び私達の前に現れる事を、お祈り致します。

は高校受験という大切な時期である中学五年の夏。私は窺視の楽しみを覚えてしまった。

○私の家は二階建の畳敷は六十以上もある大きな商家であったが、隣りが近くに色街をひかえた附近で一番大きい風呂屋であった。私の四帖半の勉強室がこの浴場の脱衣場と隣り合っていた。

○夏の夕方、勉強に疲れた私は何気なく窓をのぞいて驚いた。今迄閉めてあった浴場の天窗が開いていて、そこから女湯の脱衣室の大鏡が真正面に見えるではないか。

○大鏡の中に写る大胆な全裸の女体、近くの色街からくる芸者連のなまめかしい裸身、私は一層刻明に大寫して眺めるためにツアイスの双眼鏡を購入した。

○理性で押さえようとしても、この強烈な魅力の前には、私はどうしても克つことは出来なかった。お蔭で私の高校受験は見事に失敗に終わった。しかし、私は今でも、この青春の思い出を懐しく思いこそすれ、悔んではない。次に窺聴についても、面白い経験があるのだが、それは次の機会にお話しよう。

△手記▽

「切腹心理学」

室津三郎



世界に類のない自殺方式である切腹。これについては本誌で再三にわたり論じられて来たようだ。だから、ここではその描写や記録とは関係のない自殺としての切腹の意義について私なりの意見を披露し、あわせて読者各位の御批判を仰ぎたいと思う。

——ぐっと左下腹へつき立て右へじりじりと引きまわす、そこで刃を抜いてみぞ落へ立て、へそ脇を通って下腹へ充分切り下げ返す刃でノドをかき切るかまたは心臓を刺す。このとどめがない場合は介

らないはずである。単に死ぬだけなら一瞬のうちに苦しみが去る方法を選べばよい。それにもかかわらずこのように腹を切るというのは結局切腹という過程において生起する一步一步死へ向う恐怖、苦痛というものと対決しこれを取り越えることが出来たという勇気の表現の所産に他なるまい。この死へ徐々に向うことの出来る恐怖、苦痛の表現は身体の他の個所ではまず経験すること不可能に近い。けれども腹部はその位置上切り易い個所であり、また身体の構造的にも刃を加えるに障害にならない個所でもあるから、その対象となる役目を充分に果たすことが出来るものと思う。さらに述べたいのは人間本来の「性」というもののへ本能が最期において意識されることも加えられねばならない。腹部でも特に下腹部は男女を問わず「性」意識へ直結する大切な部分でもある。そこを心ゆくまで切りさ

や無念な場合に、そのはけ口を己れ自身におつけるというマゾ心理の作用があるわけだ。

ついでだが、本誌では触れられた過去はないと思う「陰腹」についてざっと考察してみることにする。この方法は人目につかず切腹して時を移さずさらして腹部を巻き締め、衣服をととのえる。この場合の目的は、痛手をかくして相手へ自分のまごころを告げたり諫言したりして次第に息を切らすのであるが、切々たる己が心情を露吐し、やがては死へ到るという現象において相手を奔然と悟らしめるという切腹者の心理が存在するゆえんと思う。

さてこれらの切腹も発生以来、時代の流れとともに型が移り変わって、やがては形式のみにとらわれた所謂扇腹等の刃物を腹に加えないで触れたとたんに介錯するといふ本来のものから脱却したものに変わっていったらしいが、本来の切腹は前述の諸因が混然と合して行動に移されたものである。

本誌においては、本来の姿であるところの介錯なしの方式、または充分切り終えた後の単にとどめとしての介錯の切腹を採りあげていられるのは我々同好の士にとつて心強いかぎりであると思う。

緊縛女体讃

青 弘之

女体に縄を掛けると何故このように美しくなるのだろうか。猿ぐつわをみると、何故、みんな美人になるのだろうか。

縛られた女の写真や絵を見ると、一瞬ボクの心臓は氷を当てられたようにショッキンダ。

もし本当に縛られた女を目の前に見たら、ボクはきつと気絶してしまっただろう。

緊縛女体はボクの永遠の恋人である。この楽しみがあるが故にボクは生き甲斐を感じ、バラ色の人生を謳歌するのだ。

縛られた女は、又なんと魅力的なんだろう。この世の中で一番美しいものは、縄にくびれてあえぐ女体なのだ。



(ゴムマニヤ通信)

ゴムの魅力

桂木健三

奇クファンの皆様、ゴムマニヤの皆様お元気ですか。小生は九月号で初めて通信欄に仲間入りさせて頂いた大阪西淀川の桂木健三です。九月号では、多くの人達がゴムカバー、バンド等について寄稿されたので嬉しかった。

こんなにもゴムマニヤが多いとは、本当にオドロクと共に大いに意を強くした次第です。九月号に寄稿した頃は、バンドは一つしか持っておらず、それも一年前に買ったので古くなってしまい、何とかもう一、二枚手に入れようと思いついて、考えた末、一計を案じましたので、男性で買いくらいの人のために一つのヒントとなれば幸いです。と、いえば大ゲサですが、男が女性専用のメンスバンド等買うには全く勇気がいります。

それで買う場合は、なるべく年配の婦人の店番をしている薬局に行き家内にたのまれたと言うことです。それから平静を装うこと。

小生の場合は「家内が生理痛で寝ている」と言っておいて鎮痛剤を買ったので(？)バンドを二枚買ったのですが、店の人はかえって同情してくれて親切に色々の種類を出して来て、この頃はこのような型がよく出るとか説明してくれました。店に男性の店員の場合でもバンドを売る場合は、女店員にかわりますので念のため。

又、最近の前開きのホック止のバンドは余りないとのこと、奇ククの広告に出ているパリスバンド等は小生の方の薬局では見当りません。どの方面で売ってるでしょうか、又値段はいくら位ですか知っています方がおられたら教えて下さい。それから小生はオシメカバーを手に入れたのですが、何かよいチエはありませんか。神戸さうへ行きましたが、丁度女店員が四、五人いて、とても買う勇気が出ませんでした。貴誌の発展を祈りペンをおきます。

責めの文献

〈姦通と処刑〉

芦田邦夫

第一話 緊縛に就いて

緊縛とは罪人にかける取り縄のことだ。と言っても、現在の話ではなく昔の事だ。今は御承知のとおり、警察官が腰にぶら下げている、即ち手錠だ。悪い事をした人物の手首にかける。だが、昔はこんな便利な物はなく一本の縄だった。しかも取り縄には一定の方式があったのだ。中でも女の罪人の縛りには、自称女縄といって、女はいたわるもの、そして、いじめもの、それが男性中心の封建的な考えで、縄のかけ方にも、うかがえるのだ。

首に一巻、胸に二巻、両腕に二巻、腕は勿論後手に回わされ、手首を固定され、二度縄が女の腹に巻かれる。あまった縄尻は丁度、両手首の固定された縄目に一回ネ

ジ込まれる。簡単にかけた様でも急所は、ちゃんと押えてある。そして一本縄と来ているから、容易にぬけきれなかった。この縄のかけ方の特別の所は、身体と腕が別々に縛られているのが、この縛りの特徴なのだ。

第二話 姦通に就いて

いまも昔も、犯罪現場でもっとも残酷なのは、怨恨の果ての犯行であり、愛する妻が、第三の男に寝返っていたと知った時、亭主は可愛さあまって憎さ百倍、残忍無惨な仕打ちを加える亭主族もおろう。それが姦通に対する昔からの報復手段として、なかば黙認されていた。

歴史的に言えば、実は女性を私有財産と見ていたということがい



える。今でも結婚に結納を取り交すのは、一たん嫁を金で買い取るという習慣（しきたり）のなごりなのだ。買い取った女を妻にした以上、妻は夫の奴隷、または商品だという觀念が昔には強固に残っていた。牛や馬と同じだといってもよかった。そんなに差のあるものではなかった。だから、妻を寝取る男は夫の私有財産を盗みにきた泥棒とみなされたのだ。

の一条は、姦夫姦婦とも所領の半分を没収され、官についている者は、首を斬られ所領のない者は島流し。庶民の場合だと、名主輩が過料錢拾貫文、百姓は五貫文の罰金となっていた。庶民、百姓は割合に軽かったとみていい。（姦通のモラルより）

第三話 処刑に就いて

室町時代から江戸時代にかけてもっと苛酷になって来た。夫と妻は主人と奴隷の関係、所有者と被所有者の関係とみられるようになったからである。それだけに姦通

に対してはきびしい。

「元禄御法式」には

一、主人ノ女房、師匠ノ妻ト密通

シタ者、男（女）子共ニ死罪。

一、主人ノ女ニ密通申掛ケル者、

マタハ艶色ヲ遺ウス者、死罪、

追放、赦免。

一、密通ノ使者、死罪。

となつて、姦通の手引きをした

者も厳罰に処せられるのである。

各藩の私罰。加賀藩の例をとれば

「生きつり胴」という形が当てら

れた。姦婦の両手を後ろに堅く縛



りつけ、その繩の端を柱にかけて

身体を宙に吊るす。髪は乱れ、裾

からは白い太腿もあらわな妖艶凄

絶な格好で宙吊されている。姦婦

の胴を真つ二つに斬り落す、さつ

と血を吹き出して、腰から下は地

に落ち、クルリと回転して、重い

頭の方が下に、胴体は上に逆転す

る。そこをすかさず首を切り落す

のが、生き吊胴の処刑であつた。

又両手の指を一本一本断ち落し

てゆく処刑もあつた。両手指が落

されると両足指となる。火あぶり

油でパツと焼き殺すのでなく、苦
しみを長びかせるためにマキを水
につけておいて、二時間あまりい
ぶして、じわじわと苦しませた上
で火刑に処す。

第四話 恥かし責に就いて

文政三年というから幕末の事。

四国土佐はいまでも闘犬がさかん

だが、姦夫姦婦が現行犯で捕まっ

た場合寒中でも素っ裸にして村の

広場に突き出される。丁度闘犬を

する様な広さの囲いがしてあり、

そこへ現場から引つ捕えたてた男

女を引っぱつてくるとむりやり入

れる。陽の照りそそぐ下に部落中

の人が集まって来てとり囲む。闘

犬を見る時とそっくりだ。

二升マスに入つた大豆をリング

の上にばらまく。女は片手にマス

片手に竹バシを握り、一粒一粒拾

いあげる。膝を曲げてはいけない

から、中腰の姿勢である。丸裸、

両手にマスとハシを持っているか

ら隠しどころを蔽うことが出来な

い。しゃがみこむと竹鞭で尻を叩

かれる。生き恥をさらして竹バシ

でマメを拾う。あまりの恥かしさ

に氣を失なう女もあるという。死

ぬ思いだろが、殺されるよりま

だよかろうというわけだ。

少し南の沖縄、奄美大島地方に
なると、同じように衆人の前で処
刑なのだが、土地柄残酷である。
竹矢来で囲いをつくった中に姦婦
を入れ、ヘビかごに入つた毒蛇の
ハブを磔の足もとに這わす。その
結果ハブが噛みついて死刑となる
寸法なのだ。

第五話 狂責めに就いて

大奥のリンチの一つに、お筆下
しというのがあり、これは相手の
女を素裸にして仰向けに寝かせて
四肢をおさえ、多勢の女中達が一
人ひとり眼隠しして水かふくんだ
筆をもち、寝かされた女にあゆみ
より筆をおろす。勿論上手に行く
場合は少ないが、それでも何百回
となく繰返されるとリンチにあた
った女は狂気するさうだ。女が女
に加わる苛虐は、男が女にする
よりも、はるかに残酷なことが多
い。（近世法制史料叢書より）

奇クサロンの原稿募集

○奇クサロン向きの短文、

絵、写真などを募ります。

○掲載の分には掲載誌と薄謝

を贈呈いたします。

○締切は別に定めませんから

どしどしお寄せ下さい。



【映画通信】

「甘い暴力」の

股間縛りと忍者もの

東山 映史

「甘い生活」とか「甘い暴力」とか、甘

いがつくとサジスチック、マゾヒズムの臭いが濃い。

「悪徳の栄え」は、そのものずばりだが……

「甘い暴力」には、「股間縛り」というこれまで映画シーンに出たことのない、変形縛りシーンが十分楽し

め、スキ者の目を楽しませてくれた。

「青春時代にだれしもが経験する理由のないいらだちと、目的のない反抗のいりまじった、みたされない時間の毎日を送る若者たちを描いた」というフランス映画。

ものすごい豪華なヨット、「甘い暴力」の船内での縛りごっこが見ものである。

ヒロインのエルケ（エルケ・ソマー）が後手に縛られ、ごていねいに股間にまで縄を通される。まさにモデルの縛り写真ではよくお目にかかる股間縛りである。ただしびっちらしたストラップスの上からではあるが……。この縄のかかりかたが、たつぷりとクローズ・アップである。

縛った青年が、「さあ、この女いくらで買う」と一同に呼びかける。

そんなことをしている最中に、甲板から火が出る。まさに恐ろしい船火事である。

一同がわれさきにと海の中へ飛び込む。縛られた娘——エルケだけが船内にとり残されてしまう。そこで二人の青年がまた船にもどって、さて、娘を救い出そうとする。

けむりと炎につつまれた船室では、うしろ手、股間縛りのままの娘が悲鳴をあげてころげまわっている。ようやく抱きあげて甲板の上で縄をときはなす。

股間縛りというサジスチックなシーンが、スクリーンに登場したのはおそらくはじめてだろう。まさに、珍重に値するシーンであった。

日本映画では「忍者ものブー



ム」で、厳しい掟がある。大映の雷蔵の「忍びの者」で真城千都世が信長をねらって失敗した女忍者白状せよと拷問を受け、土中に生き埋めにされ、舌をかみきって、血をタラタラ流しながら死んでゆく。セイサンだった。

「続忍びの者」で、どのような拷問を見せるか楽しみである。社会主義派の山本薩夫監督だけに工夫をこらすだろう。

東映の大友柳太朗、里見浩太郎、東千代之介らの忍者もの「十人の忍者」で、新人女優が敵方に捕らえられ、半裸にむかれ、ムチ打ちの拷問を受けるシーンを見せたし、邦画では忍者もののきびしいオキテのサジスチックなシーンをどのようにスクリーンに映すかは監督の腕といえよう。逆さ吊り、股間縛りなど面白いネタだろう。責められる女優は気の毒だが……。

私のイメージ

・女体血斗阿修羅

北村英一こと

蒲生女斗彦

思いつくままに書きためたものです。何らかの参考になれば幸いです。私は毎日このようなふんどし女の血斗図絵にあこがれているのです。

松林の中の六畳一間の一軒家。
一人の女（リズ・テラー）はばら色の燃えるような細目のふんどしを豊満な薄桃色の肌の内股にきりりとくいこませている。その髪も惱ましいまでに乱れ、手には抜身の匕首。

相手の女（山本富士子）は、紫のやや太目のふんどしを形のよい腰にびったりと締めつけ、島田に結っていた髪もすでにほつれて惱ましいまでの姿。絶世の美女二人が共に丸裸にふんどし一つという姿で斬り合う様は、この世のものと思えぬ凄艶な状況である。
二人共匕首でわたりあうこと数

刻。すでに双方共、かなりの深傷を負い、部屋中は所かまわず血汐がとび散っている。

リズはお富士の匕首で乳房を抉ぐられんとしたが、急所を外れ、まだ致命傷となっていないが、乳脇の傷口からだらだらと流れ出る血汐は、前一面を唐紅に染め、ばら色のふんどしも、いやが上にも紅い。

一方、お富士も大腿の内股をしっかりと刺され、足どりもおぼつかなく、傷口からの血汐でこれ又内股を真紅に染めている。

血に染ったふんどし一本の二人の裸女は、えもいえぬ色気を部屋一杯にみなぎらせて取組み合っている。互いに息もたえだえになつたとみるところで、リズがしばらく出すように

「えいッ、にくらしい、いい加減

で念仏でも唱えて往生しろッ」

と、匕首を逆手に構えて、お富士に止めを刺さんとする。

お富士も負けずに「なによッ、女だてらに赤ふんどしをしても、いい恰好おしでないよッ、このあまめッ」

とやりかえした。

二人共絶世の美女であるだけに、憤怒の形相もすぎまじく妖艶であった。

えいッとばかり、リズの匕首がお富士の乳房の下辺りをぐさり深く抉るや、心の臓を刺し破ったか、どっと血汐が憤き出した。

「ぐえッ、く、くや、しいッ」

最後の悲鳴がお富士の口から洩れたが、必死のお富士の匕首は、これ又、リズのふくよかな腹部を抉っていた。

「ぎゃあーッ、たすけて、く、くるしいーッ」

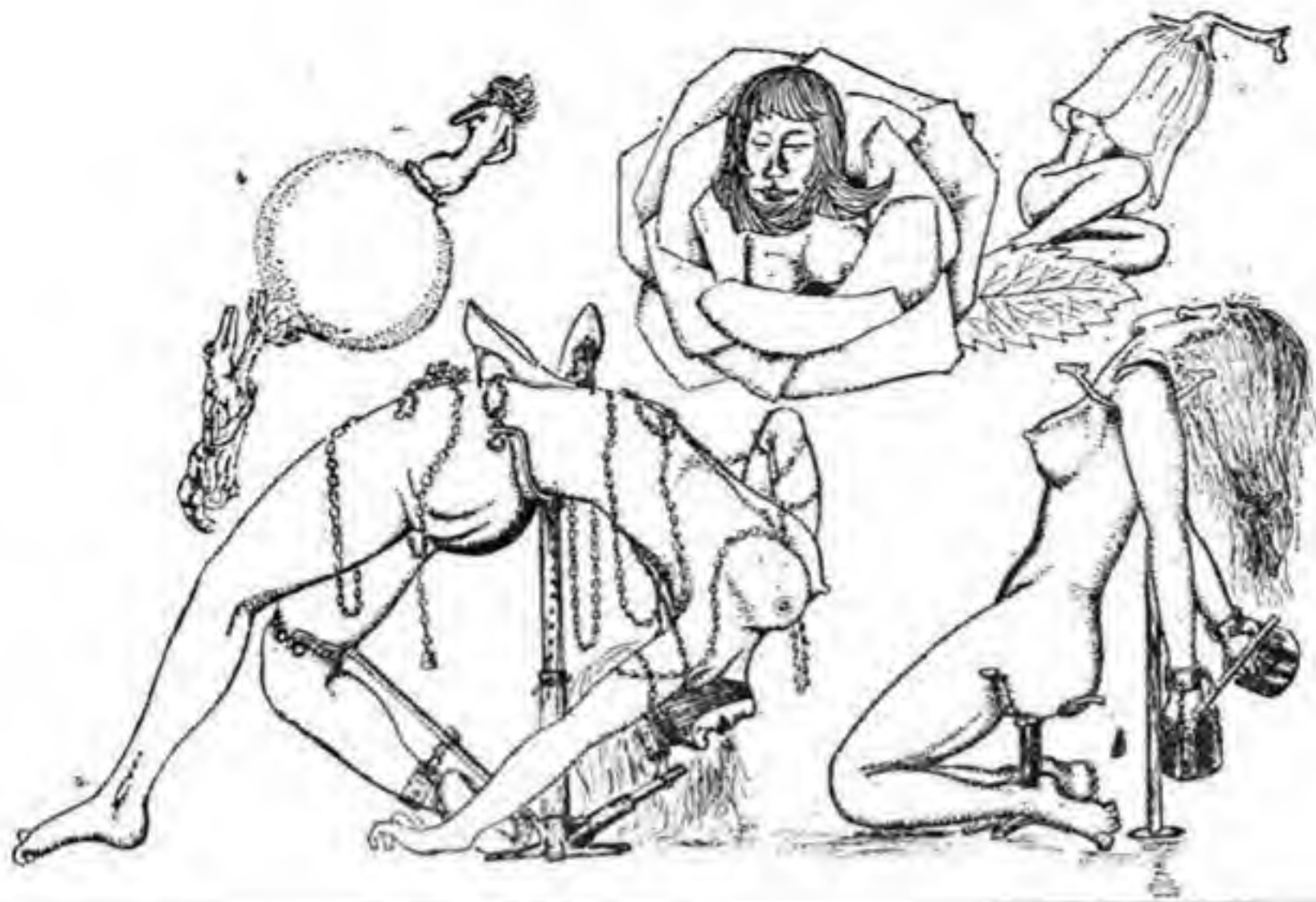


これもお富士に劣らぬ凄まじい悲鳴を残して双方共、お富士を下に、その上にリズが俯伏せに斃れ伏し、いずれもふんどしがしめ込まれた形のよい尻をしばし前後左右にけいれんさせていたが、やがてこと切れて動かなくなった。

ある切腹マニヤの幻想図

桐原 柴門

何ら説明を加えなくても、ただ眺めているだけで、妖しいムードが漂う画である。



美しい永遠の女死刑囚

梨花悠紀子様へ

東北一寒村の死刑マニヤ

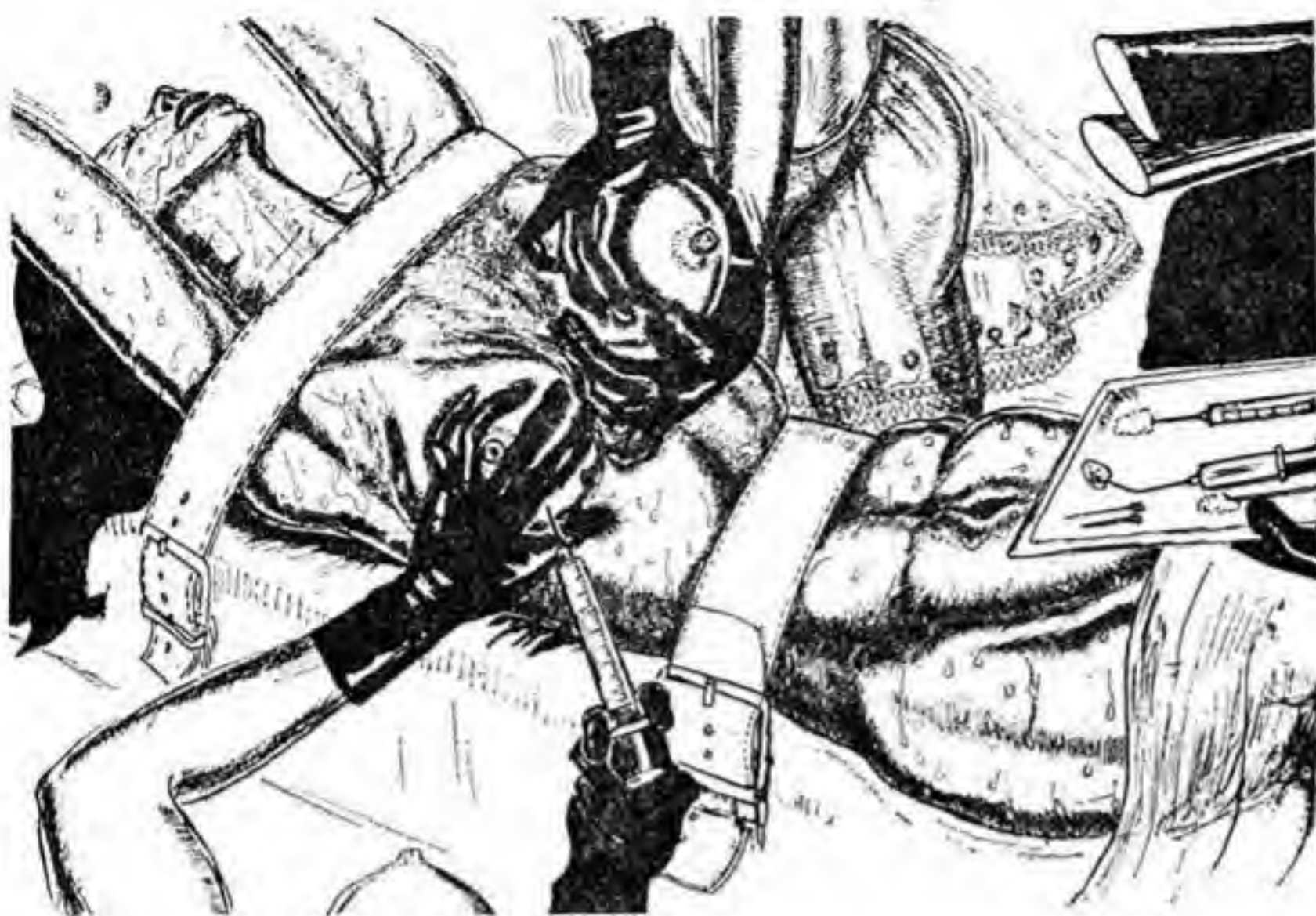
黒田 寿

- 私は最近よりの奇クの読者で十月号読者通信に始めて名のりをあげた死刑マニヤです。毎日美女の処刑を空想しておりますが、貴女もすでに数百回、死刑を執行されております。主に打首ですが、ひとつ列記してみますから、このようなファンもいることを今後御参考にしていただければ幸いです。
- 1、首の座に坐らせ、背後からの一撃、首はのどの皮一枚をのこし前におちる。
 - 2、穴の上に首をさしのべさせ、一刀のもとにうちおとす。
 - 3、ギロチンにかけ、かんたんに斬りおとす。（ここまでは平凡ですが……）
 - 4、ギロチンが斬れすぎて首が斧の腹にピッタリと吸いついてしまう。
 - 5、切れなさすぎて首がおちず、私はやむをえず、貴女の首をつかんで、ぐるぐるまわしてネジ切ってしまう。
 - 6、草を刈る押切りにはさんで上から全身の力をこめて押し、ゴリゴリと斬りおとす。
 - 7、逃げるところを斧でもって追いかける。貴女が力つきてたおれたところ只一撃で首を刎ねる。
 - 8、短刀を首にあて、ぐいとひとかき、人形の首がのりのつぎめからはがれるようにポロリとおちてしまう。
 - 9、同じく短刀で喉の筋肉を少しづつ裂いてゆき、頸骨をあらわしその継ぎ目に刃を入れて、ぐっとこじると貴女の首はゴトリと前にころがる。
 - 10、大刀でバッサリと首を刎ねたが、貴女はそのままスックと立って、首のあったところから血を噴きながら三、四歩あるいて、どっとたおれる。
 - 11、なまくら刀をつかったため、一撃でコロリと落ちるはずの貴女の首はまだ胴にのこり、喉をついても必死でかわされ、胸を刺せば肋骨や胸骨にあたり、とうとう下腹を何度も刺し絶命さす。息絶えてから一刀をふるうと、皮肉にも首はかんたんに前におちる。
 - 12、死刑を宣告され、最後ののぞみをきかれた貴女は逆吊りにしてほしいという、私は勿論この願いをいれてブラリブラリとゆりうごかし、やがて頃合をみて首をはねる。
 - 13、同じく後手に吊りあげ、まず腰から下をバッサリ斬りおとし、首の方が重くなってクルリとまわるところをタイミングよろしく首を叩き斬る。

ある切腹マニヤの幻想図

桐原柴門

女体に対するあくなき嗜虐図として、幻想的な美が隅から隅まで行き渡っている。



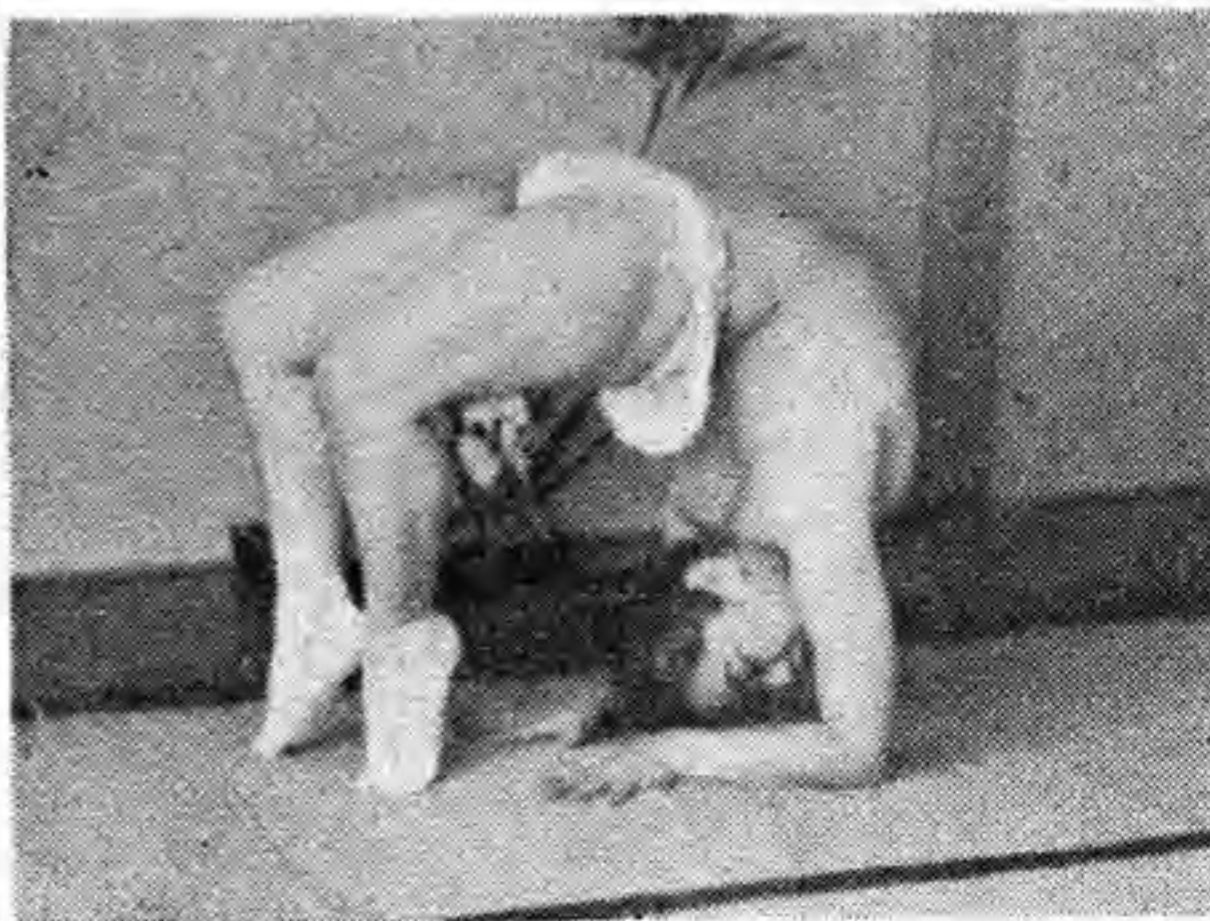
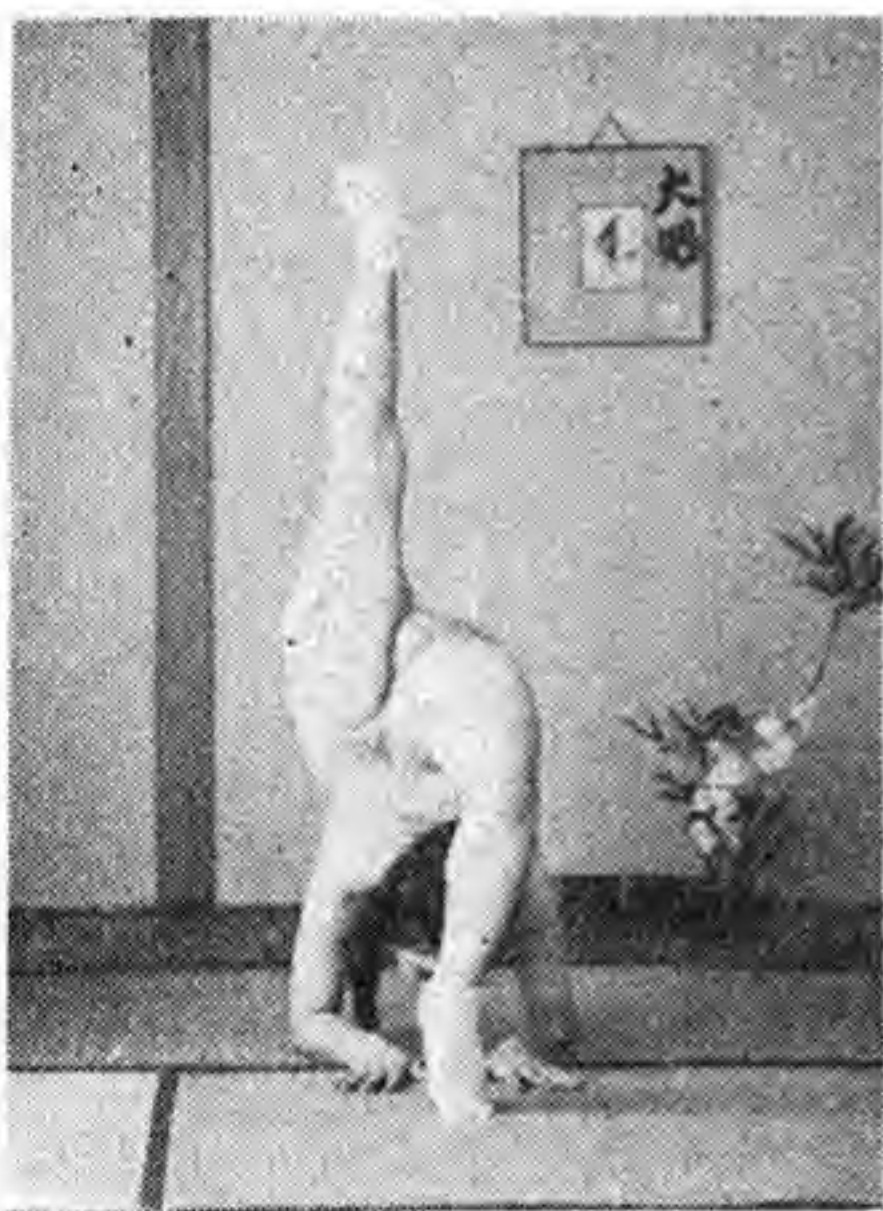
「私の特写フォト」

アクロバット

阿部能丸

私の愛好するアクロバットと白足袋。十月号では、私の撮影した特写フォトの一部を誌上公開しましたが、今月は更に秘蔵の一部を特にマニヤの方々にごらんにいたします。

女体がその可能の極限に至るまで屈曲するアクロバットの習練のきびしさを思うとき、私はそこにサジスチックな興趣をそえられることが大であるが、しかし、現実に優美なアクロの実演を目にすると、只、目の前の女体



の妖しい美しさだけが、非常な迫力で襲ってくる。

このようにアクロバットの女体の妙技に陶醉するマニヤは、私以外にもきつと相当数の方が存在することと思う。只、単に物珍しさの興味本位からだけではなく、真底の性向として、S的性格の一変型として、アクロに心酔する私達グループが、これから本誌を中心として、斯界の発展のために尽してゆきたいと思う。重ねてアクロダンサーの登場を期待する。

興行女相撲への一提案

岡 平 吉 夫

人、それぞれ趣向興味を異にするものであり、その一つに秘かにしかも熱烈な女相撲ファンのあることを見逃すことはできない。

しかし、それが興行として成立たず、地方に散在するアマ娘相撲も交通の発達により都会的風潮が伝播され、漸次その姿を消して特定の支持者を持ちながらも衰乏への一路を辿っているのは誠になげかわしいことである。

一方、大相撲は益々その人気を集めているが、相撲そのものは四十八俵、狭い土俵内で瞬間に勝負を決定する単調な競技であり、ボクシング、野球等に比較して一般的には多くの支持者を持つことはむずかしいという見方も成立つ、が、この相撲の人気というか魅力というものは三つの地盤から成り立っているのではないかと推測するものである。

その一つは男と男の真剣な力の争いというものに大衆を引き付け

る魅力がひそんでいることは間違いない事実である。しかし、この点是他のプロ・スポーツにおいても本質的には同じことがいえるのであって、決して相撲特有の魅力というわけのものではない。

次に大きな資本力と組織力によってマス・メディアを利用し得るという点においても同様のことがいえるのであって、相撲独自の固定ファンを持ち得るという論理はなり立たない。即ち、相撲の大きな魅力となり得るものは種一本の土俵という特有のムードの中の競技であり、これを評価する番付編成という、からくりから成立する。

江戸から明治、大正へ興行女相撲の世界もある時は隆盛を誇り、ある時は衰滅をたどっている。が大相撲から比較すればその規模、組織において全くみるべきものがない。

第一に真剣に力と力の戦い、争いというものが女体からは引き出せないという本質的理由によるがそれから資本力、組織力が形成されないという結果にもなる。

最後に相撲独特のムードの点であるが、これらは大相撲と違った新しい領域があるのではなからうか。

現代はアイデアの時代、奇異なものに走るといっても過言ではない。すべての行為、所産が画一的になされる時代にあつて何か珍奇なものへの憧れが大衆の心理をつく。そこから女子プロレス、女ボクシングが一時の人気を博した理由があるが、珍奇なものは立ちどころに珍奇として存在し得ない時代の早さがあることを見逃し得ない。

問題は女子という特有の魅力、それは美であり、動的な躍動裸体美である。ストリップが何年も大同小異の演技によつても、大衆に受け入れられていた点はこのにある。薄化粧を整えた均勢のとれた美女が角力髪に髪いあげたあで姿紺のまわしにさがりをつけ土俵上で四股を踏めば奇異な壮観と江戸情緒的ムードが新しい魅力として引き付けずには置くまい。

通信コーナー

写真部だより

○最近暗室作業に余裕ができましたので、現像、焼付、引伸しなどの御希望の方がございましたら、お引受けいたします。

○現像一本三〇円、引伸し大手札一枚二〇円。但し書留料並に返送料御加算下さい。

○京阪神一帯に限り、出張撮影の求めに応じます。詳細は御照会次第お返事いたします。

○特写御希望の方にはお望みのアイデアにより撮影いたします。但し、モデル料はじめ撮影費材料費等一切の費用の負担可能な方に限ります。趣向詳記の上御照会下されば、費用納期などお返事しますから返信料御同封下さい。

○モデル志願の方がございましたら御遠慮なくお申出下さい。詳細御返事いたします。

代理部だより

○代理部分譲品目録のお申込を多くの方々から頂いておりますが、新しい分を只今作成中ですので出来上るまで、しばらくお待ち下さるようお願いいたします。



女子プロレスと異って継続性を持ち得る理由はこの伝統的ムードにある。容易にパーマ髪のままやまわしが型ばかりのものであったり、マットレスを土俵代わりにすることは相撲の持つ親近感、楽しさを先ず打ちくたく結果となる。相撲の興味は控えから土俵上へ水を付けちりを切る一つ一つの動作からはじまる。徐々に緊迫感をもりあげる演出と、はち切れる色気がいたく観客を引き付ける視点となるとみてよい。

旧態以前として、今日行われていた興行女相撲はシヤツにパンツ、その上に汚れ果てた雲斎のまわし、余興としての腹上の餅付きや五女力士を持ち上げる力技等の趣向では余りにも時代錯誤的観察といわなければならぬ。

女相撲興行一本に生きる山形の某氏の健在であることを今年になって知り、意を強くするとともに戦後この道の結成を試みた幾多の人々の行為をみる時、一日も早く旧態を脱皮して女相撲興行の復興を願うものである。

興行は水もの、人手難の折柄理想的な女力士の募集は容易ならざるものであることはわかるとしても、何とかその困難を克服して新しい女相撲、魅力ある美しい女相撲の発展を願う者は私ひとりではあるまい。

昨今、ストリップ興行も一定の壁につまったとき。女相撲興行結成にあたって一つのせぶみとして本格的な女相撲ムードを演出した「女の本場所」をシヨとして企画してみても如何



であろうか。マンネリとなったストリップ興行界にとって決して危険な企画とは思われないが。

この反響からみて更に分析すべき点を究明し、また私設女相撲部屋を持った京都の先輩土俵四股平氏、東京の雪崎京人氏の意見を求めることは如何であろうか。

次にKK誌によって知った岐阜の服部不二雄氏はこの道のファンとしてよき世話役となり得る人物である。ファンの秘かなる希望を結集する意味でも彼を中心とする後援会的組織を持つことも夢からの実現への前進となろう。

○分譲品は毎月新しい分を發表しておりますが、それと共に、古い分を漸次打ち切りしております。

○以前の分譲品で、只今分譲中止になっている分を略号で次に記します。「プロ」「さ」「め」「20」「へし4」「さほ8」「おく5」「りる」「えま1」「す4」「えま2」「まか」「りつ1」「りつ2」「R組百花撰」

○現在分譲中のものは、一括して最近号に広告しておりますので、それによって御承知願います。

編集部だより

○近ごろ編集者に面会を求めたり持込原稿、或はマニヤの紹介を要求したりする方々が増えてきておりますが、残念ながら一切応じられません故、悪しからず御諒承下さい。直接訪問、電話などすべて無駄ですから、お止め下さい。

○住所氏名職業年令などを明記の上、事前に文書にて御連絡下さった方には、時間の余裕ある限りつとめてお逢いすることにしておりますから、御遠慮なく御便り下さい。電話は面識のある方以外は応じられません。

【フエチ通信】

私は赤ちゃんになりたい

△可愛い花模様の夢▽

白川 晴夫 (山形)

一、夢と赤ちゃん

私はこの様な自分の性癖を告白する事は大変恥すべき事と思ひ、今まで一人で大変悩みました。しかし、私一人の夢として秘めておくだけでなく、マニヤの方々にも知っていただきたく、私の心の夢のイメージを書きます。

私は中学の頃(旧制)より赤ちゃんの実用品であるオシメとオシメカバー、赤ちゃん服や可愛い模様のネルの下着等が大好きでした。しかし、大人である私が赤ちゃんのするオシメを平常使用することは容易なことではないので、私は種々とオシメに関する夢を追憶する様になりました。

可愛いピンクのネルの下着で下半身はピンク系統、赤い花模様のオムツカバー、そしてオムツ特有の染上げのきいた雪花模様のオ

ムツ、一番上に着るベビー服。

ああ、私も赤ちゃんになってみたい。一日でもよいからオシメをあてオムツカバーをあてられてみたい。私は大人のくせに唯オシメの持つあの可愛い甘いムードにさそわれてゆくのです。

私はいつもオムツの夢です。そして夢と同時に可愛い赤ちゃんを妄想するのです。これほどオムツや赤ちゃんの世界のとりことなつた私です。家より会社へ行く道順に赤ちゃんのいる家の前を通るのが楽しみです。それは赤ちゃんのいる家ではオシメ等が干してあるからです。可愛い柄のオムツ、そして甘い香りのするピンクのオシメカバーやベビー服。

私はもう我慢が出来ません。早く早くオシメで包まれない。早く早く、私の心は激しく燃えてきま

す。もう夢だけでは駄目です。早く赤ちゃんの世界に入りたい。可愛い花模様の赤ちゃん用品で自分の肌をくるまれて、うんと甘えてみたい。

これが私の最初の夢でした。私はまず、この夢を実現させるべく一つの計画を考えました。

二、計画

夢より現実へ、私は唯オムツにねらわれた一匹の小虫に等しい存在でした。私はとりあえず、左のような品物を購入しました。

イ、オムツ布地、雪花模様一反その他二反。

ロ、オシメカバー、ピンク系に花模様のある五、六才用ぐらいのもの二枚。

ハ、ピンクネル地、ベビー服等を作るためのもの。

最初の予定はこれだけでした。唯オシメカバーが大人用がなかなかなく、大人用はあっても赤ちゃん用と異なり可愛い柄のものはないと思ひましたので五才ぐらいのものを二枚買い入れました。これは二枚を合せて両脇のスナップボタン止めにするものです。

又、オムツは私は雪花模様が大好きなので、それを入れ、残り二反を店で買うとき、きめることに

しました。

三、買い入れ

私は三千円の資金を用意してよいよ今日は赤ちゃん用品を購入しようと思ひました。私はもう夢の中にいる様です。買い入れる前から胸はわくわくしています。店へ入るまでは、あれこれと夢を考えていました。まず最初はオシメを買いました。女店員が十種類ぐらいのオムツ布地を出してきました。私は雪花模様、ピンクの柄花のボカシのもの、可愛い熊の模様のを全部で三反のオシメを買いました。次にオムツカバーです。まず女店員に五、六才ぐらいの女の児のものを出示してもらいました。

大きいのが中々ないらしく、あちらこちら探し出して、やっと五枚程持つてきました。その中二枚が同柄のピンクに赤と青の模様の入ったカバーです。裏はうすいゴムのようなです。私はその二枚を買い入れ、最後にピンクのネル地を買いました。店員には全部お産見舞にやるのだからと一緒にくるんでもらいました。

私は女店員のくるんでくれた赤ちゃん用品を持ち、口笛もかなくペダルをふんで家へ帰りました。

鈴 蘭 香 水

すず らん こう すい

……悦虐絵灯籠 その一……

万 田 不 仁

若葉どきの明るい雨が降っていた。鎌倉駅のホームの端に、濃紺のマントを着た長身の海軍中尉がこれも可成り上背のある若い女と並んで電車を待っていた。中尉は通りかかる下士官や水兵の挙手の礼に対し、青白い顔をやや傾け、白い手袋をした右手を戦闘帽の庇にぐっと押付けるような硬い感じの答礼をした。そのどこか病的な憔悴の見える顔付が竜二の注意を引いたのだが、中尉に寄添っている女をよく見た時、竜二は愕然として危うく声を出すところだった。淡い藤色のセルを着た女の白い、彫りの深い横顔には確かに覚え

があった。あの女だ、そうだ、あの女だ、しかし……他人の空似か、いや、あの女だ、竜二の胸は忽ちざわめき、目は微かに笑みを浮かべている女の横顔に食入りそうになった。その時、横須賀線が音立てて滑り込んで来てあっと思う間に中尉と女が車内の人となってしまうなかったならば、竜二は女に何かいてやったらう。腹立たしさと、それに斥け難い懐かしさの混合した奇妙な感情の渦にまかれ、呆然と彼はホームに取残されて、立尽くした。女の立っていたあたりに仄かに花の香が漂っていた。彼はそれが鈴蘭香水の匂いで

あるような気がした。

☆ ★

松籟の声か、驟雨の音か、ざあッと耳の奥を洗われるような清々しいひびきに竜二は眼を覚ました。重苦しい夢を見ていたのだ。熱い、身を焦す泥を体に塗られて、彼は懸命に橈を動かしていた。何故自分が前に映画で見た昔のスペイン艦隊の漕役囚の一人になってしまったのやら驚き訝しむ余裕などない。橈の重さと、前後にいる孰れも彼同様体には煮え立つような泥を塗られ、砲丸程の鉄の足枷をつけられた裸の漕役囚の毛深い体から発する嘔

吐を誘う異臭に悩んだ。今にも彼はろくな食物の入っていない胃袋から血まじりのどろどろなものを戻しそうだった。苦しい夢は映画のシーンが変るように変った。秋の終り頃の凄じい風の吹く夕暮、彼は小さな囚人車に押込められ、薄暗い田舎の凸凹道をガタガタ揺すぶられていた。囚人車を引いている瘦せた黄色い馬の背に跨ったせむしの女が時々鋭く馬を鞭うち、邪怪に拍車を入れた。鉛色の雲が、馬の急ぐ方向と逆に流れ、稲妻が閃めいた。やがて行手の丘の上に乳白色の三角形の城が蜃気楼のように幻想的な姿を現わすと、そこで今宵火刑を受けることになっている彼の全身の血が俄かに冷えてくるのだった。夢はまた暗転して、彼は手術台上に仰向けに縛りつけられている。天井によく磨かれた大鏡が取付けてあるから彼の肉体で行なう残酷な生体解剖の有様が意識のある限り彼にも見える訳だ。彼はもう観念していたが、手術台の傍で、紫の僧服を纏った三人の尼僧が各々手に鋭いメスを光らせながら何やら解剖の手順についていい争いを始めたために急に未練がましく泣喚いた。手足を緊縛した革バンドはびくともしない。そんな彼を尻眼に、尼僧たちはドイツ語で口汚く罵り合う程昂奮してい

る。濃く口紅をつけた尼僧の一人が床に唾を吐くと、それは直ぐ真赤な芋虫になって蠢き出した。彼は絶望的に呻いたが、ふと尼僧たちの口論の外で、遠い処で優しい女の話声が出ている。何か女主人が物柔らかに侍女に指図しているような……彼にはその声音がとても懐かしかった。

涼しい風が竜二を本当に目覚めさせた。ごく間近に波の音が聞えた。大きなベッドの上にいる自分に気付いた彼は最後の夢の場面を思い出してぞっとした。しかし、彼は革のバンドで縛られてはいなかった。やれよかったと先ず安堵したが、事態はやはり驚くべきことだった。着ていた筈の学生服を剥ぎ取られて、代りに葡萄酒色の僧服を着せられていた。それはおそろしく窮屈だった。外を見ようとするとベッドを下り、窓際へ寄るにも、裾が窄く中風病みみたいな小股の歩き方しかできない。更にその僧服のきっちりし過ぎた密着状態は夢の初め、漕役囚になった彼の体を蔽う熱い泥が齎らす息苦しさに通じる何ともいえない不快感を彼に与えた。やっと窓辺に達して高いので背伸びして外を眺めると、明るい晩春の日差に輝く白い砂原と青い海があった。彼の部屋は三階くらいの高さらしく、飛上っ

たら古い洋館らしい黄疽に罹った人の肌にも似た壁の色が見えた。部屋は矩形で、天井も壁も無表情に白く、何の装飾もない病室のようで、ベッドの傍にこれも白塗りの小さな机があるだけ、唯ドアの取手の上に嵌込みの円い明かりが何か獣の大きな瞳のように橙色の灯っているのが不気味でもあった。

——僕は誰かに囚われたんだ。何でだろう。どうして……

竜二は仕方なく小股によちよち歩きして、ベッドに戻り、腰掛けて考え込んだ。その儘長い時間が過ぎたらしい。

ドアの取手が動いた。食物の乗った銀の盆を持った背の低い、中年の女が足音もなく入って来て、机の上に盆を置いた。食パン二切れとハム、野菜サラダだった。黒いワンピース姿のその女はどこか夢の中の黄色い馬に乗ったせむしの女に似ていた。

「君だれ、ここどこなの？」

竜二は意気込んで尋ねたが、女はちらと彼の顔を見たり引止める間もなく急ぎ足に出ていってしまった。彼の虜囚生活はこうして突然に始まった。その日の午後、刑の執行人が現れた。処刑といっても竜二には事の次第が全く腑に落ちぬ、すべて何か間違っている

としか思えなかったのだが、真紅の乗馬ズボン、褐色の長靴をはいた女がドアを蹴って荒々しく部屋に踏み込んできたかと思うと、右手に握りしめた革の鞭で彼の肩、背中をいきなり打ちのめした。実に理不尽な話で憤りて体が震えたが、抵抗しようにも葡萄酒色の僧服がきつく呪縛さながら彼の五体の自由を奪っている、やむなくベッドに俯して鞭打に堪えた。両手で後頭部を庇おうとしたが、僧服の袖の脇が広く胴の辺に縫付けてあるので

それも叶わない。女は無言で彼の尻を最も多く飽なく打った。鞭打の間に女は漸く息を弾ませてきた。彼はひたすら女の不条理な私刑を憎んだものの僧服の布地が厚いためか、それとも女が加減しているのか鞭打の痛みはさほど激しくなかった。燃え立つ憎悪をこめて責めるといふより何か遊んでいる、飄っているのではないかとも推測したのは、二三日経ってからのことだが、彼は多少ふてぶてしい神経の鈍いところもあった。まさか殺す心算



れん子 画

はないだろうという楽観が心の片隅に生じた。一頻り鞭を鳴らした後、女は青い上衣のポケットから林檎を一個取出して、ベッドの上に投捨てるように置いて出ていった。女の去った部屋の中に何やらいい匂いが残った。彼は姉がつけている鈴蘭香水の匂いを思い出した。

竜二は、少し頭痛がするので早引けした。学校の門を出て間もなく頭がすっきりしてきた。丁度大地を踏めば直ってしまう船酔いと同じで、嫌いな学校を出れば少々の頭痛など直るほど勉強嫌いな少年だった。彼は学校の傍の駅から電車に乗らずに一つ先の駅まで歩いた。それには目的があった。郊外から都心へ通じる緑色の私鉄が走る土手下のトンネルだ。トンネルは五十米くらいで昼も仄暗い真中頃の天井に裸電球が灯っていた。電球が毀れていたり、なかったりして、曇天や雨の日、暗がりに墮くこともあった。トンネルの両側の壁に蠟石で様々の戯画が描いてある。誰が描くのかコンクリートの上に白々と浮き出たような戯画は、巨大な男根、女陰、色々な性的なポーズの数々で、それは、少年の竜二の心を騒がせた。そういうことにひどく好奇心をそそら

れる年頃の上に、人通りの少ない暗いトンネルの中で見る戯画の線はへんにリアルで刺戟的だった。彼は中でも女上位の絵に心ひかれ眺めているうちに自然と顔が火照ってくるのを覚えた。彼はそのみだらな絵をつくづく見詰めていると必ず幼年時代のある日、若く美しかった母親に喉笛を焼かれそうになった時のことを思い出した。彼は隣家の少年の持っている精巧な玩具のピストルが欲しくてならが、しつこくねだった。彼の希望は何によらず大抵は叶えてくれる甘い母だったが何故かこの時は承知しなかった。我儘に育てられた彼は当然泣いて執拗に母に食いさがった。母は優しくあしらっていたが、何時までも愚図り泣きしている彼の強情さに遂に腹を立てたのだろう、不意に、彼を突いて火鉢の傍に仰向けに倒し、驚く彼の腹の上に馬乗りに跨った。大柄な母の体は重く、彼は息が詰まりそうになった。彼の両手も膝を立てた母の白足袋の足の下にきつく踏み敷かれた。母は片手に火箸を取って、赤く熾っている炭火を一つはさんだ。

「まだ泣くか、泣いているとこれで喉を焼いて声を出なくなってしまうわよ」

といって、真赤な炭火を彼の喉元に近付け

た。彼は唯恐ろしくなって突然鬼女になったような母に詫まるばかりだった。その時の母の体の重み、柔らかな尻の大きさ、着物の前が割れて、鶯色の湯文字がなまめかしかったこともはっきり思い出すことができる。殊に思春期になってから、その時の母の姿や表情を思うと胸が熱く重くなり、息苦しくさえる。母が早く亡くなったせいも母というより一人の女盛りの女に組敷かれ折檻されたような気さえするのだった。

ぼんやり壁の戯画の前に佇んでいた竜二はトンネルの向こう側の口から人の来る気配に歩き出した。トンネルの出入口に、その場を塞ぐように一台の自動車が止まっていた。それは新しいメルセデスだった。彼がその傍を擦りぬけようとした時、自動車のドアが開いて、水色のスーツを着た体格のいい女が降り立ち、彼の行手を遮った。女は大きく両手をひろげて彼を有無をいわせず抱いた。高い香りが彼の鼻孔を充たし、彼は忽ち朦朧とした深い淵の底に意識を喪った体を横たえた。女は負傷者を扱うように彼をメルセデスの中に入れた。

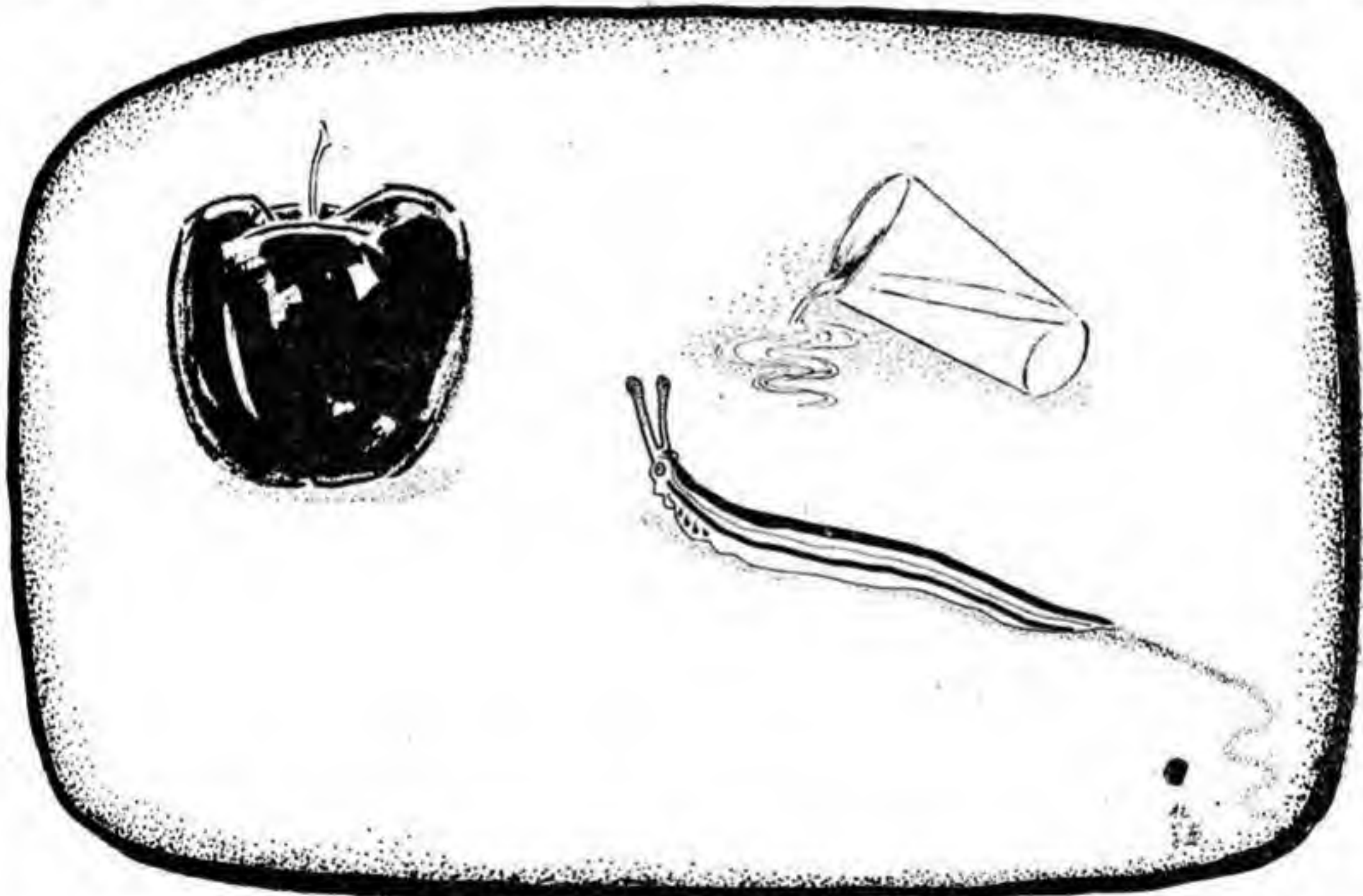
——あれも何だか鈴蘭の匂いみたいだった。

竜二は囚われのベッドの上で呟いた。窓の

外には、はや初夏の強い光が躍っているのに部屋の中の空気はここが石牢のように冷えびえとしている。外の日差を仰ぐと、何とかして窮屈な葡萄色の僧服を脱がねば脱出しても直ぐへばってしまうと思った。彼は真剣に訳の解らぬ虜囚の境涯から逃れ去るすべを考えた。先ず食事を運んでくる女を体当りで倒して部屋の外へ出てみよう。しかし、彼は飢に悩まされていた。朝が薄い二切れのパン、薄いハム二枚、僅かの野菜、昼はコップ一杯の葡萄酒にままごとじみた小さなチーズ二切れ夜が小さな乾パン二個と気味悪く赤濁りしたスープ、元来大食な彼の胃袋は甚だ不満だった。献立は、三食共判で押したように変らない。食物はせむし女の手で運ばれ、彼が食べ終わった頃また姿を現わし、銀盆に僅かの食器をのせて下げる。夜は同時に部屋の隅の糞尿壺をあけにいく仕事もあった。葡萄色の僧服の前後に用便のために空けてある小さな穴の縁が汚れているかどうか、せむし女は大蒜臭い息を彼の顔へ吐きかけながら日に一度は調べるのだった。

朝、窓から濃い霧が流れ込んでいた。脱出の決意を固めている彼の部屋へ食事を持って来たのは、せむし女ではなく、あのトンネル

の入口で彼を捕らえた女だった。綺麗な支那服を着ていた。眉が薄く、瞳の細い黄ばんだ顔に頬紅をさした女は静かに入って来た。その胸元目掛けて彼は思い切り頭突を食わせた。女は高い声で何か叫んで、よろめき、銀盆を取落してしまっただが、危うく踏みこたえろと、こんなことは予期していたらしく、動物的な声をあげて向かって来た。二人の格闘は暫く続いたが、窮屈な僧服に手足の自由を阻まれていた竜二に所詮勝負はなく、霧を凌いで照り出した朝日の光が差込む床の上に、彼は押倒され、女は容赦なく彼の胸板にどっかり跨った。女は彼が反抗意欲をなくすまで両手に力をこめて彼の喉を締めた。それから彼の両手に手錠をかけ、彼の口惜しげな顔へ唾を吐きかけてゆっくり立上った。何時来たのか彼の頭の上の方に真紅の乗馬ズボンの女が立って微笑していた。シャム猫のように瞳が光り、長い髪が重そうだった。女は乗馬ズボンの尻のポケットからよく光る金属製の開口器を出して、彼の傍に跼んだ。黒い長靴によく利きそうな拍車がついている。馬をせめて来たばかりなのか汗の



匂いがした。それにこの女の体臭のような鈴蘭香水の匂いもした。彼の口は開口器で大きく開けられた。何をされるのか、彼は動転しながらもふっと虫歯の治療に通っていた歯科医院の医師の牡牛のような体恰好、動作を頭に浮かべた。せむし女が足音もなく現れて赤い一輪挿しの花びんを乗馬ズボンの女に渡した。再び支那服の女が彼の腹の上に馬乗りになり、両手で彼の頭を抑えた。乗馬ズボンの女の手にした花びんの口が彼の口に当てがわれる……注ぎ込まれた液体の味を彼は忘れることができない。乗馬ズボンの女と支那服の女は高笑いをして、せむし女を従えて出ていった。その夜、彼は乗馬ズボンの女と支那服の女からここに書けない程の淫靡な、そして無惨な辱しめを受けた。

雨風の中で海の荒れるとどろきの聞える午後、乗馬ズボンの女が来た。いつもの男性的な出立ではなく、白いガウンのような、希臘の哲学者が着ていたようなゆるやかな衣に身を包んで、朱の革草履をはいている。女はまるで

女医が患者を治療するくらいの物馴れた態度で彼の背や尻に鞭打を加えた。女の去った後にベッドの上に林檎があった。

風邪をひいたのか咳むせたのかも知れないと思ったが、ベッドに転がっている林檎を見ると、今に僧服を脱がされて皮膚にじかに鞭を当てられ、林檎の色と同じ鮮かな血を流すことになるのだろう、よしんば僧服を脱がされなくとも、こう毎日日課のように鞭打を加えられたのでは厚い僧服もやがて破れ、そうなれば裸身に鞭を浴びることにもなるのが、そんな恐怖に彼は慄いた。にもかかわらず不思議なことに彼は乗馬ズボンの女に鞭で打たれ続けている間に心の底の暗がりに被虐を待つ気持、段々に自分が女の恣意の儘に滅ぼされていく過程を一種の自己陶醉の裡にじっと見詰めた気持が何時か萌しているのをどうしようもなかった。夜、眠られぬので色々な過去のでき事を回想したり、他愛ない空想に耽った。トンネルの戯画の入り組んだ線も時々思い出した。女上位の絵、それから母親の折檻、組敷かれ喉を焼くばかりに突きつけられた炭火の火照り、彼はその後何遍も母の豊かな体の下敷きになった自分の姿を頭に描いて、次第に柳眉を逆立てた母の怒り、荒い振

舞に対する恐れが薄らぐと、お仕置がややもすれば懐かしくもなり、どこか甘えた気持で母にいじめられることを期待する陰った心の動きを制しかねていた。母はその激しい折檻以後二度とあられもない馬乗りの責め様などしなかったから彼の密かな願望は充たされることなく内攻するばかりだった。面と向かって凶星を指されれば死にたくなる程恥ずかしいが、彼にはこうして夙に女、それも母のようない美しい女に物理的に責められ、さいなまれたい被虐愛の心情が芽生えていたらしい。

この海辺の館にある日、客が訪れた。庭の舗石を踏むらしい馬蹄の音、馬の嘶き、賑やかな男女の声に竜二は耳をそばだてた。脱出の願いが彼を窓辺に走らせた。よちよち小股に。彼は彼等の馬を一頭奪い、まっしぐらに田舎道を逃げていく自分の颯爽たる馬上の姿を想った。馬に乗ったことのない彼にはそれは全く痴夢に等しいものだった。彼等は蓄音機を鳴らしてダンスを始めた。コスチネンタルタンゴの調べが風に乘って彼の耳に届く。たとい無駄だとしても精一杯声を張りあげて救いを求めてみたら。そう思って何度か叫ぼうとした彼なのに到頭声が出なかった。館を訪れる客人は乗馬ズボンの女の仲間だろうし

それに彼は囚人服に等しい葡萄色の僧服につきつく体を締めつけられ、既に得体の知れぬ二人の女に罵られていて自分が余りにみじめだったのだ。彼等は遠乗りの途中ででもあったか、間もなく立去ってしまった。

夜遅くなつて、乗馬ズボンの女が支那服の女を侍女のように従えてやってきた。ドアの取手の上の橙色の灯に支那服の金ンの刺繍がきらめいた。支那服の女の手で彼の口に開口器がかけられる。乗馬ズボンの女の指示で、それから、革のバンドで彼の手足は緊縛された。その時、彼は乗馬ズボンの女の意外に優しい声がいつか夢の中で、口論する尼僧たちの声のずっと向こうでしていた侍女に何かいっつけている優しい声によく似ていることに気付いた。彼はもう抗がう気もなく、琥珀のコップを持って彼の傍に立った女の真紅の乗馬ズボンの腿のあたりを横眼で見ていた。長靴がきしみ、革の臭いがした。純白のブラウスの胸は大きい乳房でふくらんでいる。「これはネ、鈴蘭の鉢の水が沢山いれてあるの、猛毒よ。これを飲んで、もうお前は死になさい」

女はそういつて、琥珀のコップの中の液体を彼の口に注ぎ入れた。支那服の女が脇から

彼の頭を抑えている。乗馬ズボンの女が脇から彼の頭を抑えている。乗馬ズボンの女はベツドの上に躍りあがって、黒光りに艶々した長靴の底を彼の下腹部に当て邪慳に踏みつけるのだった。女の顔に浮かんだ凄艶な微笑が

彼の網膜に灼きついた。

★ ☆

鎌倉駅のホームに佇んだ竜二の鼓膜に戦闘機の爆音がひびいた。彼は尚自分を虐げた女の一人の面影を追ったが、彼にはあのことが

怨恨を抱いた人の人違いによる行為か、または異常な悪趣味を満足させるための仕業か解るべくもなかった。彼は囚われた時、中学三年生、薔薇色の美少年だった。

(おわり)

珍奇貴重「臨月腹」妊婦フォト (分譲)

「妊婦新作フォト」として児玉昌子さんの写真が分譲されて以来、安原さゆりさんの妊娠九カ月の写真が発表され、引続いて九月号では、この「臨月腹」の発売を見て、今や妊婦ブームも最高頂に達した感があります。分娩二日前に撮影された、この「臨月腹」のフォトは、まことに貴重な風俗文献として、好事家の間から珍重されております。何卒他の妊婦フォト(八カ月、九カ月)と比較検討してご研究下さい。尚、只今、本誌写真部において、妊娠九カ月の二十三才になる若妻の方に交渉中ですので、承諾を得られるようでしたら、引続いて妊婦写真の傑作を分譲できる筈です。彼女は本誌の熱心な愛読者なので、多分OKを得られることと思います。

臨月腹ヌード

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号「りく」

モデル 安原さゆり

お臍を中心にして、まんまるく太鼓のようにふくらんだ出産前二日の極限に膨大したお腹を、斜め正面と側面とから狙いをつけたこれこそ、まさに刻明な妊娠中の腹部をあからさまに印画に記録した全裸の妊婦フォト。

臨月腹アップ

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号「りと」

モデル 安原さゆり

物凄くふくれ上った臨月の女の腹部を、膝の上から胸部までを切りとって、大写真とし、むくれ上ったお臍、せり下した下腹部、妊娠線もあざやかな、はちきれそうな便々たるお腹をアップした。

臨月妊婦の全身

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号「りせ」

モデル 安原さゆり

出産を目前にひかえて、もうこれ以上は大きくなりませんという皮膚もはちきれそうな巨大なお腹を、大いばりでせり出して立ち、或は、お腹をかかえてどっしりと坐したところを、全身あますところなく、つぶさにマニヤの方々に見て頂くというフォト。

臨月腹の側面

大手札 三枚一組 四〇〇円

略号「りそ」

モデル 安原さゆり

立ち上った妊婦の膨大な腹部を最もよく、特徴づけて見る事が出来るのは側面からのカメラアングルである。前面にむっくりと突き出た腹部、背後にしゃくるとうにつき出された臀部、これほど妊娠中の女性の生感をありありと露出したものはないでしょう。

臨月腹の背面

大手札 二枚一組 三〇〇円

略号「りも」

モデル 安原さゆり

臨月の妊婦の前面ばかりでなくその背面から狙いをつけて、臀部の有様や、背後から見た腹部のせり出し模様などを、とくとごらん頂くために、特に背面からの分もつけ加えました。

臨月垂れ腹

大手札 三枚一組 四〇〇円

略号「りみ」

モデル 安原さゆり

出産を二日後に控えて、せり出した妊婦特有の垂れ下ったお腹。八、九カ月の頃のように、只前に大きく突き出るだけではない、この写真のように垂れ下って来ると分娩間近かという事が出来る。◎以上六種の「臨月腹」の写真の分譲を出来る事が出来ました。提供をしてくれる方に厚くお礼申し上げます。

南紀奇談クラブ例会報告記

新々播州皿屋敷

岸 本 青 柳

七十何年振りだとか何とか言われる、この春の厳しい寒さは、多くの人々を縮み上げらせ、加えて梅雨前からの長雨で、来る日も来る日も鬱陶しい不愉快極まる日夜の連続であり、爛慢の桜花を満喫する真の春らしい春を味うことが出来ず仕舞いで、遂に夏のシーズンを迎えた。だがその反面また四方の山々や森や林や庭園などは、スッカリ眼に浸むような新緑に衣替えして、風流人でなくとも、清新潑潑な気分を満たされ、所謂この世の夏を勧迎する人々も相当あったであろう。将に浮世はさまざまではある。

南紀奇談クラブ会員十数人も亦、その中に含まれ緑蔭を慕うていた。この会は毎月第二日曜日の午後には、必ず希望の会員宅やお寺、神社々務所などで集会を開いては、嗜好雑誌の研究と批評、写真撮影、実演などを行っているが、殊に女会員をモデルに、「責めの実験」を茲数年間も続けている。

五月雨のシトシトと降る或る晩のことである。竜王山と称する小高い山麓の、コンモリ繁った妙安寺という古寺がある。門も塀も壊われ、お堂の屋根も随分と荒れ果ててはいるが、このお寺には六十歳前後の智海和尚と飯

炊女の二人暮しで、寂しいとも思わず終日仏さまに仕えている。その和尚とは昵懇の間柄の或る会員の斡旋で、この月の集会を、この寺院で開催することに決めてはいた。何うした訳か同夜集った会員は、僅かに男三人と女二人だけで寂寥ではあったが、責めの研究の意欲は相変わらず旺盛であった。早速参会者から幾許ずつを集めて和尚にお布施を差出すと和尚自から洪茶を一同に勧めて呉れたので、各自持参の茶菓子で暫らく休憩する。その内誰かの提唱で一つ責めの研究や実演を演ることに相談が纏まった。

ところが五人の一座で、銘々が主役を演出される芸題をと、相互に頭を聚めて時代劇ものを、彼れや之れやと相談の結果、会員の多くが知っており、人々に膾炙されている芸題の内から『幡州皿屋敷』を実演することに決ったが、今までの演劇を少しく添作して新味を出すことにした。そして司会者格の年長者の指導監督に従うことを申し合わせた。先ず司会者から、詳細に亘っての暗記脚本の一応の説明や仕草を見せて呉れた。その劇の筋書というのは一般的には、次のように伝えられている。

新皿屋敷の筋書

旗本の近藤源次郎は、前田加賀守屋敷の門前で割腹自殺した。その訃はというと、源次郎は上覧能の見物中に欠伸したのを、舞台から見ていた加賀守は「満座の中で恥をかかせた、嚴重に処分しろ」と幕府に迫り、旗本達は青山幡磨、大久保彦左衛門を通じて、松平伊豆守に斡旋を願ひ出たが、騒動が大きくなるのを憂えた幕府は、源次郎に切腹を申し渡した。腰元のお菊を伴うて源次郎の新しい墓に詣でた幡磨は、旗本の自身の生活上にも何か不安を感じていた。欠伸一つで切腹を命ぜ

られた茶番劇も、天下泰平の証拠で幕府を擁護する旗本も、今ではその存在価値が滅却したと感じ、愛するお菊と墓参りの帰路、一軒の茶店に立ち寄り「三千石を棄ててもお菊と添い遂げよう」とお菊にも話するほどであった。だが血氣に猛る旗本達は、近藤登之助、沢主水らの言分通り、旗本を無視するばかりではなく、大名の肩をもつ幕府の態度を難詰して、旗本の意地を見せてやれということになり、白柄組を結成した。幡磨も亦、大勢に押されて、その一員に参加した。

乱暴者の多い白柄組の悪評は、次第次第に江戸中に高まって来た。若い旗本を理解している彦左衛門も、「幕府という大きな権力者が動き出した以上、お前達の手には負えないから我慢しろ」とて、旗本達を慰撫しながらこの世を去った。そのお通夜の席を、引き上げた旗本達が、途中で前田加賀守の行列に行き当り、彼らはその行列の中へ暴れ込んだ。加賀守は同志の大名達と結託して、白柄組全員の身柄引渡しを幕府に迫る。智慧伊豆守は大名達と白柄組の間を和解させるため、播磨の伯母真弓を呼び寄せ、前田家との縁を結ばうとした。その真相を知らずに播磨は伯母に招かれ、花見の野立に出かける。女ばかりの

野立に行くのは播磨と前田家の姫君との見合であろうと、早くも邪推したお菊は、嫉妬のあまり青山家の家宝南蠻焼皿十枚の内一枚を柱に投げ付けて、木ッ葉みじんに打ち壊す。

茲から例の惨劇が起るといふものではあるが、今晚の実演は一寸変っているから、ご承知を願ひ度いと述べ、更に新しい演出振りを説明する。一同は細かい点まで質問応答が繰り返えされ、漸く諒解点に達した。そこで改めて役割が決められた。

青山播磨に、加藤増太郎(42) 中学校教員
腰元お菊に、狭山礼子(23) 会社事務員
用人忠太夫に、斉藤勇造(28) 郵便局員
同人妻操に、辻本春子(25) 美容師
お菊夫三平に、原野照一(35) 歯科医師

右のように割り当てられ、前月の集会で略ぼ申合わせたように、各自が、好みの雑誌、伝記もの、責めの写真等々のほかに、簡単な責め道具を風呂敷に包んで持参したため、早速その着物に着替えて、お堂の真ん中へ集まり加藤監督兼主演役の指揮を受ける。春子美容師の手捌きで銘々の化粧を付けて貰った。衣裳と言っても至極単純なもので、男三人とも普通の単物だが、お菊は蔭紫色に白の大

小細筋の格子縞の袴着物、桃色に太い五筋の入った単帯、白の帯揚げ、紅色の腰紐、髪は総髪の姿、操女は銀杏返しに似たような髪で着物は、黄色地に中柄赤筋三つ並べの格子柄の袴、緑色の無地の帯、蔭水色の帯揚げ、桃色の腰紐で、二人ともに白襟の赤い長襦袢を用いて、濃艶な厚化粧振りが人目を惹いた。

実演と言っても、余り広くもないお堂のとでもあり、舞台装置もなく勿論見物人も居ない。僅か五人の会員の実演ではあるが、何れもその顔面には緊張味が漲っていた。先ず序幕はお菊の部屋から始められた。

お菊の部屋

お菊は鏡台の前に座って化粧直しをしているところへ、用人の忠太夫が入って来る。

忠太夫「お菊ッ、お殿様に可愛がって貰おうとて化粧しているのう」と冷笑する。

お菊「いいえ」答えて、すぐ後で素直に、「ハイ」と微笑を浮かべて応える。

忠太夫「そのように美しくうなると、お殿様が、さぞお喜びなされるだろうのう」

お菊「厭な御用人様ッ」とツンとなる。

忠太夫「何の嫌らしいことがあるものか、何なら抱いて進ぜようかッ」

お菊「まあ失礼なことを……」と睨む。

忠太夫「イヤ何も失礼では御座らぬ、そなたが余りに美しいからじゃ」

お菊はそれ以上相手になっっているのは、いとわしいとも思ったのか小用足しに行くような素振りですット起ち上って、廊下へ出ようとするので、狼狽した忠太夫は「まあ座れッ」と制して、お菊を元の座へ座わらせる。

忠太夫「お菊、拙者は何もその方をどうしようとするのではない。話し度いことがあるのだ。まあ落ち着け、実は御殿様は近い内に旗本をお辞めになって、その方と何処かで、新世帯を持ち度いと思つて居られるんだ。そのことは、そちも知っている筈だと思うが……」と持ちかける。

お菊「私はそんなことは一向存じません」

忠太夫「ソレならば聞かすが拙者の家内は昨夜突然急病で、彼の世とやらへ去つて終つた。お殿様は常にお留守勝のため、未だにお耳には入れて居らず、夕方葬式を出したばかりじゃ、若し御殿様と一緒に、新世帯を持つなら、口憚った話じやが浪人となる御殿様よりも、家屋敷をはじめ相当蓄財のある拙者と、一苦勞をして見る気持はないか」

と短刀直入、嘘八百を並べ立てて、お菊を

物にしようと巧みに誘惑の手を延ばすと、驚いたお菊は、美しい顔をゆがめながら、

お菊「御用人様、それは真実でしょうか、たとえそれが真実であっても、私はそのようなお話には答えられません」

忠太夫「突然のことでもあり、さぞ驚いたであろうが、今の話は全く真正銘の話であるから何とか色よい返事をして呉れ頼むぞ」

突然無理難題を持ち込まれたお菊は、故郷に残している恋しい、夫三平のことを臉に浮べ、俯向き加減に口に袖を当てたまま、無言の業を続ける。焦燥の氣分に咬られた忠太夫は、たまり兼ねて、お菊の側にずり寄つて行く。お菊は恐怖の面持ちで、再び廊下へ出て行こうとするのを忠太夫はお菊の背後から襟首を掴んで、後ろへ引き戻す。お菊は力任せに、忠太夫の手を振り切つて、なおも廊下へ出ようとする。それを左様には、させまいと引き戻す。お菊も亦、必死で抵抗するが、所詮は男の力には及ばぬと考え、肌身離さず持つている懐剣を前帯の間から引き抜こうとする右の手を掴んだ忠太夫は繊弱なお菊の手を逆に取り、更に両手を後ろ手に、手早く帯刀の携げ緒を解いて高手小手に縛り上げる。

お菊「何を乱暴なされます」

と叫んで、身体を前に撞と打ち倒れる。白い雪よりも綺麗な両足を、紅い腰巻の間から現わし、着物の上前も髪も乱れて悲痛な顔で忠太夫を横目で睨んでいる。忠太夫はというと、倒れたお菊を起して座らせてから、

忠太夫「お菊、そちは余り強情を張るから可愛さ余って憎さが百倍、ツイ手荒なことをしたんだぞ、早く色よい返事をして呉れ」。

矢張り未練タツプリーな忠太夫は、お菊を再び口説きにかかる。がお菊は顔も青ざめ、ウンともスンとも返事もせず、両手を力任せに後ろ手に縛られており、だんだん縄目の痛さが、肉に喰い入って来るので、目尻を上げ唇を噛んで恨らめしように忠太夫を上目で睨んでいる。

忠太夫「お菊、お前は身寄りのない孤児で可哀想だというので、この屋敷へ出入りする米屋の番頭の口利きで、ここの召使になったんだぞ、その恩を忘れて拙者の言うことを聞かぬから、コンナことになるんだ」

お菊「私には定まった夫が御座ります」

忠太夫「何とッ、今一度言ってみよ、孤児じやと偽って当御屋敷に奉公に上ったのは、始めから御殿様や拙者を欺く無礼な奴じや、御殿様が御帰宅なされると、そのことを申し

上げて何分の処分をするぞッ」と脅す。

お菊「ソナナことを御殿様に知れると忽ち私の首がなくなりますから、何とぞ、そればかりはお許し下さいませ」

と改めて、後ろ手に縛られた身体を、忠太夫の前に座り直し、乱れ髪のを頭に摺り付けて平身低頭、哀願する姿はまた一しお哀れさが加わる。

忠太夫「ならぬッ、それなら拙者の言葉に従うか」

これにはお菊は黙って何とも応えない。業を煮やした忠太夫は、スッと起ち上り仏壇の後ろから軸掛けを持ち出し、お菊の背後から二三度打ち据える。お菊はその度ごとに身体を「く」の字に曲らせて苦痛を訴える。この有様を熟視している他の会員三人も、真に迫る『責めの実演』には、手に汗を握り占めていた。そこへ和尚が突然入って来たので、一寸一服したが、その儘和尚は何とも言わずに出て終ったので、再び実演を続けた。

播磨の部屋

舞台は変って次の幕となる。主人播磨の部屋に見たてて、実演を進行する。播磨の加藤は刀の代りにステッキを右に携えて現われ、

自分の部屋に落着く。

お菊は「御殿様、お帰り遊ばせ」と、お辞儀して、叮嚀に播磨の前にお茶とお菓子を捧げる。

青山播磨「留守中に何か変わったことでもなかったか」と優しく聞く。

お菊「ハイ別段何も御座いませんでした」
青山播磨「左様か、夫れなら結構、用人を呼んで呉れ」。

お菊が次の間に引き下がると入れ違いに忠太夫が現われ、播磨の前にお辞儀してから、忠太夫「お疲れでしょうから、早速お風呂を召され、御夕食をお摂りになられては如何でしょうか」

播磨「風呂も夕食も後にして、先ず留守中のことを聞かせて呉れ」

忠太夫「別段取り的てて申し上げることは御座居ませんが……」

と語尾を濁して、何か考えている様子、これを見て推察したのか、

播磨「忠太夫、何か言うことがあるのう」

忠太夫「はい、少々内々でお耳に入りたいことが御座りますのですが」

播磨「何んじや」

忠太夫「実はお菊に夫が有るそう御座り

ますので、誠に驚いた訳であります」

播磨「ソレは真実であらうなア」

忠太夫「私も実は最初は、我が耳を誤ったので御座りまするが、当人のお菊から、左様に聞かされましたので」

播磨「どうしてお菊からソレを聞いた？」

忠太夫「御殿様が近々の内、旗本を御辞退遊ばされるようなお噂ばなしを聞いたので、お菊とも、其のことに就いて一寸話した際お菊の口から直接聞いたので御座ります」

播磨「ウン左様か、旗本を辞めるとでも噂している者があると申すのか？」

忠太夫「左様なことを蔭ながら承って居りますので……」

播磨「それで、お前は、どうしようとするのか」

忠太夫「只今のところでは、何事も考えては居りません」

播磨「ソレならよろしい、お菊は何と申して居る」

忠太夫「お菊は若し左様なことにも相成らば郷里に待っている夫の許へ帰り度いと申しで居りました」と嘘を言う。

播磨「ソチもお菊も薄情者だのう。まだ旗本を辞めるとも何とも申して居らんだはない

か？」

忠太夫「恐れ入りました。実は御殿様の御身の上を案じてのことで、決して他意は御座りませぬ」

播磨「左様であらう、左様でなければ、お役は勤まるまい」

至極穏やかな口調ではあるが、何か胸中に不満らしいものがあるように見受けられた。

播磨「お菊を呼んで参れ」

「はい」と応えたものの、忠太夫は心中不安なものがあつた。ソレはお菊を手籠めにし、責め折檻したことが、殿様にお菊から告げられるのを、非常に憂慮したからであつた。

そこでお菊が、播磨の部屋へ召されて行つた間に、茶道具室から青山家重宝の南蠻渡来の綿絵の皿十枚の内の一枚を、秘かに盗み出して、万一の場合には、その皿一枚の紛失の罪をお菊に転嫁して、自己の非をかくそうとする卑怯未練な悪業に出て、素知らぬ顔をしている。邪惡を一枚の皿で解消しようとする悪刺極まる忠太夫ではあつた。惨酷な悲劇が茲から繰り展げられて行くのであつた。

お菊「御殿様、何か御用で御座りまするか」

播磨「お菊、お前は忠太夫と、どんな話を

したのか」

お菊「ハイ、別段これという取りとめたお話では御座いません」

播磨「お前は、この青山家を出て行く氣になつて居るのか？」

お菊「いいえ左様なことは毛頭御座いません。只だ永くお側にお仕えさせて頂こうと存じております」

播磨「左様ならばよろしいが、忠太夫は左様に申しては居らぬぞよ」

お菊「御用人さまは如何ようなことを申上げたかは存じませぬが、私の心には変りは御座いません」

播磨「お菊、お前は忠太夫をどう思つてるのか」

お菊「ハイ、別段變つた考えも思いもししておりません。御用人様としてお仕え申し上げて居ります」

播磨「左様か、予の前では左様に申すが、その実は左様ではあるまい」

お菊「左様なことは決して御座いません」

播磨「ではよろしい、お菊、お前の両手に繩の筋が着いているのは、どうした訳か、隠くさずに聞かせて見い」

痛いところを見られて、お菊は何と返事し

て可いのか思案に呉れて、暫く躊躇しているのを、見て取った播磨は「これには何かあるのかも分らない」とでも思ったのか、再び忠太夫を呼べと、お菊に命じた。お菊と入れ代って、忠太夫が舞台に現われる。

播磨「忠太夫、ソチは予にまだ何か申して居らぬことがありませんか？」

忠太夫「ハイ、何もないと存じますが」

播磨「ではお菊の両手に残っている縄の跡形に就いては何も存じて居らぬのか？」

忠太夫は忠太夫でまた、痛いところを衝かれたという思い振りで、之れまた一寸即答出来ず、困窮の極、顔から冷汗を流している。

播磨「忠太夫どうした？これには何か訳がありそうだが……」

と不満顔をする。

忠太夫「ハイ、それならば申し上げますが決してお叱かりにならぬようお願い申し上げます、実はお菊はお家重宝の南蠻皿を一枚紛失したのを殿様のお怒りを恐れて、私にも秘密にしているようで御座いますので一寸詰問しただけで御座ります。」

播磨「では、それをどうして其方が知っているのか、何故予に告げないのか」

比較的家庭では穏和な青山播磨ではあるが

家宝の皿が紛失したと聞かされては不問に附して置く訳にも行かず、内心憤怒を蔵しているのが、その動作にも現わし出した。遂に語気荒く

播磨「直ぐお菊を呼び出せ？」

忠太夫は困ったことになったと、当惑顔で座を起って行つたが、会員一同はその成行き如何を頗る注視している様子であった。

青山屋敷の庭前

この時分には幸い雨も止み薄雲りの空には折柄の月影がボンヤリ境内に映じていたので第三幕目を、お堂の東側の広縁に移した。濡れた砂利の庭には、庭の上に空俵を敷いてある。少し離れた墓場通路の脇に古井戸がありその周囲が松、杉、檜など大小の樹木が繁茂しており、屈強な自然の舞台装置が出来ている。男女二人の会員は広縁に座り、朽ちた手摺を距てて雨に濡れた庭前の風趣を眺めている。主役の播磨はお堂の破れ団扇を右手で風を入れていた。其所へ後ろ手に二重に縛られたお菊が、俯向きながら忠太夫に縄尻を取られて、屠所の羊のように下手から現われる。

た。一般の劇場ならば、お菊の衣裳は疏い紫矢紺の長袖に、黒の縹子の帯を文庫に結んで乱れ髪姿ではあるが、今晚のお菊は薄紫色に白の大小細筋の入った格子縞の袴着物、桃色に白と柿色の五筋の入った単帯、白の帯揚げ紅色の腰紐、白足袋、総髪の粋な姿であるが、白い襟元と裾の赤い長縹縹を細く動かしながら、静々と舞台正面に曳き出され、そして忠太夫の指図に従って、庭の上に静かに座らせられ、俯向いたままの風情は何とも言われぬ哀れなものがああり、一同は片唾を呑んで静かに見守っている。

忠太夫は、広縁の中央にお堂の太い柱を背にして正座している播磨の前に進み出て、「お仰せの通りお菊を曳いてまいりました」と言ってから、お菊の背後に廻せて縄尻を確乎と握りしめる。

播磨「お菊、其の方は予の深い愛情にも拘わらず、お家の家宝南蠻皿を紛失した罪は重いのを知って居ろう。予に何の恨みがあつて家宝の皿を紛失したのか申して見よ」

と比較的言葉は穏やかのようなではあるが、胸中には、何か割り切れない不満と憤怒が多分に含んでいるように見える。

忠太夫「お菊、かくさずに白状してお殿様

に御慈悲を申し上げろ」と尻を押す。

お菊「ハイ御殿様のお仰せを承りましたが、夫れは誠に意外なことで御座います」と少々頭を拾げて恐る恐る応える。

忠太夫「お菊、嘘を吐くな、お前がお皿を打ち砕いたのであろうが」

お菊「ソナ無体なことを申されても、私はい向存じませぬ」と頭を横に振る。

忠太夫「まだ嘘言を申すか、盗人猛々しいとはお菊ッ、其の方のことを申すのだぞッ」

お菊「ハイ何と仰せられても、私は真実に何も存じません」と頑強に否認する。

播磨「お菊、忠太夫が予に其の方がお皿を紛失せしめたと申して居るぞ」

お菊「お情け無う御座います。私は何も存じて居りませんのは真実で御座います」

播磨「忠太夫と其の方との言葉は違うではないか、忠太夫皿を持てッ」

と改めて証拠調べをしようとする播磨の肝裏を続んだ忠太夫は「しめた」と言うような思持ちで、お堂から紫に包んだ皿を持って来て、播磨の前に差し出し、更に播磨の指図でこの皿箱をお菊の前に置き、蓋を開けてから、忠太夫「お菊ッ、このお皿の数を読んで見よ」と威猛高になる。

一枚ずつ皿を取り出し、お菊の目の前へ並べる。お菊は青ざめた眼で微かな声で、その皿を一枚、二枚、三枚、四枚、五枚と次から次へ読み上げる。これが街の劇場であれば更に哀情に喰られるシーンではあるが、茲ではその形式を演出した訳である。九枚目を終り十枚目に入ったが、お菊は十枚とは言われず唯だシクシクと泣くのみである。忠太夫は皿箱を逆さに振って、中味をお菊に見せたが、その箱の中には何一つ残っては居ないのを見定めた上で、

忠太夫「御殿様、この通り大切なお皿は九枚で御座います。残る一枚は御座いませんのは、確かにお菊が壊したのに相違御座いません。何卒御慈悲をお願い申し上げます。またお菊のお取調べを私に仰せ付け下さるようお願い申し上げます」

と暗に取り調べを口実に、邪恋の意趣晴らしをすると同時に、お家重要な南蛮皿一枚の紛失、打ち砕いた罪科をお菊に浴びせて暗殺して終うという世にも惨忍極まる策謀を胸底深く刻み込んでいたようであるが、一方また主人青山播磨の方では、勿論お菊には未練があり旗本を辞退した後は、お菊と何処かで新世帯を持ち度い気持ではあるが、お家の大切

な南蛮皿一枚でも紛失したとすれば、第一祖先にしては申訳がなく、また親類一同に対しても何と弁解して可いのか、恋と家との二つの重大関点に直面して、身の置どころもないと言うほどに其の処置に当惑しているこの弱点に付け込まれて忠太夫の願い出を許して、自らお菊取調べを之れ以上進めるのは、自身の気分が混沌としている折柄ではあり、この際一応忠太夫の願いを聞き届けて遣ろうとすることにした。

青山播磨「では忠太夫の願いを聞き届けて遣わすから、良きに取り計え」

と言ひ棄ててお堂の奥に入って行く。普通の芝居ならば、青山播磨は青山鉄山と呼んで鉄山自らお菊を吊り責めするといふのであるが、今晚の新々皿屋敷では播磨を善人として忠太夫を悪者に取扱うことと大いに相違しているのは、世の変遷から来る実演だろうと一同は漸く納得したような面持ちであった。さてこれからは、この劇の正念場である。

お菊の吊し斬り

我が意を得たり顔の忠太夫は、惨忍な意中を顔面に現わし、袴を腰の上まで捲り上げ、刀差しの白布で襷をしてお菊の背後へ廻る。

そして俯向いているお菊の後ろ髪を掴んで身体を起し、縄尻をく引くと、引かれたお菊はヨロヨロと後下りする。その儘古井戸の側まで引摺り、余った縄を側の松の枝に振りかけて力任せにその縄を手繰ると、お菊の身

体は一回転して、古井戸の上に吊り上げられた。お菊の長い黒髪は乱れ、前に頭を下げ着物は自然に乱れ、両足は上下に微かに動いている。後手に縛られた白魚のような両手は帯の上から背中の上半身は、明らかに会員の眼

に一切に覗かせる。いよいよ吊り責めが演ぜられるのである。

忠太夫は顔面に朱を注いだように真ッ赤になり、右の手に握りしめた庭掃き箒で、力を籠めて腰の辺りからお菊を四、五度打ち据える。その度ごとにお菊の身体

は宙に吊られて微かに動く。お菊は青ざめた顔に両眼が血走り、口を堅く結んで、この惨酷な仕打ちにも苦痛に耐えている濃艶な凄惨な場面ではある。

忠太夫「お菊、痛ければ早くお皿を紛失させたと白状しろ」

と叫びつつ何度も所構わず繊弱なお菊をビシビシと打ち続け、真に迫る責場である。

お菊「おのれ!!! 忠太夫奴恋の叶わぬ意趣返しに、よくも、私をこのような目にあわしたな、人に恨みがあるものか、知らせて呉れよう。」

吐く息も苦しく忠太夫を睨み据え無実の罪に陥し入れら



れる無念の齒噛みで恨みごとを吐く。目には熱い涙を顔一面に流している。暫くすると身体の重さと藻掻く苦痛とで、吊られた縄目が深く身に喰い入り、今にも吐く息が止まりそうである。それには頓着なく忠太夫は、続けさまにお菊を打ち叩くので流石に氣丈夫なお菊も、遂に首を垂れたまま殆んど動かなくなつた。忠太夫は腰の刀を引き抜き、お菊の右肩のあたりから吊り縄ともに無惨に斬り下げる。同時に井戸の底でドボンと大きな響を立ててお菊の身体は哀れにも井戸の底深く消えて行つた。瞬間心の迷いかも知れないが淡い白煙のようなものが、井戸の上にフワリフワリと舞い登って来る。會員一同は思わず恐怖の念に駆られ、肌粟を生ずる感じがしたのであつた。後で知れたことだが白煙と水音ともに忠太夫が井戸縁の後から線香煙火に点火し投石したものだ判り、演技の妙を語り合い一同はホッと息を継いだ。

忠太夫の狂死

この新々皿屋敷の演劇も二時間半目には、いよいよ千秋楽に移ることとなり、會員一同は本堂に集まり暫く休憩の後、最終の実演に入った。舞台は本堂正面に忠太夫が座わりそ

の左手に妻の操が座って、酒宴の場となる。剥げた黒塗りの銘々盆の上には二、三品の酒の肴があり、欠け徳利にお茶を入れて忠太夫の前に礼儀正しうする。

忠太夫の妻操「旦那様、さぞお疲れでしょう。何も用意して御座いませんが、粗酒なりとお召し遊ばしませ」

と先ず御辞儀して置いてから、徳利のお酒を注ぐとすると

忠太夫「ああ大分疲れた。奥のお酌で一寸一杯過ぎてさうかのう」と平静の様子、

お菊を古井戸の中に斬り捨ててから自分の屋敷へ帰った忠太夫は、多分吐く息も静まつたらしく何気ない素振り、妻の酌で晩酌を呑むことにした。呑むほどに次第に酔いが廻わり、五本目の徳利も空にして終つた。酔うにつれて地金を現わし、両眼を吊り上げ真ッ赤な顔に、吐く息も荒くなり、酒癖の悪いと言われる本性を現わして来た。遂に酔眼朦朧となり、その精神にも亦異状を来たした様子を見せる。

忠太夫「奥の背後にお菊が座っているが見えないか」

と突ッ拍子もないことを口走るので、驚いた操は後を向いたが何ものも見えない。

操「旦那様、何も御座いせんが……」

忠太夫「ソナ馬鹿なことはないぞ、現に血塗ろになつたお菊が恨めしそうな顔でコチラを睨み付けているではないか？」

氣味悪くなつた操は、怖々ながら再び後を向いたが、相変らず何物も見えないので不思議な顔付きで

操「旦那様、ほんとうに何も見えません。誠に不思議なことで御座います」

忠太夫「ソナナことがあるものか？ 今も彼の通り、コチラを睨み付けているじゃないか、嘘を申すな」

と強く叱り飛ばしたので、従順な操はこの上夫に逆うのを遠慮して黙っているのを眺めた忠太夫は、ますます自暴氣味になり独酌で呑んでいたが、よろめきながら起ち上り、前のお膳を蹴る。操の横顔を平手で殴る蹴るの狂暴振りとなる、その上抜刀してお菊の亡霊の追い払いに夢中となる。危険を感じた操はその急場を遁れ出ようとして右膝を立てたところを、忠太夫は、その背後から操の身体に組み付きながら、

「おのれ、お菊逃げるのか？」

と叫んだかと思うと、操の両手を操の締めていた桃色の腰紐を手早く解いて高手小手に

縛り上げる。後手に縛られた操は片膝で中腰となり、前に身体が崩れ少しく仰向いて忠太夫の顔を見る。

操「旦那様、妾はお菊ではありません。妻の操で御座います。何故妾を縛るんです。妾は何も旦那様のお言葉に叛いたことは御座いませんのに……」

と途切れ途切れに弁解やら恨み言を言う。忠太夫はますます憤怒の声も激しくなり、

忠太夫「お菊、拙者を恨らむのは逆恨みだぞ、思い違いするなッ」

と怒鳴りながらも操を引き摺り、仏壇の側の柱に立縛りにする。何の訳も解らず柱に縛られた操は、黄色赤格子縞の着物の裾前もはだけ、赤い長襦袢から白い両脚をさらけ出し身体を微かに動かしている濃艶な姿は、また一しお哀れを催している。そして忠太夫は操を中心として、その周囲をグルグル刀を振りながら頻りに宙を切っている。操は生きた心地もなく、唯だ怖れ戦き真蒼な顔で震えている。

忠太夫は相変らず狂乱狂気の狂暴さを発揮して盛んに堂内を暴れ廻っていたが、最後に自らの頭を椽側の太柱にブチ付け悶絶してしまった。その惨状を眼前に操は縛られた縄を

解こうとして身を藻掻いているところへ、智海和尚の案内で参堂したお菊の夫三平は急いで操の縄を解き改めて事情を聴くと、何うやら妻のお菊は、忠太夫の手にかかって悲惨な最期を遂げたのではあるまいかと言うことが薄々明らかになったようだ。勿論従来の演劇には、こんな狂乱場面は見られなかったが、勸善懲惡の現代世相が反映して、特に監督が創意でこの惨劇シーンを挿入して千秋楽にしたことであろう。こうして約三時間に亘る責めの実演を試みた会員一同は漸く解放され、和やかな気分にあふれつつ懇談したが、その中で加藤監督兼主演は一同に慰労の言葉を述べた後で、

「お菊の夫三平が最後に顔を出し操を救ったのかというと、実は三平は郷里を出る晩、不図可愛い妻のお菊が血塗れの姿で枕の前に現われ、糸よりも細い哀れな声で何事かを物語っている有様を見せ付けられたので、朝早く出立、その晩最期の場面に駆せ着けたものでお菊が三平の前に現われた時刻は恰かも、お菊が忠太夫のために松の木に吊し上げられ、両手を縛られ惨酷な目に逢って遂に井戸の中に斬り殺された時刻であった。そこで不審と不安から主人青山播磨屋敷を訪れたが不在の

ため、隣屋敷で教えられ、茲の用人忠太夫屋敷へ辿り付いたところ、その妻操が柱に縛られ、忠太夫が絶命しているのに驚き、操に事情を聞いたもので、操も忠太夫の酒癖の悪いのと今夜の狂態から推量して、或いはお菊が惨殺されたのでは無かろうかなどと話し合っただけで、果してお菊が惨殺されたのかどうかはまだこの時刻には操も知らなかった。三平が今少しく早く現われて居たとすれば、或いはお菊もあのような惨たらしい殺され方から免がれたであろうと思われるが、ソコは芝居であり、我等の責めの実験と研究に今後注意を要することだろう」

と長々しい説明をしたのであるが、会員一同も随分疲労しているので、この辺で千秋楽を告げることにした。

(終り)

三条春彦画
極彩色オフセット印刷

時代物責絵巻 画帳

(詳細解説文付き)

八枚一組 三〇〇円

略号「時代」

〔告白・体験〕

狂 愛 の 布 地

野 中 信 敏

私はこれから、あまり世間に類例がないであらうと思われる、まだ人に知られていない秘めたる生活の一面について、出来るだけ、正直に、ありのままの事を発表しようと思います。これから書く事は世間の一般人が聞いたなら多分、おかしい奴だと思ふにちがいない。しかし、奇巧の読者諸君の中には良く理解してくれる人もあらうし、私と同じような気持をもっている方には、何らかの参考となり、それらの方の投稿の一助とならん事を願ひ、小心者の私が勇気を出して発表することになりました。

私は女性の和服その中でも長襦袢、お腰、

しかもネルのような柔い、ふんわりした感触のする布で仕立てられたものに非常な愛着があるのです。私は内気で小学校に行っていた頃も友達もあまりなく、一人で過ごす事が多く、その頃からネルのような布の感触が好きで、夜寝る時、そのような柔い布を触らないと寝られなかったものでした。

近所の同年配の女の子がビロウドやネルの服を着ているのを見ると、それをさわって見たくてなりませんでしたが、内気な私は他人のように気がるに遊び仲間に入ることが出来なかったので、さびしい思いをしたこともありました。このように私の小学校時代はネル

のような柔い肌ざわりの布だけが狂愛の的でありました。それが女性のお腰、特にネルのお腰に狂愛の的が変っていったのは、次のような事情からだと思っています。私は内気な為女性と交際する事が出来ず、その代り徐々に女性の和服に対して普通の人が女性に対すると同じような気持を持ちはじめた中学の終りの頃の春休みに、知り合の所に行っていた時の事です。雨が降った日で外に行けないので、家の中でかくれんぼをしていた時、その家の小学三年生の子供と押入に入り私が奥の布団のある方に手をのぼした時、柔い手触りの布が手に触れたので、どんな布だろうと思ひ押

入の外へもって出た時、女中さんが入ってきて、「奥様のお腰なんかさわるものではないありませんよ」と言ったので私はびっくりして、その手にした柔い布を見ると、桃色のネルに白い布が縫い付けてありました。私はその時の女中さんのお腰という言葉が頭からはなれなくなり、知り合の家にいる間、たびたびその押入に入りそのネルのお腰を手で触ったり顔をお腰の中にうずめたりしました。その時の女の甘い臭は、ますます私をネルのお腰狂にしていきました。またその後、物干場を見てみると、女中さんのらしい赤ネルのお腰が干してありました。私はそれを見た時、たまらなくなつて、そのお腰を手で触って見ました。私が女性のお腰に心が魅かれるようになったのは、幼少のころから柔い布が好きであり、内気なため女性の代りにその着物に女性を投影していたこと、前記の事件等の為だと思ひますが、何んと言つても知り合の家で桃色のネルのお腰を触り、その柔さと臭に恍惚となったことが、一番大きな理由だと思います。

その内私は完全な女性のネルで出来た肌着のマニヤになっていきました。また雑誌等に「お腰云々」という所などが目に入ると何回

も読みなおしたりするのです。学校の帰り道にはよく一人だけになり、遠回りして物干場のある所を通り、干してあるお腰を眺めるのが楽しみでした。その頃はまだ多くのお腰が用いられたらしく、しかも、ほとんどがネルのものでした。私は以上のような訳でネルのお腰以外のものにはあまり興味がありません、が、色々の本を見ると富士絹のお腰や襦袢も柔くて、大変肌ざわりが良いそうですが誰れかその感触を体験された方があればおしえて下さい。また冬、風のある日なんか和服を着た女の人の裾が風でめくれて、あのなまめかしい桃色のネルが見えると、私の胸は高なり、目はそこに吸いつけられてしまふのでした。

私はそれらを見るたびに、一日中柔いネルを直接肌にまとうことができていいなあと、うらやましく思ひました。そして和服の女性を見るたびに桃色のネルのお腰が肌にまとわれているにちがいないと、思ひました。それは私の家では誰もお腰をしなかつたので、和服を見るとすぐにお腰が頭にうかんだのでしよう。

十七才の頃、半年ほど、住込みの女中さんで二十九才ぐらいの絹代さんという人が来ま

した。彼女は家の中では大抵和服を着ていました。私はそれから彼女がどんなお腰を着用しているか見たくてたまらなくなり、彼女が家の中を立ち廻る時、裾の所を注意して見ていました。来た時は九月の残暑のある時でしたので、まだ私の好きなネルのお腰はまいていないだろうと思ひ、特に注意して見る事はありませんでしたが、十月の中頃となり学校の帰りに近所の家にネルのお腰が干してあるのが見られるようになると、私は絹代さんもきつとネルをしめていられるだろうと思つて彼女が台所の縁を上り下りする毎に裾の所を注意して見ていたのですが、お腰が短いのか、またはしめていないのか仲々判りませんでした。大きき開いたとき、長襦袢の間から濃い桃色の柔かそうなネルのお腰が見えしました。私の想像していた通り、絹代さんはネルのお腰を巻いていたのです。それから私はますます絹代さんが好きになり、淡い思慕の気持を持つようになりました。今考へて見るとこれは私の理想像の女性のようにも思われます。しかし何んといつても桃色のネルのお腰がこの気持の主役になつていたことは否定出来ない事実です。

絹代さんのお腰を見てから、四日目の午後

私が絹代さんの洗濯物を下す場所を見にいくと、絹代さんが他の洗濯物との間に外から見えないようにして、あの私が見た濃い桃色のネルのお腰を干している所でした。私は絹代さんがいなくなり、お腰が少し乾いた時分、そのそばへ行ってみました。

ああ、やさしい絹代さんの肌にまかれていた、柔い桃色のネルのお腰！

私はそれを見ながら高ぶる心をどうすることも出来ませんでした。私はそれから絹代さんの肌着類が見たくてたまらなくなってきました。ある日、家の者と絹代さんが出かけて、私一人で留守番をすることになった、悪いと思いながら彼女の衣類の入っている押入を開けてみると、布団の上に普段着が置いてあり、私がそれを取ってみると、あの一度手にしたいと思った濃い桃色のネルのお腰がくるくると丸めて置いてありました。ついに私は絹代さんの白い柔肌にまとわれたネルのお腰に触れることができたのです。その時の私の気持は、お腰フェチシストの方なら十分理解して下さいましょう。私は震える手でその



お腰をまいて、着物を着て目をつぶり、部屋をゆっくり歩いて見ました。すると歩むたび

に下半身にネルがからんでその柔い肌ざわりは何んとも言えないものでした。私は家の人が夜まで帰ってこないで少し安心して、そのままの姿で絹代さんの行李を開けて上の端や布反物をのけていくと赤いネルのお腰が一枚、これはまで新しく一度を洗ってない見え、そのふんわりした柔かい手ざわりは私をして恍惚境へさそい込んでしまいました。その他に桃色のネルが三枚あり、これは何回も洗ったと見えて色がすこし淡くなり、柔かさもあまりないようでした。でも、私が締めている方のお腰の柔かさは、どう表現して良いか判りません。これはネルのお腰をまとわれた女性の方でしたら十分に判るでしょうし、また、私と同じネルのお腰の好きな方でも同様に判るでしょう。

私は絹代さんのお腰や、ネルの肌襦袢等を部屋中に広げて、その色彩と感触に恍惚となっていました。しかし絹代さんや家の者に見つかってはいけないと思い元通りにしはじめましたが、このままの姿を絹代さんに見せて理解してもらいたくない気もありました。もし理解してもらえなかったらと思いきりあきらめてしまいました。けれど、あの濃い桃色のネルのお腰は、あまりにも肌ざわりが良かった

ので脱ぐ氣に仲々なれませんでした。でも内氣な私は絹代さんにこのお腰を下さいなどは、どうしても言えなかったので、それを脱いで押入の中にしまいました。このためお腰に対する欲望はつのるばかりでした。

私は氣が小さく内氣な為絹代さんにネルのお腰を下さいということも言えず、その内絹代さんもいなくなり、私の家からすっかり見られなくなり大変淋しい思いをする事になりました。これ以来ますますネルのような柔い布で作られた女性の和服の肌着類に、心が魅かれ、絹代さんの肌につけられ、甘い体臭のある桃色のネルのお腰をもて遊んだことが、思いだされて今一度女の人にまどわれたあの甘美なネルのお腰が欲しくなりましたが、内氣な私はどうすることも出来ず悔みました。

その頃、私はよくやさしい三十ぐらいの女の人が桃色のお腰をまどわれ、その人が私にネルのお腰を締めてくれ、ネル地のたくさん入った押入から私に一番柔いネルを探させてそれでお腰や肌襦袢を仕立てるのを手伝うというような妙な夢をよく見ました。

この当時（昭和二十八、九年）はネルのお腰を締めている人は主に三十ぐらいの人で娘さん等は私の住んでいる西宮の近辺では、ネ

ルのお腰等は締めておらず、大抵洋装でしたので私はたまに着物姿の娘さんを見ると、きつとネルのお腰をしているだろうと想像してその後姿を見て、妄想をするのでした。私は赤線地域の物干場に行くのが楽しみでした、というのはそこには自由に出入り出来、いつも赤や桃色のネルのお腰が干してあったからです。私はそれを眺めながら、そのお腰を数枚分けてもらったら良かったのに、残念に思っています。今日では洋装が多くなり和服が見られなくなるのは本当に淋しい事です。時々仲居さんのような人がネルのお腰を締めていられるのが見られると、その人に妙な懐しさを感じるのです。絹代さんが去ってから、私は家々の物干場にネルのお腰が干してあるのを見るのが楽しみでした。しばらくはそんな毎日を送っていたのです。その内今一度ネルのお腰を手にする事が出来ました、それは私が十九才の頃です。田舎の親類にいった時、その私より四つ年上の従姉が着物を着て井戸端で洗濯をしているのを見ました。裾から私の好きな桃色のネルのお腰が出ているのを見た時、私はあの妖しい欲望につかれ手に取って見たくなりました。

その日の夜、風呂場に行くと脱衣場にあの

昼間見たお腰が丸めて置いてありました。私は久しぶりに、お腰の感触にひたりました。それを私に分けてもらおうと思いましたが、従姉とむかい合うと、そんな勇氣もなくなり普通の話話を話合うだけに終ってしまいました。内氣な私は本当にもうすこし氣が大きかったらと思いました。私は何故かネルのお腰を締めている女性は皆美しく、やさしい、真に女らしい人のような氣がするのです。普通の人なら、なんて馬鹿なことだと思われるでしょうが、私には柔いネルを締める人はきつと心もやさしい人であろうと思われるなりません。私はお腰のことを、もっとよく知ろうと色々な本を読んだ所、お腰にネルが用いられたのは大正時代の頃からのようです。その理由として私が考えるには、暖いこと、紡毛織物特有の柔い肌ざわりにあると思います。それは女性が直接肌につけた毛織物はフランネルであった、と書いてある書物を読んだことがあるからです。

ネル地には本ネルと綿ネルがありますが、私が今まで触れたネルでは、綿ネルが肌ざわりも良く、また大抵ネルのお腰は綿ネル地のものが多く見られるようです。また色は何んと言っても、桃色またはトキ色といわれる

綿ネルでしかも平織のものより斜紋織の方が柔くて私は好きです。

私はお腰についてはその色、綿ネル地の柔さの度合、お腰の上部に縫いつけてある白い晒の中ぐあい、汚れぐあい、等に注意を払って見るのです。これらが一つになり私をかぎりないネルのお腰狂崇へとかりたてるのです。私の一番好きなお腰は白い晒の所に紐のついていない桃色の斜紋織の綿ネルで、その布耳の所に青い色の斜めの線が入ったものです。このネル地の両端のいわゆる布耳の色は私にとっては大切なのです。それはこれにより女の人の裾からチラッと見えるお腰がネルで出来たものかそうでないか、を見分ける事が出来るからです。

私は呉服屋さんにネルが売られているのを見ると、すぐにどんな女の人がお腰にしているのかしらと思ったりするのです。だから私は桃色の綿ネルはお腰の為の布だと考えています。私は女の人の肌につけられたお腰をたくさん集めて、それらを私の体に直接つけてみたいのです。しかし現在ではネルのお腰はあまり見られなくなりました。ほんとに淋しい気がします。あのネルの肌ざわりが忘れられず呉服店で桃色のネル地を買って来て自

分で秘かにお腰を仕立てたり、今でも神戸や大阪の一部の店では仕立上りのお腰を売っている所があるので私はそこで一ばん良いネルのお腰を買ったりしたのが、五、六枚あり、寒くなるとそれを体に巻いて眠ります。そしてあの絹代さんの汚れたお腰の感触を思い出すのです。それにしても私は今少し早く生れたら良いと思います。何故なら大正の終りから昭和十年ぐらまでは、その時代の本、とくに和裁の本には女性の下着の用布して綿ネルが多く用いられているように書かれていますからです。その頃はきつと若い女の人でも好んでネルのお腰を締めたことでしょう。特に日本髪を結った二十八、九の芸者のような人が長襦袢の間からなまめかしく桃色のネルのお腰をチラつかしている所や、着替るためぱらりとお腰を脱ぐ所などが見られたにちがいないと思います。うらやましくなるのです。私は今一度着物が多くはやり、ネルのお腰が復活したなら、どんなに良いかと思うのです。

ああ、なまめかしい桃色の綿ネルの感触！これは一度ネルの感触を味った人でないと判らないでしょう。私はこの恥しい思いを人に知らすことなどとても出来ないと思ったので

すが、奇巧の読者のかたに判ってもらおうと思ひ勇氣をだして書いてみました。私はこの他人に害を与えない行為は許される事と思います。私はこれから干してあるお腰を見たり、呉服屋へネルやお腰を買に行こうと思っています。でも女の人の肌にまわられたネルのお腰が欲しくなりません、読者の中で気の小さい私の思いを理解して下さる女性があれば、大変うれしい事です。でも私は洋装の女性には何んの興味もわきません。私の好きな女性は着物を着て常にネルのお腰を締めている人です。将来私が結婚した時、妻が私の氣持を理解してくれ、ネルのお腰を仕立てるのを手伝ってくれたり、汚れたネルのお腰を私に巻いてくれたりしたら、どんなに幸せだろうかと思っています。

私のフェチシズムは幼少のころから柔いネルが好きでもあった事と、長じてくるに従いそれが女の肌着であるお腰に用いられたことを知ったからだと思っています。もし女性の読者の中でネルのお腰をされている人がありましたら、何故ネルのお腰をされるのかおしえて下さい。これで私の奇妙な嗜癖の体験告白を終ります。他のネルやお腰フェチシストの方々に参考となれば幸いです。

(終)

代理部分讓案内

略号にてお申込み下さい

○股間縛法悦境裸身

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(ぬこ) 絹川 文代

○禪裸女血斗場面

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号(らは) 絹川、大塚

○吊り打ち責め

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(やり) 関谷富佐子

○相撲禪の女

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号(そい) 東浦ひかる

○只今浣腸実施中

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かみ) 東浦ひかる

○強制空気浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かく) 東浦ひかる

○百CCポンプの浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かな) 東浦ひかる

○浣腸責の極地

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かむ) 東浦ひかり

○大の字逆さ吊り

大中判 三枚一組 四〇〇円
略号(つり) 梨花悠紀子

○立木宙縛り

大中判 三枚一組 四〇〇円
略号(くた) 梨花悠紀子

○凄惨乳房責

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(とい) 梨花悠紀子

○妊婦の緊縛

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(にむ) 永田 節子

○全裸のお仕置

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(すお) 東浦ひかる

○血紅女体自害

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(ひち) 大塚 啓子

○女体切腹マンダラ

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(あま) 甘木 春子

○悲愴女体自決

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(ひい) 大塚 啓子

○哀艶女体割腹

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(かつ) 梨花悠紀子

○凄惨血紅女体立腹

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(ひさ) 大塚 啓子

○バンド着用フオート

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(めい) 梨花悠紀子

○バンド着用縛(後手)

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(めろ) 梨花悠紀子

○バンド着用縛(前手)

大手札 四枚一組 三〇〇円
略号(めは) 梨花悠紀子

○女性の六尺禪

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号(ろく) 大塚 啓子

○ゴム・マニヤ

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(こむ) 梨花悠紀子

○メンス・バンド

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号(めす) 梨花悠紀子

○ゴムカバー着用縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かは) 大塚 啓子

○脱がされたバンド

大手札 二枚一組 二五〇円
略号(めに) 梨花悠紀子

○アテゴムの猿ぐつわ

大手札 二枚一組 二五〇円
略号(めほ) 梨花悠紀子

○変態強盗侵入

大手札 12枚一組 一〇〇〇円
略号(こと) 絹川 文代

○和洋争斗場面

大手札 六枚一組 五〇〇円
略号(らり) 田中芳代、外

○裸女争斗場面

大手札 12枚一組 一〇〇〇円
略号(らし) 田中芳代、外

○両足首括り逆吊り

大中判 五枚一組 一〇〇〇円
略号(さか) 梨花悠紀子

○逆吊りの女体折檻

大中判 五枚一組 一〇〇〇円
略号(させ) 梨花悠紀子

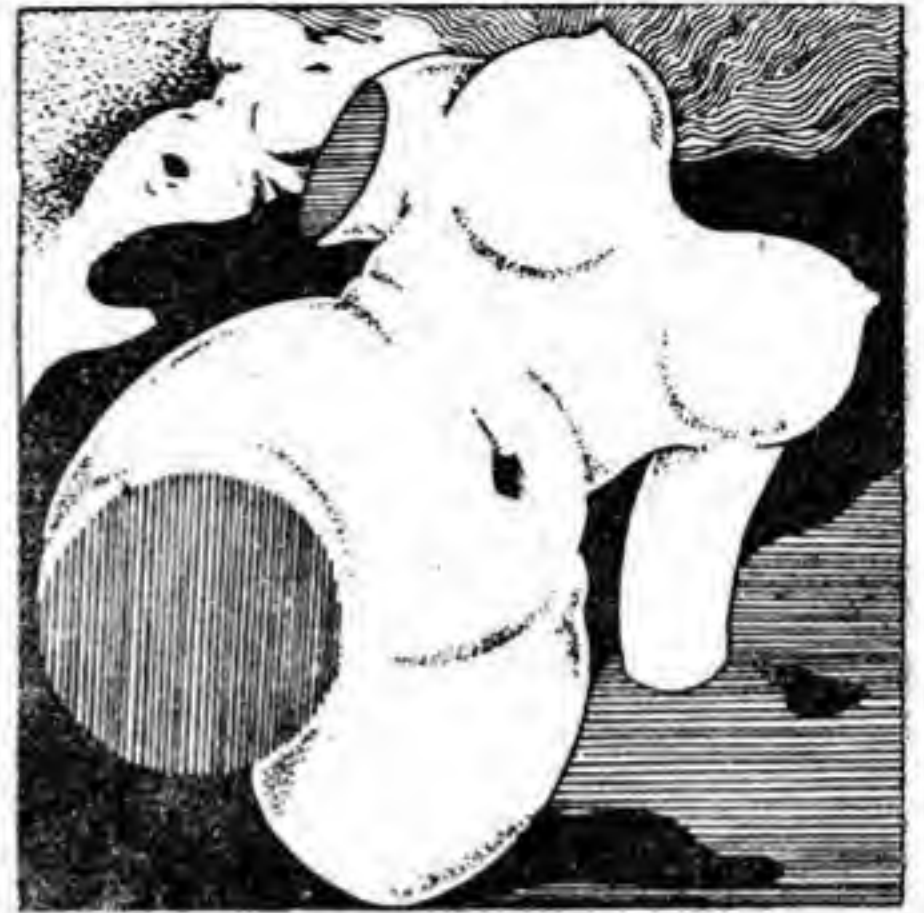
○手足揃逆宙吊り

大中判 五枚一組 一〇〇〇円
略号(さと) 梨花悠紀子

○緊縛女体撮影風景

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号(むら) 大塚 啓子

☆全部在庫しておりますから、御注文次第、厳重密封の上第一種にて急送申し上げます。



「妊婦フォトに関連して」

影 浦 栄

(一) 長かった五年間

「臨月腹フォト」拝見しました。いろいろと難しい条件もあり、完全とは言えないながら私の長い間の夢を満たした作品であることには間違いありません。

妊婦のヌード写真の提案はたしか三十三年八月号、羽村京子さんの「浣腸と妊娠」が最初であったようです。同じ年の十月号にも羽村さんが「続・浣腸と妊娠」を書かれ、ご自分の体験も混じえて再び妊婦ヌード、妊婦のストリップを提案されていましたが、その文章が願望と空想で満たされているだけに、そ

れから五年たった現在、見事な臨月フォトが出現したことに全くある種の感慨をもよおさずにいられません。

この羽村さんの文章に刺戟され、私は「女性のお腹に関して」という一文を書き、三十四年三月号に掲載していただきました。

女性のお腹、特に妊婦に関して私なりの興味を綴り、特に興味のある医者や助産婦による診察の場面を文学作品の中からスクラップしたのですが、その時挿絵として診察台に横たわっている妊婦のすがたが描かれていました。和服の前をはだけ下腹の前に手を組んで眼を閉じてお腹の触診を待っている妊婦、

これから触診しようとする医師、それを眺めている看護婦という構図で簡単な絵ですが、妊婦のポーズに何か生活感がにじみ出ていて印象的でした。前記の羽村さんの文の挿絵にもお腹の大きいストリッパーが出ていましたが、妊婦が登場したのは、この絵がはじめてではなかったでしょうか。

その後、五月号で羽村さんが三度目の提案をされましたが、その中で私の文の中から、想像で書いた妊婦の診察場面を女性の心理をうまく捉えてであると述べられていたのはうれしいことでした。

その時、羽村さんは「世界写真年鑑一九

五八年版」の中のフランスの女流写真家、アグネス・ヴァルダの妊婦のお腹をテーマにした写真を紹介されました。そのアグネス・ヴァルダは、今年の六月アートシアター・チェインで公開された映画「五時から七時までのクレオ」で日本にデビューした女流映画監督その人のようです。（映画に関してはアニエス・ヴァルダと統一してあります）

異色作としていろいろと映画ジャーナリズムを賑わせたヴァルダですが、彼女にこんな写真家としての作品があることは誰も指摘していません。こんなところに、歳月の移り変りの早さを感じると共に、すぐれたパイオニア羽村京子夫人に改めて敬意を捧げる次第です。

それから三年余り、羽村さんの活動も少くなり、三十六年三月号「蛙腹物語」という上手なフィクションがある以外、以前に比較してパイオニアの立場を下りてしまわれたように淋しい思いでした。口絵や挿絵で妊婦が出て来る場合は決して切腹や縛りの惨酷場面ばかりであり、私のような羞恥やムードを好む向には必ずしも喜ぶべきものではありませんでした。

ただ読者通信などに散見される何人かの方

々の願望が何時かは……という期待を抱かせてくれるものでした。

今年に入ってからようやく機運盛り、安原さゆりさんの画期的な試みでついに臨月腹フォトが完成したのは、何と云ってもうれしいことです。また九月号の口絵に「妊婦の浣腸二題」という四馬孝氏の作品が載りましたが、これも今までの傾向とは全くちがったもので特に助産婦を配したこと（浣腸しようとしている助産婦の表情がいい）蒲団、ネグリジェなどがうまく描きこまれ、妊婦の表情にも羞恥感が出ていることなど素晴らしい作品でした。こういう可能性をどんどん伸ばしていただきたいものです。

正直に言って羽村さんの最初の提案以来、本当に長い五年間でした。これからも、九月号で瀬沼氏の言われるように、毎月何か妊婦についてのものを一つ位はお願いしたいものです。

この五年間、私個人としてもいろいろな出版物から私好みの方向で、こうした関係の写真や記事を探しつつ来てました。

一応マニヤの方々の何かのご参考までにと、思い目ばいしものだけを幾つか報告しておきます。

妊婦といえば、どうしても家庭向きの妊娠出産の実用書でしょう。これに関しては主婦の友社のものが豊富な写真を沢山載せています。羽村さんも前に取上げられているようですが、妊娠したお腹の完全な写真は「妊娠と安産」で見ました。お産の進行に伴う注意、無痛分娩の実際などが写真をもとに解説されそれぞれお腹の写真です。無痛分娩の時、呼吸法に伴ってのお腹のふくらみ方や、マッサージ、圧迫の仕方など変化が多いので最初眺めた時は全く目を奪われました。私の好みから言って最も印象的なのは、助産婦さんにマッサージしてもらおう——という説明付きで寝台に仰臥している入院した妊婦が上にかけてある白い蒲団をまくり、寝巻をはだけ、大きく張ったお腹を出しているのを、助産婦というより、まだ幼な顔の見習看護婦のような女性片手で静かにさすっている写真です。

また同じ患者が縞模様の浴衣地の寝巻のまま仰臥し寝巻の上から自分で自分のお腹をマッサージしているのと、お腹をすっかりはだけて、腰の辺りを両手で圧迫している写真、それぞれあきらめきったような表情がはつきり出ているので興味深いものです。

同じ出版社の「妊娠、お産百科」も多量の

グラビア頁です。この方は妊娠して病院を訪れてから出産まで、一組のご夫婦を順を追って撮っているのです。診察の場面が多いようです。マタニティ・ドレスを着た若妻が病院へ行き、血圧の測定、体重の測定などが看護婦と一緒に、診察台へ寝て洋服の前をはだけてお腹にラップ型のトラウベ式聴診器を当てられてゐる。また向う向きに横臥して骨盤を計かられている。和服の前をはだけて看護婦から腹帯を巻いて貰っている写真など連続的に病院という独特のムードが感じられます。更に大寫しでネグリジェをはだけて真丸なお腹を出している同じ妊婦の上に若い男性の医師がかがみこみ、丁度お臍の下辺りにトラウベを当てているのがありました。トラウベの先が当たった部分がポックリへこんでいるのとじっと目をあけている妊婦の表情がよくわかります。

さて、この二種類の書物に出て来る妊婦の方に共通することは、顔の表情がはっきりわかることです。お産は決して痛いものではない……という本の主旨から言って安心している表情を出したのかも知れませんが、進んでモデルになって立派なお腹を見せている方々のこと、モデルになることを承知された

事情などを、ふと想像してみることにあります。

他の出版社の実用書、又は付録などを見ても、部分的なお腹の写真は出て来ても、妊婦の写真の出ることは余りないだけに、今あげた主婦の友社版について特にメモしたわけです。もちろん産婦人科の専門書を見れば医者側の側からの診察や治療の方法、触診の場合の順序など写真や挿絵入りで書かれているのですが、これには私の求めているムードなどは求める方が無理でしょう。

話が長くなりがちなので、この問題は後に回して先に進みましょう。

昨年の夏頃でしたが、O薬品が妊産婦向きの栄養剤の新聞広告に若い女性が身体に白布を巻きつけ、肩から露出した腕を大きくふくらんだお腹に当て、ニッコリしている写真を使用しました。どうもお腹が余りにも大きすぎるようでもあるし、ふくらみ方もあいまいで本当の妊婦かどうか私には識別できませんでしたが、その思いきったセンスは一寸ショッキングでした。但しこの広告はそれ一回で終りになったようです。

その他は、時折、新聞の婦人欄にあらわれる無痛分娩法の記事に挿入されている写真で

何人もの妊婦が帯をといて仰臥して一度にお腹をふくらませているところや、助産婦の指導を受けているのがありました。

産婦人科というのは、三流の週刊誌や月刊誌にとつては興味ある取材の対象であるようでよく写真や記事が出ますが、どれも内診だけを強調したものばかりですし、妊婦といえば、興味本位の分娩場面ばかりで、お腹や診察の場面は皆無といつてもいい位です。

そんな中で一昨年位分娩台にのつた産婦のお腹がきれいに出現しているのがありました。

たしか「ユーモアグラフ」の昨年の春頃の号でしたが「お医者さんは大繁昌という」タイトルのグラフで、町の医院に診察を受けに来た女性が待合室で待っているところから呼ばれて診察室へ入るところ、脱衣して医者の前に座るまで、聴診器を当てられたり、打診されたり横になったまま医者と会話している様子が次々と出て来ました。これは妊婦ではありませんが、医者を全く出さず、すべて患者だけを撮っている（もちろんモデルですが……）試みが面白いものでした。

小説の記述ではいろいろあるでしょうが、山崎豊子さんの「女系家族」から一箇所をあげるだけにしておきます。

長篇の前半が大分進行して、矢島家の当主が亡くなった後、妾があることがわかり、おまけに妾は妊娠している。遺産相続でトラブルが起っている三姉妹と叔母は、妊娠腎を発病している妾文乃の家へ見舞と称して押しかけ、本人の承諾なしに医者呼び、診察に立会うというかなり惨酷な場面です。

『看護婦を伴った医者が、座敷へ入って来ると、文乃はもう抗うことを諦めたように青くむくんだ顔を枕の上に仰向かせた。(中略)』

文乃は、一重瞼を見開き、縁なし眼鏡をきらりと冷やかに光らせている中年の医者顔の固い表情で見詰めた。

「じゃあ、早速診せて戴きましよう」

患者の緊張を解きほぐすようなもの柔かさで言い、看護婦に持たせた往診袍を開けさせ、芳子は文乃の傍へ付添かける君枝の手を払い、身内のような甲斐甲斐しさで文乃の胸をはだけ、腰に巻いている帯を引きほどくように解いた。

浴衣の打合せから文乃の肌が露わになり、医者は聴診器を取って胸に当て、最初は内科の診察からはじめ、胸から次第に膨れ上がった腹の上に聴診器を当てて行った。

文乃は、今は羞恥もなく、露わになった胸

を大きく息づかせ、晒帯を取った腹部を醜く曝していた。(中略)

文乃は千寿の手を払い抗いかけると、医者は文乃の手を取り「興奮するのが、一番胎児に悪い影響を及ぼしますから、まあ、私にお任せなさい」と言うなり、看護婦に一番下のものを脱がせ両膝をたてて股を広げさせた。

(中略)

「さあ、ちょっと動かないで、静かにしてないと危いですよ」と言い看護婦に文乃の体を押さえつけさせると、医者は手馴れた様子で、腔に挿入した子宮鏡を覗き込み、腔内の色、ただれ、出血の有無を確認して行った。

叔母の芳子の眼に産婆のような露骨さがうかび、藤代と千寿の眼に、産婦人科医以外の者が見ることのできない、女の体の最も醜いあさましい姿を見る残念な欲望と陰湿な昂りが揺れ動いた。

「どうです、ここを押えると痛いですか」

医者は、子宮鏡を抜くと左手の指を腔内に差し込み、右手で下腹部を押さえた。文乃は脂汗をにじませた顔を硬らせ、固く眼を閉じたまま頭を振った。

「じゃあ、このあたりの工合はどうです、押さえると、妙な圧迫感を感じますか」

子宮と下腹部を交互に押し、子宮の大きさ、柔らかさ、異常さを診ると、文乃はまた額に汗をにじませたまま黙って頭を振った。

その度に、藤代たちの顔に血の色が奔り、眼に秘かな悦楽を娛しむような、なまなましい光が帯びた。(以下略)

女流作家特有のひややかな眼で女を眺めた大変リアルな描写ですが、大変残酷な光景でアイディア面の素材にもなるかも知れません。

今年の春、大映で映画化された折(監督三次隅研)も、この診察場面がシナリオに組み入れられ話題になりました。文乃を若尾文子姉妹を京マチ子、鳳八千代、高田美和、叔母を浪花千栄子という豪華キャストで、肌を見せるような場面のないのは当然ですが、診察を強要するのに抵抗した文乃がやっと横になつて診察がはじまると、部屋を追い払われた姉妹たちが隣室で診察の様子に耳をすましているカット、そして看護婦が文乃の下半身の方から採取した尿の試験管を取上げたり、器具が大写しになったりして、蒲団をまくって膝を立てた下半身がうつる。そこへ隣室からたまりかねて姉妹が突然入ってくる。文乃が悲鳴をあげて診察が中断される……という流れが執拗なほどのカメラで追われていました。

映画と言え、三十五年封切のスエーデンのベルイマン監督「女はそれを待っている」が産院の中にカメラをすえっ放しにした出産をテーマの異色作できびしい映画でしたが、分娩間近かの産婦を診察する場面など、医者がトラウベを当てたり触診したりする方をアップで撮って、お腹の方がうまく逃げていました。同じベルイマンの「処女の泉」でも大きなお腹をかかえた女中が重要な役をしていましたので、ベルイマンは妊娠、出産ということを通じて、人生の何かきびしいものを捉えようとしているのではないかと考えられます。テレビにおけるいわゆる医者もの、流行も今年のはじめ頃をピークとして下り坂になったようですが、やはり公共の媒体という面から「ペンケーシー」にも「キルデア」にも妊婦の患者は余り現われなかったようです。ただNHKの「看護婦物語」の最初の回が産婦人科の出来事で診察場面があったようですが見ておりません。

(二) 羞恥について

今迄、書いたことから私好みの傾向がわかるかと思いますが、はっきり言うことは出来ませんが、私の場合、女性の裸体、特に

お腹に関しての興味は診察や治療を受けている時の状態に対してのものなのです。平氣を装って大胆なポーズをとっている中年の女性でも、他人に自分の身体を自由にされ、言うがままに身を委ねている時には、どこかに微かな羞恥が浮ぶのは当然でしょう。その羞恥が私にとって魅力的であるのかも知れません。

三十五年五月号「浣腸ファンタジー」に描かれた若い婦人、三十五年十月号、「病院にて」三十六年十月号「導尿の羞恥にあえぐ」で告白された山岸悠子さんの体験など本当に心に残るものでした。

小さい頃からの、こうした感情を自分だけのものとして秘かに分析のつかぬものとして心にしまっていたのですが、やはり奇巧の中のある一文が見事に整理してくれたのです。

三十三年七月号、九雅節夫氏の「特異の角度から」がそれです。私が「女性のお腹に関して」の中で引用した若杉慧の「禁断」で妊娠させられた少女みふねが診察を受ける描写を九雅氏も既に引用されていることを後で知りましたが、そうした描写の総括として用いられた「臨床と羞恥」というサブタイトルが実に鮮やかに心に残ったのです。

その時以来、私が心の中に抱いていた感情の根ざすところは、羞恥ではないかと考えるようになりました。九雅氏の見事な分析力に敬意を表して今後このことばを使用させていただきます。

そしてまた最近になって、昨年亡くなられた作家外村繁の作品の中にそうしたことの裏付けが見当ることがわかりました。

外村氏は晩年、「きさらぎの記」みおつくし「濡れにぞ濡れし」など一連の作品で、氏の牛タ・セクサリスともいうべき性の歴史を格調高く語りあげ、他の追従を許さない世界を築き上げられました。これらの中に共通して外村氏の夫人が医者の診察を受けている場面が描かれているのです。

『得意先が代理店をしている生命保険にとく子を入れることになり、医者と勧誘員を伴って寓居へ帰った。とく子にその旨を告げると一寸困った表情を浮かべたが、仕方なく医者の前に坐る。問診を終り、とく子は帯をとく。医者がその胸を開き聴診器を当てる。』

とく子は着物を合わせ、医者の方に背中を向ける。医者がその背中を裸にする。とく子は胸を着物で押え、目を伏せた。とく子はさ

して羞恥の表情を浮べていない。むしろそんな表情を浮かべまいと強いて堪えている感じである。私は却ってかなり好色的な興味を覚える」(落標)

「医者の聴診器がとく子の背中を離れるとその後、極めて小さな黒子が光っているのを見つめる。私は何か貴重なものを発見したように思う。」

「一寸、おやすみになって下さい」

医者はとく子を仰臥させ再び腹部を開く、乳房はそれ自身の重味のためか、二つの緩い隆起となっている。その上に医者は聴診器をあて、更に手をあてて打診する。最後に医者は素早くとく子の着物を開き、腹部を触診した」(濡れにぞ濡れし)

「うむ心臓も少し肥大していますね。ではおなかを診せて下さい」

今日は、とく子は白いレースの下ばきの下に白い腰巻をしている。とく子はその紐をほどく。杉本医師はその下に手を差し入れ、とく子の腹部を押え、押え言う。

「便秘してやしませんか」

「はあ、少しその気味なんですが」

「便通はいつもよくしておいて下さい。後でお薬を上げますがね。」杉本医師は診察台上の

とく子を見おろすようにして言う」

(濡れにぞ濡れし)

「ある日産婆が来た。徳子は帯を解きながら事務的な表情で言った。」

「すみません。お手洗のお湯を願いますわ」

産婆は診察していた。妊婦の腹部というものはかなり猥褻なものである。一種の性欲衝動を感じた。妻の腹部の猥褻感からでない。そんな妻の姿がひどく、恥しかったからである。

産婆は徳子の腹の上にラッパの形をしたものを当てた」

(きさらぎの記)

(仮名づかい原文のまま)

「産婆が来る。産婆というよりは、助産婦といった感じで、年配も妻と同じくらいである。妻と話も合うらしい。」

私は手洗の湯を運んで行く。妻の脹らんだ腹部がすっかりはだけられている。子を孕んだ女の腹はかなりみだらなものである。

助産婦がその上にラッパのようなものを当てる。胎児の鼓動を聴診するのであろう。

私は気持をごまかすように言った。

「是非とも女の子がほしいのですがね、どちらか判りませんか」

「そればかりは、判りませんわね」

寝ながら妻がそう言った。女同志の気安さもあるが、その表情には少しの羞恥も感じられない」

(濡れにぞ濡れし)

目についたところを幾つか紹介したのですが、この外にも少年時代、妊娠している若い叔母の部屋に遊びに行っている時、産婆がやって来て診察がはじまり、それを無理に心の平静を保とうとしながら時折見ている思い出また薬を貰いに行った病院でガラス戸の間から小学校の女教師が診察されているのを見てしまった思い出など、幾つかが挿話風に、いろいろな作品の中にちりばめられているのです。前に取上げた診察場面など、同じかたちのままでちがった作品で取扱われているのです。それから考えてみると、これらの出来事が外村氏の性の歴史の中で大きな意味を持っているようです。

これは私だけの大変浅い分析なのですが、外村氏が女が医者の前に裸で身をさらしている場面に立合って感情の高まりを示されているのは、女性の羞恥を身近なものとして感じていたからではないかと思えます。

小学校の先生が袴を脱ぎ、帯を取って医者の前で半裸になり聴診器を当てられている姿を見た少年の気持を外村氏は次のように表現

されていますが、これこそ、そうした場合の感情の乱れを本質的に言いあらわしていることばだと私は思うのです。

「先生は胸の上でしっかり着物を押え、裸の背中を杉谷先生の方に向けている。姿勢は正しかったが、先生は目を強く伏せているので私には気づかないらしい。私の目に先生の裸の、丸い肩や、白い腕が見えてくる。」

不意に、得体の知れぬ感情が湧くのを私は意識する。少くともそれは先生の日頃の威厳が犯されている姿ではないか。そうしてそれが私には却って強く、先生の姿の女らしさを感じさせるのである。

つまり威厳とか、誇りとかを奪われて、一人の女の肉体が発するものが羞恥であろう。

そうして朝井先生の羞恥が、更に私の心身を染めたのではなからうか。

朝井先生は肌を入れ、胸を合わせて、立ちあがった。先生は桃色の腰紐をしめている。

それがまたひどく女らしい』

(濡れにぞ濡れし)

自分自身を女性の身に転置することによって感情が高まる。それは受動的で女性的であるかも知れないがこの作者は冷静に自己を分析していますが、すぐれた告白というべきで

外村氏の私小説の価値は、このように大胆なまでに自己を語っているところにあるのではないのでしょうか。

大分道草を食い、私の独りよがりな意見を述べましたが、私が望むのは羞恥という不思議な感情を大切に育てて、いろいろな方面に反映させて戴きたいということなのです。

最近の残酷ばやり、過度の露出ばやり、単なる見世物的なエログロ横行の中で、奇巧に発表される女性の方々の告白に私たちの心をつつものが幾つかあるのは、やはり赤裸な告白や手記の文章の中にも、きわめて女性的な羞恥が描かれているからなのでしょう。

文体や描写の工夫だけでは表現できないもの、それは真実の羞恥ではないのでしょうか。

私としては浣腸や妊婦に関する写真や挿絵や記事の中に、それをいつでも盛り込んでいたきたいのです。

そういう意味で私なりの意見を書き加えたわけです。今後も私は「臨床と羞恥」を求めて行くことでしよう。

(三) 私の提案

最後に妊婦フォトや浣腸について私なりのアイデアや希望をメモしておきます。

前にも述べたように嗜虐的なものよりも納得づくのものの方が私の好みです。

従来とかく前者の方向にあった浣腸や妊婦ものが最近後者の方向も加味して来たことは悦びです。人によって向き向きもあるので無理は言いませんから適当にバランスを考えて下されば幸いです。

浣腸や妊娠には当然医療が付きまっていますが、このあたりをなるべく本当の場合に忠実に表現出来たらと思います。

例えば、産科の最も初歩的な教科書にこんな箇所がありました。

「腹部の触診を容易ならしめるため、腹壁及び子宮壁の弛緩を謀らざる可らず。

腹壁を弛緩せしむるには、先ず排尿せしめたる後、仰臥位となし、股関節及び膝関節を屈指怒責を禁じ平静に呼吸せしむ。

子宮壁を弛緩せしむるには、平手にて静かに柔かく触診し子宮筋の収縮を防ぐべし。

若し触診中に収縮すれば、弛緩するを俟つべし。尚冬季には触診手を温め、夏季の発汗者には滑石末を撤布すべし。

妊婦の腹部の聴診の際は仰臥位とし、両下肢を充分に伸展して子宮壁と腹壁とを密接にせしめかつ室内を静かにすべし」

「分娩開始と判定したすべての産婦に共通せる最初の処置は、排便浣腸と導尿となり。直腸内の糞便蓄積は陣痛を弱くし児体の進行を妨げ、第二期には排出せられて不潔となすが故に自然便通の有無に関せず、石鹼水またはグリセリンの浣腸をなし、必ず便器上にて排便せしむべし。

膀胱の充満もまた、陣痛を弱くし分娩の進行を妨ぐるが故にネラトン氏カテーテルにて導尿すべし」

無味乾燥な文体ですが、誰でもが妊娠し、お産をするならば必ず受けなければならぬ処置であるだけに、その場面を想像することは私の心をかき立てるのです。このような納得づくで羞恥あふれる場面を写真や絵で表現されたらと思います。

四馬孝・画

異色文献絵画

妊婦の媚態

略号

(にん3)

A5判感光紙極鮮明焼付

三枚一組 四〇〇円

一、診察を受ける妊婦

産み月近くなった若き妊婦、全裸となつて医師の前に立つて全身の精密な触診を受

そうなつてくると、見る方はその場の器具のひとつひとつにも興味と愛着を持っているものなのです。

ゴム管のついた聴診器、トラウベ式聴診器、浣腸器、便器、診察室の黒いレザーバリのベッド、診察室や患者の部屋の背景、患者の寝巻、ひとつひとつ吟味して充分に描きこんで戴きたいものです。

妊婦フォトで診察の場面など撮るとしたら現在のところモデルの方はプライバシーの面から顔の表情までとは行きませんから、お腹を提供するにとどめて、医師や助産婦、看護婦などを配置してみたいものです。

何時もあられもない姿でモデルを引受けていられる絹川文代、梨花悠紀子、大塚啓子さんなどにこの時はその役を受け持って清潔なける羞らしいの美しいポーズ。

二、シャワーを浴びる妊婦

豊かに膨れ上った腹部、大きな臀部。全裸となつて立ったまま、全身にシャワーを浴びる臨月の妊婦の見事な姿態。

三、入浴を終えた妊婦

素晴らしい体格のグラマー妊婦、全身から水滴をたらしながら、大きなお腹をかかえて、大鏡に全裸の腹を写している。

◎妊婦の異常な美しさを描きだした「妊婦の媚態」三態を是非御一見下さい。

白衣に身を固めて貰ったらどうでしょうか。

絹川さんや大塚さんのさっそうとした女医さんや助産婦さんぶり、梨花さんの美しいナースの姿も見たいものです。

やはり妊婦や浣腸の場面は出来るだけ女性だけで構成された方がいいと思います。出来たら、若い妊婦の様々な診察から分娩前までの様子が連続フォトで見たいと思います。

また、アイデア画の方では、妊婦診察という一連のテーマで各時代別の妊婦風俗が見られたらと希望しています。

例えば、江戸時代町娘と産婆、奥方と御典医、明治時代日本に誕生して間もない女医と貴夫人、大正時代生活やつれした妊婦と町医者、昭和エプロン姿の似合いそうな若妻の診察、現代モダンな若い妊婦など、それぞれ診察や治療やら描いて下さったら、さぞ楽しいことでしょう。

ある有名な産婦人科の女医さんが、「お産という行為は女性にとってひとつの芸術である」と言っていました。その途中の生命力を内に抱いた女のいろいろな場合の期待や羞恥や不安を見事に表現するのもまた芸術であるとも言えましょう。

どうか女性の方々からのそうした手記や告白も是非拝見したいものです。



【告白】

ゴム・プレイの生活

ゴムの持つ妖しい魅力にとりつかれたうら若き女性の
赤裸々な真実の告白

津田亜紀子

私の高校生時代、羽二重の裏にゴムを引いたレインコートがすごく流行したことがありました。子供のときから、ゴムに関心を持っていた私は、その魅力のとりこになり、いつしか親にかくれてゴムの感触を楽しむようになりました。

最初はフードだけ外して、パンティの中へ入れたりしましたが、後には夜中にそっと起きて、レインコートを自分の室に持ち込み、寝床にゴムを上にして敷いて、その上へ裸で寝ころんだりしました。その頃から私は、もうゴムの持つあのムチュムチした妖しい魅力の

とりこになっていたのです。

ゴム引きのレインコートを寝床で愛用するうちに、いつしか私は、自分の生活からゴムを離すことができなくなり、夜毎ゴムプレイに耽けるようになりました。

こんな変った習癖は、自分ひとりだけだと思いいこんでいましたので、何度かやめよう、やめようと思いつながら、どうしてもやめることができず、大学に進学してからも続けていました。

短大を卒業して、現在の会社に就職し、東京に出て一人でアパート住いをするようにな

ってからは、誰に気がねすることもなく、このゴム・プレイは益々激しくなりました。むしろ、誰にも気がねなくゴムを楽しむため、東京へ出てきたというのが、本当かもしれません。

深夜、只一人のアパートの部屋で、裸の肌にじかにゴムを巻きつけて転々とする自分自身に何度かイヤになったこともありましたが三日もゴム・プレイをしないと、淋しくて淋しくて、とてもたまらなくなり、そんなあとでは、余計激しいプレイをしてしまうようなことになるのでした。

ゴム引きレインコートは、三カ月も使いますと、ゴムが老化してかたくなってきてゴム本来のネチネチした魅力に乏しくなってきましたので、買いかえていましたが、そのころから流行が下火となり、やがてどの店にも見られないようになりました。

いろいろ考えた末、その後は、黒いゴムの雨合羽を使うことにしました。最初買うときは、何だか下品な感じでイヤでしたが、実際に使ってみると、今まで用いていたシナシナしたレインコートより、ずっと触感が強くゴムとしてのタッチもよく、寝床で使用するのには最高で嬉しくなりました。

それからは思いきっていろいろのものを集めました。ゴムの浮輪、氷枕、ゴム円座、などのような水や空気を入れたものをゴム合羽と一緒に使ってみて、ゴムの感触がずっとよくなることもわかりました。

漁師が使う太ももまであるゴム長も買いました。これを穿き、ゴム合羽を腰に巻いて、椅子の上に置いた氷枕の上に腰を下すと、女王様になったような感じで、そうした自分を鏡にうつして感触ばかりではなく、視覚からもゴムを楽しみました。

そんな頃、偶然書店にて貴誌を発見、こん

な変ったゴム・プレイに耽っているのが私だけではなかった、ということを知って、とても安心しました。思いきって投書してみた、『私のゴム椅子のプレイ』が採用され、誌上に掲載されたときは本当に驚き、そして興奮しました。

現在の私は余り結婚したいとも思っていない。なんとすれば、結婚してゴム・プレイがでなくなるくらいなら、しない方がよいと思います。でも、ゴム・プレイに理解のある男性なら別ですが――。

思えば、私がゴムに関心を持ち出したのは大分以前のことになります。小学校の低学年の頃には、口の中へ入れてならすホウズキを好み、ご飯を食べるとき以外は、口の中でキウキウと音をさせていました。あのホウズキの粘着性のある舌ざわりが、子供ころにも、私の心をとらえたのでしょう。とにかく、「いいかげんにやめなさい」と母親に叱られたことを今でも覚えております。

それから、私の一つのくせとして、ゴムの輪になったもの（輪ゴムというのです）を手首に何本も巻いて、腕にゴムあとのつくのを楽しんだものです。今、共和護謨工業株式会社でオーバンドとして売出しているあの輪ゴム

です。もう、そんな頃から、私はゴムにつかっていたのでしょう。あの輪ゴムを口の中へ入れて、噛むことを覚えしました。ゴムの舌ざわりを味うばかりでなく、時には鋭い犬歯でゴムをプチンプチンを喰いちぎったりすることもありました。

口の中で、くちやくちやに噛む輪ゴム、手首に痛いくらい巻く輪ゴム。それから、靴下止めに使う、巾広い生ゴムの輪、ときには足首をゴムでかぶらせて真赤になるまでゴムを愛用したものです。

肌に直接当たるゴム布をひろげる。例えばゴム風船を手でひろげて指先でもみくちやにする。破れたゴム風船のきれはしを口で吸って小さな風船を使い、掌でパチンと割る遊びが好きでした。これも私のゴムマニアのなせるわざでしょう。

皮膚に当るゴム、粘膜に触れるゴム、いつしか、私はゴムの虜となっていたのです。そして、今、一人前の女性となっても、この生来のゴム好きはなおらないのです。

どうか、こんなに変わっている私をお笑い下さい。どんなに笑われても、私とゴムとの生活は変わらないでしょう。

長篇SM小説

宇宙のどこかで

△太平洋戦争終結△

佐 治 麻 造

両方共が該当年令者である夫婦は大抵一緒にやって来た。そして早く済んだ方が木柵にしがみついて、愛する者の運命を見守るのであった。済んだ者は直ちに場外に立ち退かせる方針ではあったが、世にも真剣な彼等を追い出すのは忍び難い事であった。

「あーっ……」

赤玉を当てた若い婦人が絶叫してよろよろと膝を床につき、手錠の両手で顔を掩って白く丸い肩を震わせた。

「お、お前っ……。当たったのか！」

木柵の外に佇んで居た配偶者の若い男が顔を柵に押当てて悲痛な声を絞る。

「こっちへ来るのよ」

二人の婦人警人警官に両腕を抱えられて顧り顧り曳き摺られて行く妻の姿を男は柵の外で追い乍ら嗚咽した。

「一緒になれてから未だ半年も経ってないというのに……。それに折角子供も出来て……」

途切れ途切れの男の言葉に人々は暗然としたが、MP達は冷然と眉一つ動かさない。

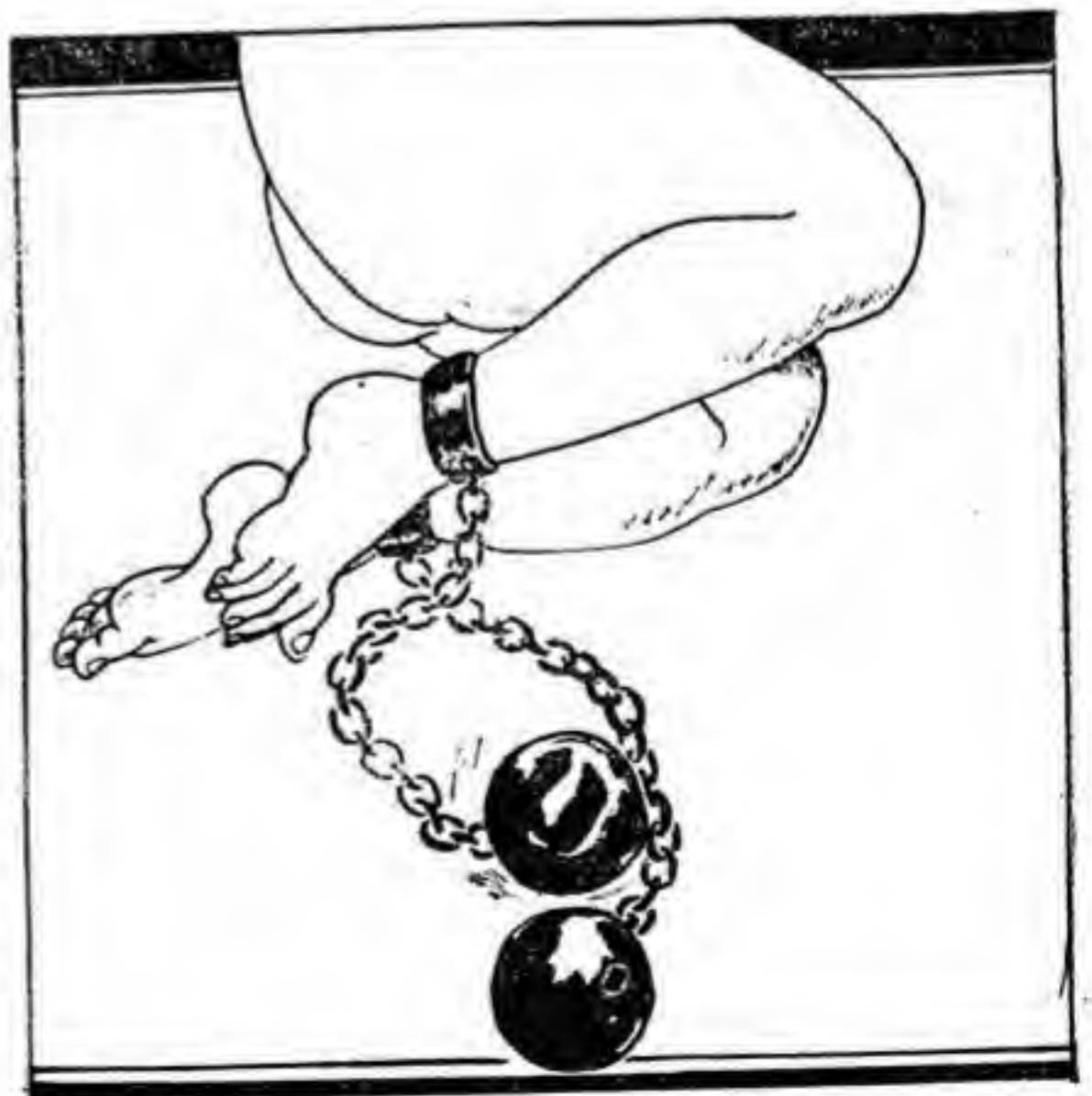
「可哀想ねえ。なんとかしてやりたいけど……」

机に坐った中年の婦人がペンをおいてハンカチで眼を押えた。

「本当ねえ。けどお腹の赤ちゃんは、どうなるのかしら？」

「中絶処置をしてしまうのよ。何カ月であろうと駄目だって。」

「まあ！ むごいことねえ。」



夫の声を耳にした婦人は、仕切り幕への通路の中程で身もだえして暴れた。

「助けて……あなた、助けて……」

「お、おれも一緒に行くよ。志願するからなっ。」

「駄目よ、それは。あなたは助かったんでしょ。私一人で沢山だわ。それに……一緒に繋いで貰えるとは限らないし……」

婦人憲兵が青い眼を光らせて席から立ち、つかつかと近寄って鞭を振り上げた。

「シャラープ！」

鞭の音と魂切る悲鳴が久江の胸を掻きむしった。妻の哀れな姿が消えたあたりを木柵の根元にうずくまって見詰めて居た男は、人々に慰められて、やがてしおしおと立去って行った。

「久江さん、外してよ。」

嬉しさに弾んだ声に久江は我に返った。行きつけの美容院の若いマダムが両脚を固く合わせて両手を差出して前屈みに立って居た。

「あら、よかったわね。」

「ありがと。ああ恐かった!!」

マダムは両手首を撫で乍ら木柵の潜り戸を飛び出ると素早く衣類をつけ初めた。

「久江さんも該当者でしょ? もう済んだの?」

薄い藤色のブラジャーのホックを留め乍らマダムが木柵越しに訊ねた。

「私は一番最後なの。人手が足りないで頼まれて手伝ってるんだけど……。お断わりすればよかったわ。」

「そうよ。あなた人がいいわね。お年寄りにやって貰うべきだわ。」

あら、小山さんが居るじゃないの!!

今しも選り取った薬莢を、選出票と一緒に持つて祈る様な面持ちで開封係のデスクに歩んで居る婦人は、久江の家の近所に住む小山昭子であった。

「選出票の紙が大きいから助かるわね。あれを持ってなきや恥かしくってとても立って歩けたもんじゃないわ。」

着終えたドレスの飾り帯を留め乍らマダムはしやべり続けた。

「けど検事さんでも矢張りくじひくのね。ひかなくていいのはポリだけか。小山さんて本当にスマートな体してるわね。新米検事さん助かるといいんだけど。随分と張り切ってやってたけどねえ。」

転がり出た赤玉を見て昭子は声も立てずに失神してしまった。

「あら。お気の毒ねえ。お母さんお独りなのよ。高文に受かった時は私の所迄お母さん、赤飯配って喜んでらしたのに……。私、帰るわ。うちの店の娘達もあらかた済んだし……」

マダムはいそいそと立去り、婦人検事小山昭子は失神したまま引き摺られて運ばれて行った。

正午少し前、久江は交替を頼んで用足しに行った。手を洗い乍ら窓から見ると、既に校庭には金網を張った大型トラックが二台並んで、積み込まれる犠牲者達を待って居いた。彼女が席に帰った時、一人の娘が丁度緑玉を当てた所だった。赤玉二〇ヶに対して緑玉は四ヶしかない。今日初めて出た緑玉だった。

「あなたはね、補充要員なのよ。だから一応は行って貰うけど、余れば帰して貰えるわ。分った?」

鼻の頭がツンと可愛く上を向いた丸顔の小柄な其の娘は、眼に涙を一杯に堪えて、両手の甲に補充要員の証印をスタンプして貰い乍

ら、コックリとおとなしくうなずいた。

「ねええ、補充要員が二〇%も要るのかしら？ 大分余るんじゃないくって？」

「そうねえ、先ず半分は帰して貰えると思うけど……。しかし其の時は又くじをひかせるのかしら？」

「それがねえ、私、確かな筋から聞いたんだけど年令順に取るだつて。若い順よ。」

「まあ、そうお!!」

デスクの婦人達は憐れみのまなざしを、曳かれて行く先刻の若い娘の後姿に注いだ。

「お互いによかったわねえ、該当者の肉親が居なくて……。」

「ほんとね。くじを引かなきゃならない子供や弟妹が居たら、とてもここに坐ってなんか居れないわ。」

昼休み迄に男女共約六割程済み、仕切幕の中にも大分溜った。幕の向うで時々号泣や啜泣きの声が洩れ、鉄鎖が重々しく鳴り、そしてたまに鞭の音と悲鳴とが響いて、人々は眼を伏せてしばし沈黙した。

「あの中にも女のMPが一人居るのよ。」

「そうらしいわね。可哀想に、何の罪もないのに鞭打たれてるわ。」

「仕方ないわねえ、敗けたんだものね。」

人々はMP達に、恨めしそうなまなざしを投げるのだったが、憲兵達は堂々たる其の体軀を回転椅子にふんぞり返り、或いは又すくと立ってガムをしきりに噛んで居るのであった。

午後になって痛ましいくじ引きが再開されて暫くすると、校庭が騒然として来た。怒りに満ちた呶鳴り声が錯綜する中に外国語が微

かに混って段々講堂に近付いて来た。憲兵が一人、出て行ったが、やがて三、四人の外国人の男を衛って連れて来た。彼等は報道関係の連中らしく手に手にスピグラ等を抱え、周囲に群って喚き騒ぐ群衆を払いのけ払いのけして入って来る。

「どこ迄馬鹿にしゃがるんだ!!」

「ほんとよ。少しはこちらの身にもなって見てごらんよ。ねええ。」スピグラに手を掛けた青年が憲兵の白い警棒で頭を割られて呻き群衆は口惜しそうに散った。

「写真を撮るつもりらしいわね。」

「本当に口惜しいじゃないの。世界中の新聞やニュース映画に出るわ。私、涙が出て来て……。」

「けど、報道活動はしないって諒解済みの筈よ。司令部と政府の間でさ。」

黒い長いドレスを着込んだ老婦人が知ったかぶりに云ったが所詮無駄だった。外人達は撮影機の脚を立て、あちこちでスピグラのフラッシュを輝かせ、そしてジャンパーのポケットに手を突込んで冷笑を唇に漂わせ乍らそこらを歩き回った。受付に来る男女が途絶えたのは当然であったが、見て取った憲兵達は未だそこで逡巡して居る男女を片端から捕え、拳銃で脅かして無理矢理柵の中に追い込むのだった。屈辱と怒りとそして恐怖におののく男女の姿をカメラは非情に追った。そして赤玉に当たってもだえ悲しむ犠牲者の哀れな姿を、男女両方で一名宛キャッチするや、彼等は、さっと引き上げて行った。

当局が最も苦慮して居たのは、当たった者が隠し持った毒薬等で自殺する事であったが、幸いにも其の様な事態は起らなかった。三時

少し回った頃には男性の方は完了してしまった。女性の方も次第に終りに近付き、久江は心配で胸がどきどきし初めた。自分が最後に残ったくじを取る迄に、全部の赤玉と緑玉が出てしまう事を祈るのは人情として止むを得ない。久江がそっと調べて見ると、既に緑玉は無く、赤玉が二ヶ残って居る筈であった。くじは木箱の底に既に甘け足らずしか残って居ない。

白玉を引いて喜ぶ女達の手錠を外してやり乍ら、久江は居ても立っても居れない気持だった。四時過ぎに、おかみさん風の婦人が赤玉を当てて胸も張り裂けんばかりに号泣した時には、正直な話、久江は頬を綻ばせた。しかしそれから遂に赤玉は出なかった。五時過ぎに震え乍らやって来た四十近い婦人の手錠を外してやる時には久江の手は震えて鍵がどうしても鍵穴に挿し込めなかった。残る二ヶの中、一ヶが赤玉なのだ。そして其の二ヶを久江ともう一人の婦人即ち受付けで勤務して居た三十過ぎの女教師とで引き合わねばならない。

デスクの人々は囁き合って息をひそめた。こんな事になろうとは久江は全くの話、露考えもしなかったのだ。

「もう私達二人だけらしいわね。全部やって来るなんて驚いたわ。三人や四人は、無届欠席があると思ってたんだけどねえ。」

整理簿を抱えてやって来た女教師も矢張り久江と同じ僥倖を願って居たらしく、整った冷い感じの顔は蒼白で膝もがくがくして居る様子であった。

「とんだ事になったわねえ。ま、お茶でもあがったら。」

温かい感じの肥った婦人が、二人の顔を見比べ乍らオロオロと云った。

茶碗を持つ久江の手は震えた。若しかしたら、こうしてお茶を飲めるのもこれでおしまいかも知れない。向い合ってお茶を喫んで居る女教師は、久江にとっては既に敵であった。顔見知りの女性でないのがせめてもの慰めであった。

婦人憲兵が焦立って何か叫んで鞭で床を打ち、そしてスカートをまくって靴下を直した。

「早くしろってさ。あと一匹なんだからって。」

「まあ、何と思いやりが無い毛唐女だろうね。」

てんでに一服して居た人々は口々に呟いたが婦人警官の指揮者は困惑した表情で久江達を急き立てた。

「さ、思い切って早いこと済ませましょうよ。」

「ええ……あら、私達も脱ぐの？」

「規則です。手錠も嵌めます。」

最後の一枚も脱ぎ捨てて選出票の大きな紙片を持った久江の右手首に冷い鉄環が嵌まり、彼女は全身の血が引くのを覚えた。両手を短く繋ぎ合わされた久江はじつとうなだれた。抽選規則によつての扱いだと云う事は分つては居るものの、みじめな思いに胸が熱くなった。もう、これで自由な身にはなれないかも知れない、と考える

と涙がポロポロと流れた。

「すぐに外してて上げるわ。しっかりね。」

先刻、久江から受取った手錠の鍵を握り締めた色白の婦人が、女教師の方に気を配り乍ら、小声で囁いて励まして呉れた。

久江達は木箱の前で一瞬睨み合った末、双方同時に同じ薬莢に指を掛けた。

「あら!!」

「じゃ、ジャンケンで順番を決めましょうか？」

久江は震え声で提案したが女教師は片頬をひきつれた様にして冷笑した。

「いいわよ。あなた先にお取りなさいよ。ああ、痛い。手錠って痛いわねえ。早くお取んなさいな。どっちみち、確率は五〇%。」

久江はそう云われて迷った。

「カクリツって何だったっけ？ 此の人、数学の先生かしら。」

二ヶの薬莢をひたと見詰め乍ら久江は千々に乱れる心の隅でそう考えた。思い切って摘み上げた薬莢を取り替え様とした瞬間、女教師の手錠の鎖がガチッと鳴って残った一ヶは取り去られて居た。

「あなた、思い切りが悪いのね。」

女教師は嘲笑を浴せて、先に立って開封係のデスクに近寄った。

封蠟が除かれる間、流石の女教師も息が喘いだ。そして転がり出たのは白玉であった。どちらかと云えば久江の方に好意を寄せて居た人々の口から吐息が洩れ、女教師は狂った様に笑い出した。

「ハハハハ、ああ、よかった……ハハハハ……」

先刻久江に囁いて呉れた色白の婦人は、差出された女教師の両手から手錠をゆっくりと外してやった。

「ハハハ、もう開いて見なくてもいいじゃないの。自分で取ったんだから恨みっこなしね。ハ、ハハ……早くこっちの手も外してよ。」

衣類を入れた箱の方へ、選出票を大切そうに持って近づく女教師を見乍ら久江はへたへたと坐り込んで喘いだ。もはや咽喉がカラカラで声も出ない。人々は顔をそむけて眼をしばいた。念の為、開かれた薬莢からは矢張り赤玉が転がり出て、デスクから落ちて久江の膝の前で止まった。

「お茶を……飲ませて……」

しかし、金髪を撫上げ乍ら近寄って来た婦人憲兵の鞭がシュツと鳴って茶碗は久江の手から叩き落された。

「ヒーツ」

鞭の先端が手の甲に当って、久江は腰を浮かせ両腕を絞る様に身もだえして呻いた。

「行きましょう」

職務に忠実な二人の婦人警官は久江の両腕を左右から抱え上げ、人々は同情と憐れみの視線を彼女の白い背に注いで見送った。何とか自分で歩こうとして身もだえすると、感違いした婦人警官は益々強く腕を締めつけて引き摺って行くのだった。久江は思わず怨めしげに左右の婦人警官達を見上げたが、恨んだ所でもはや仕方のない事であった。仕切幕の所で坐り込んで喘ぐ久江の尻が、背後からついて来た婦人憲兵に蹴り飛ばされた。手足を伸ばして床に俯向きに倒れた背に鞭が鳴り、久江は手錠を床に鳴らせ全身を硬張らせて痛苦に耐えた。

「さ、早く起きて……。又、鞭を喰うわよ。」

婦人警官に助け起された久江は、齒を噛みしめ乍ら身を起したが眼に入る室内の光景に眼が昏んで膝もなえる思いだった。そこには廿名の男と十九名の女が、各々十名宛一列に縦に並んで正座して居た。黒々と光る頑丈な手錠を嵌められた両手を正座の腿の上においてうなだれ、大半の男女は放心した様に身じろぎもしない。両足首に嵌まった頑丈な足錠と、それを繋ぐ太い鉄鎖が彼等の尻の下に見える、其の痛さに堪えかねるのか、時々誰かが腰を動かして喘いで居た。そして前に坐った者の尻の下から延びる重そうな鉄鎖が一米半

程で、その後ろの者の膝の間に挟まれて床から少し離れ、更に其の尻の下から床を這って次の者へ延びて居る。

男性の方は二列共、鉄鎖は余って居なかったが、女性の方の一行の最後尾には三米程の鉄鎖が床に延びて、そこに繋がれる者を待つて居た。全員、既に額、胸、背に整理番号を黒々と刷られ、男の方で五名、女の方で六名程は嵌口具を固く嵌められて苦しうにして居た。鞭痕のない者は極めて少なかったし、嵌口具の連中の全身にはむごたらしい赤い条痕が多数走って居る。室の片隅には更に四名宛計八名の男女が同じ様な姿で連鎖されて坐って居たが、補充要員である彼等の体に刷られた番号は赤色で、心なしか幾分は顔色も好いし足錠も嵌めてなかった。全身をきびしく検査された久江は屈辱に身を固くしてわなないたが、傍らに立つ婦人憲兵の右手からスカートに沿って垂れた長い革鞭を見ると、恐怖で胸が痛んだ。両脚を大きく開いたまま室の端から端まで歩かされた久江は、手錠の両手で顔を掩って咽び泣いたが、此の室を担当して居る婦人警官達は、同胞とは思えない程非情だった。

「四つに這って……。お尻を高く上げて!!」

何かが突込まれ、そして直腸から灼熱感が滲み上って来た。浣腸されたのだ。更に太い針が矢庭に尻にブスリと突刺され、激しい痛みには久江は悲鳴をあげた。肌に番号が刷られた。額に刷込まれる分には塗料の異臭と共にみじめさが全身に泌み渡る思いだった。先刻の検査の時に引掻き回された長い黒髪が短か目にザックリと容赦なく切り取られ、背後に回った婦人警官が短い紐で束ねて呉れた。

「効いて来た様ね。これにおし」

衆人環視の中も何のその、示された便器に這い寄った久江は、や

がて堪え切れない恥かしさに、しやがみ込んだまま泣き出した。

「済んだら、こっちに来るんだよ。」

全身を真赤に染めた久江は、自分の両足首に固く嵌まった冷たい鋼鉄の感触に我れを取り戻した。足錠が嵌められたのだ。続いて手錠が外され、直ちに重いU字型手錠がガッチリと彼女の細い両手首に嵌められた。それ迄の手錠の倍以上の重量に、久江は両手を揃えて下に垂れ、深くうなだれた。これで完全に囚われの身になったのだ。小突かれて女囚の最後尾の鎖に繋がれるために脚を踏み出した彼女は、忽ち足の鎖につまずいてよろめき、膝と両手を床について顔を歪めた。

婦人警官は、鎖の傍らに立ちすくむ久江の両脚の間に前方から鉄鎖を通した。別の婦人警官が久江の背後に立って鎖の端を受け取る。と、背筋に沿って上へ持ち上げ、端の方を女囚の首に一巻きして、首筋の後ろで錠で留めた。首の周りから背筋、そして更に股間に触れる鎖の冷たさが彼女に新たな涙を流させた。前側に居た婦人警官が、女囚の両脚の間を後ろから潜って来た鎖に少し余裕を持たせた位置で、女囚の手錠を鎖に結合した。嵌められて居る手錠の短い鎖の中央部に付けられてある小さな錠が、連鎖の鉄環の一箇を噛んでカチツと鳴った。

「ああ、とうとう鎖に繋がれてしまったわ。」

久江は、家で待ち侘びて居るであろう、母や祖母を想って嗚咽した。眼を押えようとして両手を挙げると、手錠とそれに繋がる鎖の重さが両手首の骨にこたえた。そして両手を胸の辺まで挙げると背筋に垂れた鎖がグイと張って、両脚の間をびったりと押し上げて冷たかった。

「坐るのよ」

久江が崩折れる様に床に坐ると鎖がガラガラと鳴り、足錠の鎖にも当ってガチガチ音を立てた。足の甲を床につけて尻を踵の上に下ろすと、冷い足錠の鉄環が両尻に当り、そして足首の骨が痛んだ。婦人警官が立ち去る足音を聞き乍ら深くうなだれた久江はすべてが悪夢の様に思われた。咽喉はカラカラだったが、眼を固くつぶると体が深く沈んで行く様であった。

「私が、こんなに手足を鎖錠されて、番号なんか刷られて……鉄鎖に繋がれる身になるなんて……。きっと夢なのよ……。」

しかし両脚の間の太い鎖の冷たさと、両手両足の鉄鋼のいましめの硬さは、それが現実であることを非情に教えて居た。首の鎖を巻きつけられて居るのは、各列の最後尾の者だけだと云うことに彼女は気付いた。

「不公平だわ。」

彼女の左隣りの女囚の列の最後尾には検事だった小山昭子が固く両眼をつぶり、端正な横顔を見せて身じろぎもしないで正座して居た。

「皆、よくきいて!!」

正面に立った年配の婦人警官が、時々激しくまばたき乍ら大声で云い始めた。其の婦人警官より二十センチは背の高い婦人憲兵と更に十センチ程高い男の憲兵が、婦人警官の背後の両側に立って囚人達を見下ろして睨み回した。

「これで全員が揃いました。真にお気の毒ですが、公正な抽選の結果ですから致方ありません。念のため云っておきますが、本日を以て、あなた達の国籍と人格は自動的に剝奪されます。そして奴隷と

して取扱われる訳ですから、其のつもりで……」

女囚の間からは啜泣きの声が、そして男囚の群からは低い罵声が始って鎖があちこちで鳴った。

「静かにしなさい。云うことに従わないと鞭を当てますよ。」
数名の男女の警官達は囚人の列の周りを歩き回って鞭で威嚇した。

「ち、ちきしょう!! 俺がどんな悪い事をしたって云うんだ。その毛唐女の赤い髪を掴んで引き摺り回してやりたいよ……。」

鎖錠の音を立てて身もだえし歯ぎしりして口惜しがる若い男に鞭の雨が降って、其の無念の声は次第に悲鳴に変わって行った。

「では、これから集積所に送ります。明日、身体検査が受入側立会で行われて、不適格者ははねられることになってます。」

婦人警官は、犠牲者達に最後の微かな希望を与えて口をつぐむときびしく引締めて居た頬を崩して急いでハンカチを取り出した。

「皆、お立ち!!」

鉄鎖の触れ合う音があちこちで鳴って、長く正座して居た者は呻き乍らよろよろして足鎖につまずいて倒れたりした。

二重の仕切幕を潜った囚人達は、木柵を逆に辿って校庭のトラックスに追われた。足の鎖は五十センチ程で、囚人達が力なく動かす脚につれて床に引摺られて鳴ったり又グイと張ったりして絶えず音を立てた。重い足錠に歩き悩む久江はみじめさに打ちひしがれて最後の列のその又最後尾をうなだれて曳かれて行った。おけると連鎖が先ず手錠をぐっと前方に引き、そして次には股間を強く弱く締め上げた。

「私が小さかった頃、父の店にいつも多勢居た奴隷達も皆こんな風

に足に鎖をつけられて居たわ。ずい分と歩き難いものなのねえ……。初めて分ったわ。」

そう考えた彼女は、更に、こんな風にして働かされる身になるのだと思いと堪られなくなった。繋ぎ合わせて居る此の太い連鎖から逃れたかった。重い連鎖に結ばれてずっしりと両手首に喰い入って居る手錠が切なかった。救いを求めて左右を盗み見すると、先刻までここで選出業務に従事して居た男女が未だあちこちに寄り集まって、哀れな犠牲者達をじっと見送って居た。気をつけては居たものの、余りの情けなさ悲しさに、つい注意がおろそかになった久江は、両足首の鉄環同士を打ちつけて、足をもつらせて倒れてしまった。分厚い鉄環は、其の厚みに加えて更に内側に鎖を取付けるための金具が突出して居るのであるから、歩く時にはそれをかわす様にしなければ打ち当ててしまうのだ。一直線を歩く様に習慣づけられて居る女性達にとっては、中々の努力が要ることであった。

倒れた久江には勿論お構いなしに列は前進し、連鎖は彼女の両脚の間に喰い込み、更に首を締めつけた。苦しさに思わず首を動かすと鎖が股間で摺れた。両腕に力をこめて、両脚の間の鎖をゆるめ乍ら起き上ろうとした久江の尻に革鞭がピシリと鳴った。身をよじって喚く久江の眼に、背中を見せてすぐ前に行く女囚の上体がグッと前に倒れ、連鎖を後ろへ引かれた両手が其の両脚の間から後方に突き出るのが見えた。更に其の前に行く女囚が同じ体勢になってよるめいて膝をついて止まった。久江が転んだためなのだ。鞭は更に右腿に鳴って久江は息も詰まる程の痛さを味わった。

「未だ慣れないだから、転んだ位赦してやりやいいのにねえ。」
「ほんとよ。毛唐の女で冷酷なものねえ。」

大柄な婦人憲兵の手なれた鞭を受けてヒューヒュー泣き喚く久江の耳に、人々が小声で囁やく声が不思議によく聞えた。今度は列の前方で一人の女囚が転んで鎖の音を一きわ大きく鳴らしたが、その女囚は鞭を受けないで済んだ。最後尾に繋がれた久江は、運が悪かったのだ。校庭に出ると、もう日は殆んど暮れて居た。フラッシュが突然光った。と思うとジープの投光器が囚人の群を照し初めた。又も外人のカメラマンが撮影して居るのだ。数人のカメラマンの中の二人は若い婦人で、ショートパンツの女性がアイモを回し、もう一人のデニムズボンの娘がジープの投光器を面白そうに操作して、トラックに追い上げられる囚人達を容赦もなく照らし出して居るのだった。

金網を張った二台のトラックの荷台に、囚人達は男女に分けられて鞭で追い上げられた。投光器は小山昭子の全身を照らし上げ、アイモの婦人は接近して撮影し初めた。小山昭子は両手を重そうに持ち上げて顔を掩ったが、トラックに昇るにはどうしても手を使わねばならないのだ。アイモの婦人はゼンマイを巻き乍ら金髪をスカーフの間から夕風になびかせて意地悪く小山昭子の斜め正面から撮ろうと構えた。同時に二ヶ所を掩えない手錠の両手を切なげにもだえた昭子はトラックを眼前にして地面にうずくまって肩を震わせた。途端、半ばトラックに昇って居た前の女囚が連鎖に引かれて転落して呻いた。忽ち鞭が昭子の全身に炸裂し、絶え入る様な悲鳴が夕暗に流れ、デニムズボンの娘は録音機のマイクを片手に握って愉快そうに悲鳴の方につき出すのだった。

久江が最後に這い昇ると、トラックの金網の扉は閉められて外から錠がかけられた。大型トラックとは云え、二十四名が乗るとあと

から乗って来た連中は坐れなかった。端の方で床にしがみついて、呻き鳴咽して居る小山昭子の声を吹飛ばす様にトラックのエンジンが始動し、そして附近で数台のオートバイが爆音を立て初めた。閉め切られて居た門の外では、肉親の悲運を呪い悲しむ人々が群をなして居たが、MP達のオートバイは平然と其の中に突込んで彼等を蹴散らかした。すぐ続いてトラックが走り抜ける。互いに呼び合う悲痛な声が交錯してそして忽ち離れた。

久江の眼には遂に母や祖母の姿は認められなかったし、其の声も聞くことは出来なかったが、夕暗の中を疾走するトラックの上から金網越しに肉親の姿をチラと垣間見ることの出来た数人の女達は、

半狂乱の様になって金網にしがみついた顔を押し当てて絶叫した。又反対側からの声を耳にした若い女囚は必死の形相で、仲間達を押しつけ踏み越えて反対側に移ろうとしたが、連鎖にせかれて叶わず、床に打伏して号泣したのであった。

「あ、あなたッ、助けて……、助けてよ!! 此の鎖を解いて……解いて頂戴……」

急カーブを切ったたトラックの荷台の一方の側に女囚達は雪崩を打って打ち寄せられ、下積みになった連中は、苦痛の呻きを洩らした。久江も連鎖を胸に強く押付けられて、息も出来ない程であった。

(未完)



(告白)

用便紙にひかれて

若い女性のパンティと用便紙に魅せられたある男性の告白。

岡山 勉

私は強度のパンティ・フェチシストで、毎日、自分でいる。日あくなきパンティへの執着と妄執とでなや

きなタイプの女性のパンティが手に入るならどんな素晴らしいことだろう。私はもう、そのためなら、どんな犠牲を払っても悔いない。だが、現実に至ってきびしい。どんなにかして、そんなパンティを手に入れたく思っても簡単には手に入らない。

日本国中に若い女性は、何百万といえるのだから、その中で、私のようなパンティ・フェチシストに恵みを与えて呉れる女性が幾人か居るような気がするが、実際は中々そういう女性にめぐりあうことは、むづかしい。

でも、そのうちに思いやりのある女性が私の前に現れることを期待する。いや、きっと現れて呉れるものと信じている。その人には

私は全面的に感謝と敬意を表すると共に、出来る限り、その人に、何かの形で奉仕したいと思う。

世間では、私のような男をH（エッチ）と呼ぶかもしれないが、全く正常な人でも、これに近い行為か、思想は胸深くひそんでいるに違いない。唯爆発しないだけだ。そのチャンスが来れば、私と同じくなるに違いない。私には早くそのチャンスが来たのだ。

私のパンティが欲しいという考え方は、やがて若い女性の小水処理用便紙に興味を引かれて来た。これも、どんな方法で入手することが出来るか、その方法が分らないままに悩んでいたが、やがてそのチャンスが私にもめぐって来た。

取引先の地方都市にある或る会社を社用で訪問した際（かなり大きい会社で、従業員も二千人近くあったが、地方のこととて、水洗便所ではない）私は外来者として勝手がわからず、用便のため、あわてて飛び込んだのは女子便所であった。

槽は二部屋共同の槽である。やがて私の後の便所の戸が開いて、一人の若い女性が入ってきた。

用便が終る気配と共に、紙が丸められて、

ポンと私の真下の槽に向って投げられた。私は何とかして、その紙を取りたいと思ったがどうして手に入れるか判断に迷った。幸い槽は思ったより浅い。思いきって、しやがみ込むと、手を差し込んで指を伸した。しかし、紙は指先から遙か下にある。

便器は割合きれいに掃除されてあったので不潔感は無かった。腹這いになって手を伸すと中指の先だけが紙にふれただけである。背広の胸を便器のふちに当て肩口まで便壺へ入れると、ようやく、人差指と中指とで紙を挟むことが出来た。

額に汗を浮かべながら、今、捨てられたばかりのホヤホヤの紙を手に入れることができたとときのよろこびと感激は、今でも忘れることはできない。

何と素晴らしい香りであろうか。身も心もとろかすとは、このことであろう。それ以後私はあらゆる方法で、若い女性の使用後の用便紙を入手することに努めた。或る程度入手できたが、自分で、これはと思うものは、中々数少ないものである。

手に入れたものは、きれいにそのままハترون紙で包み自然に乾くのを待つのである。乾いたあとの、その便紙の、芳香の素晴しさ

は、たまらないほど良いものである。

私は色々のトイレを歩いた。デパート（これは水洗式だが駄目であった。）官庁、会社、学校等、その中で最も素晴らしいのは女子高校であろう。女学生の若々しい身体からムンムンと発散する体臭は、最高のものであるが、この女子高校生の使用便紙は、又と得難いものだ。今でも、唯一度きり、某女子高校へ所用で行った際、入手したものが、大切に保存し、時々取り出して、その芳香にむせんでいる。

私の入手方法や鑑賞方法について、便紙のみならず、パンティについても、色々と自分なりの工夫によって楽しみ、やがて最高のクライマックスに達し、日毎にその陶醉はつるばかりである。

これについては、次回にくわしく発表して世の同好の方々の御意見を拝聴してみたいものである。それと同時に、全国の若い女性の方々の中で、ナルチシズムの傾向の方達、サド女性の方で、私のこんな変った悩みを消して下さる方に、是非御意見なり、御協力なりをお願いしたく、赤裸々な恥かしい告白をしたためた次第です。

〔FMの告白〕

女の足と下着

姫 馬 痴 人

プロローグ

私は自分のマゾヒズムとフェティシズムの今日までを顧みて、何時頃どちらが先に私の心の中に芽生えたか、幼い頃の記憶に溯ってみた。フェティシズムといっても私の場合、紺又は黒のズロース、ブルマー（パンティの型は魅力を感じず、ズロース、ブルマーでも他の色は余り興味がない）と、女性の脚（足）に人並以上の関心が湧くのであって、その他の女性の肢体の特定な部分、その他の女性の使用物には異常を認めるべき程心を惹かれることはない。マゾヒズムについては、馬化、

鞭打、足舐め、股くぐり、被縛、土下座、蹂躪等マゾ男として全般的な、一般性向をすべて持っていると言えらるが、マゾの延長とも云えるであろうコプロの境地には未だ陥ったことはない。液体の方ならば、余程の美しい女王様を前にした場合自らの妄想の中で心に描いたことはあるものの現実の経験はなく固体の方は想像の中で楽しむことも忽ちヘキエキさせられるのである。

人間の記憶というものは、普通の人の場合満四才位のこととが精々でそれ以前のことをまざまざと思い返せることが出来るというのは余程特別な場合か、特別の人ではないだろう

か。辿れる限りの幼い頃の記憶を呼び覚ましてみて、やはり私の場合、マゾヒズムがフェティシズムより大分先に芽生えたことは間違いないようだ。

幼稚園に行く頃、毎朝女中が私の足許にうずくまって靴のビジョウを穿めてくれた。それを見ながら、私はその私と女中の相対的位置を置き換えて、私が女中の足許に脆ずいて下駄を穿かせることを想像してみたりした。然し、一方幼稚園でお転婆な女の子に、人が沢山いる処で突き倒されたことがあったが、その時は喜びを感じるよりやはり恥ずかしさが先に立ってマゾ的な心理は働かなかったの

も今思い出してハッキリ判る。

右の二つの記憶は互いに矛盾するようだが双方共記憶としては間違いないのである。更に小学校二年頃になると、これはもう完全なマゾ的行為である。その動機となったのは日本児童文庫の「乃木將軍」の序文の中に將軍の幼少時代の絵で「非常に病弱で普段同じ年頃の女の子と喧嘩しても負かされて馬乗りに組伏せられる程であった」という個所を読んだことであり、それ以来、私は女の子に馬乗りに組敷かれないという強い願望を抱くようになった。恰度姉が中学受験に近く、家庭教師を頼んで家へ来て貰っていた頃の話であるから、私が小学校二年の時であったか或いは姉が五年の時とすると私は一年の時だったかも知れない。その日も家庭教師が来ていて、姉の勉強が終り、母が茶菓を持って応待に出て行き、父は未だ帰宅せず、夕方の茶の間に私と、その頃私の家に泊っていた私より二つ年上の従姉と二人きりになった。滅多にないそのチャンスを利用することを私は決心した。コーフンに震える声を努めて抑えて落着けながら

「寿美ちゃん、僕が此処に横になるから、胸の上に馬乗りになって僕を抑さえつけてごら

ん、僕は強いから直ぐに撥ね返してみせるから……」と彼女を促すと無心な彼女は私の云った通りすぐに私の上にまたがって呉れた。然し、今にも母か姉が戻って来はせぬかとそればかり気にして、おどおどした子供心のこととて、とても快感を味う余裕もなく、一瞬にして口約通り、私は彼女を撥ねのけてしまった。本当に本意ではあったけれども、それでもそれなりに初めて女性に馬乗りになられた感激は今思い出しても鮮明なものである。

一方、紺のズロース・フェティシズムは、

その当時は（小学校当時）未だ全く芽生えていなかったことは確かである。学校の運動場で常時、女生徒の体操している処を目にしていた筈であるが、別に何んの特別な興味を持った記憶がない。中学一年の時、風呂場で湯から上って着換えていた従姉の寿美ちゃんが紺のズロースとシャツだけにいるのを近々と見た時、私は、始めて異様なコーフンを覚えた。それからというものの、その時のコーフンがフェティシズムとなって、而も私のマゾヒズムと相関連して、月日と共にフェティモマゾも益々募って来たのである。というのは私のマゾ心が女性の活発な肢体、行動を空想する。体操、競技をプレイしている女性の姿は

そのような私の空想を満たしてくれる。それ等の女性達は紺又は黒のズロースかブルマーを穿いている。斯うして私のフェティシズムが芽生え、その後というものは、家の中では人の目の隙を見ては寿美様の下着の抽出しから紺のズロースをそッと取り出して顔に押し当て、嗅ぎ、しゃぶり、頭から被り、自ら穿いて快楽を貪るようになり更には洗う前の洗濯物袋の中から寿美様の体臭のたっぷりしみ込んだままのを見つけては又そのような行為にコーフンを求めるようになって行った。

然し、その頃をふり返ると、私のフェティシズムもまだまだ女性の足にまでは思い及んでいなかった。女性の脚の美しさ、足の魅力に惹かれるようになったのは、やはり私が廿五才位になってからのように思われる。それ以前も、谷崎潤一郎の「富美子の足」「蘿洞先生」のような小説を読んで共鳴する気持はあったにしても、自分自身女性の足を押し戴き女性の足に口づけし舐めてまで、その美しさに酔いたいという欲望をハッキリと自覚するようになったのは青年期に入ってからのことと言える。

さて、私のF・Mの幼ない頃から今日迄の回顧はこの位にして、これから折にふれ、気



の向くままに私のマゾヒズム、フェティシズムの経験、空想、等を折りまぜて小話集を綴って行きたいと思う。

新宿の夜

未だ赤線廃止になる前の新宿二丁目。

ネオンの輝く街には、戸毎にけばけばしく化粧を施した女達が立ち並んで客を呼んでいた。少なからず酩酊した私は、これと思しいし女性を物色しながら細い路地から路地を歩き廻る。これは、と思うような女性を見つけると私は胸を躍らせながら話しかける。このよ

うな場所で女に話しかけるのに胸を躍らせることもなからう、と云われそうだが、私にはそれなりの訳があるのだ。女に、私は先ず私の性癖を告白するのだ。その時の女の反応、マゾ男に対して徹底した軽蔑であしらわれるもよし、好奇心を示して話に乗ってくる場合、又それに越したことはない。

「僕アブノーマルなんだよ。変態っていうのかな」と私は女の耳に囁く。

「どんなことが好きなの」と、大抵の女はこう聞き返す。

「お馬になりたいんだ。僕を四つん這いにならせて背中に君がどっかとまたがって乗り廻して欲しいんだ」

そう云いながら、もう私は十分にコーフンして来るのだった。五人に一人位は、勿論やはり商売女としては客が欲しいので

「その位のこととしてあげるわよ」と私を招き入れる。然し「何バカナコト云ってんの」ととり合ね女、「おかしい男だね」と嫌悪を示す女。「ヘンタイ!」と傍にも聞こえるような声で罵る女。様々であるが、そのように断られてさえも、とも角女性の前にマゾを告白すること自体が既に私を刺戟するのだ。

招き入れられて、私はいきなり女性の足許

に縋りつき、その足に接吻し、舐め廻し、未だ立ちはだかっている女性の両脚の間に狂気のように首を突っ込む。女は少々呆れもし、驚きもして後ずさりする。私は追いつがりがら「僕をいじめてくれ、奴隷にしてくれ、女王様になって僕を馬にしてくれ、鞭で尻を打ってくれ」と性急にせがみ、懇願する。女は落着いて「そんなこと云わずに、服をぬいでおふとんに入りなさいよ」と促す。そこで又、私は異常な期待に胸をときめかすのである。

私も一応落着いたように装って、上衣をぬぎズボンをサッと下ろす。女は又呆れ、さげすむように私の下着姿を眺めている。私が紺のズロースを穿いているからなのだ。その見下げ果てたというような女の眼付きが又々私を狂喜させる。

「仕様のないHだわね」というような素振りで女は私に近づく。私は四ッん這いになって女を促す。そして暫くは女王様の騎乗がつづき、その次は私はぬぎ捨てたズボンからベルトをはずして女に捧げ、自ら紺のズロースをずり下げて生ッ白尻をむき出しにして、女に鞭打ちをせがむ。ピシリ！ピシリ！一打ち毎に燃えるような快感に酔う。疲れた女

がベルトを捨てて私にしなだれかかって来て「こんなことが嬉しいの」と私の顔を覗き込む。「こんなにまじめそうな顔をしてるのねえ——」

「君は面白くないかい」と訊くと「そうね」と大抵は煮え切らない。私は構わずにいきなり女を押し倒して「プロレスをしようよ」と云いながら、女の股倉に首を突っ込んで女の両の脚を私の両手でかかえて「このまま締め上げてくれ」と哀願する。私は鼻の先きのパンティ越しに見上げると女はニヤニヤと軽蔑し切った笑いを泛べて私を見下ろしている。

「いいの？ 締めるわよ」

「うん構わないから、グイグイきつくやってくれよ」

女の太股に恐ろしい力が加わり、その間に首を挟みつけられたまま、私は苦しみと欲びにもがき、身をくねらせながら夜の一時を過ごすのであった。

靴をはき、その家を出てフラフラとネオンの街を歩きながらも、私は又見送る女の蔑すみの視線を背中に感じて、それがマゾの喜びに変わり、鞭打たれた尻の感覚を呼び戻してほてるようなうずきを改めて味うのだった。

当時は、そのような街へ行けば必ずこの程

度の満足を求めることができたし、中には馴染みになって「又いつかのようにして欲しいの？」と招き入れてくれる女性も二、三あったものだった。それが近頃は、やはりとんと不自由になってしまった。パーやキャパレーの女性など、仲々このような調子には行かぬのは、それもマゾ男の弱気のせいなのだろうか。時々独りで飲みに入って「告白」はしてみるのだが……

国電の中で

叶順子主演の「痴人の愛」の映画が封切られた頃——。

週刊誌にも「アサヒ芸能」などは一頁抜きで、例のネグリジェ姿の叶順子が船越英二を四ッん這いにさせての馬乗りのスチール画を載せていた。私はすいた電車の中で近所に殆ど男性がいないような処で、美しい若い女性をみつけてその隣りに、成るべく近くへ何気なく寄添うようにして腰かける。そして、その週刊誌の頁をめくって行く。件の広告のスチール写真で、私のページをめくる手はストップ。隣りの女性が覗き見るのを期待する。案の定彼女もこの異様な(?) スチール画にふと眼をとめて暫く見入っている。そ

の間勿論私は感に耐えぬという風にその頁を凝視するが、やはりそうそこばかり眺めてはいられないので、心残りながら先きの頁をひもとく。終りまでパラパラと通読するようなふりをして、又改めて前の方の頁をめくり、再び叶順子の雄姿を開いてしげしげと眺め続け、「ああ素晴らしい！」とでもいうようにそっと、然し隣りの彼女には気づかれるように溜息を吐いてみる。彼女も又気がつき今度は「この男、少しへんなのじゃないかしら」というようにチラリと私の横顔を蔑視する。ああ、それこそ私が期待した国電の中の些やかな快楽なのだ。

——以下空想。彼女は猶も私の横顔を見守って「ふん！この男は」というような眼つきをしたのが、私には、見なくともよくわかった。私は、今度はもう委細構わず三分でも五分でも、七分でもその頁を開いたまま、その順子騎乗図を凝視したままだった。女があたりを見廻して、近くに人のいないのを確かめた上で「あんた、それ見て何考えてるの、さつきからその頁ばかり見てるじゃないの。読むことは宣伝文句だけで何秒もかからないし……。そういうのが好きなのかい」と、意外に伝法な句調で彼女が私に話しかけてきた。私

は黙って、哀願するような眼付きで彼女の顔を見ながらコックリとうなずいて見せた。

次の駅に着くと、彼女は顎で私に指図するように「私の後についておいで」と仰言ったので、勿論私はその命令に従った。どんなことがこれから起るのか、期待に胸をときめかせながら――。

ああ、そういう女性は、いらっしやらぬものだろうか――。

股くぐり

盛り場を、酔って歩きながら、いかにもズベ公らしい、若いハツラツとした女性が三人連れで通るのとすれちがったりすると、私はいつも空想する。ティーン・エイジャーらしい、然し十分に発育し切った肢体のハチ切れそうな三人の女性が手をつないで歩いて来るのを見ると、私はワザとそれをよけずに手をつないでいる間を押し割ってすれ違おうとした。然し、押し割れずに、私は彼女達に逆に押し戻されると「オジさん、失礼じゃないか道は広いんだよ、よけて通ればいいのに、正面からぶつかってくるなんて、何かあたい達に文句でもつきたいんじゃないのかい。ケンカなら相手になって上げるよ」と彼女の中の

一番美人で而もきつそうな子が、エライ権幕でつかかって来た。見るとこの女性達は、この辺の不良共の女友達だったのか一と悶着と見て、女達と私の周囲には女達に加勢するのであろうゴロツキのような若者達が私を威嚇するようにそれとなく取り巻いてしまっているように見えた。少女相手と思って強く出れば、このゴロツキ青年共に袋叩きにされて半殺しにされるだろう。と思った私は、といって少女達に謝るのもさすがに体裁が悪かったので「いや別に文句なんて……。ただ酔っていたのでよけるのも面倒臭くて――」と云い終らぬ中に、又少女の一人が

「何んだって、失礼なことしておきやがって面倒臭かったとは、何んちゅう挨拶なんだ。ケンカしたいならつべこべ云わずにむかっといでよ。男のくせに……」と云いながらドンと私の胸を突いた。ヒョロヒョロとよろめきながら私は「ケンカなんて……」としどろもどろ」。

「そんなら謝るか、オジさん。でもただ普通の謝り方じゃゆるしてやれないよ。あたい達三人の前に一人一人に土下座してから、あたい達の股の下をくぐればこの道を通してやるわよ」と一番美しい少女が威丈高にきめつ

ける。私はもう逃げるに逃げられずオドオドモジモジする中に勝誇ったように少女達は声を揃えて「さあ！早く、オヤジ、手をついて謝れ、あたいの股をくぐれ！」と今は面白そうに促すのだ。ああ哀れな私は天下の大道で衆人環視の中で、十以上も年下の女性達に無条件降伏を強いられ、股くぐりという屈辱の行為を迫られるのだ。だが、今となってはのがれる術もない。止むを得ない。という人並みに聞こえるが、まさかこんなことになるとは思わなかったが酔ったまぎれに活発そうな少女達にぶつかってからかってみたりし

たのは、私のマゾの潜在意識のさせた所為、知った人にも見られては大変だが、この辺ではそんな心配はない、やはり一面恥ずかしくて気がおくれる心持ではあるけれども、美少女達に大道の真ん中で土下座、股くぐりは願ってもない歓迎……。今はもう私はマゾに徹して、心の中で私はもう一人の私を周囲の弥次馬の中の傍観者の一人に仕立てて自分の演じている、状景を己の頭の中の画面に鮮明に描き、それを楽しみ、コーフンを駆り立てながら表面は女王様達に神妙な表情で「屈辱の儀式」を進めて行った。少女達は仁王立ちに

立ちはだかって私の土下座の礼を見下し、それが済むと、夫々タイトスカートを穿いていらっしやるので、膝の上に稍々スカートをたくし上げて三人一列をつくって肉体のゴールデン・ゲイトを私にくぐらせ遊ばす。美しい脚線、豊かな太腿、然し私はくぐりながら見上げたりすることは当然許され得ない。愈々私はくぐり始める。ああ、ふとした酔にまかせた振舞から、思いがけず天下の大道で少女達の股間に四ツ這いの姿になりながら私はマゾのコーフンの絶頂に到達してしまったのだ。

四馬孝画 大好評！ 注文殺到の傑作責画

美処女羞恥責「悦虐絵巻」

／＼美しき嗜虐の生贄／＼

A5判感光紙極鮮明焼付 五枚一組 五〇〇円 略号（えつ5）

【第一図】——淫辱全裸の仕置に

される捕われの令嬢

豊麗花を欺く深窓の令嬢雪絵は嗜虐的な秘密シヨの手先である

ズベ公の一味に捕えられ、地下の拷問部屋で全裸にむかれて、三角木馬にまたがせられようとする。クラブのボス香蘭は、雪絵をシヨ

のスターとして仕込もうと決心する。

【第二図】——

排泄強要の飽くなき淫婦の奸計

絶世の美処女雪絵は、ズベ公達によってヤカンから無理矢理、多量の塩水を飲まされ、奇妙なおむつカバーを穿かされて地下室の拷

【第三図】——

羞辱排泄の哀願に苦悶する生贄令嬢

問椅子に見るもむざんな開股のポーズで縛りつけられる。雪絵の真白なお腹が、ぶっくり膨らんでいる。

妊婦のように膨らんだ雪絵のお腹、激しい尿意と戦い必死になつて耐え忍ぶ雪絵。トイレへ行かせて欲しいと、只それだけを願う雪絵は羞恥の余り、遂にペロという一匹の牝犬となつて仕えることを誓わせられ泣きじやくりながら屈伏させられる雪絵。

【第四図】——

牝犬ペロの誕生とその調教

哀れなペロにさせられた雪絵は四ツ這いのまま部屋中を廻らさ

れ、首輪をつけられ砂の入った小箱の中へ排尿させられる両手両足を大きく開け、高々と持ち上げられた円い尻の上には水の入ったコップを乗せ口にはおむつカバーをくわえさせられて首輪から太い鎖をひきずりながら這い廻る雪絵。

【第五図】——

華々しい羞恥地獄の饗宴

秘密シヨの舞台の中央、まぶしいばかりに成熟した雪白の太ももを左右に開けさせられ、天井から下っている鉄のパイプに両の足をくぐりつけられて雪絵。巨大なイルリガールから尿管が、いまや一滴も余まらず浣腸液が注入されている。果してどのような光景が展開するだろうか。



〔告白〕

女が斬られるとき

「落花競艶録」

中屋敷 真

私が自分にこういう傾向があることに始めて気付き、興味を持ち始めたのは、中学二年生の夏のことであった。

当時、講談社から発行されていた娯楽雑誌『富士』の九月号に、木村毅氏作の「女武士道」という小説があり、その挿絵を見てからである。

題材は俗に「飯田騒動」として知られているもので、最近の大映映画「斬る」のトップシーンと中頃とに描写されていた。又、奇ク昨年十二月号にも取り上げられていた信州飯

田堀家の愛妾若山が、山口藤という腰元に刺し殺された事件である。

挿絵は白綸子の小袖に被布姿の若山が、お藤に左の乳下を刺し通されてのけぞっているもので、鴨下晁明画伯の描写は艶麗そのものであった。これに刺激されて、こういった傾向のものを雑誌から集めたり、映画の中この種のシーンに注目し始めた。

その傾向というのは、つまり女が斬り倒される前後の姿態に興味を感じるわけである。その中でも、特に御家騒動などの御部屋様、

愛妾風の斬られる瞬間の姿を最も好んだ。

その中に、新興映画（現大映の前身）「佐竹競艶録」のラストシーンに、最も私の好む典型的な完全ともいうべきシーンがあった。

あらすじは、お定まりの御家騒動、雲井八重子扮する愛妾お浪の方が、悪事露頭して、若き日の大友柳太朗に斬られるが、実に丁寧にえがかれてあった。

シナリオ風に書くと、（少々退屈でしょうが、我慢して下さい）悪事露頭を腰元藤尾より聞いて、お浪の方が驚いて部屋を出ようと

するところへ、若殿が抜刀のままで現れる。

「お浪、よくも母上を蔑ろにし、父上をたぶらかせたな」と迫る若殿に、腰元藤尾、身をひるがえす。その背へ、右肩より斬り下げる若殿。続いてお浪を追う。

廊下。遮る侍達を斬り払いつつお浪を追う若殿。打掛を翻して逃げるお浪。

渡り廊下。お浪、打掛も脱げ落ち、廊下の端までいざり逃げる。やがて侍達も全部斬り倒され、お浪一人、廊下へ突き倒され、起き上り身を翻すが、帯をつかんで、二、三度くるくると引き戻されて、右肩を袈裟がけに斬りつける。

「キヤーツ」

と悲鳴をあげてのけぞり、柱をつかんで苦悶するのへ、左肩に刀をあてて斬り裂く。

「ウーモン」と横へ崩れ落ちる。

荒筋は以上の通りであるが、私の好みからいえば、完璧ともいうべき作品であった。

続いて、やはり雲井八重子の主演の「変化騒動」も一風変っていた。

信州の旧家の妾で、用人と結托し、横領を企むが、本妻になろうとする婚礼の夜、白無垢打掛の花嫁姿のまま、正義派の浪人に、事關して廊下の端へ逃げようとして、右肩先を

斬り下げられ、棒を倒した様に転がる。花嫁では、これ以外に全くお目に掛らない。

又、女斗美絵巻の典型「鏡山」歌舞伎より映画まで、数えきれない程あったが、東映浦里はるみ（ヴァンプ役で鳴らした人、何度斬られたか分らない位、斬られ役の多かった人である。）の岩藤が、美空ひばりのお初に白綸子の寝着の胸を、深々と短刀を突き通されて、刀をそのまま胸に立てたまま、崩れ落ちるのが、最も印象的であった。

又、鈴木澄子や大映得意の猫物も、美しい奥女中やお部屋様が、緋の長襦袢姿や、小袖姿で咽笛を喰い破られて殺されるいうわけで大抵のものは、見逃さなかった。

戦後もこうしたシーンはあるにはあるが、女権尊重？か、精しくは描写していないし、挿絵の方も簡略化したものが多く、これはというものはない。

女の抵抗と最期、静より動へ、更に静への動き、恐怖と断末魔の悲鳴、苦悶等が華やかなサジズムを見せる。又、適当な色気も見せなければ駄目で、一方に偏すると歌舞伎の立ちまわりとなるし、逆となると、最近の残酷ブームの描写のようになってしまう。余りリアズムに徹して、殺人事件の実況描写となっ

ても困りものと思われる。

以上、長々と私自身の特異な傾向について述べたが、結婚後、私は妻を口説き落してSプレイを行うようになった。

私の好みは裸女にはないので、衣裳が大事である。わざわざサテン、デシン、綸子の小袖仕立を作らせた。

結婚当初は、郊外へ出かけて人気のない山中で、殺陣をやったりしたが、ずぶの素人の彼女は余り演技的でなく、お芝居気がないので、最近専ら斬り下げられた瞬間のシーンをカラー写真で再現している。今までに数十枚も撮影したが、自分で良いなあ、と思うものは余り出来ない。

やはり動きのある場面は、8ミリで思う存分に描写しなければ、迫力のあるものが出来ないのではないかと気付き、目下その準備中であるが、成功するか、どうかについては自信はもっていない。私の傾向のように、女性が斬り殺されるシーンにだけ興味を持つということは、たしかに異常に違いないが、或は共鳴が得られるかもしれないと、駄文を弄した次第である。

私の願いとしては、こうした分野の拡大が試みられることを希望する。



〔体験・手記〕

素人女相撲

観戦記

岡平吉夫

三十七年、夏、長崎に出張し、暇があったので市の遊園地に参りましたところ、女相撲があると言うので早速観戦、女相撲といっても興行女相撲一行とは異り同市の近く式見の町内からなる主婦団によって構成され、従って小屋掛けによるものではありません。

勿論、入場料も不要で遊園地を散策している人々がドッと押しかけ土俵周囲を取り囲みました。

十二、三名の女力士が金銀色に四股名を染めぬいた化粧まわしを付けて角力甚句を歌いながら踊っております。

二十代から五十代までの、たくましい女力

士。勿論、白の半袖シャツとパンツをつけておりますが、中には今が脂ののり出した二十五、六の肉付きが一段とひきしまった女力士黒の褌がお尻の中央にきりつとまたがり惚々するような脚線美をみせております。

五、六名の女力士は襦袢落しの角力鬘にゆいあげ錦画からぬけ出たような美人もおりました。

取組は数番ありましたが綾錦と若干鳥関の対戦の模様から申し上げます。

年の頃なら五十を越した女行司に招かれた両力士は清めの塩を撒き相対して仕切りに入ります。

両者とも二十四五才、若妻といった感じの体臭をまき散らしながら土俵上にあがった光景は肉体美の極致ではないかと思われれます。

「綾錦頑張れ」

「若干鳥しっかり」

と声援が飛びます。やや高潮した面持ちの中に闘志を秘めた二人はぐっと両股を開き、呼吸を合わせて立上がりしました。

体格もほぼ互角の両力士は直ぐガップリ四つに組み合い互いに差手も十分に相手の隙をうかがっています。

寄ろうと全身の力をこめて引き付けければ、綾錦の重量感のある太股がグイグイと躍動し下腹が大きく波打つ、大きなお尻を左右に振ったかと思われた瞬間、若干鳥の上手が切れそのまま正面土俵に寄り進みました。

あわや、若干鳥、土俵を割るかと思われましたが、俵に足をかけ顔面は真赤、再び上手を取ってこらえる肢体に筋肉が痙攣する。

一方、綾錦は腰を落してグイグイ寄りをみせる有様は誠に見事であり、興行女相撲では味えない緊迫感があります。

この強力な寄りにたまりかねた若干鳥は腰くだけとなって土俵溜りに仰向けに顛倒しました。

ドッと喚声がわき、負けた若干鳥は一礼すると背中にもベトリ付いた砂を払うのも忘れそのまま控えの幕に小走って行きました。



△私のイメージ▽

悦虐美女オンパレード

近 藤

一

眼もさめるような無残美の勢揃い、と自ら認めるところ、但し、それは私の心の底の処刑場で行なわれるものの話なのだけれど、何よりもまず、生贄の美女たちの魅力満点という責め手を考案したのが一苦労と言える。

トップバッターが野性美満点の水本茂美。私は彼女をパンビと名づけた。撓やかでピチピチしている。瞳が佳く、全身に野性の匂いがある。細いようでも瑞々しい魅力がある。パンビは何と言っても海老縛りが似合う。着るものは不要。一番小さなナイロンのパンティで充分だ。パンティがお尻の谷間を申し訳程度に覆っていれば良く、レースの縁でもついた可愛い奴がいい。

撓やかな四肢のパンビに遠慮は無用。後手

は思いきり吊上げて首筋へ持上げ首縄を締付ける。上膊部の縄目で抑えられるようなら後手の交叉を手首でやって、キリキリ吊上げるのだ。後手の高手小手首縄で、胸の縄目は乳房の上下を二巻ずつギッチリと締付ける。

そして脚だ。普通のおぐらでは駄目。足首を交叉させて脚を立て、丁度、両膝で頸を挟みつけるように縛る。頸の下に交叉した足首が繋がれて、どうしても顔を突出すようになる。パンビは苦しみ、喘ぐ。猿轡なしで話などはできない。頸と足首を強く結びつけると、首縄があるから、細い首が前後から締め付けられて充血にふくれ上るだろう。

瞳は腫れず、眉を寄せ、肉感的な唇が半ば開かれて喘ぐ女体の妖しさに魅せられて、私

は被縛のパンビを押倒し、仰向けにする。苦しみ痛みもさることながら、女の最も恥ずかしいポーズを自分自身の五官に思い知らされるとき、パンビは哭くだろうか。

二番目に登場させるのは東浦ひかる。肩から胸、腰から腿の逞しさはいかにも奴隷向きと言えよう。洗練された感じは乏しいが、それは髪型や顔立ちのせいばかりでなく、いつも張っているような下腹の膨らみが原因だから、ひかるにはやはり下腹部の責めが佳い。パレーのタイトのような奴隷着で赤とか黒が良い。襟を立てさせて、太過ぎる頸を細くするために十握巾の黒革製首輪を締付ける。両手首は手錠で繋ぎ、両足首は長さ十五握位の鎖でつないだ足錠をかけ、手錠は前手錠だ

が、それは部屋の床の環に連結される。

奴隷着はセパレーツで、上半身を覆い、下腹部は露出させる。膨満な下腹部が浮出して見える訳だ。醜悪な現象は少しでも避けた方がよいから、まず完全な洗腸と胃洗滌で嘔吐や脱糞の粗忽を防ぐ。ひかるは体質的に便秘の傾向がありそうだから、それが一週間も続いた時を狙って行えば、それだけで女奴隷は物倦い虚脱感に全身を包まれてしまう。

どうにでもして、という気持にした所で、



温湯を極度に注入してやろう。素直に受入れる彼女のことだから、五〇〇CCや一リットルは入るだろう。そして下腹は膨れ上がる。タイルカリノリニームの床に仰向いて喘ぐひかるに、次は何を飲ませようか。健康美を保つためにミルクの冷たいやつを一リットルも飲ませてやろう。いやがったら口を割って飲ませれば良い。冷たいミルクで下痢を催すだろうし、当然のゲップでミルクが喉を突上げるだろう。

羞恥と女体内部の苦痛の渦巻で彼女は甲斐のない身悶えを止めないだろう。奴隷着の肩先で息をつき、腹部に波うつ女体は、思いきり、重圧をかけてやれば良い。女の体の上下から液体を噴上げるだろうか。下から流れるものは液体でありそして口や鼻の穴からも白い液体を吐出して、東浦ひかるは瀕死の歓喜に哭きむせぶに違いない。

三番目はKK確立の功勞

者であるベテランの川端多奈子。彼女には望みどおり、窄衣を着せよう。白くなめした革が良い。細くて良いが腰までを覆うような長いもので、乳房は覗かせた方が面白いかも知れない。首と両腕を残して、上体をギチギチ締上げる。それだけで呻き出して、多奈子は口もきけない。そこで両腕を背へ捻上げて、高手小手に縛り上げ、首縄も締めてやろう。丸く突出た乳の上下を綜紹のロープでキツリと巻締めてやるのだ。そしてシャワーの下まで曳いて行く。

窄衣の下は勿論なにもつけていない。鞭を振って正坐を命じてみたところで、如何にベテランのマゾヒスティンでも、横坐りになり横倒れになり、転げて悶えるに決まっている。脚の自由は奪わない方が面白い。

シャワーの栓を開く。水の線が被縛の多奈子を襲い、髪が濡れ、白い革が濡れ、太腿が濡れる。水を吸って、ロープが締めまり、窄衣も緊縮する。人間の女の声と縁遠い、獣の唸りが多奈子の喉から出て、白く濡れた女体のたうつ。

太腿の見事な悶えに、我を忘れる男は独り私ばかりではなかうと思うのだが……。

四番目、私が惚れ込んだ女の一人、大塚啓子。量感、弾力は申し分が無い。親近感を持たせる容貌、髪も佳く、瞳も佳く、口許も佳い。何よりも根性が嬉しく、「いけにえの幸福」で彼女の価値は更に増したと言える。

体力があつて柔らかみが充分だから、思い切った残虐が実行できる。

髪は解いて長く垂らせ、先端を束ねて、そこに銀の鈴を二つ三つ結びつけてやろう。両手首は背中できっちり縛り合わせ、その縄をウエストへ巻いて力一杯絞り上げる。ウエストをくびってヒョウタンにして、手首が動けば胴が干切れるようにする。これだけで、彼女は喘ぎ、いけにえの幸福に浸り始める。腹這いにする。両足首をギッチリと括り合わせ、両脚を背へ曲げ、逆海老にするのだ。足首は手首に密着するまで引絞る。彼女の体は弓なりに反って、弾力を示すが同情は不要。彼女は歓喜にむせんでいるのだから、四肢は背で緊縛してよい。そして足首の縄目を伸ばして頸を巻いてやるといい。身悶えが絞首になる。

完全な逆海老縛りなのだが、ファイトもスタミナも悦虐の性も抜群の彼女だから、更にもう一步を進めて、この儘の姿で吊ってみた

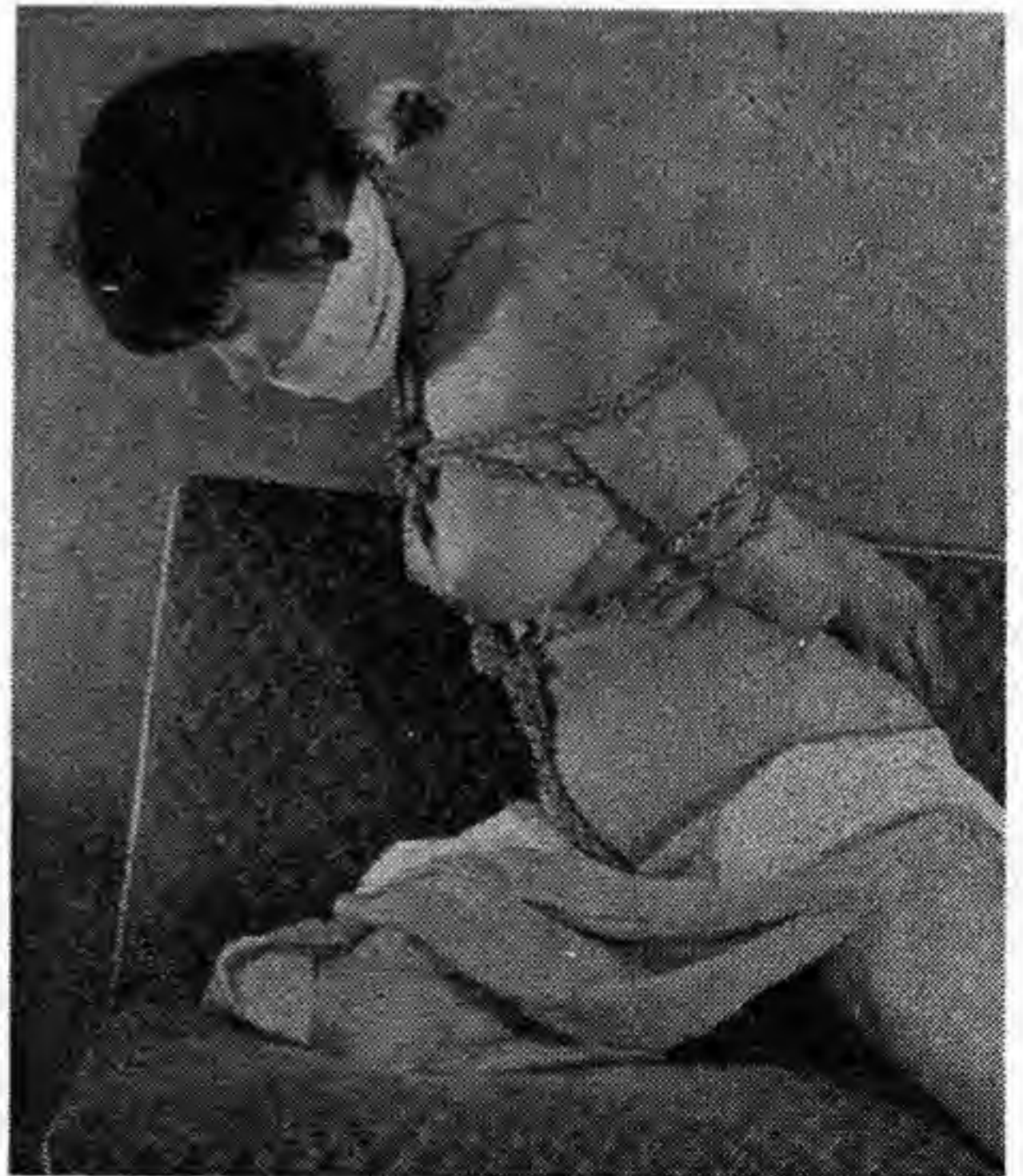
い。あの豊かな長髪に鈴をつけたのは目的がある。吊られた彼女の身悶えが垂れた黒髪を哭かせる訳だ。

駿河問いを試みる。勿論彼女はおちる。だが死なない限りは受忍させるのだ。

正直なところ、急旋回する彼女の絶叫を愉しみたいのだが、大塚啓子という嗜虐のいけにえを哀れと同情するならば、吊縄を精一杯よじって、回転を急速に続けさせ、彼女の意識を失なわせることがいだろう。

この被虐の女体は、全裸というよりは、緋かピンクの腰巻を一枚だけ許した方が、この女体のこのポーズにぴったりではなからうかと思う。

美人モデルの絹川文代も欠かせない一人。脚線美でデビューした彼女は、なかなかに日本的ムードが豊かで、根性のある女性なのだが、従来とかく綺麗事に流れ、パンチが弱く些かマンネリに墮した感があった。何故、彼女の魅力を發揮しないのか惜しまれてならな



い。この際、絹川文代の涙や呻きを觀賞するのも貴重であろう。

彼女は全裸より着衣で体の線を窺わせる方がよい。すらりとしていながら、柔らかで肉附のよい女体だから洋服ならタイツがいい。だがここでは、彼女の凄味のある日本風な美貌を活かして、古風な囚衣を着て頂こう。何と言っても女盛りで、八百屋お七というような未熟な可憐さはなく、稀代の毒婦と言う役柄が最適なトップモデルだけに、ストーリー



のあるポーズが欲しい。

囚衣は襦袢と腰巻型にして、色は白よりも真紅か藤色が佳い。襟に番号を縫いつけ、キツチリと菱縫いを掛けられる。菱縫いそれ自体は

別に身をよじる苦痛がないが、それだけに屈辱感が胸奥を疼かせる。

まず晒し者にする広場にすのこを置いてその上に荒蓆を敷き絹川文代を引据える。

彼女の罪状は美貌を餌に幾人もの男を謀殺した妖婦ということで、それを書いた高札が晒し場に立てられている。

晒しが済むと曳廻しにされる。美女でも重罪を犯した女だから、跣足で街の中を歩かせられる。太目の曳立て縄を腰に結ばれ縄尻を取られて、彼女は曳廻される。跣足の足首には、急いで歩くことのないよう鎖の拘束が施され、彼女の罪状を明記した木札二枚が、彼女の首から前後にかけられる。彼女の髪は長く垂らして、先端を薬で束ねておく。

そして処刑。絹川文代の美しい長身を活かして、磔にする。極悪の女囚なのだから本格的な大の字の磔にしよう。罪状は高札を立てれば充分で、足首の鎖は解く。刑架上の女囚の囚衣は脇腹から乳房までを露わにされ、そして彼女の刑の執行は、特に、彼女に殺された男達の妻や恋人や姉妹達の手に乗せられるのだ。若く美しい女達の手で合法的私刑を加えられて殺される絹川文

代、この位の作品はあっても良いだろうに。

KKのモデルの中で、読者を娛ませ、自らも愉しい雰囲気や撒散らしていたのが、梨花悠紀子。吊責が好きというお転婆ぶりは、魔女というより、小悪魔的でボーイッシュな痛快味がある。

彼女には完全な逆さ吊りを実行しよう。小さめのパンティ一枚にして、後手の高手小手下と首縄をキツチリ締上げる。それ以外には余分な縄目を掛けず、踝を痛めないよう、足首を括って逆吊りにする。

スポーティで夏向きの残虐を考えてみた。噴水を上げる。逆吊りの悠紀子の顔の辺りに水が噴上げて、彼女を怖えさせる。そして、水の細い流れを女体に走らせる。足首の吊縄に水が伝わりさえすれば、女体の表面を輝やかせて、髪の前から滴下する訳だ。ただ、ともすると、水は容赦なく鼻孔から流れ込むだろう。悠紀子を窒息から救うには、彼女の体を振子にしてやることだが、それはまた、彼女の顔を噴水で濡らすことになる。

妖艶な絹川文代とは違う、あどけない美女梨花悠紀子の白く輝やく女体が、苦痛と歓喜に恍惚たる悶えを見せて水滴を撒き散らすのは、KKにして初めて可能な真夏のスペクタ



クルではないだろうか。

七人目の囚女は愛川悦子。KKにとっては功績もあったし、忘れ難い個性の持主でもあった。悦子には典型的な忍従の姿がある。男に弄ばれ、踏付けられながらも蹤いて行く女の被虐の姿があるのだ。悦子の表情は穏和で従順であって、間違っても兇悪犯罪を実行できるような女ではない。もし悦子が捕えられ緊縛の上厳しい拷苦に呻吟するとしたら、それは謀略の犠牲にされた哀れな悦子の姿と考えてよいだろう。そこで思い切った虐待がで

きる。

悦子の生命は乳房の豊かなことだ。あの大きな胸の膨隆を絞り出すように括り上げて、悦子の裸の胸を、革か網目の枷で締付けてやろう。そして下腹部を同じような革か網目のコルセット風の拘束具で包んでしまおう。これでおそらく悦子は正坐ができなくな

るが、無理にも正坐をさせるのだ。そして本格的に石を抱かせてみる。後手にして、胸の枷の美をこわさないように上体を柱に縛る。石は二枚が限度。脛の下算盤板は骨折を防ぐため洗濯板程の深さの刻みでよい。ベテランの強い悦子だけに石抱きは本式でよい。

八番目は見事な肉附の令夫人関谷富佐子。正に肉体美と言うべき美麗な裸身と洗練された上品な色気。どうしてこれが被虐に結びつくかと訝しい思いがする。関谷富佐子の本領は、今迄のところ、鞭撻と言えそうだが、私

はこれに畜化をからませたい。雌獣なら鞭撻を欠かせないからだ。

彼女は美身を撻たれるために全裸にされ、素膚に金のネックレスと上膊部の金の腕輪とパール指輪が彼女の元の身分を示すことになる。囚われの彼女の傍に練絹の純白の中国服と肌のものや白手套が捨てられている。彼女の髪はフンワリとカールされ、ヒスイの耳輪でも下げようか。

その上で四肢は鉄の輪をつけて鎖で繋ぐ。梨花嬢がよく演じる姿であるが、関谷富佐子はまず四つ這いにする。そしてこの令夫人をムチ撻ち台に追い上げる。かつての「続・囚衣」で古川裕子が鞭の雨を浴びたあの構造だが、富佐子は後手縛りでないから、ギロチンの首穴のような枷の拘束を受けると、ヒップを高々と突出して四つ這いになる。首枷によって畜化は強まり、顔への鞭を防ぎながら表情が愉しめる、女体の前面が乳房や腹部の柔らかな膨らみを鞭の雨から隠してしまうけれども、それだけに背や尻や腿には一斉に襲いかかり、麗女の全身に熱湯を注ぐ味わいをさせるだろう。肌を撻ち、肌を裂き、肌を焼く鞭の味に、関谷富佐子は呻き、哭き、そして悦虐の歓喜に身悶えるに違いない。

奇譚クラブ臨時増刊号！

写真と絵画

文献―特集号

待望の臨時増刊、愈々十月十三日発売！

乞御期待。

略号（文献） 定価五〇〇円 （送共）

新しく登場する五月亜紀、長野良子、新井マリ子などの縛り美人の斬新な緊縛フォトに加えて、ベテランの大塚啓子、絹川文代、梨花悠紀子、東浦ひかるなどの凄味のあるフォトがずらりと並び、更に第二の春日ルミと目される美貌のサジスチン宮井美佐子の登場による華麗なるMフォト。今やここに、サド・マゾ・フェチをはじめとした女体切腹、流腸、糞、女斗美、妊婦等々の貴重な文献資料が一挙に開陳されることになります。

連続絵物語「白ターバンの女」

四馬孝・画
辻村隆・文

新人撮影行「五月亜紀子さんの場合」

由岐 敏夫

新しいモデル「新井マリ子さんと共に」

由岐 敏夫

写真物語「ズベ公のリンチ」

塚本 鉄三

雪崎京人提供、女相撲図絵「禁じ手五題」

（告白）「サジスチン宮井美佐子の略歴」

宮井美佐子

発行部数が限定されておりますので、末端の書店まで十分に配本されないと思っております。是非、天星社（大阪アベノ局私書箱第14号）まで御予約下さい。印刷完成と同時に発送申し上げます。どうか、お早い目にお申込み願います。局留の方は、十月十五日頃に局へおいで下さい。

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金にて御注文願います。直接の訪問並に代金引換はお断りします。
○御注文品は注文書到着と同時に発送申し上げます。但し品切の分は暫時御猶予願います。

○御送金は、現金書留（封筒は一枚三円にて局で売っています）小為替、定額小為替（小額のときは御便利です）振替（用紙は郵便局にあります）切手代用（十円、二十円、三十円、四十円などの切手で、絶対紙にはりつけないでお送り下さい）等を御利用願います。

○御注文品は、雑誌では何年何月号、或は略号の付してあるものは略号。フォトの類はすべて略号をお書き下さい。品名をお書きになると間違いが起り易いので、必ず略号のみ、お書き願います。

○送料は日本国内に限り、すべて当方にて負担させて頂きます。但し速達並に書留それに外国便は、実費御負担下さい。

○局留にてお受取り希望の方が増えてきておりますが、せいぜい御利用下さい。御注文の際、お受取りになられたい郵便局名（特定局でも結構）とお名前（仮名にて可なれど市販の認印なんかを準備し

た方がよい）とを当方へ御連絡下されば、その御指定の局に局留としてお送りします。別に局からは通知がありませんから、局へ出向かれて、お名前をいってお受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日間を過ぎると差出人へ返戻されます。

○御注文の宛先は大坂阿倍野郵便局私書箱第十四号、天星社です。（今度郵便局からの通達で、私書箱番号を明記するように依頼されましたので右の通りお願いいたします）
○尚、御注文の際、若し代品として第二希望品がございましたら添記頂けますと、万一、分譲中止、品切などのとき、迅速に処理できて助かります。

○分譲品の新しいものは、毎月号の誌上で「新版案内」として発表しております。又、古くなりましものは漸次打ち切りにします。
○御注文の宛先は必ず楷書で、はつきりとお書き願います。肩書きがございましたら、それもお忘れなくお書き添え願います。

○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故御安心下さい。封筒は用済後は漸次焼却しております。
○金額にして五千円以上のフォトをまとめて御注文の際は、金額に応じて優秀フォトのサービス品を贈呈させていただきます。

今月の新版

代理部分讓品案内

△新人、遠藤百合子の巻▽

今回、特に遠藤百合子さんの御希望により次の通り、分讓品として発表しました。グラビアにない迫真的で身近かな彼女の数々のポーズを手にとってごらん下さい。

全裸緊縛姿態開陳

略号 (ゆり)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円

汚れを知らぬ美しい百合子の全裸の姿態が乳房もゆがむ、きびしい縄目に、くねくねとしなをつくって、曲りくねる。グラビアに出せなかった百合子さんの良さを、マニヤの方だけに見て頂きたいと願うばかり。

鼻をいたぶる

略号 (ゆは)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

この写真は、いじめられる鼻を中心として余りにも刻明に、はつきりと顔が出てしまうので、口絵には出さないという百合子さんの願いで、特に分讓品としました。

白晒六尺褌

〔正面〕

略号 (しは)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円

真白い六尺褌を脛まるだしに、きりりと、いなせに締めた姿。可愛いお臍、くびれたウ

エスト、正面の六尺褌姿、恥らいに、身をくねらし、両手を挙げたポーズの数々。

白晒六尺褌

〔背面〕

略号 (しろ)

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

双丘の間にぐっと喰い込んだ晒木綿、褌覺にとつては、まことに魅惑的な六尺褌のバックスタイルを、ぐいとはかりお尻を持ち上げて、たっぷり見て頂けるフोट。

黒フンドシの女

〔正面〕

略号 (くま)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

前袋も前を僅かに覆うばかりのぎりぎりにきゅっと締め上げた黒フンドシの魅力。女のフンドシは黒に限るといわれる方へのプレゼント。百合子の美しいポーズでどうぞ。

黒フンドシの女

〔背面〕

略号 (くう)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

黒シユスのフンドシが尻の割目に捻じるように喰込んで、むっくりと二つの双丘が右に左に盛り上り、くねる。肌が白いだけに細い黒フンとの間にかもし出す奇妙なコントラストが、黒フンマニヤの目を奪う。

相撲褌締め込む

略号 (すい)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円

雲斎の白の相撲フンドシを、正式に締め込

んだ百合子さんが、そのポリウムのある裸身で、前面、背面、側面と、さまざまな姿態をごらんにいれます。肉体が素晴らしいだけに、堂々と相撲フンドシを締めた姿は前袋もはりきって見事なものです。

浣腸をする女

略号 (ゆか)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

百合子さんに浣腸器を持たしたら、彼女はぱっと顔を真赤に染めて、「あら、こんな大きなので浣腸しますの」と、あとは声もなかった。若い女の人の口から、直接、浣腸とか猿ぐつわという言葉を聞くと、妙になまめかしい。結局、彼女は初めから終りまで、浣腸については恥しがり通しだった。

バンドを脱ぐ女

略号 (ゆお)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

月経帯の替ゴムの生ゴムのむちむちした感触を楽しみながら、ゴムもあらわにバンドを脱いでゆく百合子さん。その中で、ゴムのよく見えたのはばかり三葉選びました。

月経帯のまま縛り

略号 (ゆす)

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

後手の高小手に縛られて、今は両手の自由のきかない百合子さんは、黒の月経帯をはかされて、蒲団の上どころがされる。起き上ろうとして身体を起せば、思わず両足が開いて、月経帯がすっかり見えてしまう。

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

にいたよ
つたふ
って撮
影した
穴責め
フオート

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

さあ、私の鼻はどうでもして頂戴と観念のホゾを固めた若い女性
の鼻に対して、恍惚境の表情を求
めて鼻を弄ぶ触手、鼻を男の手に
ゆだねて、うっとり、の被虐の味を
かみしめる女の顔。

大手札

四枚一組 四〇〇円
モデル 関谷富佐子

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

豊かな白い肌、典型的なマゾヒ
 スチンであるとする。自称するだけあつ
 て、責められる時の表情はマニヤ
 の琴線をゆするものがある。こ
 れは関谷夫人の緊縛フオトとして
 は、とっておきの傑作で、皆さま
 の引きせぬSの泉をこんこんと溢
 れさせる魅力を持つております。
 縄とムチに喘ぐ夫人の姿態にSム
 ードの感激を新たにしてお下さい。

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

最近一層の柔軟さを増して、グラマーズに折り曲げて、強烈なエビ縛りにして放すれば、膝小僧を顎につけて悶えながら、この苦痛から逃れようと全身をうねらす、その動きをキャッチして皆さまのＳＭードにマッチしようと思つたのです。

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 関谷富佐子

テイ、浣腸器がこの捕われの美女のヒップに向つて、徐々に執拗な触手で迫ってくる。

大手札

四枚一組 四〇〇円

裸の姿をさらして後手に吊られ、全
た魅力的な臀部を、ふりふりと固
肥りに引き締ったヒップを皮のム
チで思いきり引っぱたくと、肌を
真赤に染めて、全身をくねくねと
くねらせて身悶えめく均整のとれ
た美しさが、ぐっとしびれる。

大手札

四枚一組 四〇〇円
モデル 大塚 啓子

きりりと尻の割れ目に喰い込んだ晒、二つの丘がぐっと盛り上った見事さは、禪マニヤの胸を高鳴らせることでしよう。女性禪マニヤの方々からの要望を十分にとり入れて作成した新しいセンスの禪フオトですから、必ずや今までとは違った迫力があることと信じます。

大手札

四枚一組 四〇〇円
モデル 関谷富佐子

の端が股のつけ根に喰い込むばかり、ぴったりと締め上げた黒フンドシの魅力、背後は紐のように細くねじ上げられた黒布が、ぐいと双丘の割目に喰い込んで、一段と豊かさを誇張している。いずれも姿態に研究をこらした新作です。

イルリガートル

略号(いるり)

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 梨花悠紀子

一〇〇〇CC入りのイルリガートル、挿込便器、オシメ、オシメカバー等にとりかこまれて、自らの手でイルリガートルの嘴管から多量の薬液を注入し、激しい便意にもだえ苦しみながらオシメを当てる。オシメを着用するに至る連続場面をキャッチしました。

原画そのままの鮮烈なニアンス

四馬孝画 「凄絶、妊婦の切腹」

A5判感光紙極鮮明焼付 四枚一組 五〇〇円、略号「せつ4」

「妊婦と切腹」全く濃艶きわまりないエロチシズムと凄絶なサジズムとが、渾然一体となって迫ってくる素晴らしい重量感。原画そのままの迫力が、ぐっと胸にくる得難い傑作。発表以来申込殺到！この機会を逃すと、千載に悔を残します。分譲中どうぞ！

一、雨、夜、妊婦自刃

横なぐりの雨が降りしきる祠の前で、うら若き町家の女、雨の中にじっと見守る一人の武士の前で、ぶつくりと膨らんで、はちきれそうになった腹部に、脇差を思いきり突き刺す。切り裂かれた臍下。縁の上に流れ落ちる血汐。美しい妊婦の男まさりの覚悟の切腹――。

二、妊んだ腰元切腹

美男の小姓と通じて妊んだ美貌の腰元、見届けるお局の前で白足袋、白装束の上半身を肌ぬぎとなり、雪よりも白い妊娠腹をさらけ出す。短刀にて大きな腹の左脇臍下から右脇腹へかけて、真一文字にきりきりと、したたかに切りさばく。溢れ出る夥しい血汐の中に、青黒い腸が

傷口からのぞいている。

三、身籠った側女

殿の突然の急死のため、気も動転した側女が、身籠って今にも産気づきそうな腹部を、白鞘の守刀で切り裂き、愛寵を蒙った殿のあとを追う覚悟の自決。白装束、白足袋姿、上半身から下腹へかけて、衣服をぬぎ去り膨満した腹部にぐざりと刺す短刀、皮膚がはじけて、溢れでる血汐と臓器――。

三、産み月女の切腹

暗夜の邸内、東屋の前で豊満な肉体の若妻が大刀の柄を地面に支えて、臍下を一突き of 悲壮な切腹。産み月の巨大な腹部からは、血汐が滝のように地面へ流れる。長襦袢を僅かに腰に巻いたままの裸体姿。

依然、好調の注文続く妊婦フォト

貴重文献

妊婦緊縛秘蔵写真

分譲中

ここに分譲いたします妊婦写真は、読者有志の提供になる二十才の美貌の若妻をモデルとしたものであります。本誌上に広告以来圧倒的なお申込が未だにあとを断ちません。膨満した便々たる腹部は正に妊婦マニヤ垂涎のものであります。緊縛マニヤにとっても、決して見逃すことの出来ない逸品といって過言ではありません。是非一見をおすすめていただきます。

○妊婦の股間縛 (九カ月)

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号 (にふ)

○妊婦の股間縛 (六カ月)

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号 (にと)

○妊娠八カ月の股間縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号 (には)

○妊娠八カ月の縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号 (にあ)

○妊娠五カ月の緊縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

○妊娠前のヌード縛

児玉昌子 略号 (にこ)

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号 (まさ)

○妊娠初期の緊縛とヌード

児玉昌子 略号 (にこ)

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号 (ぬろ)

○分娩後縛り

児玉昌子 略号 (にこ)

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

○分娩後股間縛

児玉昌子 略号 (にこ)

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号 (にて)

【代理部分讓品案内】

全部在庫しています。略号にて
お申込み下さい。急送します。

○被虐夫人の表情

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「せや」 関谷富佐子

○バンド開股（アテゴム）

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「はこ」 東浦ひかる

○バンド着用責め

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号「はん」 東浦ひかる

○月経帯足挙げ

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「はと」 東浦ひかる

○バンド只今着用

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「もか」 東浦ひかる

○相撲褌締め込む

大手札 十一枚一組 一〇〇〇円
略号「すま」 大塚 啓子

○乳房いじめ

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「とき」 東浦ひかる

○強烈エビ責

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「えひ」 水本 茂美

○ゴム衣緊縛

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「みす」 水本 茂美

○六尺褌

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号「ろい」 東浦ひかる

○蒲団の上に悶ゆ

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「なき」 関谷富佐子

○悦虐の果て

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「なみ」 関谷富佐子

○椅子縛りエビ責

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おき」 東浦ひかる

○全裸強烈ムチ打ち

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「もた」 関谷富佐子

○六尺フンドシの女

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「くろ」 関谷富佐子

○強打に泣く夫人

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「むち」 関谷富佐子

○浣腸シリーズ

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円
略号「れち」 梨花悠紀子

○弓吊り宙責め

大手札 二枚一組 二五〇円
略号「つき」 梨花悠紀子

○手足宙吊り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「つた」 梨花悠紀子

○六尺褌縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「ろは」 東浦ひかる

○BG覚悟の切腹

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号「えん」 東浦ひかる

○強烈エビ縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「もい」 関谷富佐子

○乳房責の苦悶

大手札 二枚一組 二〇〇円
略号「もろ」 関谷富佐子

○月経帯責め

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「つけ」 梨花悠紀子

○エネマシリンジ挿入

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「えね」 東浦ひかる

○太い浣腸器の使用

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「かふ」 東浦ひかる

○バンド穿きかえ

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「はみ」 東浦ひかる

○レインコートの拘束

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「いろ」 大塚 啓子

○ゴム布に包まれて

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「こま」 梨花悠紀子

○狙れた和装の娘

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円
略号「ねい」 愛川 悦子

○裸女縋帯覆面

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「ふく」 大塚 啓子

○バンド晒し責め

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「はる」 東浦ひかる

○腹を切り裂く

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「やい」 大塚 啓子

○下腹に刺す刃

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「やお」 大塚 啓子

○柔肌を切りさばく

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「やえ」 大塚 啓子

〔新版分譲品案内〕

○女体争斗場面十二態

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円
略号「おん」

モデル 春日ルミ、愛川悦子

○おムツの股間しばり

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「むく」 東浦ひかる

○強烈責め、被虐の果て

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号「りお」 梨花悠紀子

○豊満乳房いじめ

大手札 二枚一組 二五〇円
略号「とお」 大塚 啓子

○強制浣腸三態

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「きか」 絹川 文代

○激痛！逆エビ責め

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「きえ」 大塚 啓子

○美貌の裸身に縄目

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「きん」 絹川 文代

○腰元、吊り責め

大手札 二枚一組 二五〇円
略号「こり」 村井知可子

○腰元間諜の拷問

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「こく」 村井知可子

○ゴムぐるみ人形

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「こみ」 東浦ひかる

○ゴム包みの束縛

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「こは」 東浦ひかる

○ゴムと女体のアップ

大手札 四枚一組 四〇〇円
略号「こあ」 東浦ひかる

○パリスバンド前開き

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おい」 東浦ひかる

○パリスバンドの縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おは」 東浦ひかる

○パリス携帯用白バンド

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おか」 東浦ひかる

○サカエ軽便型バンド

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おた」 東浦ひかる

○パリスSSバンド

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おこ」 東浦ひかる

○パピアバンド(大型替ゴム)

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おし」 東浦ひかる

○サカエバンド(百合)

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「おえ」 東浦ひかる

○珍品鼻責鼻料理

大手札 六枚一組 六〇〇円
略号「はか」 大塚 啓子

○女体格斗場面写真

大手札 五枚一組 四〇〇円
略号「めと」 絹川文代、大塚啓子

○禪美と禪縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「ふし」 桜井 葉子

○浣腸器嘴管挿入

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「しか」 梨花悠紀子

○浣腸後便器使用

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「まる」 梨花悠紀子

○浣腸後おしめ使用

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「しめ」 梨花悠紀子

○浣腸排便強要

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「はへ」 桜井 葉子

○後手吊り足挙げ縛り

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号「うら」 東浦ひかる

○二つ折りエビ責め

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号「うり」 東浦ひかる

○足挙げ椅子責め

大手札 五枚一組 五〇〇円
略号「うる」 東浦ひかる

○尻に喰い込む黒フン

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「とし」 東浦ひかる

○股に喰い込む黒フン

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「とひ」 東浦ひかる

○責め衣緊縛

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「せめ」 大塚 啓子

○踊り子緊縛

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「りこ」 絹川 文代

○猪吊りの乙女

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「いの」 梨花悠紀子

○足拳開股責

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号「あけ」 梨花悠紀子

〔本誌最近号総目次〕

○麦秋増大号

(昭和35年7月号)

定価三〇〇円(送料共)

巻頭口絵、四馬孝画「白線地帯の飼育室」(中村淳三) マゾフォト
「マゾプレイのワンカット」穴倉
幽閉、責め絵「女体エビ責地獄」
「せむしの刺青師」滝れい子 縛り絵「折檻」(北原純子)「女体切腹図」(坂爽たる馬上の麗人)「女性人形利用のマゾフォト」
グラビヤ・セクシオン、組写真、
「異国船の密航者」(絹川文代)
新入荷陳列(津川路子) 折檻場への道程(桜川葉子) 俺にもポーズをとらせろ(絹川文代) 黒髪は乱れて(大塚啓子) 縛られポーズの好演戯(春丘リル) さるぐつわをつけたポーズとその点景(春丘リル) 珍妙な首飾り(絹川文代) 女装緊縛「高島田」(杉江美津子) 縛り人形(愛川悦子) 新教祖出現(絹川文代)「本文」——絵物語解説、白線地帯の「飼育室」……中村淳三。随想、不死鳥に似て……松井頼子。告白「宇宙服と私」……飯田靖子。女性切腹の作品と作家……兵頭庫一。零の舞踊会……

……氷見竜也。愛好者の記録……とやまかつひこ。女装愛好者の記録「倒錯への道」……成舞芳夫。あるソドミニストの哀話「特高室」……榎村奏。マニヤ観照記「観客席」……牧高志。縛られた女優達……大河原珠樹。青山京子緊縛事件考察「女優就縛の図」……中谷国夫。演ってほしい責め映画……浮家鷹三。ファンタジア・マゾヒスティカ……山本節夫。空想のマゾ閑話……中沢一郎。宇宙のどこかで……佐治麻造。サド通信「君死に給うこと勿れ」……鷹取仙吉。新緑躍進号を戴いて思うことなど……南方佳男。「浣腸に関する資料」……島直樹。酒樽……蒼野礼麻生保氏の生活と意見……麻生保「バスガールの運命」……滝畑三郎。告白「ふんどし奇譚」……内田武男。マゾヒズム百景……馬場好男。「影の国」……雪俊遙。回想録「縄のない緊縛」……菅良太。沼正三だよりと雑報欄……沼正三

○清夏増大号

(昭和35年8月号)

定価三〇〇円(送料共)

巻頭口絵——絵物語「仮借なき凌辱(嵯峨紀世案・滝れい子画)」戯

画「少女王国男性族を破る」……南村俊平。「白と黒とのコンビネーション」(四馬孝画) マゾプレイのワンカット「人間馬への馴致」男性緊縛「追剝に襲われた青年」外誌紹介「靴を持つ女」自動臂打機構「切腹画」切腹曼陀羅図絵「洋画にあらわれたマゾ・シン二題」。「駿馬」(四馬孝画) グラビヤ・フォト——葉子ちゃんの立木とまり(桜井葉子) 緊縛写真撮影風景(若原明子) 落ちそうなパンティ(絹川文代) 無理強いと軽い拒否(春丘リル) 青い囚衣の女(津川路子) 落花狼藉(杉江美津子) 喰い込む縄(大塚啓子) くつわとローソク(桜井葉子) 松樹を中心としたスナップ(絹川文代) あがく捕われ人(絹川文代)「本文」——緊縛モデル「絹川文代論」……小林 清。告白、女装の楽しみ(比良野裕) 告白小説「愛犬譚」……扇町秋子。サディズム映画雑感……相原伊佐夫。被虐のシルエット……千草忠夫。切腹奇談「ある復讐」……上田美路。和装古典下着あれこれ……牧高志。渾刑事捜査ノート「裸祭」……榎村奏。マゾヒズム百景……馬場好男。時代サド小説「狼谷の魔女」

……塔場十郎。告白「由紀子の手記」……上原由紀子。愛好者の記録……とやま・かつひこ。告白手記「遠い昔に夢を求めて」……松井頼子。ファンタジア・マゾヒスティカ……山本節夫。マゾ通信、或る女優の「乗馬日記」について……倉仁成人。サド小説「白と黒と」……萩市湯之沢。体験記、切腹レポート……山田久仁子。初夏の時代劇映画縛りシーン……東山映史。創作「晩鐘」……三条卓史。告白「ふんどし奇譚」……内田武男。マゾ通信「象の思い出」……鞍良人。宇宙のどこかで……佐治麻造。追想「女装衣裳の魅惑」……兵頭庫一。編集つれづれ草八私絵物語、滝れい子画「仮借なき凌辱」……嵯峨紀世。連載第三次元小説「影の国」……雪俊遙。再映画化された「痴人の愛」……馬場好男。「零の舞踏会」……氷見竜也。浣腸マニヤの告白「疑問」……春村玲子。観戦記、女相撲と女斗美……雪村京人。乗馬ズボン断腸譜「燃ゆる男装」……藤山秀緒。マゾヒスチック・アラカルト「花の男責」……菅良太。沼正三だよりと雑報欄……沼正三。



私は京都の南の一店員です。今度偶然、本屋でページをくっつけて、「肉弾相打つ豊麗美女」を見て、今まで一ぺんも感じた事の無い、何ともいえない気持ちをして、それからというものの毎日毎日この絵を十ぺんも二十ぺんも見えています。この絵を見ると体中の血が逆流する様にコーフンします。うまいいえませんが、今までこんな感じはじめてです。女の角力というものがあるとはきいていました。が、こんなすごいものとは思いませんでした。それでさっそく貯金をハタイで奇譚クラブの古本をあるだけ見て、沢山女の角力の絵や文が出ていたので、ゾクゾクしてしまいました。今は一日中女の角力の事ばかり考えていて、他の事は考えられません。文も雪崎、円山、雄松先生らのを見て、くりかえしくりかえしよんでいます。うまいいえませんが、私にはこんな大発見はありません。世の中にこんなスゴイものがあるのかと思います。今はコーフンして熱にうかされてる様です。仲間のものにも二、三人教えたたらスゴイスゴイといって大変です。お願いですからこれからも出して下さい。ぜひぜひお願いします。ぼくは昔のマゲの女の絵より現代女性の方が好きです。グッと来ます。前の号の絵でも現代女性の絵が最高です。本とうにおねがいします。たのしみです。でもこの「十月号」の絵が今までの中で一番グッと来ます。はじめて見たからかもしれないが、恥かしいのとトク名でごめん下さい。(京都八深草生V)

薬村佳子様、小生は貴女のような人が現われるのを待っていたものです。六月号の告白文を読んだいくうちに私は、何にか引きつけられるものがありました。この通信文を書いていくうちに小生の目の前には貴女が振り袖の着物を着て縛られて身悶えている姿が何んとなく浮んできます。小生が着物姿の女性の美しさに感心したのは今年の始め、友人と京都に遊びにいった時、芸者の着物姿に惚れこんでしまったから、やみつきとなりました。着物というものは女性の肉体をほとんど包んでしまうがその反面、女性の美しい肉体の線をさらけだしているようです。あの線がなんともいえないのです。それを美しく縛ることによってなお一層強調するということにはすばらしいことでしょう。そして貴女の肉体の中まで見通すのです。貴女は、小生のなすがままに、体をくねらせ僕の目を楽しませてくれるでしょう。私は一度貴女とプレイをしたい。貴女が一番大事にしている着物を着せて、絹のヒモでしっかりと胸のあたりをしめつける。貴女の姿はすばらしいでしょう。小生はそのような貴女の姿にもっとときびしい縄をかけるでしょう。貴女は不安とこれから先への期待とでなんともいえない気持ちになることでしょう。以上書いたこ

とは、貴女の告白文を主体として書きましたが、ただの幻想ではない、貴女がその気になればいいのです。私は貴女と逢う日を待っています。最後に小生と逢ってくださる気持ちがありましたら、十月三日四時半：五時半迄阪急十三駅の神戸線ホーム(下り)で待っています。目印はコン色の長いバッグを持っています。では貴女と逢える目を楽しみにしております。(大阪府下八前田生V)

私中学生頃より映画の縛りシーン等に何かジーンと胸に感ずる様になり、高校時代にアルバイトに本屋に行き本誌を発見、自分の性的性格を知り驚き且つ同好の方々がおられるので、安心し年令と共に世の中に数多くM女性が生存する事が喜びに変わって行きました。そしていつか私の前に私の胸を満す素敵な女性が現われるのを願っていました。しかし残念ながら二十五才の秋を迎えて未だ現われずとうとうしびれを切らして、これを投稿しました。これをお読みの中にヒモや皮や責め衣等で私の目の前でもだえて下さる女性はおられませんか、特にゴムとサルグワに愛着を感じていらつしやる、お

若いM女性達とお近かつきになり
たいと思っております。神戸近郊
のM女性ぜひお手紙下さい。電話
番号も忘れずに書いて本誌発行の
翌月十日迄にお出し下さい。(神
戸市灘郵便局三宮駅内分室留置入
梓克元V)

○

愛読者の皆様お元気ですか。私
は八月号の読者通信に掲載されま
した京都のMK生です。其の後、
美しい女性方のお便りを心待ちに
しておりましたが、未だ何んのお
便りもなく毎日心淋しく思ってお
ります。戦後、女性が強くなった
とよく言われますが、これは単な
るマスコミの歌い文句なのでしょ
うか。でも私の感ずるところでは
スポーツ界その他あらゆる分野に
於いて女性の活躍は、男性以上に
目醒ましいものがあります。それ
なのに可弱き男性の一人や二人、
支配される強き女性の少なきこと
よ……以前に「マゾ男性よ嘆くな
かれ」と諸岡氏がおっしゃってま
したが、これでは嘆かざるを得な
いのです。とは言うものの、かく申
す私も奇クを愛読して十余年の長
い間、今回初めて漸く仲間入りし
た次第で、男性である私がこんな
状態と言えはおこがましいですが

やはりつつましかやかな女性なら尚
更と言えないこともありませんが
私などは典型的な優柔不断型で、
今日の活発な現代女性よりも、は
るかに劣っている、決して優る
価値はないと申しても過言ではあ
りますまい。今や男女同権の世の
中です。国民の半数の女性が男性
を支配したところで何んら不思議
はありません。このことは私一人
の意見だけでなく、フェミニスト
・マゾヒスト諸氏の共通した偽ら
ざる気持であると確信します。お
互い気持の中にあっても、何年間
の知己、会社の同僚等、気心の知
れた者、顔見知り同志が今更打明
け合うことが出来ないものです。
ですからお互い顔も合さず「私は
M」「私はS」と最初から言った
方が話もしよいと思いますが。女
性の皆様、男性を苛めて見たい支
配して見たい方は遠慮は損です。
今はPRの時代なのですから、奇
クを通じ、文通若しくは誌上で大
いに意見を交換されてはいかがで
すか。案ずるより生むが易しの諺
どおり、複雑な社会、住みにくい
世の中でも、結構生活をエンジョ
イ出来るのではないでしょう。か。
私たちマゾ男性は、強き女性のみ
が心の灯なのです。これら女性の

お声がなければ屍同然です。薄幸
の半生を過ごした私にも、将来幸
多からんことを祈り、心からお便
りをお待ち申し上げます。また同
好の男性の方も、お便り下されば
幸甚と存じます。住所氏名は編集
部へ回送方ご依頼若しくはご照会
下さい。(京都八騎手待男V)

○

初めてお便りします、花房孝子
さんの十月号「華鼻受難」を読み
たまらなくなつてペンを取りまし
た。私は小説の中の貞子と思わせ
る美しい恰好をした鼻をもつ青年
ですが、どなたか、ツンと高い鼻
を貞子様の様に、心ゆくまで、い
じめて下さいませんか。コヨリ責
め、ローソクをたらし、ペンチで
責める、思いきり上むけて、鼻汁
と涙に、くしゃくしゃにされなが
ら、美しい自分の鼻を、いためら
れながら秀でたハナに感謝した
のです。もし、そういう方で、静
かな安心できる所で、ゆっくり、
いじめていただくなら、どこへ
でも参ります。傷つけないように
生涯に一度だけ信頼できる方に、
一晩中、きれいな、印型の恰好い
い鼻孔をおまかせします。十月ま
でに御連絡下さい。(神戸市生田
区神戸港湾郵便局止八白川V)

月経帯(バン)フオート

モデル 大塚 啓子

○ダイアナ・デラック
ス・バンド(黒色)

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たい)

○ローズ・パリス・ソ
フト・ネット・バンド

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たね)

○ローズ・パリス・バ
ンド

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たろ)

○ローズ・パリス・バ
ンド・バンロン・フ
ラワー

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たう)

○着脱・ダイアナ・デ
ラックス・バンド(黒)

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たか)

○鑑賞・ダイアナ・デ
ラックス・バンド(黒)

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たあ)

○ 最近エネマフアンの増加していることは、我々ファンにとつては大変喜ばしいことです。ここ数カ月の本を見てもエネマのことはかならずのっていることは、ファンの要望が多いからだと思えます。通信欄もエネマフアンの通信は一つや二つはかならず出ている。その中で十月号の通信文に出ていました、新宿の沼田洋子様には大変近親感を感じました。小生エネマよりも一歩前進するか後進するかはエネマファンの判断にまかせますがアヌス責を好んでいます。沼田様も通信文を読みますと一種のアヌス責に興味を持ってもらえるようです。小生は数年前、貴女と職業が同じ女性とプレイをしたことがありますが。その時の彼女は最初は気味が悪いと言っておりましたが、プレイを続けていくうちにアヌス責の快感に酔ったらしく数時間プレイを続けることが出来ました。その時に使用したものの中には普通の人では考えられないものまでありました。貴女は同性のアヌスへ異常な関心を持っていると書かれていたが、一度男性とプレイをしてはどうですか。女優さんと三人でどうですか。小生お相

手になってもいいですよ。新宿だとすぐに行けます。日時、場所を指定してください。日時、場所をよ。そしてへとへとになるまでプレイをしようではありませんか。沼田洋子様の意見を聞きたい。ではよろしく、六月号の沢原洋子様八月号の栗田宮登世子様又全国エネマファンの皆様、これからエネマ発展のために、どしどしと意見の交換をしようではありませんか。特にエネマの大先輩羽村京子様などには大いに気をはいてもらいたいものです。最後に本誌にエネマのページを作れとはいいますが現在編集部で増刊号を考慮中とかその中にエネマの記事、写真を沢山載せてくださるようお願い申し上げます。では奇クの御発展を祈ってペンを置きます。(大阪八古池一雄)

○ 読者通信の皆様愈々秋の気配が濃くなって来ました。奇クの皆様には夫々の立場で活躍の事でしよう。私も勿論、子供の様に発売日が判って居ても胸がワクワクで落ち付きません。入手すると最初写真、通信本文の順であります。さて自己紹介と得意?とする受縛責めを。四十七才身長一六二、体重

五十七何処かの街の隅に落ちてるスタイル、名古屋市内に居住。家族三人一流会社の隅に。私の得意は未経験ですが責めの恐しさは奇クで想像するのみでして毎日通勤は勿論五年前から鼻膜に穴をあけて今では一センチでゴムの詰物をして穴の縮小を防いで居ります。総合的責めを受入れられると思います。自身鼻に鎖を又錠で施錠し吊して見たリカスガイを通し木に金槌で打ち込んで又ロープを通して手首と一緒に縛ったりしましたが所謂鼻責めを併用した責め、大きな事を申しますが対手の方が健康であり責具が揃って居りますれば年令は問いません。お互いに責任ある行動を、出来得れば姐御スタイルで淫虐飽なき方の責具、責衣でも甘受致します。過去奇クに鼻責めのモデルを志願しましたが没でした。立派な其の道の大家の手に一度と思いましたが、希望達せずプレイ場所は当市内又は当市から一二時間の距離で費用は折半で、小生意気な野郎よし、うんと責めてやろうと思うS女性の方は是非編集部経由でお便りをお待ち致します。又も没なんて事はないでしょ。住所氏名勤務先は編集部へ。(名古屋市八七〇生)

○ 先月はじめて名のりをあげたS百%の死刑マニアです。新宮氏の処刑プレイ、八月号は不十分でしたが九月号はかなりの満足をあたえてくれました。ただ絞首女囚の足首が床についていたのが残念でした。十月号の晒し首は更によく斬口のまわりに血のり、唇にも血汐が一滴とあれば満点でしょう。水野氏の作品も是非拝見したいものです。また大塚嬢の「冥府の広場」も快作でした。毎月ありとあらゆる種類の死刑を執行したいものです。その他の諸嬢も同様の手記をお願いします。ところで、更に勝手なことを云わせてもらいますと、私は毎日美女たちの空想死刑を今日は絞首、明日は打首、更に各種の惨殺とくりかえしております。その一例をあげて見ますと大塚嬢のハリッケは先月すんでおりますから、火あぶりにします。しかし、タキギを山とつんで、たちまち窒息などという下手なことはしません。一本づつかって乳房を始めとし、脚から下腹とゆっくり焼いて最後に首だけ残します。絹川嬢は絞首刑ですが、これも踏板からボタンとおとし、ショックですぐに絶息させたりはせず、床

からジリジリとひっぱりあげてゆきます。足が宙にうくと今度は鉄丸を一つづつつけてゆき合計百キロに達した時、かよい頸すじは耐えきれず血しぶきあげてちぎれてしまいます。梨花嬢は最後の希望をいれて後手宙づりにしてから、大刀でもって腰から下をバツサリ両断します。すると頭部の方が重くなつてクルリとまわる。そこをタイミングよろしくのびた首すじめがけて一撃を加え、かくて彼女

の身体は三つになり大向うから「お見事」の声がかかる次第。以上のベストスリーに新人遠藤嬢がえらばれ、特に最高刑の股裂きに処します。両脚を大きくひろげて二頭の馬にむすびつけ、別々の方向にむけてムチを加えると、絶叫と共にこの新人の身体は真二つに裂け、血汐はいちめんにとびちります。その胴体から首をかき斬って髪の毛をもって馬の尾に結ぶと、ブランブランゆれながらどこかに

行つてしまいます。こんなわけで私の前にはモデル嬢の生首がズラリと並んでいます。はなはだ御めいわくでしょうが、殺人罪に問われもせず、しかも何度でもくりかえし出来るのですから、ちょっと止められませんか。同好の方々と共に貴誌の発展を祈ります。(宮城県八黒田寿)

と記憶しております。(その後バックナンバーの蒐集に努め二十七年五、六合併号以来、二十七年七八月と三十年十一月を除いて、一三五冊を愛蔵しております。)学識教養も人並の心算ですし有名一流会社に勤続十余年、近く役職の地位も予想され、マイカーで通勤する三十四才の真面目な男です。趣味は、ドライブ、ヨット、スキ、写真、8ミリ、読書(お固い方の)、麻雀、囲碁、酒も少々と

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13種) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円

B 1	全裸エビ責仰向け(関谷)
B 2	逆エビ責め全裸像(水本)
B 3	乳首ペンチ挟み(竹野)
B 4	後手十字縛肩口上(梨花)
B 5	足の裏擦り責め(竹野)
B 6	おへソいじめ大写真(関谷)
B 7	剃いだバタフライ(関谷)
B 8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)
B 10	無防備双手吊り(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り(水本)
B 12	一条縄わぬ股間縛り(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り(関谷)
B 14	足踏付け二つ折り(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち(関谷)
B 16	手錠にもだえる(竹野)

B 17	尻突出てエビ責め(水本)
B 18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡(竹野)
B 20	投げ出した全裸(関谷)
B 21	美しき尻部の露出(絹川)
B 22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美(竹野)
B 24	強制鼻挟水吞ませ(梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身(関谷)
B 26	責めに気を失って(関谷)
B 27	さアどうでもして(関谷)
B 28	豊満乳房膨隆縛り(竹野)
B 29	投げだされた女体(竹野)
B 30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)
B 32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地(東浦)

B 34	すべてをさらけて(関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B 36	クリップ鼻挟み(絹川)
B 37	台上のマゾポーズ(大塚)
B 38	吊られゆく美体(絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B 40	マゾ女性の表情美(東浦)
B 41	喰い込む股間縄(絹川)
B 42	灸責めに悶える(梨花)
B 43	犠牲台の人身御供(大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B 46	手枷足枷大写真(四方)
B 47	鎖に悶える足首美(柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B 50	女囚菱縄さらし(絹川)

いった処。生活も一応安定し、平穩無事な、しかし単調な毎日を送っております。処が、生来の性癖については抑制に努めつつも、遂に癒ゆる事はありませんでした。為に結婚にも失敗し、外面一応満足な生活を乍ら、内面満たされる事のない虚しさを託っております。私にとって貴誌の存在は唯一の慰めであり、プライベートの秘事であります。(併し、あくまで良識ある対象のみを読者に選ぶ。編集・販売方法について考慮がされなければならぬと思います。でなければ過去に受けた勧告の如く、青少年に対する悪影響の為には、吾々のささやかな慰めも諦めざるを得ないでしょう。)私個人としては貴誌の存続発展を祈らざるを得ません。本文の投稿についても躊躇に躊躇を重ね、十年越しの決意によるものでございます。芳野眉美氏を筆頭に、平伏人氏、沼正三氏、乾隆一氏、万田不仁氏、鬼山絢策氏、鷹島みどり氏等の記事は、最も興味深く読ませて頂いております。ご健筆をお祈り申し上げます。又、山辺まゆみ様の記事通信については、その知性と教養の程が窺い知れて、大いに心動きました。が小心遂にご連絡するまで

に至りませんでした。後報によれば背信の憂き目に遭われた由、遺憾に耐えません。かかる公刊誌を通じて対象を選ぶに当たっては、余程の注意と警戒を怠り得ないと存じます。思わぬ迷惑を、最悪の事態を杞憂する余り、私も今日まで投稿を躊躇して参りました。唯最近漸く(失礼ですが)編集部に対する信頼について確信を得ましたので、本稿を委ねる決意をした訳であります。愛読記事でお解りの事と思いますが、私の性向はM、併し軽度なので身体を傷める様な烈しいものは好みません。ネクタール、パンティなどに対する興味を拭い得ません。軽いSプレイも嫌ではありません。女性の緊縛写真も撮って見たいと思います。(自家現像です)如何なる事態にも許可なく一線を越えぬ約束は出来ます。(誓うという他、今此処では保証の方法が見当りません。)社会生活にあってはあくまで貞淑な真面目な傾向の女性。出来れば私より若く、色白の方他の事は一切問いません。ご連絡下されば必ずご返事申し上げます。あくまでお互いの信頼が前提と存じますので、お会いした上で納得の行くまでお話ししたいと思ひます。

お手紙は編集部に廻送をお願いしてございます。三原康子様、中川フミ子様、川田幸子様、山内洋子様、関美代子様始め、S女性の方々からのご連絡をお待ち申し上げます。この一文によって、私が長年秘かに探し求め来たった理想の女性に廻り合う事が出来ればとささやかな期待を抱きつつ……尚前記欠号についてお譲り下さる方がありましたら、ご希望の価格で(常識の範囲で)譲り受けますからご連絡下さい。(東京八高山昂)

○ はじめてお便り差し上げます。

奇クの御発展を奇クの旧刊時代の愛読者として、心よりお喜び申し上げます。私は女性の裸体緊縛絵に限りなき喜びを感じるマニヤです。写真には余り魅力を感じませんが、絵には弱い男です。9月号の四馬画伯の「妊婦二題」大いに魅せられ、穴のあく程見つめました。ポツテリとふくらんだ妊婦の大きな腹になんともいえない愛らしさを感じました。今後妊婦の責絵を発行される予定がありましたら、ぜひ四馬画伯に妊婦の裸体緊縛責絵又は過日発売されました「女体浣腸嗜虐場面図」の女性を妊婦(特に産月に近い)に変え、数

々変化ある姿態及び場面の浣腸責の絵巻を作成刊行される様マニヤとしてお願いする次第です。宜しく御一考を願います。若く美しい女性に与える残酷な責場面の絵を作成せられ、我々ファンの夢をかなえて下さい。色々と注文もありますが、又次の機会にゆずる事に致します。編集部諸氏、四馬画伯の今後の御健闘を祈り、貴誌益々発展せられる様に奇クファンとして大いに期待してペンをおきます。(名古屋市中区八KK生)

○ 十月号のグラビヤにはじめて登場されました遠藤百合子さんて、ほんとうに素晴らしいお身体の持主ですわね。第一頁を開いてみて、わあ、すてき、って思わず叫んでしまいました。辻村先生の文「S・Mプレイガール」を読んでいると一層、身近かいものが感じられて、私もあんなにして縛られてみようかなと思ったり、いいや、私にはそんな勇氣なんてないわ、と考えたり思案しております。前にも、一度御誌を見ていて、そんな夢のような気持をいだいたことがございました。でも、そのときは私なんか、編集部の方々は相手にしてくる筈はないもの、とあき

らめていました。今度十月号で、遠藤さんのお写真を拝見して、私もちょっと勇気が出てきました。さつそく九月号の遠藤さんの文、被虐モデル志願を読んで、私もあんな文章だけでも書いて編集部へ

お届けしたいと思って、ペンを持ってみましたので、平常まともな文章なんて、書いたことがないんですもの、とても、遠藤さんのような立派な文章は書けそうにもありません。それでも、な

「今月の新版フォト」

血紅使用腸露出女体切腹シリーズ

大手札印画紙焼付 十二枚一組 一〇〇〇円 略号(せい12)

〔モデル 大塚啓子〕
〔白鞘短刀使用〕

左脇腹へぐざりと鋭い短刀の刃先を突き刺し、忽ちにじみ出る血汐のワンカットへから初まり最後に、咽喉元をかき切り、左乳房の下を一抉りして絶命するに至るまでの過程を、十二枚の

連続組写真として、完成しました。臍下から右脇腹へかけて深々と切つてゆけば、腸が傷口からはみ出て外に露わとなった光景も描きました。最近とみに濃艶さを増した大塚さんの好演技と美しいプロポーションによって、見事な女体切腹シリーズをなしております。

梨花悠紀子 血紅切腹絶命ポーズ

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円 略号(せん)

下腹を脇差にて、真一文字にかっさばけば、傷口から一すじ二すじとたらたら流れる血汐、若痛にゆがむ表情、やがて思うままに切り果てた上、下腹を血まみれにして、仰向けに倒れる

女体。傷口を上にして、今や自虐の恍惚境の中に全身をゆだねて、静かに絶命してゆく可憐な姿態。切腹と絶命の二様を味える迫力ある作。

んだか、書かずにはいられない気持ちで書いてしまいました。このお便りを投函するのにも、私としては非常な勇気がいります。自分がもう縛られてカメラの前に立っているような気持ちになってしまふのです。遠藤さんのマネをして書きます。泉井恭子、二十一才未婚、縛りモデル志願、洋服店勤務。夜分は出られませんが、昼間でしたら、午後半日ぐらいはいつでも暇をとれます。遠藤さん、一度お便りいただければ幸いです。編集部を通じてでもよろしいのでしたら、是非お願いします。お返事は、私の住所を書きますから。

(大阪市八泉井恭子)

「読者通信」に全部目を通すと、男性のマゾの方の投稿が非常に多いようです。本誌に限らず投稿する人は、本誌の内容に必ずしも満足でない方が多いので、満足している人は、余り投稿しないものです。だから「読者通信」の色分けと本誌読者の色分けとは、かなり違ったものであろうこと。四馬さんの絵の被虐女性は大へん美しいのですが、人相の悪い責め役を出すのは、どうかと思います。あくまでスポットを被虐女性にあて、

責め役は手や足の暗示にとどめること、若し強調するならば、人相の悪さを強調するよりも「たくましさを強調された方が、ずっとセックスがいいように判断します。逆に、絵の中に男性の存在の暗示のないものは少しさびしいと思います。新宮明夫さんのSMプレイは大へんよく、愛好してはいますが、処判者は着衣の方がよくはないかと思ひます。ふく面は大そういいですが、着衣になってこそ、処判者と受刑者の距離の遠さ、男と女のセックスの違いが強調されると思ひます。奇クの衰退(9月号の内輪話から推定、外れていたら失礼)は詩を失ったことにあると思ひます。もう少し美しい山野や河海をバックに、モデル嬢を責めてみられたらと思ひます。詩という点では、10月号では「まりも譚」が良かったと思ひます。最後にオズオズと登場された遠藤さんの目をみはるような演技を望んでペンをおきます。(東京八花田一郎)

はじめましてお便り致します。小生雑誌、主として外国へ送る英文独文の雑誌を編集している者ですが、はじめて奇クを見て感心い

たしました。小生と同趣味の人が多いのに大いに気を強く致しました。小生、浣腸に大いに興味を持っていました。一度若い女性の方と浣腸によるプレイをしてみたいと思います。誰か一緒にプレイをして下さる浣腸マニヤの女性の方はおられないでしょうか。なるべく都内にお住みになっている方で私こそ思う方は非御連絡下さい。決して御めいわくになるような事は致しません。浣腸に興味をお持ちの女性の方、是非御連絡を鶴首して御待ち致します。(東京都杉並区秋津州義之)

○ 小生、この欄にて一、二度、諸兄弟の仲間に加えて頂いたM男です。十月号の「変身記」実にすばらしかったと思います。文中「お姉様のお尿の匂いをよく嗅いでおきなさい」(六二頁)という千草の大胆なことは、それに千草のお尻の下敷にされた啓吉が、千草のお尻の匂いを求めてスカートの中顔を入れる描写など、胸の高なりを支えることができません。小生も女性の体臭には深い興味があります。若く美しい女性のはちきれそうな、お尻の下に長い間敷かれた坐ぶとん、彼女が何かの用

で席を立て外に出る、その一寸の間、私の顔は今の今まで女性の巨大なお尻の下敷にされていた坐ぶとんの真中の所にひきつけられます。長い時間の重圧のため坐ぶとんの綿はおしへしゃがれ、お尻の温みがまた残っている坐ぶとんその真中の所に鼻をつけて一息吸いこむ、ああその時の何とも形容のできぬすばらしい匂い。女性のお尻にしかれた坐ぶとんは全く強烈な臭気を含んでいます。女性の体臭を間接的にもっとよく吸いこんでいるのは、自転車のサドルです。サドルは単に腰かけられる、お尻の下にしかれるのではなく、いわゆる、「またがられる」のです。またがるためには股が開かれるので、サドルは当然、お尻の重圧を受けると共に、その開かれた股の匂いも嗅がされるわけです。直接的に女性の体臭を嗅がされる代表的なものは、パンティなどの下ばき類と、小用後使用されるチリ紙です。後者の方はしつとりとぬれた濃厚な臭気を心ゆくまでかがされるのです。そして小生のはかない夢は、自分が坐ぶとん、椅子、自転車のサドル、スカート、スリッパ、パンティ、チリ紙となつて女性の、香り高きお尻の匂い

に包まれたことです。この切なる願いをかなえて下さる、思いやり深い女王様の御出現を待ちのぞみつ。 (京都市右京区八田中M男)

○ 毎号通信欄を拝見してフアンの皆様は、何とかなえて下さる、思いやり切めて通信欄にお便りを差上げます。私、結婚二年目頃、古本により初めてKK誌を知り、豊満な若い女性体の緊縛姿を見て、女性体の拘束された姿の中に本当の女の美しさを発見しました。近頃女性体のヌード写真は数多くの雑誌に氾濫して居りますが、緊縛によって女性体の美を追及しているKK誌には全く魅了されてしまいました。勿論妻にも見せ、それ以来本を参考にし乍ら腰紐等で妻を緊縛し、研究し始めました。処がいざ自分で行って見ると、貴誌の作品の様な美しいポーズには仲々出来ませんでした。以来ロープ等も買いととのえ妻と共に研究を行って居ります。早いもので、三、四年経った此頃相当強烈な色々の緊縛もうまく出来る様になりました。そして、又々写真を写しては保存して居ります。妻も緊縛にて訓練をして来た

ので、よく苦痛に耐える様になりました。夫婦の愛情をロープに掛けて深めて居ります。では又次の機会にお便りをさして頂きます。(大阪市住吉区八女性緊縛一ファン生)

○ 先ず、貴社の隆盛をお祝いします。併し最近本誌に大塚さんや梨花さんの切腹の写真がのらなくなつたのは寂しい限りです。是非毎月おせてもらいたいと思います。特に大塚さんの戦国時代を思わせる長い黒髪に白装束をさせて、豊麗な上半身を白衣にかくして前だけ下腹まで開いての切腹等は一幅画を思わせる事でしよう。又滝麗子名画伯の近作は、腹巻の上からの切腹が多いようですが、やはり素腹の切腹物をお願い致します。そして現代物よりも時代物が悲壮感がありますし、丸マゲを結った武家妻が白木の三宝等を使用しての白装束の切腹姿は幻想的な美しさではないでしょうか。次に小説伝記、実記等で数年前の田谷先生や瀬川泰子先生等の研究調査発表を期待しております。(福島県郡山市八左東生)

○ 全国の奇クフアンの皆様、今日

Z
組七十集

大手札印画紙(9×13)焼付

各組一枚一組（送料共）

ZZZZ
4321
ゴムの猿ぐつわ
囚女第六十三号
猪型手足吊り
逆エビてぱり

(大塚) (梨花) (柳) (梨花)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z
2221201918171615141312111098765

ローソクゼメ
豊臀への責め
淫らなしばり
ザリガニ
引き回しシーン
全裸後手縛り
豊満な肌の被虐
黒髪いじめ
足吊りの媚態
黒縄高手小手縛り
強烈荒縄しばり
肌に喰込む白縄
くの字の足指
裸身の受縄
無茶な猿ぐつわ
ハリツケ
おへソなぶり
逆手足吊り

竹大梨竹前桜東梨四絹大大加東梨愛絹東
野塚花野本井浦花方川塚井茂浦花川川浦

Z
46454443 4241403938373635 343332313029282726252423

美肌いたぶり
仰向きの鼻いじめ
恐怖の一瞬間
火箸乳房責め
全裸海老責め
ベットの痴態
足の裏擦り責め
闇の縛女飾り
首絞めざらし
鼻孔加虐
悦虐責放心状態
手枷足さぐり
寝室でのプレイ
猿ぐつわの妙味
首縄柱しばり
巻煙草ゼメ
尻立てポーズ
厳しきエビ責め
彼女の好物ゴム
ワンピース
荒縄竹棒拷問
浣腸責ポーズ
鏡に映す縛裸像
苦悶に喘ぐ柔肌

大(山)大(梨)花(竹)東(桜)大(絹)梨(花)四(梨)若(大)竹(大)絹(熱)梨(若)加(絹)
塚(路)塚(花)本(野)浦(井)塚(川)花(本)方(花)原(塚)野(塚)川(海)花(原)茂(川)

Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z
70696867 6665646362616059 585756555453525150494847

恥しさに耐えて
 亀甲縛り乳房晒
 強烈縛り全裸晒
 強要する開股縛
 白肌露出全裸縛
 女大生恥態ゼメ
 縄のトゲ責め
 ゴムの人形の女
 胴縄の重量感
 オムツ逆エビ責
 全裸の股間縛り
 檻の緊縛裸体
 セーラー服縛り
 鏡の中の全裸像
 痛められた裸身
 被虐の果て
 庭園の惨酷風景
 荒縄のお仕置室
 全裸逆エビ縛り
 欄間宙吊り
 全裸に猿ぐつわ
 逆十字エビ縛り
 酔後の緊縛

(愛梨愛絹絹田梨竹桜田絹愛梨愛大大) (梨絹梨東大絹)
 館川花川川川中花野井中川川花川塚塚館花川花浦塚川

は。私は神戸市に住んでいる三〇才の男性です。大阪の麻生順子さんの提案に大賛成です。私は幼少の頃から女性の緊縛に興味を持ち十二、三年來の奇クファンです。十七才の頃近所の娘さんを後手に緊縛した所、貴男は変態だと言われ、それ以後女性と付合するのが恐く、人と違う自分の異常さにどれだけ苦しんだ事でしょう。奇クのグラビヤで女性の緊縛場面を見

るにつけ自分の不甲斐なさに情けなくなりなります。死ぬ迄に一度だけでも、女性を緊縛し色々責めて見たいと思っています。SがMを求める事は、あたり前の事と思つていますが、無学で金力もなく地位もない私では、どうしても夢を実現する事が出来ません。近頃の女性で私の夢を実現させて下さる方はいませんか。字が下手なため今迄一度も手紙など出した事

は有りませんが、恥をしので通
信致します。(神戸市有馬温泉へ
山野一男)

東海道線の金井から西南に向かつて約二十一キロ、みかん畠の間をぬってひなびた農村にたどりつけば、名ばかりの八幡神社の定例の秋祭があつて、村人たちは一年一度の骨休みとして出かけてゆくのがならわしであつた。今日、こ

の生い育ったふるさとの思い出は
やはりなつかしく美しい。そして
だんだん記憶から薄らいでゆくあ
のみかん畠や、くずれかかったわ
が家の幻影を追って過ぎし二十数
年前の感慨をしみじみ味う夜を
迎えた。このごろでは、ただ漠然
とそれを思うだけではあるが、た
だ一つ私の心の奥底に刻みこまれ
た秋祭の一コマは依然として離れ
ない。私はこの祭礼で、どこから

やってきた女角力の一行を見、恥ずかしくも強い感動を受け、当時普通の色恋であれば、それほどに恥じらいもなかったろうが、事が事だけに人に話すこともできず、苦しみ、翌年の秋祭、そのつぎの秋祭と待って見たものの、この街道から遠く離れた農村には再び女角力の一行は訪れることはなかった。そのようなわけで、本誌もある機会から知って、ひそかに女角力に関する多くの人々の積極的な考え方、見方などを拝読し、私自身ささやかな投稿から、わがふるさとの思い出を新たにし、そして女角力愛好の皆様の御健斗をお祈りします。(東京都八井原伝)

○ 十月号の口絵には久々に雪崎氏提供の女斗美図絵が登場して、吾々マニアをして楽しませていただきました。相撲権もりりしい豊満な二つの女体が力をみなぎらせて組打つ有様を生々と描いて余りあります。旧号の畔亭氏描く「娘相撲」は楚々たる風情乍らピチピチとした新鮮な娘達の取組みでしたが、これは成熟し切った女体の取組みです。きりりとしめこまれた相撲ふんどしがいやが上にもこの肉体美をひきしめています。豊麗

極まりない臀部にいくつむふんどし練絹の如き内股とびったりと引きしめている黒ふんどしの魅力これ程ふんどしをしめた女体の色気とまざまざさせている作品はありません。そして互に力の限りをつくして相手を倒そうとする力のあふれた女体。正に女相撲の美の限りをつくした秀作と思います。先々月号の女斗彦様の通信にみられる沖繩娘と西洋娘のふんどし一本の血斗図絵のアイデアもすばらしいものと思います。前川様も指摘されるように同氏の筆力に期待したいところですが、その暇がないとの同氏の通信にいささかがっかりしています。どなたか同氏の好意に甘えて、このアイデアを実現してくれる方はありませんか？このところ少しこの種の作品が途絶えていますので、マニアとしては望むこと切。(室井英山)

○ 奇クファンの、皆様お元気ですか。僕は当年取って二十一才の働きながら私立の大学へ通っている自分で云うのはおかしいですが、真面目な青年です。三年ほど前、書店で奇クを発見していろいろ毎号かかさず読んでおりますが特に本欄のマニアの方の熱心なお手紙を

四馬孝画……素晴しい女学生の浣腸シーン

女学生の浣腸 A5判感光紙極鮮明焼付
二枚一組 三〇〇円略号(せか2)

浣腸マニアの正統派が多年の念願であった「女学生の浣腸」の絵画化が、ここに四馬孝氏の麗筆によって完成しました。
一、花恥しきセーラー服の乙女が、黒レザー張りの処置台の上に真白い尻を高々と掲げて仰臥させられ、医師と看護婦の二人から浣腸される光景。

二、診察室の一隅で学校帰りの

読むたびに同好の方々の心ゆくまでプレイを楽しんでおられる様子をうらやましく思い、私もぜひ同好の方々と交際し、又文通等を通じて、いろいろお話しえねがいたくお便りさせていただきます。

僕は「S60」「M40%」ぐらいではないかと思っております。美しいM女性を浣腸責や股間縛や乳房責等でやさしく、(ムチ等激しい苦痛を与える事は好みません)じわじわと責める事を考えて見たり。美しきS女性の方に身動き出さない様に縛られたり、首を股間にはさまれてしめられたり、死んでしまいたくなるような、はずか

制服の女高生がスカートの裾を看護婦にまくり上げられ、若い医師の手によってガラス製浣腸器によって、グリセリン浣腸をされる目ざましい光景。
いずれも羞恥にたえいりそうになりながらも、未知の浣腸に對する、好奇心と期待とで胸をおどらせる乙女の姿態が美しい。

しめを受ける事を考えて見たり、といったぐあいです。全国の同好の方お手紙下さい。(特にM60% S40%ぐらいの女性の方) (東京都中野区八岩崎章)

○ 遠藤百合子さん。今日は。私は昭和生れの青年です。奇クは数年来の愛読者です。十月号貴方のフォートを見て失礼とは思いますが、お呼びかけする気になり筆をとりました。私はあなたの様な娘さんと友達になれたら……一度お目にかかれたらと思います。(土曜日午後六時頃住吉鳥井前売店)でお目にかかりましょう。貴方の

よき返事をお待ちします。住所は編集部へ知らせておきます。週刊誌の題字を下に向けて手に持って居ます。(大阪住吉区八重造生)

初めてお便りする「奇ク」ファンです、まだ日は浅いのですが、貴誌が、面白半分でなく、真面目に、自分の性向を見つめていくという、他には見られないすばらしい点を持っているので、グッとひきつけられました。「奇ク」に対する熱意は皆様に決してひけをとらないつもりでおります。僕はMS、浣腸、下着(女性)に興味を

妊婦新作フォト

京都市在住の一読者の方の御好意により妊婦のヌードと妊婦の全裸緊縛写真の提供を得ましたので、ここに分譲写真として発表いたしました。マニヤの方々の御気に召しコレクションの一端に加えていただければ幸いです。臨月腹と御比較検討下さい。

妊婦ヌード (九カ月)

大手札 三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号(やま)
妊娠九カ月の便々たる大きな

持っております。Mの方がSより少し強いようです。一度でもいいから責められたい、或は責めたいと思うのですが、恐怖感も伴って思い切った事が出来そうもありません。僕は一七五センチ、七〇キロと大柄で、未熟ではありませんが筋肉型です。顔には自信があるとこの程の事はありません。気は小さい方です。東京近郊三十ぐらいまでの女性の方、どなたか、文通プレイの相手をして下さいませんか。真面目な交際を希望します。誌上にて御返事下さい。返事の中にどこかで待ち合わせるように場

お腹をつき出して、全裸の腹部をあからさまにさらけ出した若妻の大胆なポーズ。一見して、その腹部の巨大さにマニヤの血を躍らすこと、必至の貴重な文献、妊婦ヌード。

妊婦しぼり (九カ月)

大手札 三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号(やま)
全裸ですつくと立った妊婦を側面からキャッチしたので、見事な膨らみを見せた妊娠九カ月の丸い腹部が、ぷっくりとつき出て、いささか垂れ気味となり産み月の近いことを如実に示している。

所、目印を御指定下さい。最後に「奇ク」の発展を祈り、又編集部の方々の活やくに深く感謝し、女性の方がドシドシ投稿されることを願っています。(東京八松坂秀夫)

村松芳子様、九月号奇クサロンを拝見致しましてお呼びかけ致します。私事三十八才身体強健、いささか肥満体ですが強度のマゾヒストです。そして貴女様好みの露出症です。若し私の様な者でよかったらドレイとして御交際願えないでしょうか。御便りに依りますと結婚前提とありますが、私はマゾヒストは貴い女王様と結婚するなど大それた希みはありません。唯々女王様にかしずき賜られ飼育され度いのです。其の為の如何なる奉仕もいいたしません。貴女様の御命令なればどの様な仕事、どの様な行いも忠実に実行致します。若し貴女様の御気に召さない場合は貴女様の思うままこの奴隷の身分を思い知らせて下さいませ。御手数乍ら今度この欄へ御呼びかけ下さいまして御めもじ出来る日を鶴首致します。(東京八ドレイの山口静男)

初めてお便りします。十月号の雪崎京人さんの絵はよい。雪崎さんは、この頃は物語や小説の方は書いて居ないようですがどうですか。楽しみにしているファンのために頼みます。僕は一番雪崎さんの物が好きで雪崎さんのファンです。それから前にまとめてメトマーズを書いてありましたが新しく絵を書くのが無理ならあれを一つ大きくして、もう一度発表してくれないかと内心思います。もっとも雪崎さん活躍して下さい。頼みます。岡平さんや円山さんでもいいのですがその中では雪崎さんが一番いいのです。だから雪崎さんが駄目なら岡平さん円山さんに頼んで下さい。それから十月号の広告に臨時増刊号五〇〇円でメトミが出ていると書いてありました。たたくさんメトミの画を出して下さい頼みます。(メトミH生)

御社には益々御発展の段同慶に存じます。私ことうかつにも今日まで御誌のある事を知らず過日帰宅に際しまして本屋に立寄りまして所、女相撲の愛読者の通信を拝見致しまして、そのまま求めたわけで御座居ます。ただ誌上にはそ

れらしい見聞記とか紹介も見当りませず、改めて神田の古本屋から旧刊号を手に入れました、物語や熱戦絵巻を拝見させて頂きました。大変興味深く且つ過去の思い出が、よみがえって参りましたので、つい筆を取ってしまいました。私は昭和十六年まで長崎に在住致しましたが、其の後仕事のため東京に住み付きましたが、長崎市外に式見と申す漁村が有りまして、この主婦や娘さん達が相撲を取るのを御座居ます。由来に就きましては漁村では肉体労働が激しい為それを訓練する為と申す人も有り、或いは、日露戦争の戦勝奉納行事として発足したと申す人も御座います。私は年に二度程行われる女相撲の魅力興奮が印象に残りまして、在京中に有りながら用事に事寄せてお祭りには帰省した事もしばしば有りました。昭和十九年には、結婚を致しまして當時は嫌がる妻を説得しては、よく相撲を取ったもので御座居ます。當時は、式見の女相撲を真似まして髪は、相撲髷、肉じばんに猿又を付けさせ黒しゅすのまわしとさがりを作りまして夜間には、よく部屋の中で相撲を取りました。それ丈けなら妻も我慢出来たのでし

ようが土俵が無いので物足りなくなりまして、広くもない庭先に小屋を作りまして、其の中に土俵を築いて始めましたものですから、あきれて怒り出した事も昨日の出来事のように思い出されます。妻は相撲を取る事よりも髪を直すのに一苦労と度々こぼして居りました。が子供も現在では四人御座居ますし、妻の座も高まりました。昨今ではこんな遊びも出来なくなりました。妻は中年肥のせいでしよう現在では私よりも体重が増えまして若し相撲を取りましても敵わないのではないかと秘かに推察致す始末で御座居ます。こうしたわけで女相撲に就きましては、青年期から初老の今日まで数々の思い出を持ち何時果てる事もない道楽に身をやつして居ります。昨年の秋頃の事でしたか、親戚の者が上京しましたので式見の女相撲に就きましてそれとはなく聞きました。今日でも存続して居るそうで御座居ます。しかしながら昔程の隆盛はなくて二十数名の婦人達によってお祭りや市の行事の余興として出場して居るそうで、それも弓取式が中心となり、取組は二三番との事で御座居ました。私以外にも数多くの女相撲ファンがいらっしゃ

全裸の縄目

(みい) 略号

大名刺 三枚一組 二〇〇円

モデル 平野 笑子

全裸の羞恥

(みろ) 略号

大名刺 五枚一組 三〇〇円

モデル 田原美佐子

全裸股間縛

(みは) 略号

大名刺 五枚一組 三〇〇円

モデル 岩井 知子

全裸後手縛

(みに) 略号

大名刺 三枚一組 二〇〇円

モデル 平野 笑子

寝台の全裸

(みほ) 略号

大名刺 三枚一組 二〇〇円

モデル 平野 笑子

全裸股間縛

(みへ) 略号

大名刺 五枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

股間しばり

(みと) 略号

大名刺 五枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

椅子開股縛

(みち) 略号

大名刺 三枚一組 二〇〇円

モデル 絹川 文代

る事を知り今後とも女相撲の発展の為に、また女相撲愛読者の要望に答えて頂き、女相撲の調査や紹介を発表して頂く様勝手な御願いで御座居ますが御高配を賜りますよう伏して御願い申し上げます。末筆ながら御社の御隆昌と編集部各位の御健康を御祈し併せて年甲斐もなく筆を走らせました失礼の段御許し下さい。(代々木初台の自宅にて八老女相撲居士石道生)

里乃糸枝様九月号の奇クサロン

でああなたの文を読んで、私と同様のオコシの好きな方がおられるのを知り大変嬉しく思います。私もあなたと同様に最近の本誌はサドが大半をしめているようで、淋しいですね。編集者の方が今すこし私達オコシフェチシストの事を考えて、オコシだけでなくてもよろしいから、フェチシストの特集を作ってもらいたいとお願ひします。私あなたの文に勇気付けられました。つい先日私の告白文を投稿しました。もし掲載されたらごらん下

い。私もあなたの夢と告白をまぜた文を是非読みたいと思います。私本誌の古いのを読みたいのです。が、もしあれば読ましていただきたく思います。里乃様はネルのお腰に特に心が引かれる事はありませんか、私は告白文にも書いていますように、ネルのお腰(オコシ)が大好きなのです。よければあなたはどうなオコシが好きなのかおしえて下さい。私の頃ではもう女のかたがまとわれたオコシが欲しくてたまりません。誰れかネルのオコシをまとわれた女の方で私のようなものに分けて下さる人はいないものでしょうか。現在では私は呉服屋でネル地を買って来て家の留守の時にオコシをつくりそれをまとっています。里乃様あなたは私より先輩のように思いますからオコシについても色々とお知らせとおられると思いますので、もしネルのオコシを売っている所があればお知らせ願います。本当に失礼な事ばかり願います。本当に失礼な事を機会に誌を通じてでも又直接文通してでも交際したく思います。あなたのお返事をたのしみにしています。もし直接返事下さるようでしたら、編集部私に住所を知らして置き、あなたの問

合せがあればおしえるようにしておきます。(西宮八野中 信敷)

○

私も仲間入りさせていただきませう。読者通信には若い人ばかりですが、一体、中年層以下の人は見えていないのでしょうか。こう申す私は今六十になる外地官吏の引揚て帰った者ですが、約十年前妻に死別財産はないけれど健康に恵まれ今から人生を踏み直そう思っている者です。この健康の源泉の一つにKKのあることを確信して中年層以上の人も大いに読んで見るべきです。私はSですけれど、その反面、ほんとうに愛し愛される仲の女から気の遠くなる程責めてもらいたいなあとと思うこともあります。こうしたお互様の行為は必ず二人の愛情を高め、若々しい、ムードを再生してくれると思います。私の研究したいことは、私に縁があつて女が出来ました時、その女を関谷様や東浦さんの様なMに誘導すること責の中的喜悦をどのように導くことです。その方法です。それを知りたいので、今御夫婦または理解を以ってSMの交際をしていてる方々に、その方法の御教示を願いたいものです。今中小企業の守衛をしておりますが酒は

正月やお祭等にだけ一合ばかり煙草は吸いません。若しこのプレイを以って精神肉体の上にいる結果をもたらしように営みたいと思う女の方があつたら、先ず誌上を通じておつき合を始めたいと思います。KKによって現在若さを取返しておりますが、「この精神も肉体もお前のものよ」と願ひて言えるような可愛い私の女と信愛の上で立つて思いきりプレイをしたのです。私の歳が歳だから女の方の歳は問いません。私の中から歳と顔にも似合わぬ何かを感じ得られると思います。KKを活用して人生のプラスになるように。お呼びかけをお待ちします。(広島八六丸壮年)

○

これは三十七年七月号と三十八年七月号に掲載されたわたしの創作「住み慣れた地獄を立ち去るために」―マゾヒズムへの孤独な願望―を興味ぶかく読んで頂いたあなたへのお手紙です。月並なことをあえて申し上げますが自己の希望を綴ったあの創作以外は何もうちあけぬわたしを許容願います。わたしもまたあなたがわたしに与えてくださる言葉と行為以外は何も知りたくございません。サド・

マゾの行為は豊かな暖い心のかよいのうえになりたつときこそ本当に魅力のあるものだと思いますし、またわたしのマゾヒズムの性癖は多分に禁欲の研究生活が生んだ幻想的なところがあると思いますから、サド・マゾの関心もさることながら、福田久文というペンネームを使っている青年の個性と心情があなたに捧げられることにより多くの期待をおもち願えれば幸いです。一人の青年の個性が評価できたり、その青年のマゾヒズムを迎え入れたりできるのは若い婦人ではありません。じゅうぶんな人生経験を経られたあなたの気品あるお顔こそ慕しい。もし、あなたがわたしの様な青年を探し求めて得られない孤独を負っておられるのなら、どうかお便りを頂きたいと存じます。互に敬意を失うことなく渴きを鎮めあえる日の一日も早からんことを念じます。あなたにお逢いできる日まで少年時のみずみずしい情感を伴っていたのですが、日に月にそれはすさんでいくのです――愛(は)しき君いつこにありやめぐり逢ういずれのと きぞ日は過ぎゆくを(大阪市八福田久文)

○

私は山の都として有名な長野県大町市の官庁に勤務している二十五才の公務員です。ふとした機会から奇クを愛読するようになり、以後毎月読んでおります。ところで奇クの読者の中には女性の読者もかなりいる事と思われませんが、女性の読者の中で私と文通したりつき合ったりして頂ける方がいましたら是非御便り下さい。決して迷惑をかけるような事はしませんから、御心配なく尚文通したりしていただいた方には山都大町市を案内致します。山を愛し山に親しむ者にとって憧憬の的である北アルプスの連山が鹿島槍を初めとして五竜岳、針ノ木岳、槍ヶ岳他の峻峰がそびえたっています。又市の公園高台には全国唯一の博物館である山岳博物館が皆様のおいでを御待ちしています。その他温泉あり、湖水あり、また黒部第四発電所へのバスが毎日運行しております。奇ク読者の女性の皆さん明るく楽しい文通をしようではありませんか。尚手紙は御手数でも封書で左記へどうぞ。(長野県池田郵便局留八渋谷国友)

○ ひどい便秘になやむBGでございます。放っておきますと二十日

以上も便通がなく浣腸しましてもどのようなつよいお薬も大量の注腸も液だけ出てしまい(ときおり親指くらい出ますが)効果がありません。排便時間が早すぎるのかと思い洩らしでもいいようにおしめを当ておしめカバーをして、三十分位がまんしましてだめでした。下剤はヒマシ油が全然利かずビサチン錠を定量の二倍ほど飲みますとお通じはありますが、その後の二、三日は激しい下痢が止らず医者も体によくないと言いますので困っております。現在五日目毎に病院へ通いはずかしいことですが腹部マッサージの後で看護婦さんに肛門へ指を入れて掻き出して頂くのですが如何に職業とはいえ同性の手でそのような処置をうけますのは死ぬより辛いこととございます。誰かよい浣腸の方法薬品をお教え下さい。この様な事は恥ずかしく親にも知人にも相談できず悩んでおります。(豊橋八吉村英子)

○ 栗瀬長氏の「検便随想」興味深く拝読しました。先日某女子高校チームが試合中よりバタバタと倒れたニュースがありました。きつと皆最初に浣腸された事と思

います。スポーツと云えば思い出すのが、昨年の高校野球の作新学院の八木沢選手の赤痢事件です。作新の選手は勿論、同宿の某高校の選手も全員検便されたとの事。若い精気溢るる高校スポーツ選手の検便。その中何人かは浣腸の世話になったことでしょうか。ああ僕がその係りの医者だったら。僕は選手の中より、可愛い青年や、又男らしく逞しい青年に対して「一寸疑いがありそうだから」とも一度一度検便するのです。一度出した事とてそうすぐには出ません。勿論浣腸です。試合に練習に、真黒に日焼けした鍛えられた若い肉体が排泄を覚えて汗ばむ様に僕は気を失うかも知れません。八木沢選手は入院。毎日三回浣腸で検便です。そして退院の時にはすっかりマニアとなり、僕の可愛い弟となる。こんな夢をみている僕です。今後共、皆様の仲間に入れて戴きいろいろお教え願ひ度々思っています。僕は現在、三〇cc・三本、五〇cc・一本、一〇〇cc・一本のガラス・スポイドとエネマ・イルリガツールを持参しています。又今迄のK誌やF誌の古本を探して浣腸の記事をスクラップして持っています。男性の浣腸の写

真や絵は無いものでしょうか？どうかマニヤ諸兄の皆様よろしくお願ひします。(大阪八浣好生)

○ 「臨月腹」は、実におどろくべき作品です。クローズ・アップして思い切りデフォルメされた、今にも爆発せんばかりのもののすごい腹部。すんなりした若い裸身の腹部だけがおそろしく膨れ上って、飛び出した痛々しいというか、生々しいというか、まことにショッキングな女体。正にマニアの期待にそむかぬ傑作と信じます。妊娠中の読者に交渉して、御社写真部による作品が計画されている由、大いに期待しています。なお、撮影の際、息を一杯に吸いこんで、ウンと腹を膨らますように力を入れれば、もっと丸々と大きくなると思いますが、どうでしょうか。(羽村京子)

○ 小生、当年三十才、体格、その他中以上の健康な会社員です。K誌は一年半以来の読者ですが、通信文は此れが初めてです。最近自分のM的を知り、一度でも是非プレイをして見たく、お便りします。六月号の三浦様、二月号の川田様、お便り拝見し、若さと、

美と健康に溢れる女性を、女王様として、一度でもお仕え出来ることを念願しています。小生、平凡なサラリーマンですし、プレイの経験ありませんので、あまり厳しいセメは望んでいません。今の所、手足を縛られ、馬乗りされ、尻に敷かれ便器にされる等です。どなたかプレイをして下さる女性のお便りをお待ちしています。東京新宿郵便局止入江秀夫宛お便り下さい。御返事は必ずさせて戴きます。又、お互の秘密は厳守する事を条件とします。(東京八入江秀夫)

○ 最近の読者欄を拝見してお互いに真実を語る場のあることをまず喜びたいと思います。私等多分に投書欄の真実性に疑いをもっていた一人ですが、決してその疑いは私だけではないと思います。それは人間本来の自己防衛からくる見栄とか羞恥とか等々があつて、なかなか想い通りのものは書けるものではないと思います。従つてそれらを超越した希望と欲望のほどばしりが読者欄と考へますときに、マ

ニアにとっては至上のサロンである筈です。そこには理屈抜きの赤裸々なマニア像があり、おかしがたい領地が開けます。私はその領土の広さを決して好むものではなく秘密はあくまで護り合えるお互いの広場をつくり度いと思つています。スリルを求め希望を満し合える場としての理想境を……。当然私の考えるこの事はKK社がすでに実行されているかと思ひますがK誌愛読数年の私もまだ知りません。私は御誌を通じ大阪の一部で支部づくりをしてみたいと思ひます。その支部から生れる不動の趣味の会として発展することを祈ります。九月号の麻生さんの語り合える場所を指定してほしい等は、その現れではないでしょうか。同志のお便りをお待ちします。(大阪市南区八初瀬二生)

○ 久方振りに、雪崎京人氏提供の巻頭口絵が登場して嬉しき限りです。今後も一枚程度は口絵か女相撲フォトを掲載されることを切望いたします。分譲品女相撲力斗図四枚も誠に結構、大塚、東浦両嬢

の相撲襪は締め方が正確でなく、その上一般モデルのようなポーズは納得がいきません。相撲襪を求めるからには、すべて女相撲ファンとみてよく、その場合は明らかに相撲の激突を連想させるところに価値ありと考えます。今後一人のモデルによる撮影の場合はよろしく仕切り、四股を踏む真剣な表情をとらえてほしいものと希望致します。無理なお願いかも知れませんが、相撲襪はやはり黒か紺が魅力的であり、その上さがりを付ければ尚結構、左程手数のかかるものとも思われませんか、一考していただければこれに過ぎる喜びはありません。また女相撲ファンの諸兄姉、未だ山形の興行相撲は健在であり、各地の素人女相撲も細々ではあります。時折り村祭りの余興などに出場している事実を知りました。しかし、いずれにしてもその将来は暗く滅えの一路をたどっているものとみてよいでしょう。シヤツやパンツの上の襪ではなく、裸身の白肌に黒襪をした本格的な女相撲こそ興行として成り立つもの、色気と迫力ある場面を展開すれば今日のよう特定のファンだけのものとはならず、一般人々からも受け入れられることであるまい。何んとか、このフ

アンの声を結集して新しい女相撲魅力のある女相撲の実現を念願する次第です。(東京八〇・Y)

○ 先日見た「甘い暴力」という洋画に奇巧的な場面がありました。数人の若人が、ヨットで海に出るのでした。若人達は、それぞれ船内で若いエネルギーを発散していた。そのうち、皆がだんだんたいくつしてくる。そんな中で一男性は、一女性を後手に縛り上げ、何かゲームしようとする。ある男は俺がロシアの皇帝になったら彼女を后にしようなどと、皆それぞれ勝手なことをいいながら、はしやぎ回っている。首縋までされた彼女は、じっとしている。それはいまセリにかけられて、売られようとしている奴隷であり、縄で、じかにしめつけられた腹部、縄によつてかくされた臍などは、とても美しい姿であった。そうこうしているうちに、ヨットは火事になる。消火につとめるのではあるが不可能とわかつて、一人又一人とヨットからボートへ、海へと去って行く。しばらくして、彼女のいないことに気付く、そのころ船の中では、不自由な体で、身をくねらせ、ころがりながら、助けを求める彼女の美しい姿があつた(マニア生)

次号(十二月号)は十月二十五日に発売いたします。

新人異色原稿募集

一、告白

「私は、こんな趣向を持ちます」
○自分はこのような人に言えぬ変った趣向を持つてゐるという方はペンに托して、その偽らざる真実の告白をお寄せ下さい。どのように奇想天外のものでも驚きませんから、どうか、全国のファンの方々に、貴方（貴女）の真実の告白を引っさげて、お呼びかけ下さるよう心からお待ちします。

二、手記

「私は、このように思います」
○真面目な御批判をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御自分の生活のこと、社会一

三、体験

「私はこんな変った体験をしました」
○長い人生の中には、誰でも一度や二度は凄く体験をするものです。ぜひ、とっておき異色体験記をお書き下さい。また、特に変った体験でなくとも、御自身で非常に強い印象を受けられた事柄を、この際再び追体験して下さい。
○以上の「告白」「手記」「体験」の三項目の応募原稿は、近く発行予定の「特集号」に一括掲載したいと思ひます。採用篇には、相当稿料お支払い致します故、奮って御応募あらんことを。
◎締切日、毎月三十日

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思ひ出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたとえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△（映画、雑誌）通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお待ちの事項或はマニヤ各傾向の本

☆ 本誌御購読の栞 ☆

一月分（1冊）二五〇円△送共△
三月分（3冊）七〇〇円△送共△
半年分（6冊）一三〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価二五〇円

十一月号 （第十七巻第十二号）
昭和三十八年十月二十日 印刷
昭和三十八年十一月一日 発行

編集印刷局発行人 箕田 京二
阿倍野局私書函第十四号

発行所 天 星 社

（振替口座大阪五〇〇四二番）
（昭和三年四月三日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号）

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。只今、目録作成中ですの出来次第、誌上で広告いたします。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫してありますから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。